

徳島の剣道

特別寄稿

日本武道館・京都武徳殿・東大七徳堂

坂本 功

特報

1. 台湾における剣道
2. わが祖父・父を語る

村井正志

第**37**号



徳島県剣道連盟

徳島県剣道連盟新執行役員（令和3年度・令和4年度）

名誉会長：三木 毅

会長：藤川和秋

副会長：米倉 滋 西谷肇一 一村昌和 松村和宏

監事：立川信彦 磯部洋一 土川資雄

理事長：福多雅英

副理事長：平野誠司 白木洋一

事務局長：柳谷照男

事務局次長：木下裕康

令和2年度 物故者

西岡 侃 令和2年9月25日 逝去

坂下 彦之 令和3年2月 8日 逝去

平田 照男 令和3年2月 9日 逝去

中山 啓男 令和3年2月27日 逝去

◎新役員の挨拶ならびに物故者の記事は次号で掲載します。

巻頭言

ピンチをチャンスに

徳島県剣道連盟 会長 三木 毅



令和三年、徳島の剣道は「第三十七号」の発刊を迎えることとなり、我が徳島剣道界の奥深い歴史と誇れる価値を感じます。編集の指揮をとられた関係者、原稿を投稿された剣士諸氏、新聞報道された記事を漏れなく収集された剣士諸氏等々の情熱に満ちた力が結集された年刊誌であります。ここに、各関係者に敬意と感謝を表す次第であります。

令和二年を顧みると、新型コロナウイルスの地球規模での感染のすごさと恐ろしさを見聞し、社会活動・経済活動・学校教育活動などがストップし、さらに生活困窮者の増加など初体験の出来事が連続的に発生し、しかも感染力が衰えないという、何とも強烈な病気に怯える日々が続いております。

全日本剣道連盟はいち早く「剣道練磨の休止を宣言」しました。続いて各種大会・昇級昇段審査の中止の通知を連発し、剣道は全国的に静観の構えに移行しました。

剣道界では、指示を堅持し静観の構えではありませんでした。しかし、

各地から「工夫を凝らせば剣道練磨が可能ではないか」との情熱的な意見がもたらされるようになりました。全剣連では医・科学委員長の宮坂信之先生のもと「面マスクと面シールド装着で剣道は可能」との方針が示され、感染防止の徹底で稽古が再開されるようになりましたが、未だに多くの試合や講習会等が中止となっております。

この間、私ども徳島県剣道連盟も多大な損失を受けました。しかしながら、この期間を自分の剣道を見つめ直す機会と捉え、一人稽古で剣道を深めながら、剣道が制限なく実施できる日に備えて地力を養うチャンスと捉えるべきであります。「ピンチをチャンスに」このことは剣道および人生の極意ではないかと思えます。皆さんの益々のご発展を心よりお祈りします。

《追記》

令和三年三月の剣道連盟総会において会長職を退任することとなりました。会長在職中は格別のご厚情を賜り、深く御礼申し上げます。

これからは藤川和秋新会長のもと、徳島県剣道連盟が益々発展しますことを心より祈念いたします。

『徳島の剣道 第三十七号』 目次

巻頭言……………三木 毅……………1

《特別寄稿》

日本武道館・京都武徳殿・東大七徳堂……………坂本 功……………4

《特報Ⅰ》

台湾における剣道……………村井 正志……………8

顕彰一覽

剣道有功賞

剣道六十年をふりかえって……………美馬 勝行……………13

少年剣道教育奨励賞

このすばらしき子ども達とともに……………河野 通宣……………16

先人の労苦が報われた少年剣道教育奨励賞……………井内 勝則……………19

体育功労賞

体育功労賞を受賞して……………木原 資裕……………22

日本スポーツ少年団顕彰

剣道を振り返って……………松村 和宏……………24

令和二年度徳島県中学校剣道優秀選手

令和二年度徳島県高等学校剣道優秀選手……………26

先生を偲ぶ

吉田博三氏を偲んで……………鈴木 清……………27

吉田博三先生を偲んで……………柴田 宗忠……………30

わが祖父・父を語る

わが祖父範士八段高島永吉を偲ぶ……………高島 稔之……………32

祖父を思う……………仁科 文宏……………35

父・下村富夫―楽天命―……………下村 昇……………37

わが父・柴田稔夫を語る……………柴田 宗忠……………40

父・寺西慶裕から受け継ぐ……………竹内佳代子……………46

わたしが感動した「徳島の剣道」

堀江先生が憂いた三十六年前の道しるべ……………三木 毅……………49

堀江幸夫先生「随想・老剣士のつづや記―恩師―」……………米倉 滋……………52

故堀金實先生の『ありがとうございました』に思いを寄せて……………藤川 和秋……………55

坂下彦之先生の「剣は人なり 剣は心なり」……………別宮 憲治……………58

剣道の魅力……………西本 浩章……………59

出葉成一先生の「齢六十五にして思うこと」……………柳谷 照男……………61

全国講習会報告

日本剣道少年団研修会 体験・実践発表

恵まれた日々……………後藤 彩祿……………64

私を変えてくれた剣道……………大谷 心海……………66

書道展入賞……………谷本真智子……………68

徳島の剣道史

徳島県高齢剣友会の歴史（一）……………高島 稔之……………69

徳島武徳殿の姿を求めて……………三木 毅……………71

丹生谷支部史―丹生谷支部の沿革―……………吉田 租……………84

剣道に役立つ医学知識

かみ合わせと姿勢の関係……………安田 勝裕……………102

各種大会に参加して

全日本剣道選手権大会に出場して……………白木恒二郎……………104

全日本選手権に出場して……………坪井 香歩……………106

随想

昇段審査での一コマ……………中村 稔裕……………108

光陰如箭……………長崎 秀信……………109

剣道と私……………佐伯 守夫……………112

剣道繋り……………徳重 清久……………113

「剣の道」剣道・居合道・杖道の三位一体をめざして……………一村 昌和……………115

剣道雑感……………松田 久司……………118

ある夏の思い出	梅山 寧史	119
近年の阿南支部	坂本 信幸	121
コロナ禍の現状と私の思い	岡田 豊	122
修行の身	影山 美雄	124
徳島刑務所制す	森 直行	125
鞘の内(自分で自分を自分する)	平野 誠司	127
居合と剣道	福井 勝	128
藍と剣	吉原 均	130
杖道との出会い	徳山 豊	131
杖道を始めて	米倉 武志	133
私の一年のサイクルについて	出口 正春	135
新型コロナ禍での稽古	西堀 和文	136
日日是好日(心に残る言葉)	栗野 佳明	137
称号・段位合格者		
剣道七段に合格して	木下 裕康	139
剣道六段に合格して	綾部 文明	140
剣道称号「教士」を授与されて	小坂 治	142
剣道教士称号審査に合格して	金野 裕美	143
練士に合格して	香川 利浩	144
居合道「錬士」をいただいて	林 由美	145
称号・段位合格者一覧		146
はじめまして		
私の考える武道との関り方について	酒井 康充	150
徳島での四年間を糧に	たなこう たなお	151
がんばろう徳島		
事務局取材レポート		
頑張ってます!市場剣道教室	藤川 和秋	154
専門部報告		

事業部	佐賀 博史	157
審査部	佐藤 佳宏	158
強化部	平野 誠司	159
女子部	竹内佳代子	160
居合道部	福井 勝	160
審判部	富浦 廣志	161
中体連	佐藤 浩	162
高体連	玉田 晋作	164
大学連	木原 資裕	165
高齢剣友会	乾 清孝	166
徳島県剣道稽古場所一覧		167
居合道 道場案内		170
少剣強化プロジェクト実施要項		171
医・科学委員会に関する内規		172
令和二年度 大会記録		173
徳島新聞に見る戦いの跡		188
令和三年度 昇段審査学科試験問題・解答例		198
令和三年度 徳島県剣道連盟行事予定表		206
令和三年度 審査実施計画表		208
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等		209
事務局だより	柳谷 照男	210
編集後記		

表紙題字	堀江 幸夫
表紙	村嶋 恒徳
さし絵	(元徳島県剣道連盟名誉会長・故人) (茨城県在住)

特別寄稿

日本武道館・京都武徳殿・東大七徳堂

東京大学名誉教授・元東京大学運動会剣道部長

坂本 功



昨年（令和二年）七月、「awaもくよんプロジェクト」の設計案を決めるコンペの審査委員長を頼まれ、徳島に帰った。それは、徳島の県営住宅を木造四階建てで建て直す計画があり、その設計案

を公募して、採用案を審査委員会で決めるという仕事である。そのころは、徳島ではまだ新型コロナウイルスの感染者数が少なく、委員全員が集まっていゆるる対面で委員会を開くことができた。

ちょうどそのちょっと前に、「徳島の剣道」の編集をなさっている木原先生から、私が建築屋であることもあり、剣道場について書いてみませんかとの打診をうけていた。それでその委員会会の翌日に、もとの西の丸に移っている武道館を覗いてみることにした。そのとき、剣道場では十人ほどの年配の方が稽古をしていた。その中に、垂に高島と書かれた方がいた。私はひょっとして、城

南高校時代の一年先輩の高島稔さんではないかと思い、仲間の方にお尋ねした。やはりそのとおりで、高校以来およそ六十年ぶりにご挨拶をすることができた。なによりも、途中で退部してしまった私のことを覚えていてくださったのが、ありがたかった。高島さんは、もちろん徳島県剣道連盟の現審議委員長の高島さんである。

さて私にとって最初の剣道場は、剣道を始めた鴨島一中時代に稽古をした普通の教室である。放課後、その机や椅子を後ろの方に積み上げて、剣道場代わりになっていた。それは懐かしい思い出であるが、ここでは、日本武道館・京都武徳殿・東京大学七徳堂について、建築的な観点から紹介したい。

日本武道館は、東京の北の丸公園にあり、よく知られているように、前回（昭和三十九年、一九六四年）の東京オリンピックのときの柔道の会場として建てられたものである。私は、東大剣道部の部長をしているとき、全関東学生（男子）の団体戦・個人戦の応援で、この武道館には度々行った。私自身は四年生の時、昭和四十年の全関東学生の個人戦に出してもらったので、負けたとはいえ、思い出深いところである。

この建物は平面が八角形で、宝形（ほうぎょう）の屋根を載せている。これは、法隆寺東院の夢殿と同じ形である。（金堂や五重塔があるところは西院と呼ばれている。）設計者は山田守。戦前、若い時には、逋信省（現在の日本郵便やNTTの前身）で当時最先端だった現代風の建物を設計し、評価の高かった建築家で

ある。その山田が、お寺のお堂のような復古調のデザインの日本武道館を設計したので、建築界からは少なからず批判があった。それでも、建てられてからかれこれ五十年以上も経つと、その批判も過去のものとなり、日本における武道場の中心的な存在として、確固たる地位を占めている。

日本武道館は、鉄筋コンクリート造であるが、いわゆる新耐震基準（昭和五十六年、一九八一年の建築基準法の改正にともない強化された耐震基準）以前の建物であり、二十年ほど前に耐震補強がなされている。目につくところに補強部材（外壁面の鉄の格子）が入っているが、それと教えてもらわなくては分らないような巧みな補強である。なお、最近も今回の東京オリンピックにあわせて、改修が行われている。

京都の（旧）武徳殿は、平安神宮の境内の西北端にあり、現在は京都市武道センターの建物のひとつとなっている。この京都武徳殿は、明治時代に全国各地に建てられた武徳殿のいわば総本山で、大日本武徳会により、明治三十二年（一八九九）に創建されている。剣道場としては、私にとっては雲の上の建物であるが、二つの縁がある。ひとつは、東大の剣道部長だったとき、京都大学との対抗戦がここで行われたことである。内部に入ったのはこの時だけである。もうひとつは、この京都武徳殿が重要文化財に指定されたとき、文化庁の文化財保護審議会第二専門調査会（建造物）の委員として、その審議に参加できたことである。その後、この武徳殿について、全日本剣道連盟の機関誌である「剣窓」に



日本武道館



京都武徳殿（記念の扇子）

その紹介記事を書かせていただいた。

この京都武徳殿は、内観外観ともに和風の木造であるが、部分的には明治維新以降の新しいデザイン（たとえば小壁の筋交いやその上の広い明かり窓など）が採り入れられており、近代和風建築の代表作のひとつとなっている。写真は、京都武徳殿創建百年を記念して作られた扇子を写したものである。この扇子は、当全日本剣道連盟の会長をなさっていた武安義光先輩が、「君は建築が専門だからこれをあげよう」と下さったものである。宝物であるが、夏には持ち歩いておおいに使っている。

最後は、母校の東大の七徳堂である。剣道部員として、また剣道部長として、まさに私の剣道場である。一階正面の部室では、部員のときには、師範の鶴見岩夫先生や安藤謙先生、岡田守弘先生が、そして部長のときには、小沼宏至先生や小林英雄先生が、学生といっしょに着替えをされたり、剣道の話をしてくださったところである。二階が道場になっており、柔道部などと共用している。ここは、全日本剣道連盟の現会長・張富士夫先輩と警察庁長官になられた国松孝次先輩が、主将・副主将として稽古をしたところでもある。

七徳堂は、昭和十三年（一九三八）に建てられた柔剣道場で、外観はお寺のような和風であるが、構造は鉄筋コンクリート造である。設計者は、内田祥三（よしかず）先生。東大で私が教授をしていた講座（研究室）の三代前の教授で、東大が東京帝国大学といっていたときの最後の、つまり、終戦時の総長を歴任され、

のちに文化勲章をお受けになられた。この当時、新しい建築構造方法である鉄筋コンクリート造で、こうした和風の建物を建てるのが、しばしば行われた。なお、この建物も、数年前に耐震補強を含む改修がなされている。



東大七徳堂

特報 台湾における剣道

台湾における剣道

阿南支部 村井正志

はじめに

私は二〇一八年四月より二年間在外教育施設派遣教員（シニア派遣教師）として台湾の台北日本人学校に派遣された。

シニア派遣教員は文部科学省が退職教員を対象に、在外教育施設の更なる充実を図るために募集した制度である。在外教育施設は、世界に、約五十カ国、九十校近くの日本人学校がある。派遣先の国や学校は、文部科学省が決めることであり、本人の希望が聞き入れられることはない。台湾に派遣される知らせが届いたのも日本を出国する約三ヶ月前のことであった。生活に必要な準備物も派遣先の国によっては随分と違ってくるので、それからの三ヶ月間は、日本での勤務や出国の準備等で多忙な毎日を過ごした。

台湾の概要

台湾は、「中国大陸の東南、東北アジアの西南、東南アジアの東北」に位置する台湾本島（日本の九州よりやや小さい）とその周辺部の島嶼部からなる。台湾の正式名称は「中華民国」と称し、人口は、約二三〇〇万人を超える。日本と台湾は、日本が台湾を植民地統治していた時期（一八九五年～一九四五年）もあるものの、歴史的にも関係が深い。現在、貿易関係を中心に、経済や文化面での民間レベルの交流は、ますます緊密になっている。台湾は、「親日」であり、日本人に対して非常に親切であると言われている。その理由としては日本の統治時代、台湾発展のために尽力された日本人が大きく関係している。

台湾における剣道史

日本統治時代、台湾では、剣道競技が学校教育で行われており、剣道が自然と台湾に伝わってきた。その為、剣道競技が非常に盛んであり、剣道人口は現在、約一万人ともいわれ、競技者としても約六〇〇〇～七〇〇〇人が剣道を行っている。台湾には、昔から多くの道場があり、剣道の指導者として生計を立てている人もいるほ



どである。

台北日本人学校

台北日本人学校の児童生徒数は、小学部約六〇〇名、中学部約二〇〇名、全校児童生徒数約八〇〇名（二〇一九年度）である。ここ十年、国際結婚家庭児童生徒数が増えており、中学部では、国際結婚家庭生徒数が約三十％近くになる学年もある。子どもたちは、殆どにおいて従順で素直である。しかし、その反面、全体的に挨拶の声も小さく、自律心や自他を大切にしている心が十分育っていない。編入、退学を繰り返す児童生徒が多く、お互いの人間関係が希薄になってしまっている現実がある。将来、「社会を生き抜く力」を養うための知・徳・体のバランスのとれた豊かな力を育てることから考えると、特に徳育の部分での教育の重要性を感じた。

剣道指導から

①学校剣道

台北日本人学校の子どもたちは本来日本人が持っている道徳心や礼節に触れる機会が少なく、事の善悪を知識として理解することはできても、行動面においてはまだまだ未熟である。このことから特に、真の礼節を学ばせる機会の必要性を感じた。そこで、中学部の剣道の授業では、剣道修練の目的や活人剣について教え、実技指導では竹刀操作や日本剣道形を中心に学習を進めた。子どもたちは、日頃から日本の伝統文化に触れることも少ない為か、

非常に興味関心を持って学習に取り組むことができた。

・体育科での授業を通して（生徒の感想）

『剣道を通して二つのことを学びました。一つ目は基本の大切さです。剣道は六〇歳までが基本だということを聞いてとても驚きました。基本ができていないと成長が遅く、剣道の本当の美しさがわからないと思います。私は初めて、剣道を学んだので、礼法から竹刀の持ち方、素振りなど学校や家で練習しました。また、基本を大切にするという意味では、剣道だけでなく、数学や国語など他の分野にも生かしていきたいです。二つ目は「剣道の美」です。見た目の力強さだけでなく、しなやかさ等といった柔らかい部分もあり、そこが美しいと思います。そして、見た目の裏にある内面の美しさもあります。真っ直ぐな心、忠実な心、自分には厳しく、相手には優しくする心、きれいな心などといった所が素晴らしいと思います。「外の美」があり、「内の美」がある剣道から日本人の真の美しさがすぐく伝わります。剣道の授業を通して学んだことを大切にし、これからの人生に生かしたいです。剣道ができて本当に良かったと思います。とても良い経験となりました。』



②課外活動

台北日本人学校では、主に日本で行っている教師が顧問を担当しながら指導するような活動ではなく、あくまでも保護者主体の課外活動である。練習日は、水・金曜日の放課後、土曜日の午前、週三回の練習である。特に土曜日の練習については、約八〜十名の先生方で子どもたちの指導に当たっていた。指導者の中には、幼少期から



ら大学時代まで本格的に剣道を経験されていた方も数名おられ、指導陣は、かなり充実していた。但し、平日の指導は、指導者の勤務時間の関係もあり、保護者担当者一〜二名となり、練習は殆ど子どもたちが中心の活動であった。実際に中身の濃い指導は、土曜日の練習のみであったが、子どもたちは『礼儀を大切にし、心と体の修練』を合い言葉に、日々の練習に取り組んでいた。課外活動生は、小中学部合わせて約二〇名であり、中には來台後に剣道を始めた初心者から、技術的にも充実している課活生まで、経験の程度にかなり差があった。しかし、指導者スタッフが多くのことが功を奏し、一人一人の練度に応じた基本稽古を行うことができた。私の立場は、全体の指導を充実したものにすることをアドバイザー的存在であり、部員の実態に合った練習内容を考え、

助言や指導が主な役目であった。土曜日の練習内容については、子どもたちの実態から基本稽古や約束稽古が中心であった。

③台北日本語授業校の取組

台北市内には、日台国際結婚家庭の保護者たちが中心となって運営されている「台北日本語授業校」が設立されている。日台国際結婚家庭の子どもたち（国際児）が現地で教育を受けている場合日本語を話す機会は日本人の親と会話する時などに限られる。台湾は中国大陆との政治的に不安定な状況にあり、将来を予測することは困難であるので、国際児の親はいざという時のためにも、国際児のための日本語補習を必要としていた。台北日本人学校の教員は台北日本語授業校に対して、一人二時間の授業を実施することになっていた。私は、中学部男女一・二年生六名に対し、剣道の授業を実施した。授業前から子どもたちは、日本の伝統文化、剣道に触れることを非常に楽しみにしていたこともあり、授業後の感想の中には、「日本のアニメなどにも剣道が出てきて、ますます剣道をやりたいという気持ちが増しました」等、日本の伝統文化の素晴らしさにふれた喜びが伝わってくるような感想が多く見られた。



④ 榮總（ロンゾン） 剣道社

台北榮民總醫院関係者が中心となり、活動を行っている。

道場訓は『剣心仁術』である。剣の理法の修練により、人間形成の道を究め、『剣心仁術』を目指している。道場生は約

八〇名であり、基本稽古や五角稽古を中心に週一回、約二時間の稽古に励んでいた。榮總（ロンゾン）剣道社の指導者の中には剣道教士八段を始め、教士七段の高段者の先生も師範として指導に当たられていた。私も指導者として台湾剣道の発展に協力させて頂いた。また、練習日には、元世界大会台湾代表選手が多く排出されている、桃園市体育会剣道隊などからの参加もあり、非常に充実した稽古が行なわれていた。

⑤ その他

- ・台北日本人学校においての昇級審査（審査員として）
- ・現地校との交流会にて剣道の授業を実施
- ・一〇八年台北市青年杯等、日本人学校指導者チームとして出場
- ・台北日本人学校剣道課活と日本各地の道場との剣道交流



おわりに

台湾には製糖産業を世界有数の生産地とし、台湾発展に寄与した新渡戸稲造がいた。その新渡戸稲造が遺した、著書「武士道」の中には、人の生き方の心得とは何かについて詳しく述べている。そして、新渡戸稲造に大きく影響を受けたのが、第八・九代元台湾総統李登輝氏（二〇二〇年七月 九八歳 逝去）である。李登輝氏は「武士道」に大きな影響を受け、新渡戸稲造を人生の師と仰いでいた。台湾において、その武士道精神を私たち日本人に思い出させてくれた出来事があった。それは、二〇一一年に起きた東日本大震災時の出来事である。台湾の方は、日本円にして二百億円以上の義援金を日本に送ってくれたのである。近隣に困っている人がいたら助ける。受けた恩は忘れない。このような台湾の人々の心は今、日本人が忘れかけている徳であるといえる。

現代社会は、日々グローバル化が進み、異常なスピードで発展している。そんな時代だからこそ、人と人との繋がりを大切に、共に生き抜く力が必要である。特に、日本の良き伝統、不易の部分を大切にしなければならぬ。台湾には昔の日本の良いところがまだまだ残っている。私にとって、台湾での生活は日本では経験することのできない、有意義で充実したものであると共に、私自身の人生の節目を振り返る貴重な二年間となった。



中学時代の李登輝氏

令和二年度 顕彰一覧

剣道有功賞 (全日本剣道連盟)

○美馬 勝行 (徳島県剣道連盟審議員)

徳島県剣道連盟評議員として十八年、常任理事として四年、審議員として九年間務め、徳島県における剣道の普及、発展に大きく寄与した。

少年剣道教育奨励賞 (全日本剣道連盟)

○宅宮剣道倶楽部 (指導者代表 河野通宣)

昭和五十七年四月に創設され三十八年間にわたり少年剣道を通じて、剣道の普及発展に寄与してきた。平成十九年には、体育館、武道館を自費で建設し地域に開放するなど、地域への「和」づくり「親睦」の場として青少年の健全育成に大きく貢献している。

○市場剣道教室 (指導者代表 井内勝則)

昭和五十一年十月に創設され、四十四年間にわたり剣道を通じて少年の健全育成に尽力してきた。春分、秋分の日には地域をあげて子供から大人まで一緒になって錬成大会、地元神社への奉納演武大会を行うなど伝統を引き継ぎながら剣道の普及発展に尽力している。

徳島県スポーツ功労者表彰 (徳島県スポーツ協会)

○木原 資裕 (徳島県剣道連盟常任理事)

徳島県剣道連盟理事及び常任理事を十九年間務め、徳島県における剣道の普及発展に大きく貢献した。特に本年度で三十七号となる年刊誌「徳島の剣道」の発刊と「徳島の剣道ホームページ」の立ち上げに大きな実績を残した。

日本スポーツ少年団顕彰 (指導者表彰)

○松村 和宏 (徳島県剣道連盟副理事長)

永年にわたりスポーツ少年団の発展に貢献し、特に顕著な功績があった登録指導者として受賞した。

徳島県剣道連盟 顕彰状

○高橋 國保 (阿南市在住 竹刀師 八十三歳)

昭和五十年に京都から阿南市に移住し、竹刀師として徳島県で四十五年にわたり竹刀を製作してきた。現在も高齢でありながら県内外の剣士のため竹刀製作に精励されている。これまでの業績、功労を広く剣道界に顕彰すべく会長名で「顕彰状」を贈呈した。

顕彰状 (全日本剣道連盟)

○(故)坂下 彦之

(剣道連盟名誉会長 令和三年二月八日ご逝去)
長年に亘り剣道の普及振興に努め、剣道の発展に多大の寄与をした功績が讃えられた。

剣道有功賞

剣道六十年をふりかえって

美馬 勝行

新型コロナウイルスの感染が拡大するさなかの、令和三年三月、全日本剣道連盟から剣道有功賞を拝受いたしました。これはひとえに徳島県剣道連盟の諸先生方はじめ、剣友の皆様のご厚情によるものでありまして、ここに心からお礼申し上げます。

この受賞を機に、私の剣道人生六十年をふりかえってみたいと思います。

一 生涯剣道への第一歩

私が竹刀を手にしたのは、昭和三十九年四月の高校一年生で、友達に誘われるままの入部でありました。

下村富夫先生の教えを受け、三年後の高校総体で「大将戦」を制して、インターハイへのキップを手にすることができたのです。

この全国キップが、私の剣道への思いに火をつけて、六十年にわたる剣道人生の「ワクチン」となったのです。

二 憧れの機動隊へ

「剣道やるなら剣道特練」との夢が実現したのが昭和四十二年の春でした。師範堀江幸夫先生の指導を受けてひたすら修練に励み、全国警察剣道大会、四国管区警察剣道大会への出場のほか、大阪府警での合宿、他県警察への遠征稽古などを通じて技を磨きました。

一 全日本剣道選手権大会への出場

昭和四十四年の第十七回全日本剣道選手権大会に出場、一回戦はクリアしたものの、二回戦で神奈川県警の幸野選手に秒殺負けとなり、全国の壁の厚さ、また勝負の深さを思い知らされました。

しかしこの敗戦は私への大きな学びとなり勝負への「執念」、「闘争心」、特に打突の「スピード」の必要性を教えてくださいました。

教訓

・勝負は勝つか 学ぶか

・勝つことが大切ではない 勝つための準備が大切である

二 国民体育大会（二〇二四年からは、国民スポーツ大会に名称変更）

国体には四回出場しました。

最後は、平成五年十月に地元徳島県で開催された第四十八回国民体育大会でした。

一部は

先鋒 飯田栄一 次鋒 平野誠司 中堅 近藤 巨
副将 美馬勝行 大将 大澤譲二
のメンバーで 「苦戦の末 第三位に入賞」 開催県の面目
を果たすことができました。

三位決定戦での副将戦は、チームの勝敗を左右する後がない瀬戸際の一戦で、相手は東京チームの副将、身長が一八五センチの巨漢、警視庁の鬼とも言われた梯選手で、「これで東京音頭か」とあきらめムード漂う会場の雰囲気は、開始線に向かう私にも感じとれるほどでした。・・・が、奇跡の小手二本。勝負を大将戦に持ち込むことができたのです。

いつまでも心に残る うれしい一戦でした。
そして大将は、百戦錬磨の勝負師・大澤先生である。選手をはじめ会場応援団の期待どおり、見事に大将戦を制して徳島チームを「三位入賞」に導いてくれたのです。

さらに、二部の三人制では

先鋒 玉田晋作 中堅 鈴木伸一 大将 那倉文夫
チームが栄えある「優勝」を手にし、徳島県チームが剣道総合優勝となったのです。得意技は 身を助ける・・・秘
密を身につけよう。

三 剣道の仕上げは高齢剣友会で

徳島県高齢剣友会はこれまでやってきた剣道の総仕上げの場で

あると私は思っています。

生涯剣道の最終段階で勝負から解放され、結果を求めず、求められず健康維持を図りながら「交剣知愛」のもと竹刀を交えてお
ります。

八十歳を過ぎても、中腰の蹲踞しか出来なくても、月二回の稽古はもとより、徳島県健康福祉祭剣道交流大会、四国高齢者剣道大会、全日本高齢者武道大会、ねんりんピックと年齢に応じた試合を楽しむことができます。

ぜひ生涯剣道の締めくくりを高齡剣で！

四 少年剣道の指導

北井上剣道教室での指導歴は、警察退職後から現在までの十一年になります。私は特に基本では見本を見せて分かりやすく解説し、やらせてみるようにしています。稽古では打たれ上手で褒め上手「山本五十六の教え」の指導方法に重きをおいています。
見本を見せるは 自己修練なり。

五 受賞と主な戦績

受賞

○スポーツ優秀賞

平成二十四年五月二十四日

徳島市体育協会

○体育功労賞

平成二十九年二月十一日

徳島県体育協会

戦績

○第四十八回国民体育大会〈平成五年十月二十八日 城北高校〉

総合優勝 「一部 第三位・二部 優勝」

○全日本高齢者武道大会 個人

・優勝 剣道B組（六十五歳～六十九歳）

平成二十三年六月六日 日本武道会

・準優勝 剣道A組（七十歳～七十四歳）

平成二十八年六月六日 日本武道館

以上、六十年の剣道をふりかえってまいりましたが、「剣道に底なし」まだまだ努力が必要と心得ているところがあります。残り少ない剣道人生、有功賞の重みをしっかりとかみしめ、ささやかながら恩返しをと、心新たにしているところであります。

最後に、今後変わらないご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。お礼と感謝の言葉といたします。



少年剣道教育奨励賞

このすばらしき子ども達とともに♪

宅宮剣道倶楽部 河野通宣



栄えある奨励賞を賜り、お世話になりました。皆々様に心から感謝を申し上げます。

大学卒業以来十数年間、竹刀を握ることがなかった私でしたが、昭和五十七年四月に故中川虎雄先生のご提案で徳島市上八万町の地に「宅宮剣道教室」（後に宅宮剣道倶楽部と改称）を立ち上げました。これも先生の娘を妻とした因果か・・・と。稽古の場は氏神様である宅宮神社（河野家が代々宮司を勤めてきた）の境内で、夏には蚊の一斉攻撃を受け、冬には寒風吹きすさぶ中で面に積もる雪を払いながらの稽古でした。また、雨が降れば保護者ともども雑巾で水を拭い、雪が積もれば雪かきをする日々でした。

昭和六十一年に小学校に体育館が落成し、恵まれた環境で稽古ができるようになり、会員も約百名の大世帯となって、各種大会でも満足な成績を残すことができるようになりました。以来三十九年、これまでに三百七十余名の子ども達が巣立ち、各方面での

活躍をお聞きできることは嬉しい限りです。

さて、私は平成十八年の退職を機に、地域の「連帯」「和」づくりの場、健康増進の場として、拙宅に隣接してミニ体育館と武道館をつくり地域に開放してまいりました。そして、それまでの夢であった太極拳、卓球、バドミントン等の五つのクラブからなる総合型地域スポーツクラブ「えのみや睦会（むつみかい）」を設立しました。宅宮剣道倶楽部は、この中のクラブの一つとして位置づけ今日に至っています。

現在、二十名余の幼稚園児と小学生が稽古に励んでいます。特に幼稚園児は練習の半分を幼少年期に必要ないろいろな動きを身につけるための基礎運動に割いています。これは、以前と違って最近の子ども達は戸外での遊び（体を動かし多様な動きを覚える）の機会が少なく、運動不足あるいは偏った運動によりバランスが崩れて成長する傾向がみられること、また、剣道等単一の種目だけでは鍛えにくい筋肉もあり、習得し難い運動感覚などもでてくることを痛感していたためです。

当倶楽部の目的は、礼儀作法やコミュニケーション能力を培うことはもちろんですが、何よりも、楽しく、体を動かすことが好きになるよう、将来、運動好きのおじいさん・おばあさんとなるように育てることです。

これまで、自分自身の鍛錬にはあまり熱心ではなかった私も七十五歳を迎え、当初の教え子の子どもが入会するようになり、つくづく年月を感じているこの頃です。



幼稚園児の剣道

心身ともに健全で、子どもらしい明るい表情を持った、元気な子ども達が育つことを夢見て、また、地域の交流を広げ、大人共々「健康で、楽しい、想い出多き人生」づくりのお手伝いができると思っています。



幼稚園児の基礎運動



小学生の剣道



小学生の基礎運動

先人の労苦が報われた 少年剣道教育奨励賞

市場剣道教室室長 井内 勝 則

令和二年に本教室が、全日本剣道連盟より少年剣道教育奨励賞受賞の栄を賜りました。推薦をしていただきました徳島県剣道連盟の会長並びに関係役員の皆様には厚く御礼申し上げます。

最近までの本教室は、心配をしてくれる人の声が多く、指導者として心苦しい思いで運営していましたが、この度の受賞で、私たちの剣道教室を取り巻く多くの人々に喜びをもたらしてくれました。

昭和五十一年十月に市場剣道教室が発足して以来四十五年になります。発足当時は市場中学校の旧校舎の教室を使用して稽古をしていました。徐々に生徒数が増え、初級・中級・上級の組に分け、三つの教室を使い指導をしていました。しかし、すぐ手狭になり、武道館の建設を強く要望した結果、昭和六十年に念願の市場武道館が完成しました。

この頃には多くの剣道大会で実績をあげ、剣道教室の活動は、年間を通じて多彩な行事を取り入れ、活発に行われました。このことは、「徳島の剣道三十一号」で「一村昌和支部長が「人生の師 坂本裕二先生を偲ぶ」と題した追悼文の中で詳しく述べていますので参照してください。

栄枯盛衰は世の常といいますが、平成十年頃からは生徒数の減少により活動に陰りが見え始めてきました。その決定的なダメージとなったのが、平成十九年一月に河野耀雄先生（当時の阿波支部長・市場剣道教室室長）が六十四歳の若さで急逝されたことでした。

幼少の頃から剣道の手解きを受け、大恩ある坂本裕二先生が創設した剣道教室の灯を消すこともならず、次期室長に私が推され、引き受けざるを得ませんでした。十数年の間には、存続を諦めかけたこともありましたが、少人数ながら細々と教室を維持してきました。最近やっと復活の兆しが見えてきた矢先に、今回の受賞の朗報がもたらされ、長いトンネルから脱出した喜びを強く感じました。

前室長の河野耀雄先生には、長生きをしていればご自身で賞状を受けてもらえたと思うし、平成二十六年七月に九十六歳で逝去された初代室長の坂本裕二先生には、生前に受賞の報告ができていれば、どれだけお喜びになったかと思うと残念でなりません。この受賞を契機に、明るい話題が道場にあふれるよう、さらなる発展を目指して活動をしてまいります。今後とも本教室の活動に多大のご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

追記

本号には、市場剣道教室の少年剣道教育奨励賞の受賞だけでなく、『私が感動した「徳島の剣道」』を企画していただき坂本裕二初代室長の功績を記した追悼文の再掲、さらに年末には藤川理事

長が来訪し、『がんばろう徳島・事務局取材レポート』の取材を受け、掲載していただけることになりました。貴重な誌面を本教室のため、プチ特集的に取り上げていただきましたことに対し、重ね重ね感謝の意を表します。





徳島県スポーツ功労者表彰

体育功労賞を受賞して

鳴門支部 木原 資裕



令和三年二月十一日、徳島県体育協会より体育功労賞を頂くこととなりました。今回の受賞は前ページ顕彰一覧にありますようにこの『徳島の剣道』の編集作業とホームページ立ち上げを評価されたものとされています。

ただ、編集作業は平成八年の第十二号から携わり、今年で二十年目となりますが、これまで目の前が暗くなるような事案を多々犯しております。執筆者の名前やタイトルの間違い、提出したはずの写真が掲載させていない、また、大事な写真なのに執筆者に返却されていない、校正不十分で誤字脱字が多い、執筆者の先生からは「数カ所誤字がそのまま印刷されている。ちゃんと校正していない！せっかくの原稿が台無しだ！」とお叱りを受けることしばしばでありました。私自身、教職の身でありましたので、編集時期であります二月から四月がちょうど、学校での年度末・年度初めで多忙な時期と重複してしまい、編集作業が滞ってしまい

ます。そんな折、当時編集顧問でありました故・堀江幸夫先生からは「この『徳島の剣道』を楽しみにしている人がいるのだから、しっかりやりなさい。」と暖かい叱咤激励を受けました。いまでも本当にありがたく思います。それからは、手の空いている剣道部の学生や私の妻にも編集作業をできるだけ手伝ってもらうこととしました。それでも、最終的には一人の目で通して見る必要があります。発刊時期の遅れは、今年も含めて積年の課題です。

これまでの『徳島の剣道』の編集後記には発行が遅れたことへのお詫びと次回への改善を目指す旨が数多く書かれています。中には「編集者の任を賭けて取り組む・・・」と書いてある年もあり、当時会長であった三木毅先生に「編集長をやめさせて欲しい」と申し出たことがあります。その時、三木先生が言われたことは「ちゃんと後任者を育成してからにして下さい！」でした。その後、この人に後任をと何人もの方にアプローチするのですが、その方々も職務多忙であり、なかなか思うようにならず、今日に至っております。

また、受賞理由のもう一つとして、『徳島の剣道』のホームページを立ち上げ、創刊号から現在の号までが閲覧できるようになっていることがあげられました。しかし、このことは、パソコン教室を主宰する技能を有される小松島支部の澤井勝之先生によるホームページ作成へのご尽力があったのであります。改めて、澤井先生に御礼申し上げます。ありがとうございました。

昨年の編集後記に書かせていただいたことではありますが、



「今日、創刊号からこの三十六号までつながって見えたとき、徳島県における剣道という壮大なドラマの編纂に携わらせて頂いていたことに気づきました。」今回の受賞を期に、改めて『徳島の剣道』に関われたことをうれしく、誇りに思えます。本当にありがとうございます。



日本スポーツ少年団顕彰

剣道を振り返って

松村和宏

私が社会人と成り再び剣道を始めたのは昭和五十六年、二十八歳の時でした。入田町内の方達に声掛けをし、中学校の体育館を借りてのスタートです。

当時、私は三段と未熟で、指導する立場では無く、お互いに練習し、汗を流し、身体を鍛えようと始めたのです。

そんな中、日々子供達が集まりました。そして、昭和五十九年に入田錬成会として少年剣道の一步を踏み出しました。

昭和六十二年にはスポーツ少年団に加盟し、私も指導員の資格を取りました。平成九年に徳島県剣道連盟の理事と成り、今は亡き堀江先生から少年部の指導をするようにと、お声掛け頂き、当時少年部長でいらした堀金先生、広瀬先生の下で指導に当たって参りました。

私が少年部長になってから早二十一年に成ります。少年の指導に携わってからは三十二年と長くに於いて子供達と関わった事が嬉しく思います。

当時の少年剣士が今は立派な社会人と成り、子供達を指導する

様になりました。私も少年部長を引き受けた以上は子供達を県外遠征に連れて行って、多くの経験をさせてあげたいと微力ながらお手伝いさせて頂きました。

全日本小中学生優勝大会が開催される様になってからは、毎年参加し、全国ベストエイトまで進むことも出来ました。しかし、昨年は世界中に新型コロナウイルスが発生している為、多くの各大会が中止と成り残念で成りません。

今後世界情勢がどう変わろうと、今、私達に出来る最大限を考え地域の為、徳島の剣道の為に一生懸命にお手伝いをさせて頂くと思っております。

この度、日本スポーツ少年団顕彰指導者賞という身に余る賞を頂きました。これを機に私も改めて、これからの剣道を考え、行動して参ります。

どうか今後共、先生方ご父兄の方々皆様のご協力を賜り、徳島県剣道連盟及びスポーツ少年団の発展にご協力くださいますようお願い申し上げます。



令和2年度 徳島県中学校剣道優秀選手

No.	男 子	学 校 名
1	岡 崎 進 平	那 賀 川
2	羽 坂 颯 真	那 賀 川
3	倉 橋 秀 汰	那 賀 川
4	岡 輝 晟	那 賀 川
5	内 海 翔 貴	徳島文理
6	横 手 良 祐	徳島文理
7	佐 藤 治 郎	徳島文理
8	森 脇 康 生	徳島文理
9	紅 露 和 輝	北 島
10	撫 養 思 唯	北 島
11	三 宅 澄	北 島
12	永 濱 聡 良	北 島
13	野 尻 壮 馬	徳 島
14	入 江 陸 男	徳 島
15	島 田 輝	徳 島
16	中 野 脩 大	小 松 島
17	川 口 寛 太	小 松 島
18	米 田 安 里	相 生
19	近 藤 正 獅	高 浦
20	香 川 柊 吾	高 浦
21	徳 永 唯 吹	高 浦
22	吉 岡 健 心	鷺 敷
23	受 川 諒	大 麻

No.	女 子	学 校 名
1	武 藏 小 春	那 賀 川
2	山 名 来 実	那 賀 川
3	岩 佐 ほのか	那 賀 川
4	小山田 奈 央	那 賀 川
5	北 池 花 梨	石 井
6	高 橋 央 奈	石 井
7	森 本 悠 楽	石 井
8	松 本 彩 愛	土 成
9	上 田 凜	土 成
10	吉 本 彩 乃	土 成
11	岡 部 里 緒	徳 島
12	和 田 鼓 子	徳 島
13	山 橋 直 歩	徳 島
14	村 田 梨 奈	徳 島
15	田 窪 飛 奈	海 陽
16	浦 上 紗 笑	海 陽
17	吉 田 瑞 希	海 陽
18	長 尾 紗 弥	川 内
19	西 崎 彩 乃	小 松 島

令和2年度 徳島県高等学校剣道優秀選手

No.	男 子	学 校 名
1	大 城 穂 高	富 岡 西
2	住 友 太 洋	富 岡 西
3	松 田 匠 輝	富 岡 西
4	福 本 哲 郎	富 岡 西
5	井 藤 想 真	川 島
6	江 口 弘 純	川 島
7	河 野 航 太	川 島
8	大 空 航 己	城 北
9	松 本 喜 起	城 北
10	兼 松 凌 真	城 北
11	後 藤 田 凜	城 北
12	小 山 滉 冬	鳴門渦潮
13	川 西 修 羅	鳴門渦潮
14	眞 貝 晴 樹	鳴門渦潮
15	石 川 好 誠	鳴門渦潮
16	住 友 由 記 哉	徳島科技
17	河 野 翔 太	徳島科技
18	飯 尾 陽 祐	徳島科技
19	川 口 新 太	富 岡 東
20	小 畠 涼	富 岡 東
21	原 田 和 佳	徳島文理
22	細 井 康 平	徳島文理
23	富 田 哲 平	阿 南 光
24	津 山 幸 也	阿 南 光
25	山 本 悠 貴	阿南高専

No.	女 子	学 校 名
1	福 田 優 那	富 岡 東
2	田 邊 望 恵 瑠	富 岡 東
3	北 林 葵	富 岡 東
4	武 藏 千 咲	富 岡 東
5	福 山 花 純	富 岡 東
6	垣 内 菜々香	富 岡 西
7	桑 村 有 妃	富 岡 西
8	古 本 明 里	富 岡 西
9	山 本 美 翔	城 北
10	佐 藤 祐 理	城 北
11	大 西 千 晴	城 北
12	和 田 鈴 々	城 北
13	土 井 直 子	川 島
14	中 海 花 栞	川 島
15	北 村 凜	川 島
16	正 木 彩 加	川 島
17	三 好 優 果 利	川 島
18	藤 井 千 風	川 島
19	東 内 萌 々	徳島文理

先生を偲ぶ

吉田博三氏を偲んで

高校・大学の同窓生 鈴木 清



吉田博三氏は下村富夫先生から、中学生時代、そして高校生時代本格的に剣道の指導をいただいたこと、先生の真似をするなどによって「下村の小型」だと呼ばれていた。

また、先生からの厳しい稽古と真心の込められた御指導のお陰で今日があると有難く感謝しているとのことであった。

主な高校大会の成績は、昭和二十九年全国大会大分大会ベスト八。昭和三十一年福島大会ベスト八。吉田博三氏優秀選手賞。昭和三十一年十一月一日第一回国民体育大会秋季兵庫県大会、団体戦、吉田・川田・鈴木決勝戦で惜敗。これらは多くの方々のご指導と先生方、全部員一丸となつての成果である。

大学時代、大学入学当時から、吉田氏と私は剣道部合宿所での生活であった。合宿所の先輩達みんな紳士で大変にめぐまれていた。

当時、一九五九・六〇年安保闘争が全国的規模で展開され、

六〇年の五・六月は連日、国会に向け数万人のデモ行進が行われていた。安保条約反対の学生運動も活発であったが、結局条約は改定され、新条約批准が発効された。その間、私達剣道部員は大学からの要請によって、時には学内に宿泊して警備をしていた。剣道・学業・警備と身がもたないほどであった。

剣道部において、吉田博三氏は実力、人物優れ、人望厚く紳士であった。部員の多数から主将におされた。ところが、どうしても主将になりたいという者があり、その者を主将にしないと本人が駄目になるから譲ってやってくれないかと監督から話があり、それに従った。

社会人時代、卒業後日通本社入社。全国大会にたびたび出場、岐阜での全国東西対抗試合では優秀選手賞を受賞。その後、法政大学体育会、剣道部監督・師範・顧問を努めている。

現在まで、熊谷市「春風会」において毎週稽古・指導をしている。吉田氏が残した書籍として以下のものがある。

「剣道一言録」平成二十七年九月吉日

吉田博三氏が厳しい稽古・修行の中から剣道に対する考えをまとめたものである。

私、勝手ながら各部少々抜粋させていただきました。

○心構え（7）

一、称号や段位にこだわらず、帝王の剣を求めよ。

一、剣道修行の敵は己に有り、己の剣は己で測れ、他人にまか

すな、平素が最も大切。

一、試合に勝ちたいなら稽古せよ、それ以外に方法は無い。

○技術 (13)

一、一瞬の閃(ひらめき)が宝。

一、剣先は相手の中心に、気は三百六十度技は千変万化。

一、残心は次の動作の心構え。

一、卒爾(そつじ)に動くな、表裏を尽して起りを打て。

一、竹刀は手で持つな、臍で持て。

○指導・師・剣友

一、道場は真心と思いやりの発揮場所

一、剣道はよく説明し、見本を示して見せ、やらせてみる。できたら褒めてやる。少年も大人も同じ。

一、師は一生を掛けて探せ。

一、ひとたび剣を交えれば生涯の友

○試合勝負 (6)

一、審判の判定に従うのが剣道、絶対である故に審判の責任は重い。

一、審判も心の中で試合をしている。試合者の攻めが審判の攻めと一致すれば旗は上がる。

一、稽古の蓄積無くして試合をするな。

一、試合に負けて言い訳する選手になるな。

一、まぐれで勝ち有れど、まぐれで負けはない

「剣道俳句集」令和元年十二月吉日

この百句も、机上ではなく実践の中からの句であると思われる。

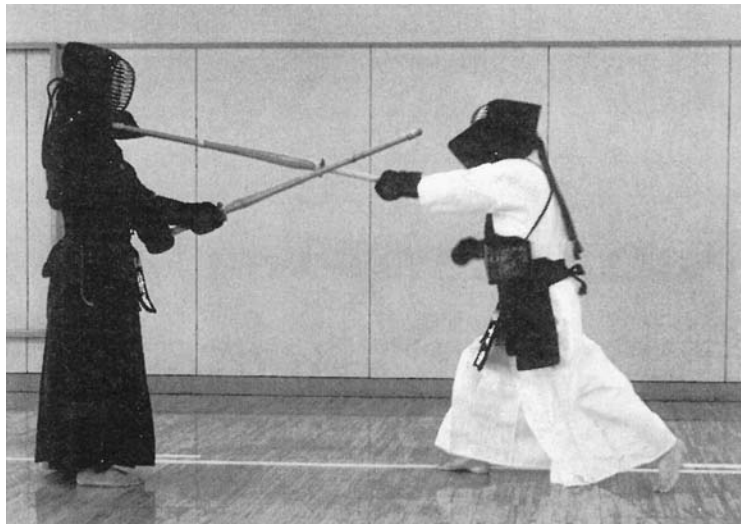
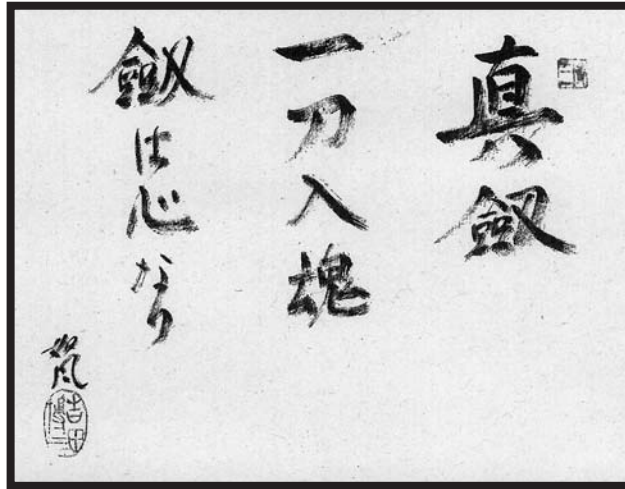
「剣道回想録」発行令和二年二月十一日

昭和二十七年から現在迄多くの先生・先輩方に剣道の御指導を賜ったこと、時は令和八十一歳を越え、これを機に、小川金之助範士から下村富夫先生まで五十名の先生方との稽古・御指導いただいた思い出をつづったもので、その内三十九名の方が範士先生であること、また五十名以外の先生方にも御指導いただいた感謝の著である。

令和二年十一月二日、電話があり、川田武志氏、石本芳照氏、高校時代の剣道部員等での思い出、その後についてなど、酒を少々酌み交わせ、語り合う場を持つとうと計画していた。

そのやさき令和三年一月二十四日朝、肺炎のための悲報であった。まことに残念無念でならない。合掌





吉田博三先生を偲んで

美馬支部 柴 田 宗 忠

令和三年一月二十四日 午後一時すぎ吉田博三先生の実家から電話をいただき、先生がお亡くなりになったことを知りました。昨年十二月より入院されていたのは知っていましたが、こんなに早く亡くなられるとは思ってもみませんでした。八十三歳、まだまだこれからいろいろなことを教わりたいと思う矢先でした。

吉田先生には大変かわいがっていただきました。ここではいつもの会話のように大学の先輩でもありますので、吉田先輩と呼びせていただきます。吉田先輩の生い立ちや戦績、剣道に対する取り組み等は、徳島の剣道第三十五号特報ふるさとトーク・第三十六号特報剣道回想録で自分で詳しく書かれていたので、私個人の思い出やエピソードを書かせていただきます。

私が学生時代（昭和五十三年）に下村富夫先生のご子息、三郎さんと二人で熊谷市の自宅へあいさつに行った時のことです。昼ご飯をごちそうになり奥様にもお会いし、いろいろなお話をしていただき愛車のベンツで駅まで送ってもらい、たくさんお小遣いもいただきました。高額だったことで大変うれしく「また行こうな」と二人で顔を見合わせたことがありました。いい先輩だな。脇町にもこんな先輩がいるんだ。学生の私にはありがたかったことを思い出します。

平成二十四年全国中学校剣道大会が埼玉県で開催された折、熊谷市からわざわざ宿泊地の浅草まで来ていただき、選手の上田真奈さんと私に美味しいしゃぶしゃぶをご馳走していただきました。その時「これは私が注文をした竹刀の一本だ。突きがよく入るから使いなさい」。吉田先輩の最も得意とする突き技仕様の高級竹刀でした。後の社会人大会でこの竹刀を使って突きが入ったとき、竹刀がすごいのか吉田先輩がすごいのか、悩みましたがこれは両方だなと納得しました。

徳島の剣道三十六号で書かれておりましたが、俳句も詠まれ、いくつかの作品を俳句大賞に応募されていました。亡くなる間際の作品は故郷を想う俳句で吉野川や土柱を背景に詠んだ作品でした。

昨年九月には地元埼玉新聞に吉田先輩のことが記事になりました。その中で「剣道で大切なことは跡継ぎを育てることだと思います」と伝えたそうです。まさに今、剣道人口が減少しているとき指導者が心掛けなければいけないことだと痛感しました。

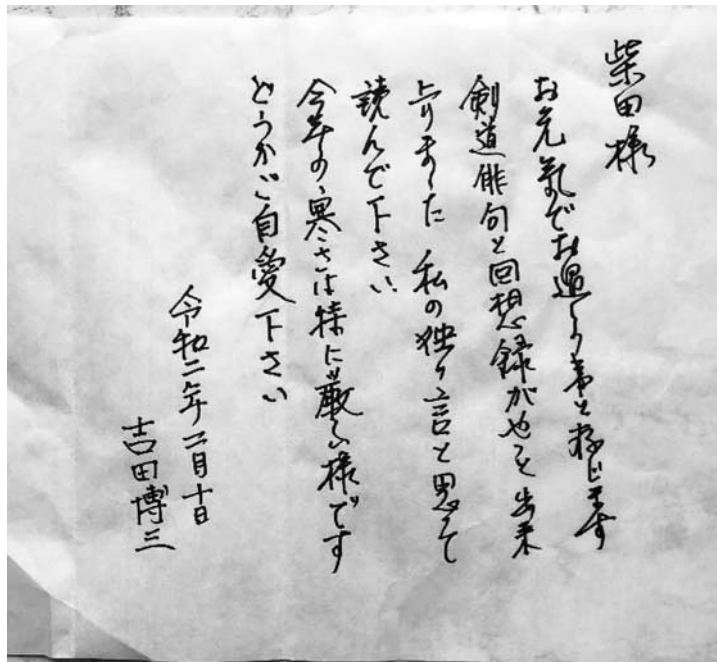
脇町に帰られた際は必ず連絡をいただき「ちょっと遊びに来るか」と実家に呼んでいただき、甘酒をいただきながら大話をしたり、竹刀を手に技を教えてくださいました。特に「差し押さえ」の技については細部にわたり教えていただきました。これを使えるようになるは無理なく面や小手が打てるようになる。「この技は銀行のそれよりも恐ろしい」と言っておられました。最近ではコロナの関係で電話で話をするのが多くなり、剣道の技の話、人

物の話、俳句の話、紙面では書けない話をユーモアたっぷりにして頂き大声で笑ったのを思い出します。切り落とし技や摺り上げ技を指導している動画もお弟子さんを通じて送っていただきました。

昨年十一月には春風会道場のお弟子さんを連れて帰省し、脇町剣道教室で指導をしていただく計画でした。お弟子さんのお話では脇町で稽古できるのを大変楽しみにしていたとのことでした。

まだまだ書ききれないほどの思い出が山ほどあります。元気で稽古され「今日は十人超えて稽古した」「俳句の賞はもらったようなものだ」と言われていたのに、もうお話を聞けなくなるとは思ってもありませんでした。残念で仕方ありません。剣道が強く温厚で後輩思いの大好きな素晴らしい先輩でした。「おいおい、悪く書くなよ。こっちではまた下村先生にしごかれそうだよ。」と言われるのが聞こえそうです。

令和三年一月二十七日 合掌



剣道回想録と剣道俳句集を送っていた時の手紙

わが祖父・父を語る

わが祖父

範士八段 高島永吉を偲ぶ

徳島県高齢剣友会会長
全日本高齢剣友会副会長

高 島 稔 之

この度、編集者より、祖父（永吉）について書いて欲しいとの御依頼があり、以前に「徳島の剣道」（第五号）平成元年五月二十日発刊（三十二年前）の中で掲載させて頂いたものを再掲載させて頂くことにしました。



高島永吉は、明治二十四年十二月一日、岡山県邑久郡大宮村宿毛（現・岡山市幸地崎町）に池内末吉の三男として生まれた。

郷里の尋常高等小学校長・岡田義孝に剣の手ほどきを受け、騎兵隊で三年間の軍隊生活を送り、除隊後、京都の武道講習科（武道専門学校の前身）で厳しい修行を重ね、大正七年二十六歳の時、大日本武徳会徳島支部の専任教授として着任。警察、師範学校、商業学校、刑務所、旧徳島

中学校（現・城南高校の前身）等の剣道教師を務め、多くの人材を育てた。この間、故吉本彦吉範士の次女・米子と結婚、高島家を継ぎ二女をもうけた。

師の剣道の神髄はその軽妙な足さばきであり、往年の剣を知る人は、『玉を転がすような足さばき』、『水の上を滑るような足さばき』と讃え、その足さばきより繰り出される小手、面の秀技に感嘆した。

身長一六五センチメートル前後、体重中ぐらいで、体格的には恵まれている方ではないが、機敏な運動神経と何事に対してもコツコツと努力する粘り強い性格により、その見事な剣技と人格を大成し、皇紀二千六百年奉祝・檀原神宮奉納全国剣道大会（昭和十五年四月）においてベスト8入り、同年六月の天覧武道大会の指定選士に選ばれるなど、『剣道界に高島あり』とその雄名を全国に轟かせた。

太平洋戦争の敗戦により武道は一時中止となり、郷里の岡山で農耕にいそんでいたが、知己や門弟の招きもあり、昭和三十一年徳島に帰り、再び剣道の指導を始め、翌三十二年五月・八段、翌三十三年五月・範士の称号を授与された。昭和三十四年から五十年まで剣道連盟副会長、没年まで名誉会長を務め、無口ではあるが、その誠実・謙虚な人柄をもって、本県剣道界の要としての役割を果たし続けた。この間、昭和四十一年十一月には、それまでの功績が認められ、勲五等瑞宝章が授与され

た。

晩年の師は、剣道指導の合間に、門弟などをつかまえて、あまり上手とは言えない囲碁・将棋の二刀流を演じていた。その時の師の姿は、まるで子供のように楽しそうにはしゃいでいた。これは、往年の師が、そのカイゼルひげのゆえをもって、『ひげピン』と恐れられていた姿を脱し、無我・無欲の境地にさしかかっていた象徴であったように思われる。

昭和五十三年十月十六日、八十六歳でこの世を去った。十月二十一日、師の逝去を悼み徳島県剣道連盟葬が挙行された。五百余名に及ぶ参列者の数が、師の偉大さを物語っていたと言えよう。その遺影は今も県武道館の正面で、我々後継者の活躍を見守っている。

〔徳島剣道三十年の歩み〕より

当時の徳島支部長の森川先生（故人）より、「孫の稔之先生の手で、範士八段・高島永吉先生について書いて欲しい。」と言う依頼があり、筆を執ることになった。しかし、自分の祖父のこととなると大変書きづらい。とりわけ、私自身が物心着く以前の祖父の姿については、人の話を聞いて書く以外は手に負えないことになる。そこで、往年の姿と経歴については、「徳島剣道三十年の歩み」の中から引用して、その紹介に代えることにした。そして、私自身が物心付いてから後の祖父の姿を通して、剣道家としてその根底にもっていただけられる剣道観

について述べてみたい。

「高島は、お祖父さんから色々教えてもらえるけんえーなあー。」と、これまで何十人に言われたかわからない。しかし、本当に、祖父を知る人は、「高島は、お祖父さんにも誰にも全然教えてもらえなくて大変だなー。」と言うはずである。（しかし、現実には、誰も、こう言わなかったが……。）

祖父から、手取り足取り教わったという人はいないのでないかと思う。それは、口べたで控え目な性格によるところが大きいのであるが、それとともに、「剣道は、口で説いたり、手取り足取りして教えることのできるものではない。（表面的、技術的なものは教えられるが）」と言う考えが、晩年になるほど強まっていたように思われる。このことは、「現代剣道百家蔵」（全剣連、昭和四十七年）の中で、「剣道は何のために」と題して述べている内容からも推察できる。この文章は、「徳島剣道三十年の歩み」の中にも紹介されているが、簡潔に言えば、「剣術でなく、剣道であれ。剣道修業の目的自体も、刻々と高まるものであれ。つまづけば、基本にもどれ。時として、師に問いかけて見るもよし。しかし、道の追究は、師の後ろ姿を見て、自分自身が修業する以外に最終の方法はない。」と言うことだと思われる。

この文章を見る度に、今は亡き下村富夫先生を思い出す。祖父が、この世を去る二年程前のことである。新年の寒稽古

の後、下村先生が、祖父に「お年玉をください。（今日の私の稽古について御指導ください。）」と言ったところ、「そんなものはない。（下村先生のような段位になると、人から与えてもらえるようなものはない。）」という返事がかえってきたと、私に二、三度話されたことがある。そして、下村先生ご自身は、亡くなる一年程前から、「仕太刀の剣の修業」ということをしきりに口にされていた。あの鋭い剣先からの豪快な技をふまえた「仕太刀の剣」への変容に、道を志す一人として、大きな関心を寄せていた。ところが、思いもよらぬご他界によって、このすばらしい剣道のドラマは、完成を見ないまま終わってしまった。「百家箴」の中の祖父の言葉は、下村先生の話とオーバーラップして、今も私の心の中に強烈な印象として甦ってくる。

剣道を志す諸先生方から、祖父と係るいろんな話を聞くにつけ、「人に『教える』ことは得意としない範士であったが、「人に『学びとりたい』と感じさせる範士」であったと感じるようになった。私は、職業柄、『教える』ことを業としてゐる。しかし、「人に『学びとりたい』と感じさせる己でありたい。」と思う昨今である。



祖父を思う

警察支部 仁科文宏



今回光栄な事に、徳島の剣道の執筆依頼を頂きました。改めて祖父が旅立ってから十六年の月日が経ち、時の流れる早さを実感した次第であります。

私は、六歳から祖父の影響を受けた両

親の勧めで剣道を始めました。その頃は九州の鹿児島県に住んでいましたので、鹿児島県のスポーツ少年団に入り、私の剣道人生が始まりました。その小学生時代に、夏休みになると決まって、徳島の祖父の元へ行き、祖父の道場で毎日稽古をしていました。普段、祖父は孫である私にとっても優しい「爺ちゃん」でありましたが、ひとたび稽古が始まり、その優しいままの爺ちゃんにかかると、ほぼ百パーセントの確率で掛かり稽古だった事を思い出します。その掛かり稽古は、息つく暇を与えない掛かり稽古でした。打突して振り向くと、そこには一足一刀の間合いに祖父がおり、打突しなければならぬ。そんな稽古を毎日行いました。

そして、私は中学二年生の冬から徳島で生活することになり、より祖父の近くで生活していくことになりました。

祖父は、とにかく剣道が人生の中心であり、防具を着けて稽古に励むのは当然ながら、少しでも時間があれば自宅の庭で素振り

をしたり、防具の手入れをしたり、また書物を読んだり、書道をする姿をよく目にしました。しかしそれと同時に、家の掃除、家事全般、祖母は自営業であるため、その送迎を毎日したりと完璧にこなす人でした。その頃から私にとって「優しい爺ちゃん」から「偉大な祖父」へと印象は変化していきました。

中学・高校と剣道をしていくなかで、私は祖父に、自分の剣道について、どうしたら強くなるのか、結果を残せるのかと、質問を何度かしたことがあります。その時、決まって祖父から言われることは、

「目先の結果にこだわらなくてもいいじゃないか。基本が一番。綺麗な剣道で稽古を積み重ねた者が、必ず結果を残すんだよ。」

いつ聞いても、それは最後まで変わる事はありませんでした。

そして私が大学二回生の時、祖父はこの世を去りました。大学を卒業し、徳島で警察官となり、剣道特練員として剣道に打ち込む事になるのですが、特練員は結果が全て。自ら剣道というものについて向き合い、自分の剣道について試行錯誤しながらやっていくしかありません。そして、その時ほど、祖父に剣道の話聞きたいと思ったことはありません。今思い返すと、祖父が私にあえて細かくアドバイスをせずに、多くを語らなかったのは、自ら考え、それを稽古で実践する。教えられることをやるだけでは、人として成長できない事を伝えたかったのではないかと感じています。

剣道の理念である、

「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である。」

剣道修練の心構えである、

「剣道を正しく真剣に学び、心身を錬磨して旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて礼節をとようとび、信義を重んじて誠を尽くして、常に自己の修養に務め、持って国家社会を愛して、広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである。」

という理念と心構えの、真の意味を自ら考えて欲しかったのではないかと思います。

私は現在、剣道特練員を数年前に卒業して、剣道中心の生活から離れています。今まで培ってきた土台は剣道にあり、その頃の苦勞を思えば、ある程度の困難は大したことはないと思えます。

結びになりますが、今の私があるのは剣道を通じて結びついた全ての方々のおかげと心に刻み、現在（一月現在）コロナ禍で剣道はおろか、様々な物事に制限がかかり、不満や不安が募る日々を送らなければなりません。しかし、大きな転換期であり、そんな今だからこそ、調和を大切に日々愚直に、腐らず、前を向いて頑張っていこうと思います。

祖父は、

「あなたの職業は？と尋ねられたら剣道家と答えたい。」と言っていました。まさに堀江幸夫は剣道家でした。



父・下村富夫 — 楽天命 —

長男 下村 昇



大正十五年五月二十二日に福井家の長男として生を受けた父であったが、両親が一日も早く学校に行かせたくて三月生まれということでは出生届が出されたようだ。早行きのせいで、小学校時代は、同級生に比べて背が低く、劣等感を持っていたという。いじめられたかどうかは判らないが、父の持つ負けん気というか、勝負にこだわる執着心は、その頃から育まれてきたものだった。

旧制脇町中学校を卒業後、国士舘専門学校（現国士舘大学）に進学する。ちょうど太平洋戦争真っ只中だった。国士舘では、国文学を学び剣道部に入部し稽古を重ねていった。そして志願して陸軍予備士官学校に進む。その後、陸軍少尉として終戦直前に関東の陸軍部隊に配属された。海外への出征はなく内地で終戦を迎えた父は、国士舘専門学校に復学する。何回か父から聞いた話だが、戦後の荒廃した東京には、ヤクザまがいのチンピラがいっぱい居たそうだが、国士舘の剣道部と言うだけでヤクザからも一目置かれていたようだ。

国士舘卒業後、徳島へ戻った父は、江原中学校で教師としてのスタートを切る。父二十二歳の時だった。当時、剣道の腕を買わ

れて、石井町の須見家の分家にあたる脇町の須見虎雄氏の娘・久江との縁談が持ち上がり、脇町にあった下村家に夫婦養子として入った。久江と同年の二十四歳での結婚であった。

脇町の下村家はちょうど跡取りがなく、父を第十九代下村家当主として迎えた。下村家の先祖は、蜂須賀家政公の家来として戦国時代より馬廻役として仕えており、江戸時代から明治時代にかけては、今の徳島市の城山公園あたりに下村の梨屋敷があったと伝えられている。

昭和三十六年、久江が三十五歳の若さで急逝する。後には幼い三人の息子が残された。父は大変なショックを受けたようだが、翌年、鳴門の岡野家からものすごい別嬪さんのお母さんがやってきた。岡野家は鳴門わかめの創始者の家であり、明治天皇に鳴門





わかめを献上した旧家である。父もほっとしたのか、さらに剣道にも磨きがかかったようだ。ちなみに我々三兄弟はいずれも大学まで剣道をやっており、父も鼻が高かったと思う。親孝行と言えるのはそのくらいしかなかったが・・・。

昭和三十七年五月には全日本都道府県対抗剣道優勝大会第一回大会より連続一〇回出場場で表彰を受ける。その後全日本剣道選手権大会一〇回出場、全国教職員剣道大会二〇年連続出場の表彰を受けた。この三つの表彰状は、今でも八万町の自宅に掲げている。全日本選手権では半分くらいは一回戦で負けていたらしいが、この三つの一〇回出場記録は、日本一だとよく自慢していたのを出す。

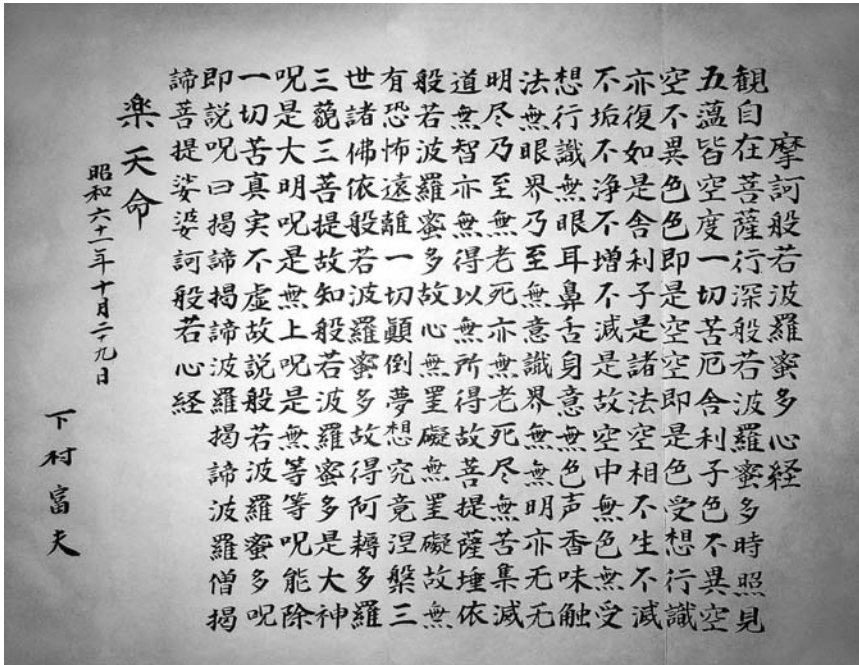
父は昭和三十三年、三十二歳で剣道七段位を取得する。当時は、全国最年少での七段取得であった。その後八段までの道のりは遠かった。五十歳を過ぎたころから何度か八段の試験に挑戦していたようだった。

五十九歳で教員を早期退職し徳島文理大学に勤めるが、翌年胃がんが見つかり八月に手術。一度は退院するも再入院。入院中も退院後に、また八段を受験すべくハンドグリップで握力を鍛えていた。

お酒が好きで、人を喜ばせるのが大好きで、それよりも何よりも剣道が好きだった下村富夫の人生は、少々急ぎ足だったかもしれないが、好きなことを一杯やれていい人生だったのではなかったかなと思う。



八段の夢叶わず父は六十歳で生涯を閉じた。「生涯の勝」を追
い続け、「自浄修練」に励み、最後にたどり着いたのが、「楽天命」
ということであった。



わが父・柴田稔夫を語る

長男 柴田宗忠

父・柴田稔夫は大正十二年十月十六日生まれで生きていれば今年九十八歳になりますが、昭和五十八年十一月、私が二十六歳の時六十歳で他界しました。

父は脇町高校・法政大学時代は剣道部の主将を務めており、試合巧者であったようです。終戦後は徳島に帰り、脇町役場に勤め、東西対抗・国体・教職員大会等参加し、多くの人と交友を深めたそうです。私も法政大学に進学し、剣道部に入部した関係で父のことは多くの先輩方から聞かされていました。学生時代はこんなことを一緒にしたとか、国体の試合はこうであったとか、東西対抗はどうだったとかいろいろ武勇伝もあったようです。

私は父とはあまり稽古の思いがありません。学生の頃稽古にかかっていくと「お前は剣道のセンスがない、剣道するより勉強しなさい。」「私と稽古するよりほかの先生にかかりなさい」と言われたのを思い出します。また、東京でサラリーマンをしているとき「徳島に帰ってきて、教員になりなさい」と言われたのも記憶に残っております。

私の剣道の先生、先輩方は父と親しくしていただいた方ばかりです。父は私に人間関係という多くの財産を残してくれました。先生先輩方に優しくしていただいているのは父のおかげだと思

ます。

父を知るたくさんの先輩方から「お父さんは剣道が強かった」「おやじそっくりだ。剣道は違うけど」とお褒めの言葉をかけていただいております。

脇町高校剣道部「芳越剣友会」では毎年十二月三十日に多数のOBの先輩方が墓参りに来ていただいております。墓参りは下村先生、滝下先生、そして父親の墓です。父が亡くなって三十八年、毎年来ていただいております。ありがたいことです。父親も大変喜んでいえることと思います。

話は前後しますが、昭和五十年頃 父が「稲武館」を立ち上げ少年剣道の育成に力を入れたと聞いております。父がなくなった後、長江芳香先生、細川昭典先生に引き継がれ、今の「脇町少年剣道教室」に至っております。剣道が好きだった父に親孝行が何一つできなかった私ですが、「脇町少年剣道教室」を通して剣道を絶やさないようにする事が私の使命とあって子供たちと共に稽古に励んで行きたいと思っております。

この原稿を書くために昔の写真を整理していると、懐かしいものが出てきました。以下に掲載しておきます。



父と私



左から、大沢先生 父 米倉先生 西谷先生 堀江先生 坂下先生



高千穂国体 父は後列右から3人目



高千穂国体 父は後列右から3人目



琵琶湖国体前列左から、大沢先生 父 遠藤先生
後列左から、中尾先生 福多先生 近藤先生



稲武館 後列左から、細川先生 長江先生 父



島根国体 前列左から、近藤先生 岩木先生 出葉先生 米倉先生
後列左から、玉田先生 臼木先生 布川先生 大沢先生 高島先生 父 福多先生 坂下先生



東西対抗 左が父



脇町高校剣道部OB会「芳越剣友会」

父・寺西慶裕から受け継ぐ

長女 竹内 佳代子

父が亡くなってから、もう十五年も経つ。私にとって父は、人生の道しるべである。

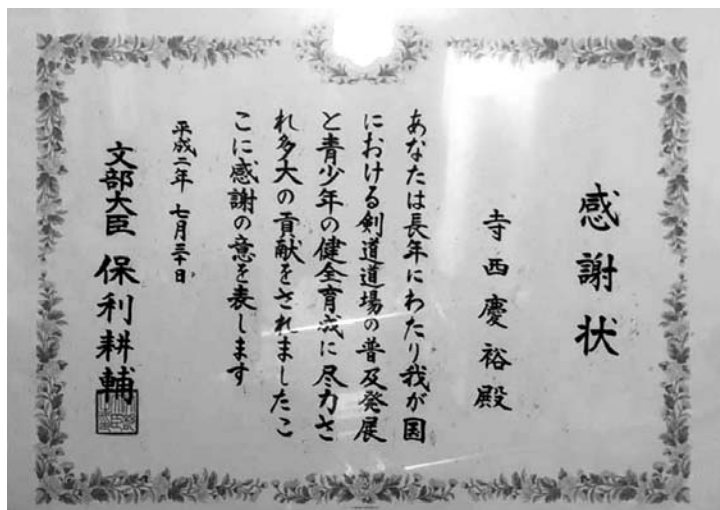
父は四十一才の時、川島警察署から鳴門警察署へ異動になり、剣道を通して将来社会に貢献できる立派な青少年を育成したいとの思いで、鳴門警察署の柔剣道場をお借りして、鳴門少年剣道クラブ（現在の鳴門市光武館道場）を発足させた。その時、私も二人の兄とともに入門することになったが、小学校二年生だった私は、父に言われるままに何のためらいもなく入門したと思う。それが私の剣道人生の始まりである。



父から指導を受けた人たちは、父のことをみんな「厳しかった」「怖かった」と口にする。兄も「鬼のようだった」と言う。でも、私の記憶の中にはそんなイメージはない。私はよく父と二人で練習をしていた。道場以外でも、当時住んでいた警察官舎の駐車場で、防具をつけずに打ち込みなどの練習もしていた。兄には、「佳代子には甘い父親だった。」とよく言われるが、父と練習するのは好きだったし、楽しかったので、怖いというイメージはまったくない。でもそんな父も、勝負の内容には厳しかった。一番叱られたのが、私が高校二年生の時の県総体予選である。心に油断が生じ、集中力に欠けた不甲斐ない試合をした私を、公衆の面前で何度も殴りつけた。その時だけは、優しいはずの父も、しばらくは口をきいてくれなかった。

大学の進学先も父が決めた。「剣道が日本一強い大学に行け。」高校生になってもあまり物事を深く考えていなかった私は、その大学についてよく知らないまま父の希望通りに筑波大学を目指した。合格したのは本当に奇跡以外の何物でもない。それがまた私の人生に大きな影響を与えてくれた。

父の生きがいがかたかったように、私の生きがいも剣道である。時々思う。あの時剣道をしていなかったら、どんな私になっていただろうか。筑波大学に進学していなかったら、今も剣道が続けただろうか。剣道は私の人生にたくさんの彩りを与えてくれた。剣道から学んだことは大きいし、何より私の心を強くしてくれたと思う。そういった意味でも、父には本当に感謝している。



私が感動した「徳島の剣道」

堀江先生が憂いた三十六年前の道しるべ

徳島県剣道連盟会長 三木 毅



年刊機関誌「徳島の剣道」の創刊号は昭和六十年発行で、今を去る三十六年前のことである。三木只雄会長が巻頭言で触れられた発刊の意は「過去を偲び或いは省み、将来に向かっての活躍資料の糧

になるものと思意される」と記されている。その頃の徳島県の剣道人口は有段者約八〇〇〇人、小学生二七五〇人（男子二三〇〇人・女子四五〇人）という盛況な剣道人口が記録されている。

誠に喜ばしいことながら、堀江先生は憂いの念をもち、道しるべを示されている。その中身は、剣道が求め続けている剣道の価値と歴史と伝統の伝承という誇らしい場面から観た憂いである。すなわち、「躰や礼儀、人間形成の目標が等閑されている」「剣道全体の傾向や姿は勝負剣道のための修錬となっている」ということである。

先生はその後の剣道の姿を見越していたように、平成になって、

「三所隠し」という剣法が姿を見せ始めた。嘩然とした勝負剣道の姿であった。全剣連が「三所隠し」を反則と解釈したのは平成二十年のことであり「公正を害する行為」「時間空費」としたのである。堀江先生が憂いた一端が審判規則上で規制されるまでになった。

現在やっと「三所隠し」は姿を消しはじめてきたものの、相当の時間が必要であったことを忘れてはならないと思う。

全国的な傾向として剣道人口は微減の傾向にあるが、心強い剣道愛好家の情熱によって、剣道が連綿と伝承されている事実は厳然と存在している。伝承の重責を担っている現役の剣士は、堀江先生が憂いた「剣道の進む道」を熟読吸収して次代に憂いなく剣道理念が伝承されることを切に願うところである。

剣道の進む道

徳島県剣道連盟理事長 堀江 幸夫

最近全日本剣道連盟が発表した有段者数は八十万。では本県は、登録有段者数八千人に及ぶ。幼少年剣士を加えると大変な数にのぼる盛況ぶりである。盛んなことは結構なこと、まことにご同慶のいたりである。しかし、この盛況を裏返してみると、手放しでよるこんでばかりおれない歪も、表

面化してきていることも否めない事実である。

今は、教育の本質がどうあれ、良い点をとればよい、剣道の本質がどうであれ、試合に勝ちさえすればよいの風潮が蔓延しつつあり、剣道の前途に駭^{おそ}りをさえ感じさせる昨今である。試合は、剣道修練の手段である筈なのに、試合のための修練となっている。全国は勿論、県内の行事予定表を見ても、大会がぎっしりと詰まっっていて、剣道界あげて試合志向型となり、いきおい勝つことに狂奔している姿が、この辺の事情を物語っている。

少年剣道大会一つを例にとっても、指導者も保護者も、勝った負けたに一喜一憂、徒らに勝敗に夢中で、剣道修練の最も大切な課題である、躰や、礼儀、人間形成の目標は等閑にされたままである。

又一方では、修練を外に、ただ高い段位をのぞみ右往左往している姿だ。試合も段位も、剣道修練の手段である。少しでも高い段位をのぞむのは、心情的に理解できる。しかし、段位はあくまでその人の修練の尺度であって決して剣道の凡てではない。黙々と地道に、苦しい稽古に打ち込んで、気がついたら何段に達していた。

社長になるために仕事をしたではなく、一生懸命仕事に打ち込んで、気がついたら社長になっていたという心がけが大切なのではないだろうか。こうした姿勢こそ剣道を学ぶ者の本当の姿であり、そこに自ら剣道が広がり、深まり、自らの目も開い

て自己の思想ともなるのである。

こうした、諸々の事情の中で、遅滞ながら剣道の本質に還れの声がようやく出はじめた。特に全剣連が、昨年度日本選手権の選手の資格を六段以上にしたのも、こうした声の下での苦肉の策なのである。勝敗にこだわる余り、格調の高さ、理念にかかった試合がのぞめなくなったからである。この六段以上にすることも、種々意見も批判もある。こんな小手先の策を弄しても、剣道を本道に引き戻すことも、本質に還れるものではない。

剣道人の凡てが、剣道の本質に目覚めなければ立ち直りはない。剣道は、打ち突きという頗る単純単調な動作の連続で、一見竹刀での叩きあい、打ち合いが剣道の凡てなのであるとか、とふと疑問が。だが、五十年六十年と続けている人など、別して珍しくないのがこの道。若さ、スピード、力、技と、体力が凡てであれば、七十歳八十歳の高齢ともなれば、到底ついていけない筈の剣道が、現実では強さ、格調の高さに微塵の衰えも見つけられず、むしろ年齢と共に技に枯淡^{こたん}の味、静謐^{せいひつ}な強さと牙えが益々加わってくる。これは剣道のみがもつ他に求められない特質である。体力的技から脱して、心の技が自在に働きを發揮するからであろう。

幕末の剣士島田虎之助の「剣よく人を打つに非ずして心よく人を打つなり。われよく人を打つに非ずして彼自ら打たるるなり」の無心の境地こそ技の極地である。この心の技は、長い年

月厳しい稽古の中で蓄えられた力が体内で熟成昇華して剣の心となるのである。厳しい修練を避けて通っては、絶対に得ることのできない剣の心である。

吾々は、剣道何百年の歴史を知り、先師先輩の遺産を正しく受け継ぎ、次代に手放す努力をし、五十年百年後の剣道に思いをいたさなければならぬ。勿論、こんなことを抜きにしても、強くなることも試合に勝つこともできるだろう。だが剣の心はつかめない。

剣の心を知ろうと願うならば、広く謙虚に学んで剣道に教えてもらうしかない。吾々が、剣道をとおして求めているのは、剣の理法の修練によって、自己を自覚することであり、自己の完成であり、人間の原点に還ることである。

剣の心とは、人間の原点である。このことに思いをいたし、長短は問わず日々の生活の中で心身に付着した諸々の穢れを剣の修業によって奇麗に拭いさり、純粹無雜の生れながらの心への回帰に努めなければならぬ。剣道の進む道は、いや私たちの進む道は、この道に外ならない。



堀江幸夫先生 「随想・老剣士のつばや記―恩師―」

副会長 米 倉 滋



私が特に感動した「徳島の剣道」は、
第二十二号（特集・追悼 堀江幸夫先生）
記載の「随想・老剣士のつばや記―恩
師―」です。

川内にある堀江先生のご自宅によくお
伺いしました。そのとき先生はご自分のことはあまりお語りにな
らず、恩師「酒匂久」先生のことをよくお話しされ、その内容が
随想に込められております。これを読むと当時が思い出され大変
懐かしく思います。

私事で恐縮ですが、先生がお亡くなりになって四ヵ月後、平成
十七年十一月、日本武道館において行われた八段審査において合
格することができました。これもひとえにこれまでの堀江先生の
ご指導があったることと感謝しております。



随想

老剣士のつづや記

— 恩師 —

堀江幸夫



“初日の出

待つ間に交わす

御慶かな”

老境の光陰は夢

中に過ぎていく平

成十五年はどんな年になるかと。結果は、暗いニュースばかり益々混とんとした世相の中で終わった、無責任な放言と受取られても仕方がないが、正直言って何一つ期待出来る材料がなかったし、その上、今日の世の中での動静など所詮は私の手の届かぬところであり、心の中でケ・セラ・セラを決めるので、剣の道の片隅で一隅遍照を考えていたのが本音であった。今年は、珍しく素晴らしい初日の出で迎えた、平成十六年は

甲申で私にとっては七回目の年男となる。

想えば、太平洋戦争で死んでいた苦の私が、大病もしつつ八十四年生かされた。有難いと言うより不思議に思えるのが実感であるが、人生いろいろ八十四年の人生の後半で考えもしなかった剣道の専門家としての生活になり、多くの先輩専門家に交じり我武者羅に稽古して、心技体を鍛えられて今日に至ったこの四十余年間剣道具を肩に、全国津々浦々に足跡を残す。期するは、心秘かに一流専門家に伍して一步も、との競う心と一方で恩師が目指した剣の心を守り継ぎたいと、大外れた望みを抱くようになっていくのも自然の成り行きであった。師の大きな背中が私を導いてくれた。今日未だ力及ばずの焦燥はあるが、師の背中を見失うことがない限り精進努力の泉は枯れることはない、恩師の更なる加護を祈る今日この頃である。

恩師「酒匂 久」は鹿兒島県蒲生町に生れ鹿兒島県立第一師範学校を経て、京都武道専門学校を卒業され、大阪府警察の剣道教師となられるが、終戦により郷里蒲生町

に帰られ、請われて蒲生町長に就任在職中に亡くなられた。享年四十三歳の若さであった。鹿兒島師範在学中に鹿兒島県代表として、昭和四年の昭和天皇即位天覧試合に出場し、予選六試合を五勝一敗で惜しくも決勝トーナメントに進出出来なかったが、その豪剣ぶりは後々まで語り継がれた。武専時代は申すに及ばず、大阪府警に入られ、

精進ぶりは府立青年塾堂の朝稽古から始まり、警察学校、武徳殿、時には母校武専へと稽古相手を求めて一日が終る繰り返しであった。その間宮内省主催の皇居済寧館大会に優勝、明治神宮大会で二度の優勝されたが日々の稽古は愈々いよいよきびしさを増すばかりであった。

私が全国各地の行事や稽古に参加しはじめた頃、よく「君の師匠は誰か？」と聞かれたが「酒匂 久」と答えると、殆どの人は「道理で…」とうなずき特に武専出身の人達は、“酒匂先輩の”その後は別格の親しみを以って接してくれた。思わぬところで師の遺徳をいただく。先生は薩摩出身らしく言葉数のごく少ない、一緒にいても言

葉で指導されることは殆どなかった。ある時など「男はいらぬことはしゃべらないようにしなさい」と注意をうけた。稽古を頂いた後も、いいとも悪いとも言われず“露堂々”すべてをさらけ出して稽古を見せて下された。“見て学べ、研究工夫せよ剣道は百錬自得だ”と声なき声の芯まで。多感な青年期又とない剣と人生の良師を得、今日尚、無言の語らいの中で教えを頂く幸せをしみじみ噛みしめる日々である。

“かなかなや 師弟の道も 恋に似て”

秋桜子門滝春一句



鹿児島酒白先生の墓参り



堀江先生の恩師 酒白 久先生

故 堀金 實先生の

『ありがとうございますございました』に思いを寄せて

徳島県剣道連盟理事長 藤 川 和 秋



先日、家族で写真の整理をしていたところ、故 堀金實先生の叙勲祝賀会の写真が出て来ました。小松島少剣クラブ主催で私が司会をしている写真、また故 堀金先生が保護者等の女性陣に囲まれ、嬉しそうに笑みを浮かべている写真で懐かしく見入ってしまいました。この祝賀会は平成十三年十一月二十四日に開催され、その翌年の三月十六日に先生は亡くなられています。

故堀金先生は、昭和二十年に徳島県警察官を拝命し、現職の三十六年間を主として刑事畑を歩んで来られ、現職中は剣道特練生として全国大会にも出場されています。退官後は徳島県剣道連盟の少年部長を経て、亡くなるまでは審議員を務められたほか、地元の小松島少剣クラブの代表指導者として少年剣士の育成に尽力されていました。

懐かしい写真を見ると、故堀金先生が晩年、病に倒れ入院中に「徳島の剣道」に投稿されていたのを思いだし急いで探してみたところ、徳島の剣道第十八号に「ありがとうございました」との表題で掲載されていました。



叙勲受賞祝賀会での故堀金先生と私

当時、故堀金先生は病で入院中に投稿されており、叙勲祝賀会への出席をお願いした際にも病にかかわらず快く承諾して頂いたことは今でも忘れられません。

故堀金先生は常に「感謝」という気持ちを大切するよう子供達に指導をしていました。そんな感謝の気持ちを表した先生の「ありがとう」がとうございました」の投稿文は、死を身近に感じ自分に関わった全ての人達に感謝の意を伝えたかったものと思います。

先生の「ありがとうございます」との感謝の掲載文を改めて読み直し、故堀金實先生の当時の心境が、乾いた大地に雨粒が染み込むごとく心に伝わってきました。私も人としての晩年に近づき、故堀金先生と同じ思いが湧き上がってくるのをしみじみと感じたところです。



小松島少剣クラブ保護者等との記念写真

「ありがとうございました。」

小松島支部 堀 金 實



入院先の病室で長男の嫁から「爺ちゃん叙勲表彰をしてくれるようでよ。しかし、内示の内示の様な連絡であった」と言うのが私が知った一報である。思えば長い月日の間で思いもよらぬ出来事を体験して来た事は何度かはある。

しかし、叙勲などは思いもしない夢物語で実感が湧いてこない。どちらにせよ、十一月三日がくれば判ると思ったのが実感である。

そして、十一月三日の朝刊で勲五等瑞宝章の受章を確認しました。思えば、昭和二十年九月二十五日、徳島県警察官を拝命し、昭和五十六年四月一日までの三十五年七ヶ月の期間を無事勤め上げ、事故なく退職する事が出来ました。その約二十六年間は捜査関係の仕事にたずさわっていました。また、その間、上司先輩からのご支援で警察庁長官表彰そして警察功労賞を受賞することが出来ました。今回表彰もこの功労賞が大きな要因となっている事をつくづく感じとったのが実感であります。

人として人生の中で大きな節目を見た時、自分自身の自立と

社会への奉仕を考えるのが常道であろうかと思えます。江戸時代の儒学者であった齋藤一斎の教えをおかりするならば、「少老いて衰えず、老いて学べば則ち死して朽ちず」。しかし、残念な事に、今の自分には体力的、精神的にも出来得ないのが実感でございます。

ここで今後とも皆様からの温かいご指導とご鞭撻、それに叱咤激励を心からお願ひ申し上げます。

最後に私を支えてくれました多くの皆様に対し衷心よりお礼を申し上げます。

合掌

坂下彦之先生の

「剣は人なり 剣は心なり」

徳島支部 別宮 憲治

私は、剣道は歳をとってもできるということ、定年退職後に徳島支部の月曜会に入会させていただき、吉田昌彦先生のご指導の下、週一回の稽古に励んでいます。今もって、どうにかして面一本が当たらないものか、そのことだけに腐心しています。そんな私が驚きましたのは、坂下彦之先生が「徳島の剣道・第三十一号」の巻頭言で紹介されている堀江幸夫先生のご指導「一本の打突の尊さ」についてです。初心者私の想像だにできない、剣の達人の凄さを垣間見たと思います。

「剣は人なり 剣は心なり」

徳島県剣道連盟 会長 坂下彦之



「剣は人なり、剣は心なり」は剣道人であれば、よく耳にする言葉であります。全日本剣道連盟においても『剣道の理念』として「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と定

義しています。

また、剣道の稽古のあり方について、かつて我が師・堀江幸夫先生は次のように指導されておられます。「我々は日々の修練の中で打つという動作を反復しているが、その一本一本の打突の中に、オーバーな申しようであるが、自らの人生を賭けていなければならない。それは単なる当てるための打突ではなく、打たなければならない必然性の具備された打突、すなわち天地自然の理法にかなった打突であり、その打突に自らの人間性が深く沈潜し、それが相手の心に昇華していくところに一本の打突の尊さがある。」

堀江先生が指摘される「その打突に自らの人間性が深く沈潜する」ことこそ「剣は人なり、剣は心なり」の要諦であり、人間性を高める剣道を行うことこそが、先人や諸先生方が目指された剣道であったと確信するところでもあります。

徳島県剣道連盟の皆様方におかれましても、今後益々、人間性を高める剣道を共々に実践して参りましょう。

剣道の魅力

鳴門教育大学 非常勤講師 西 本 浩 章

COVID-19（新型コロナウイルス）の猛威により剣道界でも試合どころか稽古も安心してできない状況の中、試行錯誤を繰り返してどうにか出口を見つけようと模索しています。

私は稽古も思うようにできないこの時期を「剣道を見つめ直す」好機だと考えることにしました。そこで私は徳島の剣道第二十四号の随想でフィリップ・トゥリニイさん（当時、阿南市外国語講師）が執筆された「剣道の魅力」を紹介したいと思います。

剣道の魅力については各人が修練を経てそれぞれの考えがあると思いますが、私は日本人より海外の方が剣道の魅力を実感しながら稽古に励んでいるような気がします。フィリップさんは剣道の魅力は永遠の成長だとしており、「剣道は欠点を教えてくれ、それを直す力を与えてくれる。また、剣道は真の自分を映す鏡であるため自分の醜さに気づかされ、それを克服する力を与えてくれる」と述べています。これはフィリップさん自身が感じたことなのか、先生から贈られた言葉なのかは不明ですが、この言葉がフィリップさんの剣道の根幹にあることは間違いないと思います。そして私自身まだまだ未熟な剣道家としてはこのような魅力を実感しながら剣道に励んでいるフィリップさんを羨ましく感じます。

私も剣道を通してそこに映った「自分を見つめ直す」ことで成長し続け、そこから学んだことを学生へ道標の一つとして教えていきたいと思っています。

「剣道の魅力」

阿南市 外国語講師 フィリップ トゥリニイ



ものではないからです。

「何故」という質問が飛び出してくる。日本人は、私が剣道をしているという話になれば、必ず聞きます。その時、いつも返答に困ります。答えは、単純で、一言で簡単に言える

剣道に辿り着いた道のりは、子供時代に遡ります。偶然にも本で出会った日本に惹かれ、日本史・日本の文化、特に武道についてよく読んでいました。それで、高校と大学時代に空手をしていましたが、諸事情によって続けられなくなりました。しかし、日本と武道に関する興味は薄れませんでした。そして、大学卒業後しばらくして、転機が訪れてきました。運動不足になっていたため、何かを始めようと考えていたところ、剣道を思いつきました。幸いにも地元でできる所を見つけることができました。当初、剣道を選んだ理由は、運動不足解消として、それまでと違ったことをしてみたかったの

と、剣道には、国際化した空手や柔道より、もっと日本の武道の文化と伝統が純粹に残っていると考えていました。また、同じ時期に、日本語の勉強を始めました。その後、先生から A E T (Assistant English Teacher) になることを勧めてくれました。そのお陰で、長年の日本に行く夢が叶うことができました。こうして、何気なく歩み出した剣の道は、一生の宝物になりました。

日本に来た時は、日本語も殆どできず、剣道も適当に竹刀を振る程度に過ぎませんでした。そんな私を回りの日本人、特に剣道界の人たちは、優しく受け入れてくれ、色々と教えていただきました。そのお陰で、未だに日本に住んで、剣道を頑張り続けています。A E Tとして、阿南で素晴らしい指導者がいる学校で中学生と一緒に基本練習から始め、また支部の一般稽古でも、多くの先生方から指導を受けました。非常に恵まれた環境で本格的な稽古ができたので、すればするほど剣道にはまりました。さらに、上達していくにつれ、中学生の指導を手伝ったり、大会で審判をしたりするようになりました。修行の幅が広がって、益々面白さを感じるようになりました。また、中学校の遠征にも参加することで、多くの人との出会いができ、様々な人から多くを学び、剣道を通して日本の良さを直接触れることができました。剣道があったからこそ、長く日本に住み続けることができました。それで、最初、頭の中だけの知識に過ぎなかった日本の伝統と文化を、剣道を通じて肌で感じるも

のとなりました。

剣道を始めてもう十年、日本に来てはもう九年経ちました。何故それほど剣道に没頭するようになったのでしょうか。もちろん、運動としてのストレス解消や健康維持の効果があるけれども、それだけなら、どのスポーツでも得られます。それ以上に、精神面での剣道の効果に惹かれたと思います。普段の生活で、自分の欠点などを認めたくなくなりがちで、言い訳等しながらその欠点を隠そうとしたり、逃げようとしてしまいうことがよくあります。しかし、剣道は正直で、稽古の中で隠しようも、逃げようもなく、必ず欠点に直面していきます。すると、修行を積んでいくうちに、欠点を直す力を得て、人間として成長して行きます。簡単に言っても、それは実は非常に難しいです。だからこそ頑張らなければなりません。簡単に結果を得られないからこそ、やりがいがあって、一つできた時の達成感が何ともいえないものです。そして、次の挑戦へと進んでいきます。一つの欠点を直したら、剣道が次の欠点を教えてくれ、再び直す力を与えてくれます。繰り返す真の自分を映す鏡になり、自分の醜さに気づかされ、それを克服する力を与えてくれるという永遠の成長が、私にとって、剣道の最大の魅力なのです。

私はまだまだ未熟です。これからも、剣の道を歩んで、一生の修行を積んでいきます。人間として、死ぬまで成長し続ける為に。

出葉成一先生の

「^{よわい}齡六十五にして思うこと」

事務局長 柳 谷 照 男



還暦を迎え、早くも二年経過、自分の人生をふと、振り返ってみると、本当にこれでよかったのだろうか、深く反省してしまふことが多くなった。

そのような中、「徳島の剣道」に今は亡き麻植支部長であった、出葉成一先生が、平成二十四年発行の第二十八号にこのような題目で、執筆されているのが目に止まった。

今は亡き出葉成一先生（平成二十九年二月六日ご逝去）は、剣道の稽古には非常に熱心に取り組まれ、亡くなられるまで、麻植支部の稽古会等をはじめ熱心に、指導稽古をいただいた方である。

先生は、この中で剣道に対する今後の取り組み姿勢等について、「道元禅師が正法眼蔵で言われる「仏道を習うというは、自己を習うなり」ということを剣道に置き換えながら、要は自分が剣道とどのように向き合い、普段の稽古にどのような覚悟や気持ちで取り組むのかということであり、これを自分自身が明確にして肝に銘じておくことが大事とされている。また、自分が目指すべき理想の剣道像とか、剣道感といったものを持って、それらを達成実現する為には、何をしなければいけないのか、何をすればいい

ないのかということをしつかりと自己認識しておくことが必要だと記されている。

今、剣道教室には、車いすでの生活を余儀なくされている中学生が、兄妹と剣道を一緒に始め、竹刀素振りもままならなかったが、自分でやれることは何か、何をすべきか考え稽古に励み、今では、剣道における理合等も理解し、木刀による剣道基本技稽古法を習得、吉野川市市民体育祭剣道大会にも参加した。

出葉成一先生の「自分が目指すべき理想の剣道像とか、剣道観といったものを持って、それらを達成実現する為には、何をしなければいけないのかということも、しつかりと自己認識しておく」ことを身をもって教えられたように感じている。まさに、全日本剣道連盟が目指す、「剣道とは、剣の理法の修練による人間形成の道である」と言えるのではないだろうか。

「^{よわい}齡六十五にして思うこと」

麻植支部 出 葉 成 一



光陰矢の如しで、私も今春三月末で早くも満六十五歳になります。自分のこれまでの人生を振り返ると、何もせずに只歳月を重ねただけであり、本当にこれでいいのだろうか

深く反省せざるを得ません。

「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」(劉希夷)

という漢詩の一節がありますが、これは自然の人間の姿や摂理とか、人が老いゆく嘆きを謳ったものと受けとめています。誰しも加齢とともに、気力や体力が衰えるのは、如何ともし難いことではないでしょうか。最近、私は頓にこの詩の心境が切実に感じられるようになりました。冷静に考えた時、たった一度しかないこの人生を何もせずに、このまま終わらせてしまうのは、何故か非常に勿体ない気がしてなりません。私には、遣り残した事や遣らねばならない事が山程ありますが、せめて何か一つだけでもと考えていた時に、ふと頭に浮かんだのは、やはり未熟なりにも自分が大好きな剣道のことでした。

これまで自分がやってきた剣道を振り返ると、何の志も持たず、自己がまとまらずに、ただ当てっこの剣道ばかりやっており、これでは、自己の人間性や人格の向上を図ることはおろか、剣先の攻め合いの中にあると言われる剣道の本当の醍醐味すら味わえないのではないかと深く反省した処であります。

この大いなる反省の上立って考えた、自分のこれからの剣道をどうすべきかということについて、思いつくまま稚拙な内容ですが、赤面の思いで述べることにします。これはあくまで私個人のことですので、予めお許し願います。

一 剣道に対する今後の取り組み姿勢等

剣道修練の大目的は、剣の理法の修練による人間形成であることは、論をまたないことですが、私はその修練をする者の心構え等で最も大事なことは、剣道を正しく真剣に学ぶということではないかと再認識しました。

道元禅師が正法眼蔵で言われる「仏道を習うというは、自己を習うなり」ということを剣道に置き換えれば、要は自分が剣道とどのように向き合い、普段の稽古にどのような覚悟や気持ちで取り組むのかということであり、これを自分自身が明確にして肝に銘じておくことが大事であると思いました。又自分が目指すべき理想の剣道像とか、剣道観といったものを持って、それらを達成実現する為には、何をしなければいけないのか、何をしてはいけないのかということも、しっかりと自己認識しておくことが必要だと思えます。

二 私理想とする剣道

私が理想とする剣道は、相手の心と自分の心が真正面向き合い、お互いの優劣が見えてくるまで徹底して攻め合い、その攻め合いに勝って理のある機会を捉えて捨てて打ち切るという剣道です。これは非常にハイレベルな剣道であり、私如きが口にするべきことではなく、又並大抵の稽古や精進ではおぼつか

いことは、百も承知しております。

私は、このような剣道を意識して稽古すれば、おのずと一本を大事にし、初太刀を大事にするようになると思っております。又そんな気持ちで打つ一本は、例え少々打突部位がはずれたとしても、きっと相手の心に響くのではなかるうかとも思っております。この意識でしっかりと稽古すれば、剣道の内容や質も自然と良くなり、お互いに清々しい気持ちにもなれるのではないかと考えています。

三 現在取り組み中の課題

私には、今後取り組むべき課題が山程ありますが、取り敢えず現在意識してやっていることについて話します。その一点目は「非知りの稽古」ということです。これについては表現は違いますが、打たれて強くなれとか、打って反省、打たれて感謝という教えと同じ意味であると考えています。私は、稽古の中で己の非を知るといった的を得たこの教えの響が、現在の私の心境や立場にピッタリで気に入っております。この教えの内容は、稽古や試合で、相手に打たれたら、それは相手が自分の欠点を教えてくれたのだから有り難いと感謝の念を持ち、自分がどういう機会や間合で、どんな気分のところを打たれたのかと素直な気持ちで真剣に反省をして、それを次の稽古に活かしていくということです。要は稽古をやりっぱなしにしないということです。二点目は、初太刀を

大事にすることと併せて、相手と対峙した場合に、一足一刀の間のギリギリの処で、どこまで打ち気にはやらずに辛抱できるか、懸待一致の待が居着きにならないようにと、目下懸命に取り組み中です。三点目は相手と縁を切らない稽古ですが、これもまた非常に苦しいことで苦勞しています。打突後、直ぐに気が抜けてしまい、充分な残心がとれなかったり、必要以上に間が遠くなり過ぎて張り詰めていた相手との心の糸が切れてしまうなど、苦勞しているところです。

結びに

それにつけても、日々の生活や剣道のことを考えたりしている時に、ふと懐かしく、また有り難く思い出されるのが、恩師の面影と尊い教えであります。故三木只雄先生からは、「暇は自分で見付けて稽古しなはれよ」とか、故堀江幸夫先生からは、「習い事は何でも同じで、上達の秘訣は素直な心で行じることであるが、特に剣道では、それが求められる。まずは真剣に行ずることが大事」とか、「竹刀は刀である。そう考えれば失敗は成り立たない。やり直しはきかんのだから、もっと真剣に稽古に取り組まな、あかんぜ」等々、数えれば限がありません。本当に有り難いことです。恩師の教えに一步でも近づけるよう精進したいと思っております。

恩師のご冥福をお祈りしながらペンを置かせて頂きます。

合掌

全国講習会報告

第四十三回日本剣道少年団研修会体験・実践発表において、後藤彩柙さんが優良賞に大谷心海さんが敢闘賞に選ばれました。全日本剣道道場連盟の許可を得て、ここにお二人の発表を掲載します。



恵まれた日々

徳島県鳴門市光武館道場 中学二年 後藤 彩柙



になりました。

私が中学校一年生の時、二年生は一人、同級生も一人しかいなかったもので、沢山いた三年生が引退してからはたった三人で戦ってきました。五人で行う団体はいつも二人分の黒星、四本分とられた状態からのスタートで、誰かの負けが即チームの負けになるので常に背水の陣でした。それでも大好きなチームメイトと試合に出られるのは楽しかったし、勝てたらとても嬉しかったです。

自分が二年生になった時、「一年生を沢山勧誘して、絶対五人で団体に出るんだ。そして、たった一人で私たちをひっぱってくれた先輩との勝ち試合の思い出をもっと増やすんだ。」と意気込んでいました。来年度の試合予定も何ヶ月も前から決まっているものが沢山あって、泊りがけで行く県外遠征は、普段とは違う仲間の姿を見ることができるので特に楽しみにしていました。

雲行きが怪しくなってきたのは、二〇二〇年二月、中国で発生

したウイルスが爆発的に広がっていると世界が騒ぎだしたのです。その時は「他国の話」として軽く聞き流していました。しかし、その状況が一変し、ウイルスが日本にも入ってきて、突然、学校が休校になりました。不要不急の外出が禁止され、もちろん部活もできません。いつ学校が再開されるのかわからない中、楽しみにしていた試合の中止報告だけが次々に届きました。

しかたないことだとも、誰が悪いわけではない事も、中止にしたくてするのではないことも理解していたけれど、剣道の時間が、仲間との思い出が、今までの頑張りが削られていく、無くなっていくことが寂しくて悔しくてたまりませんでした。

五月、ゴールデンウィークが明け、やっと学校が再開されました。先輩の引退まで約二ヶ月、この時点で予定されていた全ての試合が、白紙になりました。

部活動も飛沫感染予防を万全にして少しずついい範囲が広がっていききましたが、自粛期間中に鈍った体は思うように動かず、練習試合さえ組めない状況に気分はどん底でした。

そんな中、唯一の光明は一年生が二人入部してくれたことです。これで念願の「五人」が揃いました。「いつでも試合を再開してくれて構わないぞ。」と、気合が入りました。しかし、それからひと月経っても、県外はもちろん、県内ですら試合再開の目処はたちませんでした。せっかく五人集まったのに、本当にこのまま、一度も試合をすることなく先輩は引退をしてしまうのかと焦るような気持ちだけが募っていた頃、先生や連盟の方々が総体がなく

なってしまった三年生のために開いてくれることになった錬成会に私たちのチームも呼んでくださりました。

順位のつかない大会だったけれど、去年競った他校の三年生とも戦えたし、先輩がいる最初で最後の五人のチームとして団体戦ができてとても嬉しかったです。

ひとつの試合が終わったら次の試合があることが当たり前だと思っていた日々が、どれだけ恵まれていたことだったのか、今回本当に身にしみて思いました。

私の大好きな剣道は、私ひとりだけでできるものではありません。しかし、私の周りには、上達を信じ指導してくださる先生方、応援してくださる保護者の方々、温かく見守ってくれる家族、そして共に支え合う仲間がいます。このことが、どれほど恵まれて幸せなのかということ、剣道ができる毎日が当たり前ではないこと、今ある「普通」が一瞬で消えてなくなるかもしれないということ、それらを心の片隅にしっかり留め、これからも一生懸命に悔いのない日々を過ごしていきたいです。

私を変えてくれた剣道

徳島県鳴門市光武館道場 小学六年 大谷 心海



去年の暮れころから、コロナウイルスという言葉を耳にするようになりました。でも私は外国のことで、日本には関係ないことだと思い、別に興味はありませんでした。ところが今年の二月になると、ふだんはどこでも見かけるマスクや消毒液がお店から消え、学校も休校になってしまいました。どんどん広がるコロナウイルスにきょうふを感じました。剣道の練習も中止となり、家で過ごす時間がふえました。学校へ行く、友だちと話す、買い物へ行く。ふだんあたりまえにしていたことができなくなりました。私はとても悲しい気持ちになりました。早くコロナウイルスが消えてしまわないかと、毎日願っていました。

そんな中、私が一番おどろき悲しかったことがあります。それはコロナ差別があると知ったことです。テレビでその言葉をよく聞くようになりました。その人を傷つけるようなことを書いた紙を家にはったり、県外ナンバーの車に石を投げたり、SNSなどでひどいことを書き込んでいる人がいるそうです。コロナウイルスがこわいという気持ちはわかるし、感染したくないのはみんな同じです。それなのに、かかった人にいやなことをするのはちが

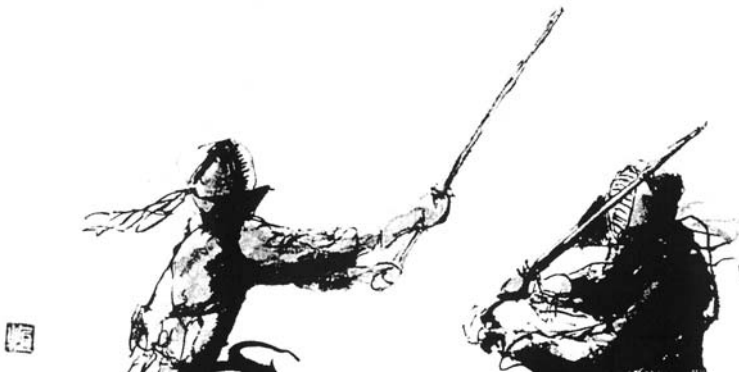
うと思います。もし、コロナ差別をした人がコロナに感染したら、どんな気持ちになるでしょうか。自分におきかえて考えてほしいです。私は剣道を通して、人を思いやることの大切さを教えていただきました。いつも相手の立場に立って行動する、相手の気持ちを考える大切さです。だから、私はぜったいにコロナ差別をしません。

四月に入り、うれしい知らせがありました。剣道の練習の再開です。短時間でのマスクをつけての練習、防具をつけないすぶりや打ちこみ中心の練習。いつもとはちがう練習だったけれど、再開されたことはとてもうれしく思いました。久しぶりに先生や友だちに会えて本当にうれしかったです。

私は改めて、剣道を習い始めてから今までのことをふり返ってみました。入門して最初に先生に教わったことは、あいさつをすることでした。次に教わったのが、トイレのスリッパを後から入る人が使いやすいようにきちんとそろえることでした。剣道を始めるまでの私は、気が弱く、大きな声をだすこともできませんでした。そのせいか、同級生からも仲間はずれにされていました。いやなことをされてもいやだといえず、だまっていますがまんでいたのです、毎日がとてもつらかったです。でも、そんな私を剣道がかえてくれました。あいさつが、相手の目を見て大きな声でできるようにになりました。自分の家や他の人の家にかかる時、くつをきれいに並べるのがあたりまえにできるようになりました。ほめられることもたくさん増えました。そして少しずつ自分に自信が

いてきました。練習も、私が苦しそうにしていると、仲間が「大丈夫、あと少しがんばろう。」と声をかけはげましてくれるおかげで、弱音をはずかずに最後までがんばれるようになりました。剣道が私を強くしてくれたと思います。いやなことはいやと友だちにも言え、自分の気持をすなおに伝えることができるようになりました。今は仲間はずしもなくなり毎日がとても楽しいです。

このように、私が変わることができたのは剣道を通してたくさんの人に支えてもらったからです。優しく、そして厳しく指導してくださる先生方、はげまし合いながら一緒に頑張れる仲間たち、いつも見守り応援してくれる家族。コロナウイルスで様々なことが制限された中だからこそ、改めて剣道が私にとってどんなに大切なことを考えることができました。私も六年生。最高学年としての自覚をもって、いっしょうけんめい練習に打ち込みます。そしてこれからも、自分ができることを勇気をだして行います。それが私の剣道と出会えたことへのおん返しです。



◎日本剣道少年団研修会 書道展で国府小の谷本真智子さんが毎日新聞社賞を受賞しました。



日本剣道少年団研修会書道展で第3席
谷本 真智子さん (国府小6年)

はばたけ キッズ

剣道を学ぶ小中学生が書道の腕を競う「日し」と笑顔を見せました。本剣道少年団研修会書道展」(吉日本剣道道 何度か書き直してみ 剣道を始めたのは6歳。県大会で優勝した

文武不岐 夢へまい進

場(連覇)で、第3 たちの、最初に任上 席に入った徳島市の国 げた作品の出来栄が 府小6年谷本真智子さ 一番だったそうす。 ん(12)。半紙っぱい 全国から314名点の に「夢の実現」と書い 応募があり、審査員か 主将を務めました。

た自作での上位入賞 らは「生き生きとして 道は一体という「文武 不岐」の教えがあり、 小学2年で書道教室に 通い始めました。「剣 道で身に付けた精神力 や礼儀作法は書道にも 生かされている」と実 感しています。

思うように書けない 時は「お手本をよく見 て、自分に何が足りないのか考える」と基本 な姿勢は剣道から学び ました。

将来は小学校の教師 になるのが夢です。 「書道や剣道で心も体 も鍛え、きつと表現さ せたい」と力強く語り ました。(山口和也)

日本剣道少年団研修会書道展で 第3席に入った谷本さん

徳島新聞 令和2年3月23日

徳島の剣道史

徳島県高齢剣友会の歴史（一）

徳島県剣道連盟審議委員長
徳島県高齢剣友会会長
全日本高齢剣友会副会長

高島 稔之



徳島県高齢剣友会の結成について、現
存する「徳島県高齢剣友会結成記録」を
基に、草創期の取組みを記載しておきた
い。

一 徳島県高齢剣友会発起人会

〈期 日〉 昭和六十一年五月十五日 十一時開会

〈会 場〉 亀甲鮨（キッコウズシ）

〈出席者〉 中川虎雄 西野四郎 山田豊康

山田 仁 一村喜佐男 平岡武雄

清原 栄 七名

〈議 題〉 徳島県高齢剣友会設立趣意書作成

徳島県高齢剣友会結成規約書作成

発開式 昭和六十一年五月二十九日

二 徳島県高齢剣友会発開式

〈期 日〉 昭和六十一年五月二十九日 午後一時三〇分

〈会 場〉 城の内武道館

〈出席者〉 竹原常雄 磯部茂治 中川虎雄

井原秀文 堀江幸男 西野四郎

山田富康 山田 仁 高田 亮

井上建二 浜田逸郎 一村喜佐男

平岡武雄 石井克太郎 高橋静夫

前林利夫 吉田 祖 菱田 晋

森口 求 清原 栄

① 発起人代表 清原 栄

② 会則審議

* 議長選出 清原 栄

* 役員選出

会 長 竹原常雄

副会長 磯部茂治 久保 勇

理 事 長 清原 栄

副理事長 中川虎雄

事務局長 西野四郎（事務局は西野宅に）

理 事 井原秀文 勝浦 守 平岡武雄

山田富康 蛭名久作 重井好高

一村喜佐男 高田 亮 山田 仁

平岡勝美

監事 吉田 祖 浜田逸郎

* 決定事項 第一回大会を十一月三日に開催する。

③ 高齡剣友会の会費について（昭和六十一年七月二十二日）

城の内武道館で、県剣道連盟の三木忠雄会長と堀江幸夫理事
長と私（清原栄）が話し合った時、「年会費五千元は高すぎる
のではないか。」という意見がありました。私は「五千元ぐら
い取らなければ、事業も何もできないと思う。」と発言しまし
た。すると、会長から、「高齡剣友会は、今まで県剣道連盟発
展のためにご尽力頂き、大変ご功績のあった方々の会ですから、
県剣道連盟の方から補助金として、毎年、三〇万円を出します。」
と、非常にありがたいお話がありました。但し、全日本高齡者
大会の出場者に一万元の補助金を出して頂いていた分は、その
中で賄うことになりました。そして、次の理事会で、会費の徴
収額を引き下げることになりました。

④ 理事会

〈期 日〉 昭和六十一年七月二十三日 午後五時

〈会 場〉 城の内武道館

〈議 題〉 会則の一部変更

- ・ 会費五千元を三千元に変更する。
- ・ 入会金として二千元を徴収する。
- ・ 六〇歳以上八四歳までを正会員とする。

（六〇歳以上七〇才までは準会員、七〇歳以上が正

会員であった。）

・ 本会の会計年度は、四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。但し、総会は大会当日に開催しても良い。

・ 第一回徳島県高齡剣道大会を十一月三日に予定していたが、当日、徳島市少年剣道大会があるので、十一月十六日に変更する。

〈期 日〉 昭和六十一年十月二十九日

〈会 場〉 中川虎雄先生宅

〈出席者〉 竹原常雄 磯部茂治 平岡武雄

高田 亮 伊原秀文 西野四郎

山田富康 重井好高 浜田一郎

中川虎雄 清原 栄

〈議 題〉

会則の一部変更

- ・ 第4条 「事業：古武道の警鐘」を除く。
 - ・ 第2章第5条「銃剣道、なぎなた」を除く。
 - ・ 第5章第15条「会としては、見舞金はしない。個人で行う。弔慰金は五千元。
 - ・ 新理事の追加 遠藤一美
- 〈報 告〉 清原 栄先生（十月一日）全日本高齡剣友会理事となる。

徳島武徳殿の姿を求めて（その一）

三木 毅

徳島県の剣道史編纂を知る



私は、平成十五年三月末日で徳島県警察官を退職した。この退職直前のこと、徳島県剣道連盟の役員から次期理事長にとの声掛けをいただいた。強く固辞をしたが、抗しきれず平成十五年四月一日付けで、徳島県剣道連盟の理事長に就任した。

警察官在籍中に警察剣道部会長を数年務めていたので、剣道連盟の会議などに出席して連盟の様子はおぼろげに理解していたが連盟理事長と言う運営責任者としての立ち振る舞いは一年生であった。

理事長就任直後のこと、市場町の坂本裕二先生から「自宅に立ち寄って」という連絡をいただき訪問した。私が中学生時代からの剣道の恩師である。坂本先生は自宅の店の一部を書斎とし、調べごとに熱中され、様々なことを話された。

中でも、「理事長として手伝って欲しい重要な仕事がある」という。その仕事とは「徳島県剣道の歴史書編纂の作業」であった。

坂本先生の構想は、徳島の剣道歴史を二つに分類する。一つは藩政時代、二つには明治以降と大きく分け、藩政時代は坂本先生

が担当し、明治以降は堀江先生が担当とし、作業が進められていくという。遠大な構想を知りとまどったが、とりあえず、坂本先生が蓄積中の、徳島県剣道連盟の各支部の歴史資料を渡され、整理する仕事をいただいた。

私にとっては突然の話であり、しかも中身は全く分からずのままお手伝いがスタートすることとなった。

徳島県武徳殿の松永先生が判明

堀江先生や坂本先生のお話を伺ううちいつしか時間が進み、おぼろげながら県内の剣道歴に触れることができかけてきた。堀江先生から資料の一部を預かり点検したり他の資料と突合したりするうち、「徳島武徳殿」の姿が見えていないことに気がついた。今や高齢となられた先生方を訪ね「武徳殿の先生」についてお聞きする中で「市場町の「松永^{えいじ}腕二先生がいた」ということが判明した。

松永腕二先生は、元警察官で武徳殿の事務局長をしていたことも判明した。市場町で松永姓を訪ね歩くうちに「先生の姪に当たる人がいる」ことを知りその方と面談した。「堺市に子供さんがいる」ことが分かり問い合わせした。その方は、腕二先生のお子さんでなく孫さんであり手紙のやり取りや電話での話などをさせていただいたが松永腕二先生の姿が浮かび上がってこなかった。

そこで、孫さんの自宅にある腕二先生にかかわる品物を全て郵送してもらおうことにした。ダンボール箱二個が送られてきたので点

検し全て写真撮影をしてお返しした。

残念ながら私がイメージしていた、武徳殿の写真、間取り、師範先生、運営内容、剣道練磨内容などを掴むことはできなかった。

徳島武徳殿の姿が浮かぶ

平成二十三年五月一日付け徳島新聞の二十面に「移動編集部シリーズ」で徳島市内町・新町記事中で「昭和十二年九月三日付けの絵地図」が掲載されていた。

絵地図には徳島の城山から眉山方面への主たる建物が描かれ、建物名が示されていた。絵地図の建物名の文字は小さくぼやけていたが克明に文字を追っていると、城山東側に「武徳殿」の文字に出合ったのである。

その場所は、現在の徳島中央公園内バラ園の南端、堀に沿っており、西には鳥居龍蔵先生が発見した城山貝塚が存在する位置である。武徳殿の南側には、料亭「喜楽亭」があり、北側には「徳島動物園」が存在している。武徳殿のおおよその姿が絵となり姿を表したのを見て興奮気味になったことを覚えている。

これをきっかけに、武徳殿の姿を追い求めることとなった。まずは武徳殿で剣道練磨をされた先生を探して話を聞き歩いた。おぼろげの姿は浮かぶが、写真が欲しく探し求めることとなった。

多くの剣道家に会い、武徳殿写真を聞いたが、諸先生方が武徳殿練磨した時期は、十五歳・十七歳といった年齢であり写真が手に入る環境でないことが明らかになり、しかも写真機というものが

が民間になかったというのが大きな理由であることが理解できた。当時の写真を求めるには、新聞或いは公文書しかないことに気が付き、時間を見つけては県立図書館に通い新聞のマイクロフィルムを覗き込む生活を送った。

その結果、ただ一枚だけ小さな記事の新聞写真を発見した。それは「徳島毎日新聞」昭和三年十一月二十九日（木曜日）二面記事であった。その記事は円形写真の中に瓦葺の建物の正面とその手前の門柱が映っており記事は、「滴水閣跡に移動した武道講習所 二十八日 移動神事祭」と記されているのみであった。

絵地図作成者を訪ねて

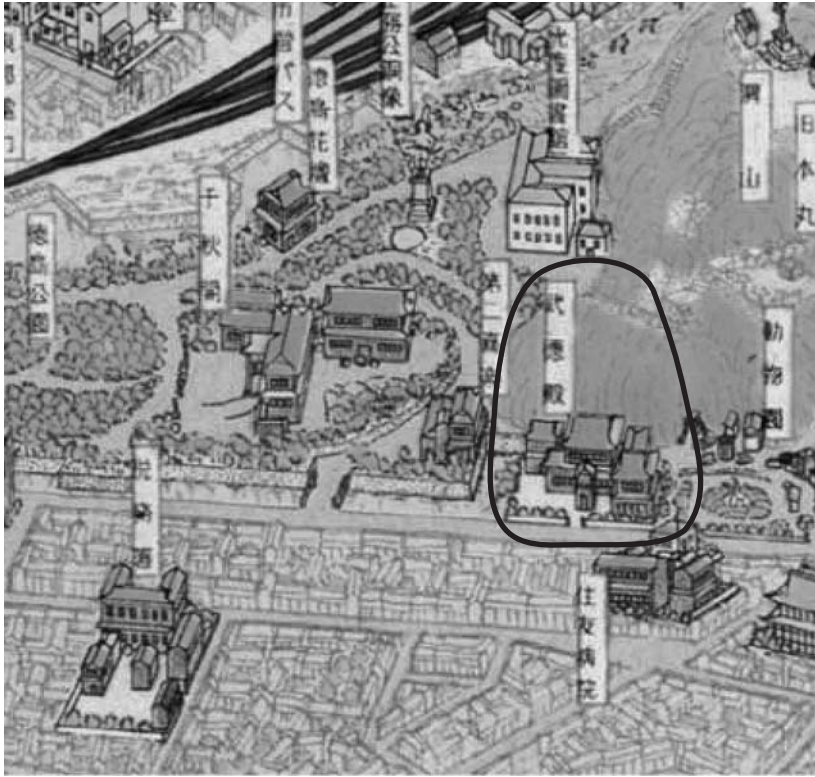
昭和十二年九月三日の徳島新聞に掲載された絵地図作成者に会いたくて、徳島新聞社文化部に赴き絵地図作成経緯を訪ねた。

徳島市幸町の発行者が判明した。現在その発行元の会社は解散され同会社を知る人を明らかにすることはできなかった。

県立図書館 徳野隆先生のアドバイス

県立図書館での探究では、武徳殿の小さな写真一枚の発見に終わった。図書館の事務職員から、「文書館の徳野先生に相談しては」との指示を受け早速徳野先生を尋ねた。徳野先生はよく相談に乗ってくれ「武徳殿と言うのは元は県議会会堂であり、移築して武徳殿という名前になった」との話をいただいた。

よって、県議会議事事務局に問い合わせしたが明治時代の議会堂の



写真はないとのことであった。

武徳会とは

明治二十八年とは、桓武天皇が京都に都を移してから千百年に当たり記念すべき年とした。平安千百年を記念し、京都岡崎に平安朝時代の大極殿を模して平安神宮が建てられ記念大祭がおこなわれた。

京都主税局長の鳥海弘毅を中心に、京都府知事や平安神宮宮司、加えて市の有志が「大日本武徳会」の設立を決定し、趣意書を作り全国に配布した。

武徳会はこうして設立され、京都武徳殿の造営へと進展することとなった。その後、武徳会は内閣あげでの組織づくりとなった。主たる役割は警察が担うこととなり、義金の募集が展開された。

警察史の探究・・・中尾正輝先生の功績

武徳会の探究を深めないと武徳殿にたどり着かないとの考えが浮かび、武徳会と剣道、そして武徳会と警察の構図から解き明かすこととした。私が警察官を拝命した昭和三十六年には徳島県警では「警察史編纂」の専従班があり、三原武雄氏が主となり執筆され昭和四十年三月には千四百ページの警察史を完成させている。この間大量の資料収集がなされていたことを感知していた私はその資料がどこに保管されているのかを探ると、警察学校の書庫であることが判明した。

当時警察学校の剣道講師として座していたのは中尾正輝先生で

あった。即刻武徳会そして武徳殿に関する資料の探究を依頼した。快諾をしていただき懸命に取り組んでいただいた。

警察資料の中に「警友」という機関誌が存在し、その機関誌の内、昭和十二年五月、第八十八号に、武徳殿の移築記事があるのを発見してくれた。この功績は私にとっては大ヒットであった。

警察機関誌「警友」第八十八号 昭和十二年五月 警務課

中尾正輝先生が発見してくれた「警友」第八十八号の内容を、現代風に直したものは次のとおりである。

畏かしこき 梨本総裁宮殿下

武徳会有功章の御親授と武道大会を台覧あらせらる。武徳会徳島支部は本年三月有功章の義金三万円の募集を行い総裁宮殿下の御台臨を仰ぎ有功章の御親授と武道の台覧をふす。まことに恐懼感激にへさるなり。

有功章の御親授

梨本宮守正王殿下には昭和十二年四月十二日午後四時四十八分徳島駅に御安着遊ばされ、直ちに御旅館澄屋にご宿泊。翌十三日午前九時忌部神社御参拝、同九時(?)徳島県庁にお成り。支部長その他にをたまわりたる後、庁内県会議事室に設けたる式場に入らせられ御着座のあと支部西田主事の挙式宣告にて武徳会有功章に有功章の御親授を賜りたり。

この栄光に浴したる者

一等有功章 十人

二等有功章 二十六人

三等有功章 百六十五人(郡市別代表者に御親授)

右御親授を終わるや会長代理山本副会長は御前において四等有功章を郡市別代表者に授与せらる。その数五百十一人。

しばらくして、午前十一時式を終了せり。この時間約一時間十分。

御茶の会と御賜餐ごしきさん

殿下には十三日午後四時四十分、市立寺島尋常小学校内に設けられたる御茶会場に臨ませられお召の武徳会支部の主たる役員及び各種武道の錬士以上、県庁各部課所長、県下各官公長、中小学校長、公設消防団体の組頭等八百五十名に御茶を賜う。

殿下には、午後五時五分、更に徳島公園内千秋閣大広間に設けられたる御賜餐場(ごしきさんじょう)において武徳会関係の主たる人々及び今回有功章親授せられたる者並びに過去において表彰せられたる者の内二等有功章以上を授けられたる者等五十七名をお召あらせられを賜う。

殿下にはことのほか御機嫌麗しく満堂感激奉謝の情し、かくて各員光栄の記念すべき第一日は予定の通り無事終了を告げたり。

武徳会徳島支部状況

明治二十八年四月、大日本武徳会の創立に際し本県知事村上義雄以下庁員あげてその主旨に賛同し直ちに警察職員及び庁内各種武道の先覚者を委員とし、もっぱら会員の募集に努め明治三十一年秋ようやくにして三千有余人を得、同年十二月六日支部設置のを得たり。

越えて翌明治三十二年二月二十六日支部発会式を挙げ爾來会員の募集基金の造成に努めたるも支部財政の基礎確立を見るを得ず。

したがって事業の遂行に支障多く明治四十年頃支部財政は窮乏その極みに達し毎年一回行うべき武徳祭演武大会は一時中止するのやむを得ざるかを憂慮せし。のみならず従来演武場として代用せる旧城山麓の滴翠閣は他に移転したるため徳島警察署の演武場に、或いは県会議事堂に随時移動のやむなき実況に鑑み支部財政基礎確立のいよいよ急務なるを告ぐるにいたり、明治四十一年七月県下各警察官署長たる幹事の外一市十郡の市町村長を始め地方有力者及び各種武道家数百名に委員を囑託し、広く篤志者寄付並びに一般会員の募集に着手し、大正四年に及びようやくにして基本金二万円（現在価値では八千万円か）を造成するを得てその利子および事後募集会員義金の分附金をもって事業の一端を遂行するを得たり。しかして各種武道の普及奨励を図らむとせば常に多数の演武者を収容するに足る武徳殿建設の必要の急なるを察し、

昭和三年しかも支部設置後三十年に相当するをもってこれが記念

事業として武徳殿の建設を断行するべく武徳会本部の承認を得てこれが建設指定寄付及び会員大募集を企てしも、当時一般財界のその遂行の実に容易ならざらしも、幸いに熱誠なる官民の協力により相当の成績をおさめたりと言えども、未だ予定の額に達せざるためその新築は到底望むべからざるをなかんせん故、従来支部演武場として借用し居れる元県議会議堂及びその付属建物の全部を県より金三千百十円（現在価値では千二百四十万円か）にて譲渡を受け、また一面において徳島市有の滴翠閣及びその付属建物一切を無償譲渡を得たると共に市公園の一角たる滴翠閣の敷地跡累年無償貸し付けを得て、昭和三年五月金壹万六千九百八十円（現在価値では六千七百九十二万円か）を投じ、これを右公園内に移転改築の工事請負契約を市安宅町大松磯吉と締結し、直ちに起工。同年十一月二十六日をもって現在の武徳殿を竣工するを得てここに支部多年の懸案たりし武徳殿が初めてその形態をそなうるに至り。翌昭和四年三月二十三、二十四日の両日に互いにその落成式を兼ね第二十五回の武徳祭並びに演武大会を挙行せり。

昭和九年四月十三日

閑院宮載仁親王殿下には、日本赤十字社有功章及び帝国軍人後援会の徽章親授のため本県へ台臨あらせられたる際、当支部武徳殿へ成らせられ親しく本県武道家の剣道柔道の試合を台覧あらせられたり。

ここにおいて当支部はこの栄光をとこしえに記念すべき事業を

考究の結果、従来狹隘を感じたる弓道場及び構内事務所の拡張改築に決し会員募集の収入より金三千七百八十円（現在価値では千五百二十二万円か）を支出し、既設の十四坪の弓道場及び付属的場を三十三坪に。十七坪七合五勺の平屋建て事務所を、二十一坪の二階建てに改築。工事は昭和十一年八月竣成したり。

叙上のごとく支部設置以来数事に及ぶ寄付金及び募集の分附金より蓄積せる支部基金は、昭和四年の年度初め現在高六万三千七百円（現在価値では二億五千四百八十万円か）を算し、支部事業にこの利子および事後の会員入会費金の分附金その他の収入をもって遂行しつつあるも、晩近（ばんきん）一般金利の低下によりたちまち支障をきたすべきをもってこれが補てんの方法を必要に迫り、数年前より毎年市別に一定の割当て額により会員の募集を継続せり。しかれども会員の募集もまた無限にあらざるが故、基金増殖のみは他にもとめるの外なきを認め、昭和十一年支部常議員会の決議により金二万三千二百円（現在価値では九千二百四十万円か）を基本金中より支出し、本県海部郡木頭村において実測反別二十七町四段九畝二十一步の造林を購入すると共に右基金補てんの目的にて本年一月金三万円（現在価値では一億二千万円か）に達すべき有功会員の募集に着手し、その募資金額三万六千四百九十五円（現在価値では一億四千五百九十八万円か）を得たり。これ今回、有功章御親授の光栄に浴したる人々の応募金額なり。文中の金額については、昭和四年当時の教員と巡査の初任給を元に、令和三年を比較し四千倍した価値を記載した。

以上が警察機関誌「警友」記載の記事である。

武徳殿移築の大松磯吉氏を訪ねて

武徳殿となった元徳島県議会議堂の移築を請け負ったのは、安宅町大松磯吉氏であることが判明した。同氏又は後継者に会えば武徳殿の写真や間取り関係者など相当の収穫が得られると期待は大きくなった。

安宅町界隈の「大松姓」について、寺院を訪ね文献を見ながら探すと、大松姓は一家のみ存在することが分かった。現在も安宅町に居住する大松家はアパート経営者であった。

大松磯吉氏の名前を出し尋ねるも「知らない」の返答であった。よって過去への続き柄を訪ねると現在の夫婦は出会い夫婦で「姓を継いでいる」とのことで先代の様子は知ることができなかった。

徳島武徳殿の姿を求めて（その二）

令和三年四月四日作成の「徳島武徳殿の姿を求めて」は、多くの方々のお話をたどる中、中尾正輝先生が警察資料を見出してくれたことで元徳島県議会議堂であった建物を武徳会が買い取り徳島城山東側に移築し、それが「徳島武徳殿」となったという経緯であった。

続報としての今回は、武徳殿の姿を写真で確認したいという強い思いで写真を求めた経緯を述べたい。

武徳殿は元徳島県議会議堂であったことから、現徳島県議会議事務

局に問い合わせをしたところ「明治時代の議会議堂の写真は存在しない」という回答であった。

そこで、徳島県立図書館や徳島市図書館で写真集をめくることとした。

写真集には簡単な説明文が添えられておりこれを克明に読み進めるうち、徳島県公会堂（県会議事堂）という建物名があった。

添え書きは

現在の県庁東側付近にあって、県会議事堂兼武徳殿で、各種の催物会場などにも使われていた。一時ドイツ兵の収容所に当てられたことがある。昭和三年（一九二八）二月武徳会

支部に譲渡、体育館の現在地に移築して武徳殿とした。

また、滴翠閣については

浅野幸尚、仙石学ら有志の寄付で旧城内表御殿跡に建設さ

れた公会堂兼武術講習所で、千秋閣の建築にあたり、明治四十年（一九〇七）に城山東に移転、さらに昭和三年（一九二

八）移築した武徳殿の附属建物となった。

と記されている。

この説明文は、先に判明している警察資料の記載と合致することが明らかとなった。

写真集に残されている建物は「二階建て入母屋作り」であるが不鮮明なもので更なる写真がないかという思いが強まってきた。

ドイツ館 山上三郎館長との出会い

徳島新聞 平成二十六年十二月二十日付けでは「独兵捕虜の功績知って」の見出しで「音楽や食品加工が県民に紹介」などが記されており、二階建て入母屋建物の前で、楽器を持った制服姿のドイツ兵が紹介された。これを見た私は、ドイツ館に足を運ぶべきだと直感したのである。

年が明け二月五日ドイツ館を訪問した。館長は「山上三郎氏」であった。館長室に案内していただき早々に話を切り出し「ドイツ兵の音楽隊が新聞報道された。その後方に映っている建物について知りたい」旨を説明した。

山上館長は即座に「鮮明な写真がある」と明言された。話はこうである。

ドイツ兵は民間の兵士であり色々な職業人の集まりであった。写真技術を持った兵士がおり、多くの写真を残してくれている。

徳島新聞で紹介された音楽隊の写真はドイツ兵が収容されていた当時の元県議会議堂の前で写したもので、元県議会議堂だけの写真がある。

というのである。

その写真は電子化されて保存されており、パソコン上で見せていただいた。そして、この元議会議堂は模型が作られている。大正時代の徳島工業高校生による習作で忠実に作られておりこれも電子化されて保存している。

また、此の模型は、工業高校からドイツ館が戴き目下「バルトの庭」の一角に展示しているというのである。さらに、この模型については次の説明があった。

収容中のドイツ兵は大正三年十二月から大正六年四月までの二年半の間元県議会議堂の建物で生活しており、工場日誌や徳島捕虜収容所報告が作成されている。元県議会議堂の略図や写真も残されておりこれら資料を突き合わせると精巧な模型であると言える。

というのである。

私は小躍りして感動したことを覚えている。山上館長から電子化された映像はいただけることとなり、五日後の二月十日にドイツ館に赴き映像のコピーを頂戴した。

おどる気持ちで持ち帰りパソコンで映像を確認した。写真は元県議会議堂を正面からとらえた鮮明なもので、探し求めていた願望が成就した瞬間であった。

写真は鮮明ながら、一階、二階、正面前に人物が映っていた。瞬時に、澤井勝之先生が浮かんだ。澤井先生はパソコンの指導員という力をもっておられる人ですので、写真の人物を消すという加工をお願いしたいからであった。早速電話をした。意はずぐ通じたのでUSBをお送りした。まもなく澤井先生から人物を消去した元県議会議堂の写真が送られてきた。

その写真は、わが剣道機関誌「平成二十六年 徳島の剣道第三十一号」の表紙に用いた写真である。

鮮明な武徳殿写真の確認 勝浦守先生が明快に

徳島の剣道三十一号の表紙に用いた写真は、事前に確認しておく必要がある。勝浦守先生に見てもらったこととした。入院先のニート病院に赴きお話をさせていただいた。先生は、見るなり「これが武徳殿本館じゃ。こんどはよう画けとる。」と明快に答えていただいた。

勝浦先生には、それまでに吉田昌彦先生が描いた想像した武徳殿建物を何回か見ていただいていたため、今回も白黒写真を見て「よく画けとる」と言われたので、「先生今回は写真です」と説明すると「よう探したな」と感心していただいた。

入手した写真に確信がもてたので、機関誌の表紙に用いることができた次第である。

武徳殿の炎上 東條浩士氏の目撃

先に、昭和十二年の徳島市の絵地図を紹介したが、武徳殿の南隣に「喜楽亭」という建物名がある。

平成二十九年十二月のことである。我が連盟の坂本憲一先生とお会いした時のこと、坂本先生から、喜楽亭の経営者が「東條さん」であり、陸軍、海軍の軍人さんが出入りしていたことなどを知っておられ教えて戴き、平成十七年十月十一日付け徳島新聞の切り抜き記事を戴いた。

その切り抜きは、喜楽亭の経営者東條さんの子供さんである

「東條浩士氏」が投稿した記事であった。

記事によると、武徳殿や気楽亭があった場所は「徳島公園」であったという。徳島公園は、日露戦争戦勝記念とした明治三十八年に開設され、平成十七年が開設百年に当たることから、徳島新聞が近代化への百年という歩みの中で、喜楽亭で過ごした思い出を投稿するよう依頼したというものであった。

記事のタイトルは「徳島公園の思い出」とし、子供の頃の自家事業の様子、公園の様子が多く書かれていた。私が気をひかれたのは次の部分である。

昭和二十年七月四日の未明は徳島市が空襲に遭った日である。

東條先生はこの空襲で自宅が燃えたことについて「焼夷弾の炎が家を包んだとき、母と私達五人の子供は、池の中に入って避難していた。

武徳殿に火が燃え移ると池の水は湯と化し・・・」

という部分である。すなわち、東條先生は武徳殿炎上を知る目撃者なのである。

記事には、東條先生の経歴が記されており、文理高校教頭先生であったことが分かり、玉田晋作先生を介して東條先生と連絡がとれるようになり、面談の運びとなった。ところが私が剣道稽古中に左膝関節靭帯剥離骨折の負傷で入院生活となり、その後一年間無駄な時間をすごしてしまった。

東條先生との面談が気になりながら時が経ちそのうち令和になりコロナが蔓延拡大という事態になり令和三年となってしまった。

コロナ禍でお人との面談に気が重くなり思案しながら日を過ごしていたが、面談に勇気を出すこととして、令和三年三月二十六日に東條先生の自宅を訪問した。

先生は快く対応していただき、二階の部屋に通していただいた。一通りの説明をしてご理解を戴き、先生が武徳殿周辺で生活した中で記憶にある武徳殿そして武徳殿炎上の姿を書き残していたたぐこととなった次第である。

徳島武徳殿の姿を求めて（その三）

松永俛二先生のこと

松永先生を姪が語る

徳島武徳会の様子を知りたくて聞き歩くうち、事務局長をされた「松永俛二先生」の存在があったことは前述したところであるが、私が面談した方は、松永俛二先生の姪さんに当たる「松永為子さん」であった。会話を進めるうち私が知恵島出身であることを話すと即座に「知恵島であれば平尾勝美先生がおり、詩吟の会で大変お世話になった」とのことであった。私からは剣道の大家恩師である旨の話をさせていただいた。平尾先生の話で話が弾み気安さいっぱいの会話となった。松永為さんは小学校の教師の経歴をお持ちで八十六歳であった。為さんは俛二伯父さんから「薙刀」を勧められ技能を取得されている。為さん宅には俛

二先生から贈られた剣道関係の書物が多数ありこれを剣道連盟に寄贈したいとのことでありこれを戴くこととした。戴いた書籍は現在剣道連盟事務局の書棚に陳列されている。

「松永為子さんには、俛二先生との思い出を綴ってほしいと依頼した。

しばらくして為子さんから原稿用紙に書かれた思い出文が届いた。日付は平成十七年二月吉日となっておりますその文面を紹介する。

伯父松永を語る

松永為子

八十六歳

この度伯父松永俛二について、何か書くようにとのお話を受けた。私ごときがと改めて周囲を見廻してみたが、伯父には三男三女がいたが今はほとんどこの世にいない。私の姉妹も皆亡くなつて、今、伯父を語る者のいない寂しさを改めて知らされたわけである。

さて、「髭のおじさん」の愛称で呼ばれていた伯父は、松永家十四代松永新三郎の次男として生を受けた。

そもそも松永家は、かの戦国武将松永久秀ひさよしの弟を祖とするといわれ、その十四代目にあたる新三郎の息子が伯父や私の父である。

私の父は新三郎の三男ではあるが、長男が早逝し次男の伯父が分家したため十五代を継ぐ破目となった。

私が物心ついた頃、伯父は祖母のいた私の家を度々訪ねてくれていた。私たちは「髭のおじさんが来た」と言っよくそばへかけより、祖母は「俛さん、俛さん。」と喜んで喜んでいた。又伯

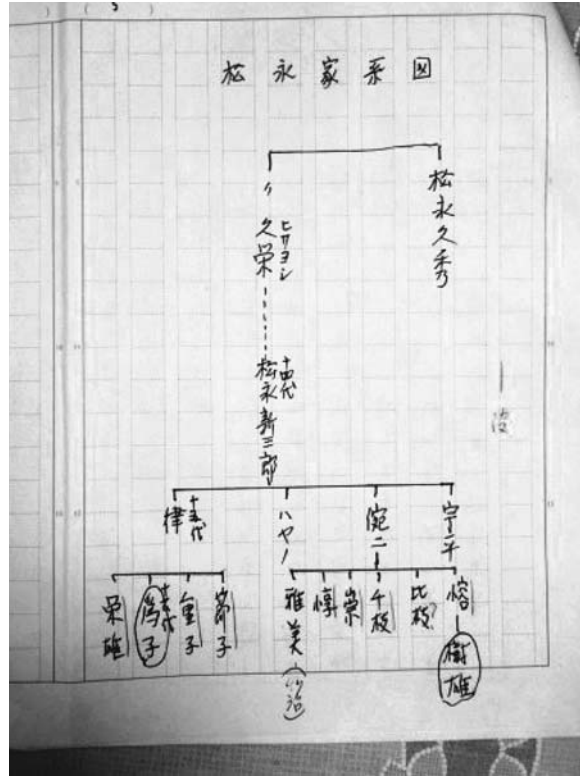
父につられて従兄弟たちもよく来て、木のぼりなどをしたことを覚えていた。

伯父の髭は、私達には珍しくいかめしくもあったが、剣士といえやさしく人ざわりがよく、口数の少ない我慢づよい人であったと思う。伯父の時代には私達の部落に四宮哲夫という漢学者がいて、祖父や伯父たちはその門弟であつたらしく伯父の手紙には漢語が多く使われていた。又伯父は勉強家と見受けられ武に関する書物をかなり読んでいたようである。又古美術などの趣味も多少あつたかに見受けられた。

伯父の剣道については余り聞いていないが「山根道場」という所で貫心流を学んだとか、さだかでないが私の記憶に残っている。

伯父には三人の男児がいたが剣の道を継ぐ者はいなかった。姪の私が女子師範学校に入学して二年生の時、折からの戦時ブームで女子にも武道をということで弓道に併せて薙刀が課外授業に取り入れられ、伯父は私に是非薙刀を習えとすすめてくれ、私も心もとなかったものの伯父のすすめに従った。伯父はよろこんで何くれとなく世話をしてくれた。

昭和十二年、徳島へ武徳会総裁の梨本殿下が来られ御台覧の演武に、晴れの薙刀を見て戴いた記憶も写真と共に残っている。又学校を卒業して小学校へ赴任した頃、県の体育協会より小学校の先生方に薙刀の指導をして欲しいとのことで各地へ講習にでかけたこともあった。又赴任地の小学校の運動会で、多くの児童生徒達を率いて校庭で薙刀を披露し、その気合に全校庭が一時静かに



なったことなど、今だに教え子や父兄たちの語り草となっているらしい。又伯父のすすめで昇段試験に松山へでかけたことなど、このような思い出はすべて伯父につながることはばかりでその御恩を今更感謝するばかりである。

伯父は警察官であったが、県の警務課へ入り武徳会で多くの人に剣道を教えた。退職後は徳島の空襲に遭い、伯母の実家を頼り疎開した。長女が身の廻りの世話をしていたが、彼女の結婚を期に長男の住む堺に移り余生を送った。九十歳の誕生日を目前にこの世を去った。九十歳には堺市の名誉市民となることが約されていたというが叶わなかった。しかし、その後武徳会本部より範士の称号を贈られたことは、生涯を武の道に捧げた伯父にとって

此の上ない本望といえよう。

髭の伯父松永侘二は、私たちにとってやさしくなつかしい人であり、松永家として誠に誇らしく輝やかしい存在であった。

この稿を綴らせていただいた私も当年八十六歳、松永家の生き残りとしてかかる伯父を改めて語る機会にめぐまれたことを誠によろこばしく謹んでこの稿を了らせていただきたい。

平成十七年二月吉日

松永侘二先生の娘婿さんの手紙

松永為子さんが綴ってくれた家系図の中に三女「雅美さん」は、徳島県警察官の「竹治邦夫さん」に嫁いだということが分かった。竹治邦夫さんは徳島県警で署長をされた方で私は存じ上げている方であった。早速、先輩名簿で住所を探し、竹治邦夫氏に手紙を書き、奥様（雅美さん）から侘二先生のことを知らせてくれるように依頼をした。

平成十六年十月二十八日付けで返信をいただいた。文によると

徳島から千葉に移る際、蔵書、書類は大半廃棄したのでそれらしいものは見つからなかった。何かのヒントになればということまで次の内容の手紙が送られてきた。

一、義父・松永侘二は大正末期か昭和初期に警察職を引退して、勧めにより武徳会の常任書記（徳島支部）として職に就き、各支部全般運営管理に当たっていました。

その一方で剣道教師として指導に当たっていたようです。

本人は山根道場（流儀は忘れてしまった）で剣の道を修行しています。その時の印象は江戸時代の諸流派の道場を連想するようなもので指導の表に立っていたようで、松永先生の愛称で県下に知られていたようです。

終戦時（昭和二十年）は占領軍（GHQ）総司令部の「好ましからざる団体」として解体の運命を辿りました。

私は当時満州国奉天にいました。武徳会創設から解体まで運命を共にしたのではないかと思います。

二、武徳会のこと

私は昭和八年の警察官拝命前に武徳会に入り、指導を受けました。

当時、大日本武徳会は中央に置かれ、各県下に支部が設置されていました。本部は梨本宮守正王殿下が総裁で各県では県知事が支部長の任に当たられていたと思います。その下部にも支部が各警察署単位に設けられ、支部長は警察署長でした。

武徳会では京都に武道専門学校を設置し、柔剣道の上級指導者養成に当たっていたようで本県からも多数卒業者が出て県下各地で指導に当たっていたようです。

当時柔剣道の資格は武徳会が唯一公認資格でした。只柔道は民間道場として現在も存続する講道館があり著名な存在でした。武徳殿・武徳会の建物は徳島公園内に有り、管理人が常駐していました。

稽古は祝祭日を除き、毎夜九時まで開放され自由に先生の指

導を受けられました。

指導員は松永教士を中心に

近江先生（師範）、吉本彦吉先生（教士）。警察の指導員である高島永吉先生（巡査部長）は吉本先生の娘婿に当たる。その他何名かあったようにも思います。これらの先生は武徳会から委嘱を受け五段までの資格審査員でもありました。

松永教士は各種大会運営審査試験事務等全般に亘処理していたようです。

以上参考になるものは少ないと存じますが思いつくままに記しました。

これに関連したことでお尋ねあれば知るところを御返事します
ご遠慮なくお申し出下さい。

ご成功を祈ります。

平成十六年十月二十八日

三木毅殿

竹治邦夫



徳島武徳殿（昭和3年11月竣工、昭和20年7月徳島空襲にて焼失）
写真提供：ドイツ館



丹生谷支部史 — 丹生谷支部の沿革 —

支部史編集委員長 吉 田 租

一、剣道の流れ

1 天正、慶長時代

豪剣の上手、達人といわれた人の名は残っていないが武将として名を残した数名をあげる。

山田八右衛門宗重

(山田家初代にして其の後、代々阿波藩の仕置家老を勤め五千三百石余を領し十代真胤の代に断絶)

宗重は初め父宗純と共に織田信長に仕え姉川の合戦外たびたび軍功あったが信玄死後、天正十年蜂須賀正勝に従い勇武絶倫と称され賤ヶ岳の戦北庄城攻め、相州小田原攻め(北条征伐)、朝鮮の役、関ヶ原などの諸陣に加わり、岸和田城攻めの軍功で蜂須賀正勝公より朱の柄の槍を賜わった。天正十三年蜂須賀家政阿波入部の折、仁宇谷一揆あり仁宇山城主仁宇伊豆守を討ち動乱を鎮圧したので恩賞として仁宇谷および荒田野、由岐ほかを賜わり本堂を和食に置き居城とした。後ろ髪を刺って胡叟または三哲と号し、大阪の陣には隠居の身分のため留守固めを勤めた。元和四年戊午二月二十日逝去八十一歳。墓は丈六寺にある。

岡 忠太夫定吉

山田宗重の由来、宗重と共に姉川の合戦ほかすべての諸陣軍役に従い幾多の軍功をあげた。山田家本営を和食に置き、家老職として出来島町の織部邸に在るや代官として和食本営を守った。元和六年卒、その墓(五輪塔)は和食郷西在悉地院裏の墓地にある。

2 藩政時代

驚敷町では、文化・文政のころ麻植郡牛島村大字麻植塚の人で貫心流佐藤忠右衛門が和食へ剣術を教えに来ていた。豪商花屋で泊十数人が門下生になっていた蛭子神社で撃剣大会を度々開いたというから蛭子神社の境内で教えていたのかもしれない。

阿井村庄屋で郷鉄炮の加藤光平、百合村医師岩代宗節の二名は免状をもらい其の他数名は目録をもらった。(光平の長男で庄屋を継いだ清太郎が書いた天保正記に書かれている)

忠左衛門死後、その子忠右衛門が指南しに来ていた東山清兵衛・花屋熊助その子伊之助など多勢が稽古をしていたようだが名は残っていない。

加藤光平は阿井に住む加藤隆年氏の祖であり、岩代宗節は徳島市の佐古村の医家から養子に来て乗馬で往診に行っていたという話が残っている。居宅は昔の百合村から阿井村へ移住し現在の岩代朗氏の祖である。加藤、岩代家とも免状は無くしていたがその伝承は残っていた。

3 嘉永安政年間

相生町

海部郡大里の柳生流佐藤寅右衛の門弟に花瀬和太郎の名が残っており、この和太郎は自分の弟子を拜宮で何人か持っていた。

花瀬和太郎は露口家の祖である。尚、佐藤寅右衛門は安政四年十二月二十九日に没している。築ノ上浜田勝蔵は倭朝直指流十一世師範をして名を残している。(明治二十七年以降没年不明)

上那賀町

前記柳生流佐藤寅右衛門の墓碑に拜宮花瀬門弟中、海部郡古屋村谷屋芳蔵、同村門弟中、平谷村門弟中と刻まれているのを見ると古屋村、平谷村に何人かの直弟子が居た事が知られ当時すでに武士以外の者が剣術を学んでいた事がうかがえる。

木沢村

木沢村誌に左の通り記載されている

文久三亥年七月

武藝勤諭方當組村々相調取都指出帳

木頭村

小高取 湯浅賢太郎

歳四十七

惣領 湯浅高太郎

同 十五

小高取別家 湯浅春蔵

同 三十一

同村夫役御免人 十一名

(名前略)

同村先規奉公人 民太郎

同 十五

同村神主 民部

同 三十四

坂州村

肝煎本人惣領 富太郎

同 三十三

夫役御免人
先規奉公人

二名

(名前略)

木頭名村 庄屋本人惣領

茂重郎

歳四十一

夫役御免人

同村夫役御免人

四名

(名前略)

懸盤村

肝煎役人

和田重郎

同 四十四

同村郷付浪人

西谷光次

同 三十二

同村先規奉公人

藤川類太

同 三十二

右同

二名

(名前略)

同村五人組

作次

同 四十二

沢谷村

庄屋本人惣領

齋城八百八

同 三十一

夫役御免人

齋城八百八

同 三十一

齋城多賀次倅

齋城八百八

同 三十一

川成村

先規奉公人

仁右衛門

同 四十五

出羽村

肝煎本人惣領

生田与太郎

同 二十七

夫役御免人

生田与太郎

同 二十七

生田義蔵倅

生田与太郎

同 二十七

拝宮村

肝煎右同御用代

浅岡友蔵

同 四十四

竹谷村

肝煎右同御用代

栄蔵

同 三十

東尾村

肝煎右同桂太郎倅

紋右衛門

同 二十八

桧曾根村

肝煎右同佑五郎倅

龍太郎

同 三十四

小浜村

肝煎右同御用代

刃之助

同 三十七

同村神主

恵喜蔵

同 四十四

同村夫役御免人 栄左衛門 同五十二
 花瀬村 肝煎本人惣領 伊佐太 同 三十

夫役御免人

音谷村 肝煎右同御用代 入江岩右衛門 同二十九

花瀬村 御林目付 露口森之助 同三十九

西納村 小高取 植原権之進 同三十七

長安村 肝煎無役人恒太郎伴 金蔵 同 二十

人数四拾五人

但右式組之所劔術稽古仕候様相談相極申候

右ハ此度武芸相勵候様勤諭方之義ニ付当組村々右之通取調帳面ニ
 取都指出申候已上

湯浅賢太郎

文久三亥年七月

児嶋与一郎殿

二、日本武徳会の支所創立時代

鷲敷町相生では『武徳会徳島支部は明治三十三年二月に発会し
 各支所は警察署管内に創立した』とある。その頃現在の鷲敷警察
 署是那賀警察署和食分署、即ち本署は富岡で分署であったので武
 徳会の支所も出来てなかったようである。それでも本署と交流が
 あった証拠として明治の終わりから大正初年頃の撃剣試合組合せ
 が残っている。その中に審判官池田恵一郎、濱谷普がある。池田
 恵一郎是那賀川町平島の人、濱谷普は阿南市大野の人だろう。そ

の他選士にクワノ小西とあるのは阿南市桑野の小西家の人
 その組合せは左の通り。() 内は補記

撃剣及柔道之部

居合 西谷雪蔵 (山家雪蔵鷲敷)

眞鍋筆三郎 (阿南市)

形 西谷雪蔵 (鷲敷町仁字)

上田儀一 (同町阿井)

審判官

池田恵一郎 (那賀川町平島赤池)

濱谷 普 (阿南市大野町)

1 中村茂久太 (鷲敷町八幡原)
 徳田 栄 (" 和食町)

2 木下 京蔵 (" 八幡原)
 八田 良平 (" 和食町)

3 浅井 友吉 (" 小仁字)
 徳田 久栄 (" 和食町)

4 山城 甚助 (鷲敷町土佐町)
 野々宮岩田郎 (相生町 横石)

5 西田 又吉 (鷲敷町 阿井)
 南実 太郎 (相生町日開谷)

6 今田恒太郎 (鷲敷町小仁字)
 近田 幾次 (" 八幡原)

- 3 福多 禎二 (鷺敷町土佐町)
- 小笠原佐守 ()
- 4 延谷喜代吉 (鷺敷町八幡屋)
- 松原李太郎 (" 和食)
- 5 桜木倉太郎 ()
- 小林 森房 ()
- 6 上杉 幾八 ()
- 野村 弥平 ()
- 7 川野武八郎 ()
- 殿谷 隆二 (鷺敷町和食町)
- 8 小島 亀太 ()
- 川田 一二 ()
- 9 竹中喜久次 (鷺敷町八幡原)
- 竹内 貞吉 (")
- 10 原 ()
- 車田甚五郎 (鷺敷町八幡原)
- 11 小川 吉蔵 ()
- 近田 幾次 (鷺敷町八幡原)
- 12 笹野賀之助 (")
- 原 庄五郎 (")

以上で解るように鷺敷、相生町で五十名程の青年が剣道を、二十四名が柔道をしていた事が知られる。然し指導者を得なかった事と稽古する道場が無かったため柔剣道とも大成しなかった。

相生町吉野の鈴木隆勝氏の祖父鈴木多平太と大久保の仁木正氏の祖父仁木助三郎、また明治二十七年正月十二日朴野の西浦伊三太(西浦新氏の祖父)が目録を直指流第十一世師範浜田勝蔵より受けている。

大久保の西村百太郎(明治三年正月五日生)も明治三十一年目録を伝授されたとあるが浜田勝蔵からであろう。流派による剣道は明治二十八年大日本武徳会の発足により吸収され、その形は居合道に残った。

木頭村では明治三十五年頃より昭和十四年まで出原の端伝寺の庭で剣道の稽古をしていた。当時木頭村の若者は一定の年令に達すると義務的に青年会に入会し、杉の下刈、苗木の運搬などの収入で防具(剣道具)を購入した。

試合は年一回涅槃会の行事の一つとして徳島市の武徳会より審判員の派遣を得て盛大に端伝寺で行われた。

三、大正・昭和前期(昭和十年頃まで)

富岡東に本署を置いていた那賀警察署和食分署は大正十五年七月一日昇格して鷺敷警察署となり海部郡内の四木頭(下木頭、中木頭、上木頭、奥木頭)を加え本管区とし現在の態勢が出来た。剣道も大日本武徳会の方針に従い鷺敷署を中核として歩み出したが統一したものはすぐには出来なかった。

鷺敷町では在郷軍人会、青年団などが武道を始めたが剣道の指導者が無く銃剣術が主になった。それでも高等科の生徒が運動場

で少々していた。

相生町では明治末期から在郷軍人や青年団に剣道を修める者があり昭和五年に日野谷村剣友会が出来、新田密太が代表となって稽古を始めた。つづいて朴野龍虎道場が藤本幾久、新田實などによって始められた。また小学校でも日野谷尋常高等小学校に岡久幸夫三段が赴任し学校剣道が盛んになった。この頃、村会議員有志による剣道防具の寄付があり剣道に一層拍車がかかった。

那賀郡内の尋常高等小学校剣道大会が見能林小学校で開催され日野谷からは東野整、藤崎廣美、谷崎啓一、新田茂理雄、西浦明、富永敏雄が出場した。

前記の方の外、東明義（横石）、閑崎利男（朴野）、中川清（ ）、鈴木豊一（吉野）、小森文雄（舞谷）が活躍していた。

上那賀町誌には、『宮浜村青年団・大正十年頃東尾に剣道具二組、檉棒（六尺）で棒術を、桜谷では大正十二年頃応神村吉成から佐藤某三段を招き約三ヶ月桜谷舞台で剣道の指導を十二名の者がうけた。』とあるから大正から昭和にかけて旧宮浜村では、青年団で稽古されていたのが知られる。

この頃、中等学校では武道が正課となり剣道は非常に盛んになった。特に徳島師範学校で剣道を修練した新鋭が大正末期卒業して丹生谷の各校へ赴任して以来、目覚ましい発展を見た。

相生町 日野谷尋常高等小学校

岡久 幸夫 三段

日野谷尋常高等小学校

（大正十四年）

（兼）日野谷青年訓練所

（大正十五年）

（兼）日野谷農業補修学校

（昭和二年）

（兼）日野谷青年学校

（昭和十年）

日野谷西小学校長

（昭和十一年）

日野谷西女子青年学校長

（同年）

原 貢一 三段

延野尋常高等小学校

天羽 慶一 三段

木頭村 北川尋常小学校

和無田尋常高等小学校

大澤善二郎 三段

情熱燃ゆる若きこの先生方によって木頭村と相生町日野谷に青少年の剣道が特に盛大となった。

四、昭和戦時中（昭和十二年〜昭和二十年八月）

昭和十五年紀元二六〇〇年奉祝を迎えた大戦前は日本が一番充実した年で剣道も最も盛んであった。

警察の道場では何時も竹刀の音が聞こえ小学校、青年学校でも剣道が普及して那賀郡とか小地区での大会も行われていた。

それでも道場が少なく机を出して教室でしたり運動場で稽古し

ていた。

一般の社会人剣道は指導者に恵まれず道場が無い事、剣道具の普及度などによりそれ程されていなかった。

それでも旧日野谷村、木頭村では目覚ましいものがあつた。

その頃活躍していた人

鷺敷町

山家 雪蔵 (百合・徳島市にて道場を構え徳島商業にて剣道

教師)

原 貢一 (八幡原・日野谷村で剣道を教えていた)

森口 幸 (田野・大阪にて稽古していた)

原井 一徳 (和食・阿南市山口町で稽古していた)

小延 從二 (中山・教員で阿南市山口、大野などで教えてい

た)

島田 幸美 (百合・教員で富岡にて稽古していた)

相生町

新田 密太 (日野谷村で青少年に教えていた。小手の名手だっ

た)

藤本 幾久 (龍虎道場として青少年に教えていた)

東 明義

閑崎 利男

中川 清

小森 文雄 (南満州鉄道社員として満州で稽古していた)

上那賀町

清原 栄 (阿南市大野町の人、海川中学校・平谷中学校で

教えていた)

松田 貞夫 (平谷桜木旅館の人、明治四十一年生まれ徳島師

範学校中退したが昭和八年頃北川尋常高等小学

校で訓導をしていたが少し剣道をしていた)

前川 清明 (宮浜村で少し稽古をしていた)

坂口 市次 (海川)

中川 虎雄 (後徳島市へ出た教員、教士七段となった)

木頭村

大澤善二郎 (教員、木頭村内で青少年に剣道を教えていた)

大城 六郎 (警察官、村外で稽古した)

曾根 義雄 (大澤先生と共に村内で普及に努力していた)

田村

五、大日本武徳会の解体期

武徳会支部は、各警察署を中心にして在った。丹生谷でも武徳

会鷺敷支所があり同支所主催の剣道大会が行われていた。第二回

大会が昭和十四年行われ日野谷尋常高等小学校が優勝し、その記

念写真を原崎好夫が所蔵している。選手として竹原康雅(高一)、

大西幸(高一)、浅田弘雄(高一)、前田卓美(高一)、新田耕佐

(高二)、原崎好夫(高二)が写っており藤本久幾、新田密太の指

導者前川村長、西改校長野村庄市先生、相原先生も写っている。

今の所この一枚の写真が武徳会唯一の資料で詳しい事はわからない

い。

陸軍中尉で丹生谷在郷軍人分会長をしていた和食町の松浦俱樹氏か、相生町朴野の西田弥壽氏が支部長をしていたと思うのだが両家ともに資料が残っていない。

昭和二十一年十一月一日大日本武徳会は解散されたところがあるが、別にどうということは無かった。

六、剣道空白時代

昭和二十年八月終戦と共に武道は火の消えたようになった。進駐して来た連合軍最高指揮官マッカーサーの武道禁止命令により学校はもとより一般でも一切出来なくなった。禁止令もさることながら食糧がなく一日三度の食事が一回か二回しか食べられなくなり少量の配給制だったから体力を消耗するスポーツなどはできなかった。

七、本格的剣道再開までの状況

(戦後昭和二十一年～昭和三十年)

・支部の活動状況

食糧不足もやや緩和され始めた昭和二十四年の秋、徳島県体育剣道クラブが結成された。結成には山家先生も参画されていたので横石の新田密太先生、木頭の大澤善二郎先生と連絡を取り剣士を探し出して昭和二十五年三月十二日丹生谷支部を結成した。徳島県体育剣道クラブはこの日、徳島県剣道連盟となったので丹生谷支部もその傘下となった。

支部長、庶務会計には山家先生が就任した。山家先生は荒んだ戦後の青少年の善導と健全スポーツとしての剣道の特性を説いて片道八十料に及ぶ丹生谷十ヶ町村の役場、学校を何回となく説いて廻り時には教室を借り、時には校庭で教え奨励し普及に努力した。先生その熱情に動かされ剣道を休んでいた剣士が動き出し各地区で会を持ち町村毎の支所が出来た。

昭和も二十五年ともなれば主食大人一人当り二合一勺(二九四グラム)の配給もやや好転し食糧配給公団も此の年度で終わりを告げ民営化された。又、警察予備隊が出来たのもこの年だった。それでも剣道防具は非常に乏しく稽古する人も少なかった。

驚敷町では山家雪蔵先生が誘って吉谷弥十郎、原貢一、助岡克則、森口幸、吉田租などが阿井小学校や時には和食小学校講堂二階で稽古した。

相生町では新田密太、藤本幾久、新田茂理雄、西村武夫、吉岡峻次、新居英男、西田武生、原崎好雄、西田実、川野美和太、吉田広則、新田常八などが稽古を始めていた。殊に朴野では銃剣術の防具を改装して龍王神社で少年剣道をしていた。

木頭村では昭和二十四年秋、青年会有志五～六名で八幡神社舞台で剣道を始めた。その後、大澤善二郎先生を指導者に迎え西岡信太氏の厚意により西岡氏所有の劇場を昼の間剣道に貸して頂き昭和二十七年頃は二十数名が一日おきに稽古していた。

と、当時を知る雄西義春氏が話してくれた。

中でも特筆すべきは昭和二十五年日野谷中学校が剣道をクラブ

活動として始めた事である。これに刺激されて丹生谷中の中学校に次々と剣道部が出来た。

鷲敷中学校でも少しおかれて小原享教師が剣道部を作り道場が無いため机を廊下に出して教室で稽古をしていた。時には校庭で草履ばきをする事もあった。昭和三十年に吉岡峻次先生が赴任して来て一層充実した。昭和二十六年九月八日講和条約締結、同二十七年四月二十八日発行という戦後の終りを告げる状況の中で剣道も再開に始動を加速した。

そして昭和二十八年年度徳島県剣道連盟丹生谷支部の第一回大会が二十九年三月十四日阿井小学校講堂において挙行された。

記念すべきプログラムは別添の通りである。

中学校はまだ充分態勢が出来ていなかったので参加していない。

十ヶ町村の内五ヶ町村しか組めなかったので赤松チーム、警察チーム、食糧公団チーム(営団は間違い)が参加している。

赤松は四回まで参加した。

尚、選手名「谷崎計一」は「啓一」が正、丸山の名は「好雄」、個人試合延野小森は「文雄」

・参考までに中学校の参加は第三回昭和三十年年度からである。

【最初の頃の場所と優勝歴】

昭和十九年第四十八回を以て休止していた京都大会が昭和二十八年五月五、六、七日全国規模の剣道祭典、戦後第一回京都大会が開催されたのが大きなはずみとなり丹生谷地区でも昭和三十年

代の飛躍へと開けていった。

回	年度	少年の部	一般の部	場所
第一回	昭和二十八年年度 昭和二十九年三月十四日	阿井小学校 講堂	日野谷支所	鷲敷町
第二回	昭和二十九年年度	試合無し	日野谷支所	日野谷
第三回	昭和三十年年度	鷲敷中学	延野支所	宮浜村
第四回	昭和三十一年年度 昭和三十二年二月二十日	相生町延野 小学校講堂	赤松支所	延野村
第五回	昭和三十二年年度	日野谷中学	宮浜支所	木頭村
第六回	昭和三十三年年度	日野谷中学	木頭支所	鷲敷町
第七回	昭和三十四年度	不明	鷲敷支所	相生町 日野谷
第八回	昭和三十五年度	宮浜中学	宮浜支所	宮浜村
第九回	昭和三十六年度	不明	鷲敷支所	相生町公民館 延野
第十回	昭和三十七年度	不明	木頭支所	平谷小学校

八、戦後飛躍の三十年代

1 道場の創立

大和錬心館 那賀郡木頭村出原

昭和十四年秋、大澤善一郎先生が木頭村和無田の自宅横に「大和塾」を建築して青少年に剣道、女子には薙刀を教えたが同十八年頃戦争急となり休止していた。それを昭和三十一年十一月、他から少々の寄付は有ったが村内二十五、六名の剣士によって出原の現木頭村役場位置に再興した。控え室・風呂付き・間口四畳半、奥行六間の道場で夜は剣道、昼間は保育園として使用した。些かではあるが地域社会へ貢献出来たと思っ

ている。
昭和四十一年木頭村役場の敷地となるため現在位置へ移転改築した。

稽古は隔日であったが現在は週三日である。

- | | | |
|------|------|-------|
| 初代館長 | 教士六段 | 大澤善一郎 |
| 二代 | 教士七段 | 松本 英雄 |
| 三代 | 錬士六段 | 雄西 義春 |
| 四代 | 教士七段 | 松本 英雄 |
| 五代 | 四段 | 佐々木武夫 |
| 六代 | 六段 | 松本 繁嗣 |

振武館道場 那賀郡鷺敷町百合

戦前徳島市富田橋北詰「振武館」を建て、山家先生は青少年

に剣道を教えていた。戦災で家も道場も灰燼に帰し昭和二十年故郷へ帰られ、鷺敷町百合石橋に居を構え安住の地とされた。先生の剣道復興に掛ける熱情に感動し有志集り振武館再建期成同盟会を作り徳島市、木頭村、平谷村、日野谷村、延野村、相生村、阿南市、鷺敷町の有志に呼びかけた。賛同する者一八二名募金を終え瓦葺の振武館を建設し昭和三十二年十二月八日山家雪蔵先生に贈呈した。「振武館」の横書き看板は鷺敷警察署長出口佳堂氏の筆である。

稽古日は週三日としていたがほとんど毎日していた。この道場は山家先生の逝去された昭和五十五年迄丹生谷支部の本部道場となっていた。

平成六年六月十日、百合字松の木にB&G海洋センターが出来その二階を剣道場として範士八段堀江幸夫先生染筆による「振武館」の看板を揚げ、月・水・金の週三回の剣道を続けている。

- | | | |
|------|------|-------|
| 初代館長 | 範士七段 | 山家 雪蔵 |
| 二代 | 教士七段 | 吉田 租 |

竹友館道場 那賀郡上那賀町海川

昭和三十四年四月三日山脇隆志氏が自費で建設し青少年を指導した。当時海川中学校校長に清原栄先生がおられ海川成瀬の青少年を十五、六名週二回教えてくれたので盛んになった。其の後駐在所の警察官に剣道熱心な人が赴任され、少年剣道に力

を入れ竹友館が丹生谷で優勝するまでになった。

平成に入り平谷少年剣道教室、海川少年剣道教室が合併して上那賀竹友館の名で活躍している。

初代館長 教士六段 山脇 孝志

二代 四段 久川 英二

三代 二段 谷 靖

龍虎館 那賀郡相生町の日野谷公民館を借りて道場としている

昭和二十九年十月日野谷公民館が落成し、ここを道場として

大人・中学生・小学生が稽古をしていた。それが戦前の朴野龍虎道場の延長の格好となり少年の部の対外試合に龍虎館を使うようになり、藤本幾久、西浦新氏などが責任者となった。

昭和四十五年龍虎館として少年部の練成に当りその実績は大いに上がった。昭和五十一年四月一日、日野谷龍虎館スポーツ少年団規約を制定施行し本格的に充実した。その後、日野谷体育館が西納野に建設され龍虎館の本據も体育館に移った。

平成十三年度相生町内四小学校統合により相生龍虎館となった。

初代館長 教士六段 藤本 幾久

二代 教士六段 西浦 新

三代 二段 橋本 一幸

2 武者修行

(1) 県内巡回武者修行

昭和二十九年十二月に七日かけた

参加者は左記の通り

(引率)

大澤善二郎 松本英雄 曾根義雄

西谷竹夫 中郷計一 品川敦雄

中橋達夫 井上新吾

(2) 四国一周武者修行

昭和三十四年十二月より同三十五年一月(十日間)

大澤善二郎 西岡信太 大城六郎

松葉嘉吉 松本英雄 岡田幸三

雄西義春 曾根義雄 小原 享(驚敷)

蔭原栄二 井村 悟 谷崎好孝

西田竹夫 吉岡峻次 以上十四名

十四名が自動車に分乗して高知↓愛媛↓香川↓徳島と道場を巡って稽古をした。どこへ行っても大歓迎してくれ剣技の向上もさる事ながら友情も深めた。又現在と異なっずすべてが不便だった時代、相手との交渉、交通、宿泊等々に大変であり大事業であったが、当事者だけでなく剣道会に大きな刺激となった。

(3)九州一周武者修行

昭和四十五年三月二十六日〜同四月三日(八日間)

大澤善二郎 大城六郎 松葉嘉吉

松本英雄 西山勝喜 雄西義春

走川輝一 大澤讓二 西岡信和

原田 勝 以上十名

三月二十六日 出発⇨松山泊

二十七日 早朝・松山市武道館で朝稽古

〃 午後七時・大分県中津市吉富町体育館にて稽古、相良先生の御指導

二十八日 午後一時・福岡県久留米市広又

武楊館にて稽古、緒方先生御指導

〃 午後六時・佐賀市松原町

霊雨堂にて稽古佐々木先生御指導

二十九日 午後六時・熊本市下通り

武道館にて稽古松永先生御指導

三十日 午後六時・鹿児島市

武道館にて稽古二階堂先生御指導

三十一日 午後六時・鹿児島市

武道館にて稽古楠本先生御指導

四月 一日 午後八時・宮崎市

今井道場にて稽古黒木先生御指導

二日 〃

三日 無事帰着

(4)水戸東武館練成大会 第一回参加

この大会の正式名は「第六回全国少年剣道練成大会」である。

昭和四十年宮浜中学校吉岡峻次先生が同中学校生徒を引率して右大会に参加した。吉岡先生は先年大澤善二郎先生について四国一周武者修行に参加しその強い印象が忘れられず教育的配慮から遠路であるが参加した。全国より参加団体二六〇、総勢二、〇〇〇名が一堂に集まったの練成である。大人も少年も強い印象が残った。

三月二十六日 出発⇨二三・三〇分発・関西汽船

二十七日 五・〇〇天保山着 新幹線⇨東京 乗換⇨

⇨一四・〇〇水戸着⇨百里原航空基地泊

二十八日 八・〇〇県立スポーツセンター着

――練成・試合――

二十九日 見学⇨原子力諸施設・水戸の名所・新宿泊

三十日 見学⇨国会議事堂・日本武道館・皇居前⇨

大阪港乗船

三十一日 帰宅

監督⇨吉岡 峻次

先鋒⇨原田

次鋒⇨近藤 充雄

中堅―綱島 和宣
副将―南川 長志
大将―入江

(5)水戸東武館錬成大会 第二回参加

昭和四十一年三月、去年の体験がすばらしかったので本年は参加対象区域を丹生谷一円の中学生として参加した。その募金の趣意書があるから載せておく。

参加人名は此の度の調査では不明だった。

(6)水戸東武館錬成大会 小学児童参加

昭和四十九年三月、水戸東武館創設百年記念・第十五回全国少年剣道錬成大会に木頭錬心館の少年が初参加、当時の理事長三木只雄、大澤善二郎両先生がわざわざ木頭村まで激励に上がった。大会は四七五チーム約二、三〇〇人の選手が一堂で熱気ある錬成の後、二日間の試合に入った。

木頭の山の子が、この大舞台で大きな試練の意義に感銘を受け、以後第三十回大会まで十六年間連続参加したが、児童の減少により休止した。

※タレネーム、チーム旗はシーツの布を保護者が縫い合わせ手書きで作った。

※第一回目参加者のみを記しておく。

監督―原田 勝
先鋒―吉田 博文
次鋒―和田 肇
中堅―佐々木直樹
副将―昇 和彦
大将―佐々木和人
補員―西田 静男

「全国少年剣道錬成大会参加趣意」

徳島県剣道連盟丹生谷支部
丹生谷剣道スポーツ少年団

戦後二十有一年を経た今日、日本古来の伝統を誇る剣道は、ようやく脚光をあびるに至り、わたしたちこの道に生き、この道によって健全な青少年を育成せんと志す者にとっては、まことに同慶の至りであります。

されば昨年度はわが丹生谷少年剣道連盟は全徳島県の剣道会の代表として、遠く水戸東武館に遠征して初参加ながらも三四戦まで勝ち残ることを得る赫たる戦績を挙げ一層自信を強めるに至りました。

爾来丸一ヶ年「捲土重来全国制覇」の夢のもと日夜地道な精進を続けて参りましたが、今回再度水戸東武館に遠征を試みるとするものであります。申すまでもなく水戸は水戸学発祥の地であり維新の大業を成し遂げた原動力の地であり、この日本人の心のメッ

かとも言うべき水戸に心と剣道を学ぶことは実に有意義なことと存じます。又当丹生谷はご承知の通り山間へき地であり徳島市さえも出た事のない子供が多いので、この機会に広く見分を広めさせるために、科学の先端をゆく原子力研究所や帝都の観光あるいは時代の寵児夢の超特急を利用させ文武の確立を具現せんとするものであります。つきましてはこの費用を捻出する方法を論議の末関係町村にお願いし、あわせて憂国の有志各位のご理解あるご支援をお願い致し度いのであります。何かとご出費ご多端の折まことに恐縮には存じますが健全な日本人育成のため格別のご後援をお願いする次第であります。

記

一、目標額 二十万円

内訳 選手丹生谷一円より十名 監督・付添三名

旅費、宿泊費、昼食、準備費

一、日程計画 二十万円

三月二十五日 丹生谷出発↓小松島夜行(十一時三十分)↓

二十六日 大阪駅(七時)↓東京(十一時)↓上野駅(二時)

↓水戸(五時)↓勝田(六時)

二十七日 鍊成大会(茨城スポーツセンター)

二十八日 水戸市内史蹟見学・原子力研究所・大洗海岸

二十九日 東京見学(八時)↓東京駅(二時)↓大阪(六時)

三十日 小松島(五時半)↓丹生谷振武館↓解散

3 合宿土用稽古

(1) 振武館の土用稽古

昭和三十三年より四十三年、山家雪蔵先生の体調が崩れる迄十一年間中学校が夏休みに入った直後から一週間合宿しての土用稽古をした。

丹生谷の中学校ばかりでなく加茂谷、新野、平島などがすばらしい評判を聞いて参加したが、宿泊出来ず通いもあった。講師先生も遠く鳴門、徳島方面から高名な先生方が沢山参加してくれた。

― 振武館道場合宿訓練の沿革 ―

丹生谷少年剣道連盟

驚敷町以西、いわゆる丹生谷十ヶ町村は古くから剣道が特に旺んであったが戦後日本国内に於ける剣道は一時萎縮したことはご存知の通りである。然るに驚敷町百合の山家雪斎翁は日本人のこうした沈退を、いたく心痛されていたが衆に先んじて、『いちやく剣道を忘れることは日本國の滅亡となり剣道こそは日本復興の原動力となり』と叫んで各地を行脚して、これが復活・奨励につとめられた。

ためにか昭和二十八年以来、県下中学校の剣道大会には必ず丹生谷の中学校が優勝・準優勝を獲得して決して他に勝をゆずることのない未曾有の歴史を築いた。

狭隘な運動場、限られた生徒数と教育予算はこの地区の学校の

クラブ活動にマッチして又現職に適当な指導者をも得て、ますますこの道に拍車をかけて来た。

又翁の高潔、清廉、豪気にして温情の豊かさ、風雅のきわみを極めて、その仙境は古びず常に時代と共に生きられる気概を示し諧謔をわきまえた巾の広い人格は万人の渴仰してやまざるところである。

以後毎年夏の土用稽古には、振武館には丹生谷内外より数多の斯道精神の老若が詰めかけ盛況をきわめているが特に六、七年前より宮浜中学剣道部を主軸として各校が合同合宿をするに至りその成果は頓に高揚して来た。

私邸の奥の奥の、その奥まで汗臭い男共に解放して余すところなく物心を挙げて後進のものに提供して惜しまぬ姿は万人感服するところである。鶯敷町当局に於ても公費を割愛してこの町道場に防具を購入し籠手を修理し且又他町村青少年のために公民館を宿舍に解放くださったことは、まことに翁の果す仕事の役割が利害を超えた超人的社会教育への奉仕に感激されたがためであると信ずる。

毎年実施している合宿訓練は大体右のような状況である。

本年も別紙要項によって計画をしているので志あるものは挙げて来り参加せよ。

大方の沿革のあらましを述べて皆さんの奮起を望む

昭和四十年七月

剣道夏期合同合宿訓練要項

丹生谷少年剣道連盟

一、目的

質実剛健をモットーとした本格的剣道の修練のかたわら団体生活を通じて総合的人間の陶冶を図り活力のある人間を育成する。

二、期日

昭和四十年七月二十六日より七月三十一日まで

三、場所

鶯敷町百合 振武館（阿井停留所）

四、参加資格

丹生谷剣道連盟管下の中学生を主体とするも希望者は性別・年齢・学歴・職業を問わず

五、会費

食費は実費徴収（但し副食費のみ、米は持参のこと）
大体一日一人・八十円位

炊事婦雇代、毛布、宿泊場所等の謝礼及び映画会、写真代、茶菓子代、蚊取線香代等大体・二百円位とする。

六、準備携行品

会費、剣道用具、トレパン、タオル、歯磨等日用品、下着、小遣若干、学習用具（一、二年生は主として夏休みの宿題、三年は補修用教材）

七、講師

徳島県剣道連盟の範士、教士、錬士の有数の先生方及び学習
係講師として管内高小中学校の優秀な先生方多数を予定して
いる。

※勝手ながら左の先生方に委託します

国語―新田、加藤、住吉、吉田租、岩川、滝本、山下各先生
英語―福本秀佳、中内正臣、岡田、小森、桐川先生、高島先
生

小原、走川

数学―吉岡先生、吉田広則、新居英男、清蔭、弓長、西田、

八、計画の日程（七月二十六日～三十一日）

5:00	起床 体操 洗面
5:30	数 学 1、2年 基礎学習 3年 進学向合同学習
7:00	朝食及び後始末、朝の清掃、散水、学習準備
8:00	英 語 1、2年 基礎学習、宿題 3年 進学受験向き学習
10:00	剣道修錬
12:00	昼食、後始末、午睡 自由行動 竹刀、防具の点検・手入れ
2:00	剣道修錬
4:00	入浴、清掃、散水、雑談等
5:00	夕会、後始末、自由学習、自由行動 竹刀、防具の点検・手入れ
6:00	国 語 1、2年 基礎学習、手紙の書き方 俳句、宿題の解決 3年 受験用補習
8:00	各校対向演藝会、試胆会、怪談の夕、剣道座談、講話
9:00	就 寝

(2)日野公民館の合宿土用稽古

山家先生御病気のため恒例の少年の合宿しての土用稽古が出来なくなり丹生谷支部長藤本幾久先生が日野谷公民館で振武館に代って三泊四日の合宿をした。昭和四十四年、四十五年、四十六年の三ヶ年であった。

指導の先生 西村武夫 藤本幾久

助岡克則 川野美和太

谷崎正助 野村幸大

二宮 章 吉田広則

吉岡峻次 ……………の各先生

参加学校名	人数			引率教師
	昭和四四年	昭和四五年	昭和四六年	
新野中学	十二名	十一名		吉田峻次
宮浜中学	十二名	十八名	十五名	谷崎正助
相生中学	十名	二十名	十九名	新居 野村幸大
木沢中学		九名	八名	二宮 章
鷺敷中学		十六名	十五名	助岡克則
平谷中学			十七名	吉田広則

4 合宿土用稽古

丹生谷各地の道場、剣道部では毎年一月上旬に一日〜三日の寒稽古は現在も続いている。

5 丹生谷支部恒例の大会

○丹生谷支部大会

昭和二十九年三月十四日第一回丹生谷支部大会が鷺敷町で開催した。会場は阿井小学校講堂、参加町村は平谷、延野、日の谷、鷺敷、木頭、赤松それに警察、食糧チームを加え八チームだった。一般のみで少年の部は無かった。中学校が参加するのは第三回昭和三十年からである。

大会長山家雪蔵、日本剣道形 打太刀山家雪蔵、仕太刀大澤善一郎 伸び行く丹生谷剣道の幕開けにふさわしい両先生の剣道形であった。加うるに鳴門より無雙神伝抜刀術尾形郷一先生門下八名による居合い、羽ノ浦よりは大森流山本忠蔵先生の居合いが花を添えた。

尚、面白いのは補員のみ優勝戦が組まれていたことである。

連面を続いて平成十五年には五十回を数えた。

丹生谷支部史編集委員会

委員長 吉田 租

委員 佐々木武夫

走川 輝一

雄西 義春

湯城 豊勝

岩川 正毅

谷 靖

杉本 雅彦

富田 正

平成十六年三月二十一日



剣道に役立つ医学知識

かみ合わせと姿勢の関係

歯科医師 安田 勝裕

剣道や居合で頭が傾いたり、肩が上がったりして、なかなか治せない方、また、子供さんに注意してもなかなか治らない生徒さんとか、ひょっとしたらかみ合わせから姿勢に影響してる方かもしれません。かみ合わせ（専門用語では咬合といいます）が姿勢に関係するのはご存じですか？かみ合わせには、①利き咬み（利き手のようなもの）②不正咬合（出っ歯や受け口）③歯の欠損（歯が抜けてしまっただけの状態）などがあります。

①については全員の皆さんにあるんじゃないでしょうか。利き咬みは、最初に食べ物を入れたときに食べものが移動する側です。多分、みなさん自分の利き咬みを知らない人がほとんどで、やってみてください。よく使ってる側ですから、トラブルを起こしやすい、同じ側のトラブルでいつも歯科医院を受診するかもしれません。ちなみに右咬みが利き咬みなら、頭が右に傾く傾向があります。

②の不正咬合は、出っ歯や受け口などによって、噛み合わせの面（咬合平面といいます）が傾きます。この傾きを、地面と平行

にするように頭部を補正します。このことで、姿勢が傾きます。

①は左右の傾きですが、②は前後の傾きになります。

③歯の欠損は、虫歯や歯周病で抜歯に至ると生じます。その部分を放置していると、前後上下の歯が移動して、噛み合わせが変わっていきます。欠損の程度部位によって、咬合平面は変化します。③は前後左右に傾きます。

頭が傾くと、それを補正するように体幹が傾きます。図のように頭が左に傾くと、左肩が上がります。左腰は下がります。このような状態を作り、人間は体幹をまっすぐさせているのです。口腔内（歯科）に原因がある場合は、やはり正しい体幹、頭部を保つために、無理に筋肉を意識して補正するよりも、噛み合わせの面（咬合平面）を歯科医院で補正してもらおうか（歯科治療で治す



か) 口腔内に補正する手段があればアドバイスを受けましょう。
チェックする場合、割り箸を横(水平)にして奥歯で咬んでみましょう。そのまま目を閉じて、鏡の前に立って、目を開けてみましょう。また、格子のような柄の壁紙の前に立って、全身を姿見で見てください。どちらも難しければ、他の方に写真を撮ってもらいましょう。正面、側面を撮ってもらえれば、体の傾きはつきりわかります。

対処法としては、①の咬み癖で右咬みの場合、左側で、キシリトールガムを噛みましょう。食事で左で咬むように意識するのも一つの手ですが、私の場合はガム咬みを勧めています。習慣化しやすいからです。

②と③は歯科医院の受診をお勧めします。アドバイスを受けてください。矯正治療(歯並び)や補綴治療(入れ歯)などで、改善される場合があります。

また放置しておく、顎関節症と言って、顎が痛くなったり、口が開かなくなったりする場合があります。腰痛とか肩こり、全身の疾患を起こす場合もありますので、注意してください。みなさんの、修行の一助になれば幸いです。



各種大会に参加して

全日本剣道選手権大会に

出場して

名西支部 白 木 恒二郎



令和三年三月十日、長野市真島スポーツアリーナに於いて第六十八回全日本剣道選手

権大会が開催されました。今年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、多くの大会や講習会等が中止となりました。この大会も、「今回はもう中止だろう」と思っていました。時期をずらしての開催となりました。

新型コロナウイルス感染症が収束しない中での開催、また、強豪の警察官が不参加ということもあり、今大会の開催にあたっては様々な意見を耳にしました。しかし、

私にとってこの大会が憧れの舞台であることに変わりはありません。五年前に一度出場しましたが、絶対にまた出場したいと思い、毎年挑戦し続けてきました。そのため、悩みながらではありましたが今回も予選大会への参加を決めました。

予選の決勝では、大学の後輩であり教員でもある美馬選手と対戦をしました。「これは絶対に負けられない」と気合を入れて試合に臨みました。美馬選手は勢いもあり、途中でヒヤットとする場面もありましたが、何とか勝利を収め、全日本選手権大会への切符を手に入れました。

次の日から本戦に向けての準備を始めました。予選から本戦まではあまり期間がありませんでしたが、多くの先生方や仲間と稽古をつけていただき、体力面や技術面など、自分の課題を克服するためにやれるだけのことを精一杯やりました。短期間での調整でしたが、いい状態で大会の日を迎えることができました。

大会当日は、自分でも驚くほど落ち着いていました。一回戦の相手は東京都の石田

選手でした。大学の先輩であり、その強さは以前からよく知っていました。普段の私であれば余計なことを考えて不安になってしまうのですが、この日は「自分が今までやってきたことを出すだけだ」と素直に思うことができました。試合開始とともに先をかけ、相手の出ばなを捉える意識で攻めていきました。この意識が自分に流れを引き寄せ、結果的には相手の居ついたところへ打ち込んだ面が一本となりました。その後も冷静に試合を展開し、そのまま制限時間となりました。この試合で勢いに乗ることができ、二回戦は沖縄県の山川選手、三回戦は神奈川県の本郷選手に延長戦の末勝利し、準々決勝に進出しました。

準々決勝の相手は茨城県の松崎選手でした。学生でありながら昨年のこの大会で準優勝をしている選手で、対戦できることを嬉しく思いました。実際に松崎選手と試合をして感じたのは、懐の深さでした。自身調子がよく、自分の方が攻めている感覚があり、正直あまり打たれそうな気はしませんでした。ただ、それと同時に相手の打

突部位が遠く感じ、打てるイメージも湧きませんでした。いい機会で技を出せた場面もありましたが有効打突にはならず、最後は、面に誘って返し胴を打とうと手元が浮いたところに小手を打ち込まれ勝負がつかしました。試合を振り返り、当然悔しい気持ちもありましたが、それ以上に現段階で自分のできることはやりきったという充実感の方が勝っていました。まだまだ改善しなければいけない点がありますが、今大会で自信をつけることができました。今後も常に向上心を持ち、生徒の指導と自分の剣道を両立していけるよう日々精進していきます。

最後になりましたが、今大会に出場するにあたり温かいご支援・ご声援を頂きました皆様方に心からお礼を申し上げます。

試合結果

- | | | |
|------|-----|-----------|
| 一回戦 | メー | 石田 (東京都) |
| 二回戦 | メ延ー | 山川 (沖縄県) |
| 三回戦 | メ延ー | 杉本 (神奈川県) |
| 準々決勝 | ー延コ | 松崎 (茨城県) |



全日本選手権に出場して

環太平洋大学 坪井 香歩



令和三年三月十日、長野県で開催された第五十九回全日本女子剣道選手権大会に、私

は初めて出場した。徳島県予選にも初めて出場し、出場権を勝ち取ったが、大会直前になるまで実感は湧かなかった。徳島県の代表選手として恥じないような試合をしようと、日々練習に取り組んだ。

選手権大会が開催される二日前に私は現地入りをした。まだそのときは緊張や興奮などの感情はあまりなく、いよいよだな、という気持ちだった。前日練習のときの体の動きも良く、いつも通りの調子が出ていたように思える。ただ、前日の会議において、初めて会場入りした時のあの緊張と身体への震えは今でも思い出せるほどであった。本当にこの場に来たんだと、ここで戦うん

だという気持ちが一気に湧いてきた。この場で勝ち上がりたいという闘志が燃えてきた。

試合当日のアップは少し体の動きが硬いと感じたときもあったが、いつもの試合前と大差はなかった。いつも通り動けることができたら大丈夫だと思っていた。しかしそうは上手くいかなかった。

開会式が終わり、各試合場で試合が始まった。名前の知れた選手であっても試合をすすめる中で、思わぬところで敗北していく。私は、実力があっても試合はやはり何が起るかわからないということを感じ知った。だんだんと自分の試合が近づくにつれて、手元が震えていた。ただ勝ちたいという思いだけはあった。

一回戦の相手は、滋賀県代表の堀由美恵さんだ。試合が始まる瞬間相手の選手と向かい合い、面をつける。手元の震えは止まらなかった。蹲踞をして、はじめの合図とともに立ち上がってからも足元がおぼつかなかった。ただ試合中の思考は、いつもだったらここで面を打てる、ここでこう対

応すると頭は冴えていた。しかし、それに身体はついてこなかった。負けたくないというマイナスな気持ちが身体に重りをつけるかのように動きは硬かった。試合が終わる瞬間までずっと緊張していた。試合を純粹に楽しむことはできなかった。

その結果、延長の末、相手が面に出てきたところを後から合わせるような形で面を打ってしまい、少しの差で相手の面の方が速かった。そして、私は一回戦敗北という不甲斐ない結果に終わってしまった。最後打たれてしまったところもいつもなら勝っていたであろう場面のためらいが出た。ただただ悔しかった、悔いが残った。全てにおいて悔いしか残らなかった。しかし、もう一度この場に戻ってもう一度試合がしたいと強く思った。強くなって帰ってこようと、学生生活最後の年、全力で行こうと誓った瞬間であった。



第59回 第68回

全日本女子剣道 全日本剣道

選手権大会 選手権大会

令和3年3月14日(日)

とき 午前9時30分開会 / 午前10時00分試合開始

ところ ホワイトリング (長野市真島総合スポーツアリーナ)
NHK BS1 <正午~午後3時50分>

主催 公益財団法人全日本剣道連盟 主幹 一般財団法人長野県剣道連盟
後援 スポーツ庁(申請中)・長野県教育委員会・公益財団法人長野県スポーツ協会・長野市・読売新聞社・毎日新聞社・公益財団法人日本武道連

<https://www.kendo.or.jp>

全日本剣道連盟より画像提供

随想

昇段審査での一コマ

審議員 中村 稔 裕



『徳島の剣道』

第三十七号発行
めでとう御座居ま

す。年一回の発行
が待遠しく毎回心

待ちにしております。専門部の活動状況が手に取るようにわかり、関係者の皆様の御努力に敬意を表します。中でも私が最も関心を持って読んでいるのは、昇段審査合格者の感想文です。六段以上の審査は全国審査であり、これまでにない緊張感と綿密な準備が必要となります。見事一回で合格された方、何回も苦労された方といういろいろドラマがあるようです。

ここで、私の昇段審査を省みながら感じたことを述べてみます。私は、平成十年十

一月に七段を受審しました。これに備えるべく夜毎各少年剣道教室に出向き、多くの先生方に御指導を頂きました。その時ある先生から

「中村さん、誰ぞ先生についてとんでと、たずねられ深く考えぬままに

「私の先生は既に他界し先生はいないんです。」

と返事をしました。ところがこの言葉が審査当日に生かされる事になりました。

場所は東京の日本武道館、数百人の七段受験者が目標を達成すべく激しい立ち合いをしておりました。私は午後の審査でしたので他の人達の立ち合いをしっかりと見る事が出来ました。午後の部に移る前、審査場片隅で二十人程の円陣が出来ており、何事かと私も円陣の外側から様子を見てみると、円陣の中心に大阪の高名な範士八段の先生がおられ

「みんな、こんな立合いしていたら誰も受からないよ。攻めがない、大声を出しても相手を動かしていない。相手が打ってきたから小手を打った。相手が打ってきたから

胴に返した。すべて後手打ちだよ。やったと思っても後手打はダメだ。小手を打ったのに、胴に返したのに受からなかった。こういう人が大半だと思う。攻めて相手を動かし、打ってこさせて出小手、返し胴、これが出来ないダメだ。審査員は攻めがあつたかどうかチャンと見てるよ。常々ただ打合いの稽古をしているからこんな悪い結果になるんだよ。午前の部合格率は二十パーセントに届いてないよ。攻めて先手を取り、相手を動かさないとダメだよ。」

と話された。そうか、厳しく攻めて先手を取らないとダメなのか。審査直前になって自分の剣道の見直しを迫られる結果となった。理に合った剣道をしないと高段合格させてもらったものの、高段者の先生にしっかりと掛り、理に合った剣道の重要性を教えられました。

「誰ぞ先生についてとんで」

とは、この事だったのか。これ以来私は高段者の先生方の稽古、試合を徹底的に見ることにしている。相手をくずす事はなかなか難しいことですが、日々の稽古をよく考

えて無駄のない稽古をしようと思っ
ている。
ある剣道雑誌にこんな川柳を見つけた。

「乗って打つ、乗るところがわからない」

この乗る所を見つけ出す方策として、高
段者にしっかり掛かり、乗るべきところを
教示願ひ、自ら会得することが必要だと考
えている。皆さん高段者の先生に掛かるこ
とに臆せず、勇気と強い信念をもって稽古
をしようではありませんか。

光陰如箭

徳島支部長 長崎 秀信

徒然とは裏腹な日々において、支部長と
いう大役を仰せ付かり早二年たとうとして
いる。実に、光陰如箭の感が深い。

支部の年間行事と支部長の仕事としては、
四月の支部の総会に始まり、翌年の総会で
終わる。

この間に、

六月 初段以下の審査会

中央署主催による防犯剣道大会

審判長として注意及び講評

九月 徳島支部主催による

少年剣道錬成大会兼スポーツ少年

団剣道交流大会県予選

大会長として挨拶、表彰状授与

十一月 徳島市中学校新人剣道大会

大会長として挨拶 表彰状授与

一月 剣道連盟の役員会及び支部長会

支部長会の議長をする。

二月 徳島市スポーツ少年団剣道交流大

会来賓として祝辞

四月の総会に向けての支部役員会

三月 市体育協会総務委員会

等々である。

そして、年間を通して行われているのが、
中央武道館での徳島支部稽古会である。毎
週水曜日午後六時から八時半まで、「来る
者は拒まず、去る者は追わず」をモットー
とする稽古会は、早い時間帯の子どもの指
導稽古に始まり、支部以外からも多くの剣
客が集い毎回さわやかな汗を流している。

その稽古会も令和元年七月から中央武道
館の改修工事に伴い道場が使えないとの連
絡があった。さて、これはどうした事か、
一大事である。

支部長としてこのまま稽古を休みにする
のは簡単だが、会員から不満の声がでる事
が予想された。然りとて、年度半ばにおい
てこれに代わる稽古場所を確保できるだろ
うかと思ひながらも何箇所か当たってみた
が、やはりどこも空いていなかった。

ある日、たまたま県立障がい者交流プラ
ザの前で信号待ちしていると、その看板

には障がい者スポーツセンターとも書いてあった。もしかしたらと思い中に入れてみると大きな体育館があり、その使用状況を担当者に聞いてみると運よく空きがあった。多少使用料は高かったが、駐車料、冷暖房料共に含まれていたことから、その場で七月から半年間予約した。

こうしてどうにか障がい者スポーツセンターの体育館を半面確保することができ、多くの会員のみなさんはもちろんのこと、支部以外からもたくさん参加していただき、以前と同じ曜日、同じ時間帯に稽古を続けることができたのは、まさに奇跡か偶然か、はたまた天の与えとしか言いようがない。しかし、第一と第三水曜日はもう半面での阿波踊りの練習と重なり、館内に響き渡る二拍子の静と動から繰り出す轟然たる音に気合い負け、思わず足、腰、竹刀を持つ手がぞめきのリズムに引き込まれ、意味もなく体が動き竹刀を振り回すだけの打突になっっていくような気がしなくてもなかった。そんなぞめきのリズムにも慣れてきた頃に、当初二月頃までかかると言われていた

改修工事であったが、年明けそうそう武道館が使えるとの連絡が入った。

この時、中央武道館と障がい者スポーツセンターの施設、設備面を比べてみた。

障がい者スポーツセンターは体育館であることから床が硬いの欠点だが、広い駐車場があり使用料の中に駐車料、冷暖房料が含まれていることから稽古に来られる方々への負担がないという利点があり、支部の稽古会を中央武道館にもどすか否かその判断に随分と迷った。

阿波踊りのぞめきのリズムに合わせ、ただただ激しくそして静かに体を動かす静と動と、剣道の互いに心を読み、竹刀の鏑の操作から生ずる虚実の構えの静と、激しい打突の動は同じ場所には存在しないと考え、令和二年一月から中央武道館での稽古を再開した。

さすがに真新しい床は気持ちいい。足の裏にしっくりくる。新しくていいのは畳と女房だけじゃないようだ。

だが、これも束の間、周知のとおりの新型コロナウイルス禍による第二の大事であ

る。

令和元年十二月頃に中国武漢で発生した新型コロナウイルスが、こんなにも速くグローバルに蔓延するとは思ってもいなかった。

剣道は三密「密閉、密集、密接」に該当する恐れがある。感染源となりうる口からの飛沫の飛散が非常に多いという事実を決定づけたのが、愛知県警特練員の稽古中によるクラスター感染であろうか。

全剣連、県剣連の通達を受け令和二年二月後半から徳島支部稽古会も稽古の自粛を余儀なくされた。

そしておよそ四ヶ月、令和二年六月十日付で対人稽古自粛解除令が出されたことにより、徳島支部は地域の現状を鑑みて、全剣連から出された感染拡大予防ガイドラインに沿い、稽古前の検温と稽古前後の手の消毒。稽古の都度、検温、氏名、連絡先等の記帳。稽古中は面マスク、マウスシールドの使用。高齢者に対しては、併せてアイシールドの使用もお願いし慎重に稽古を再開した。

いつ、どこで、どのように感染するか分からない新型コロナウイルス。稽古を再開して半年になるが感染者が出ていないのが幸であり、今となっては、検温、手の消毒、面マスク、シールドの使用はごく普通の光景となり、それぞれが感染源となりうる口からの飛沫の飛散に注意しながら、以前と何ら変わりなく多くの剣客が稽古に励んでいる。

だが、稽古は再開したものの予定されていた試合、錬成大会等々のあらゆるイベントが中止あるいは延期となりいまだにその尾を引いていることから、巷では子ども達の剣道離れが出てきているとの噂もあった。もしこれが事実だとすれば第三の大事である。

光陰如箭

予期せぬ阿波踊りとの共存稽古

予期せぬ新型コロナウイルス感染拡大による稽古の自粛、そして感染予防しながらの稽古の再開、諸行事の中止。

新型コロナウイルス感染症がいつ終息するのか分からないが、このコロナと共存し

感染予防しながらの支部の活動がまだまだ続くと思われるさなか、いま将に支部長としての任期が過ぎようとしている。



剣道と私

鳴門支部長 佐伯守夫



私は中学入學と同時に剣道を始めました。伯父が中学校の外部指導者をしていた為、強

制的に入部させられたのです。最初は嫌で嫌で仕方ありませんでしたが、当時の私は、少し肥満体型だったので、少しでも解消したいと思い直し始めることにしました。始めるからには、最低でも中学三年間は一生懸命続けようと心に決め、稽古に取り組みました。

稽古のこいがあり、三年の時、団体戦のメンバーに入り、香川県中学校総合体育大会で優勝し、少しですが自分に自信ができました。当初三年間のつもりでしたが、剣道の奥深さが分かりはじめ向上心も芽生え、高校でも続けようと考える様になり、剣道部に入部しました。

恩師の葛西和久先生はじめ土庄町剣道連盟諸先生方の熱心な御指導により、高校生活最後の県高校総体では、決勝戦まで進みました。惜しくも琴平高校に敗れ、準優勝でしたが、土庄高校剣道部初の四国大会出場を果たしました。結果的に中学校・高校と六年間剣道を続け、充実した学生時代を過ごしました。

卒業後は、就職の為、故郷小豆島を離れ、鳴門市の製菓会社に入社致しました。初めて親元を離れての生活が始まりました。仕事を覚えるのが一番で、また地域に溶け込むことに注力し、剣道の稽古を一時中断しておりました。

仕事に余裕が出来はじめ、一人暮らしにも慣れてくると、心の中に剣道への思いが沸き上がって来ました。再び竹刀を持ちたいと鳴門市の剣道教室を探していたところ、鳴門警察道場で鳴門少年剣道クラブ（現・鳴門市光武館道場）が練習していると聞き、見学に行きました。

道場で初代光武館館長である故・寺西慶裕先生と出会い、入門の許可をいただき、

稽古を再開する事が出来ました。入門から数年後、寺西先生から「佐伯さん、自分の稽古もいいけど、これからは子供達の指導をしてはどうですか」との御言葉をいただき、先生のお手伝いをする事になり、私の指導者としてのスタートとなりました。

現在も、縁あって二代目館長・寺西明弘先生のお手伝いをしております。初代及び二代目館長は、何より礼節を重んじ、基本に忠実をモットーに稽古を行っております。私も、子供達には、すり足、素振り等、基本の大切さを教えており、同時に剣道の楽しさを体感出来る様に指導をしていきたいと考えております。

少年剣道とのかかわりも三十余年となり、光武館で共に稽古した子供達も数多く巣立っていきました。将来、多くの子供達が剣道を通じてくれる事が、私達指導者の願いであります。

中学校で嫌々始めた剣道を五十年余り続け、会社を退職した今では、剣道が生活の大切な時間となっております。後何年続けられるかわかりませんが、これからも光武

館の子供達と共に楽しく稽古に励み、徳島県の剣道界の発展に、微力ながら貢献出来る様、努力を重ねて参りたいと思います。



剣道繋り

板野東支部 徳重清久



剣道との出会いは小学三年生の頃。当時仲の良かった友人のお父さんが剣道をされてお

り、誘われた事がきっかけでした。(入門して後に知ることとなったのですが、そのお父さんは当時の京都代表の選手でした。)誘われたのはいいのですが、私は正直興味がなかったのです。しかし二歳上の姉が興味を持ち一緒に見学に連れられて行きました。

先生は多分勘違いされたのだと思ってるのですが、姉の入門より、私が入門するのが当然であって、姉への指導より私に対する指導が熱心でした。姉の方こそ剣道熱が高かったのですが…。

順調に剣道が続けていく中で、高校三年生時には京都での国体開催が決定し、「国

体世代」として、強化選手の選考や、強化稽古会の発足等が有りました。小学六年生の頃には強化稽古会に参加したのですが、道場として参加しなくなり、また中学進学時は剣道部のない地元中学に入学し(今は様に越境など考えもつきませんでした)、高校生になる頃には他の道場のライバル達に随分と遅れを取り、結局は高校時には追いつけずにそのまま剣道から遠ざかりました。

しかし、近所に住む小学生が私の出身道場で剣道を習い、一度稽古を付けて欲しいとの事で二十一歳の頃に週一回のペースで再開しました。ただ、私のお世話になった先生方は既に道場を去っており、私も仕事の都合等でいつしか足が遠くなり、再度剣道から離れました。

再度剣道を再開するきっかけとなったのは、娘が小学校に上がる際に「剣道をした」との事で、現在も娘の通っている道場に預けた事です。私の出身道場が存続していれば、娘を預けようかと思いましたが、気付けば出身道場は閉会されていました。

通わせた道場では私は一父兄として送迎だけを行い、稽古を見学するなどは一切しないようにしていました。しかし京都府南部の山城地区大会の後で、妻より「あまりにも下手すぎるから、家で見てやって」と強制された為、既に防具は処分していたので道着袴から一式揃えて、しぶしぶ家で「打ち込まれ台」になりました。

月に一・二回の「打ち込まれ台」から、徐々に動きのある「打ち込まれ台」に変化し、高校の後輩がオープンで催している稽古会に参加させていただき、最初は子供達相手にしかするつもりが無かったのですが、交流させて頂くうちに大人同士の稽古へと発展しました。

娘が五年生でやっと形に成り出し、六年生の道場連盟全国大会予選まであと僅かだったのですが、二〇一八年十月に徳島への単身赴任の打診があり、二〇一九年二月からの赴任となりました。赴任期間は未定のままですが…。

出発する際に妻より「剣道を続けて、娘が徳島に遊びに行っても稽古させていた

けるところを確保しておく様に！」との命を受け、フェイスブックにて繋がりのあった誠武館道場の井川先生を頼りに徳島での剣道人生を開始しました。

現在、誠武館道場さんにお世話になりながらいつも感心する事は、子供たちの純粋な眼差しと大きな声。返事をする際には「はいっ！」と大きな声で答えてくれます。親御さんたちの躰や、周りの方々の愛情が子供達に沁み込んでいっているのが凄くわかります。

先に記述しましたが、私の出身道場は既に在りません。先日偶然にも道場の先輩と三十五年ぶりに剣を交え、感慨深いものがありました。やはり自分の道場、「帰れる道場」でお稽古出来る事が幸せだと感じています。

今後の私の目標としまして、この素晴らしい子供達と共に汗を流させていただけれる事を喜びに感じ、感謝の念とともに子供たちの気持ちに寄り添えるように、また五年後・十年後の将来に「帰れる道場」の存続・継承を伝えられる様に心がけていけるよう

にして参りたいと存じます。

日頃、文章を書くことのない生活を送っておりますので、このような拙い文章で大変申し訳なく、また恥ずかしい思いです。失礼いたしました。



「剣の道」

剣道・居合道・杖道の

三位一体をめざして

阿波支部長 一 村 昌 和

一 はじめに

これまでに、剣道七段昇段時に「射石飲羽」、居合道七段昇段時には「二兎を追わねば二兎を得ず」と題した拙文を本誌に寄稿してきた。六十の手習いでなく、古稀を目前にして杖道を習い始めたので、三道のあり方について思いつくまま記してみた。期せずして数字シリーズとなり、「一」・「二」に続いて今回は「三」がテーマになった。

二 剣道と杖道

剣友からの誘いがあるまでは、杖道についてはほとんど未知の世界であった。つまり徳島県剣道連盟会則で、連盟は、徳島県の剣道・居合道及び杖道の愛好者をもって

組織すると謳っていることぐらいであった。

私は、杖道を習得することで「剣の道」のジグソーパズルの最後に残されたパーツが埋まり、完成するのではと勝手な思い込みで取り組み始めた。

杖道は、白樫の杖（四尺二寸一分・一二八cm）を用いて打ちかかる太刀に対して「後の先」で千変万化、臨機に应变し、制圧する武道である。杖先と杖尾を交互に繰り出し、杖を持つ手も左右順逆に握りを変え、剣道には見られない構えから、前後左右斜めと体をさばいて太刀をかわし、攻撃に転ずる技を習得する。打つ・突く・巻落とす・掬う・たたき落とす・受け止める・繰り付け・繰り放す・体当たり等、技の組み合わせが豊富で、初心者にとっては難解な形も多く、奥の深い武道であるがため、剣道連盟の中でも普及・発展が遅れたのではなからうかと思われる。

剣道・居合道は全都道府県剣道連盟に取り入れられているが、本県を含め数県においては杖道部がない。そのため、杖道不毛の地を開拓すべく、数年前から杖道愛好家

が集い稽古に励んできた。前年度発行の「徳島の剣道三十六号」でも杖道部新設の意思表示がなされ、令和三年度からの発足に向けて鋭意努力をしている。また、会員も十余名に増え、見学者や入会を検討している者も少なくない。杖道部が発足すれば、さらなる躍進が期待される。全日本剣道連盟においても、全都道府県での普及発展を目指しており、全日本杖道大会（都道府県対抗の団体戦）を計画している。設立と共に、急ぎ強化を推進しなければならない状況にある。

「剣の道」を愛好する者にとっては、剣道・居合道・杖道の三道すべてを学べる環境が整うことを強く望んでいる。三道を学ぶことにより、幅広い、奥行きのある「剣の道」を体得できるヒントがあるように思われる。諸事情により一道又は二道の取り組みであっても、それぞれの武道の特徴を理解し、相互に協力と支援をしあえる協調関係を築いていきたいものである。

三 剣道と居合道

『剣道は、竹刀による「心気力一致」を
目指し、自己を創造していく道である。』

(剣道指導の心構え・竹刀の本意 平成十
九年三月十四日制定)

しかし、竹刀による稽古だけでは「剣の
道」の本質を極めることは至難であり、ど
うしても真剣の居合道を修めなくてはなら
ない旨を有名な剣道家も言っている。抜き
付けの極意や刀法の習得は、剣道の高段者
にも求められる。日本刀による抜刀・切り
下ろし・納刀の体得は、剣道形の演武にも
生かされるはずである。

さらに、真剣による業の追求は、深遠な
る含蓄に富み、内面の世界を生かす修行と
なり、「剣道の理念」に掲げている人間形
成の道そのものであると信じている。

四 三位一体(さんみいつたい)

多くの剣友・同士は、剣道・居合道・杖
道の三位一体を理解してくれていると考え
る。三位一体とは、三つの要素が互いに結

びついて本質においては一つであることを
いう。また、三者が協力して一体となるこ
とをいう。

剣道連盟の主流は「剣道」であるには違
いないのであるが、あたかも一元化された
ように認識され、居合道や杖道との乖離が
見られるように思われてしかたがなかった。

剣道界の発展は、大黒柱は剣道であって
も、居合道と杖道による鼎立(ていりゅう)が肝心である。
多くの剣道家が居合道と杖道に理解を示し、
興味と関心をもって取り組んでくれれば、
もっと会員が増えると思われる。また、地
域や職域に普及すれば、さらなる徳島県剣
道連盟の発展が実現されるであろう。

五 三道の教士

日本の剣道史に燦然と輝く剣士に中山博
道がいる。剣道・居合道・杖道の範士であ
る。私にとっては、雲の上の人であり恐れ
多くて口にするのも憚れるが、無謀にも先
生にあやかって、遠大な目標を立てた。三
道の教士号の取得である。剣道・居合道は
すでに教士七段を受領しているが、杖道は

本年から始めた全くの初心者である。こ
の目標を達成するには、今後三十年の健康
寿命が必要である。

「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練
とす」という教えを實踐できれば不可能で
はなくなる。つまり、千日は三年、万日は
三十年を要する。この「鍛錬」を全うでき
れば、「三冠」を手中に収めることができ
るであろう。

「目標」は、簡単に達成できるものを意
味するものではない。大願を成就するため
には、自分自身の精進・努力と共に天祐神
助に期待するしかない。一世紀にわたり三
道を楽しむことができれば、これほど幸せ
な人生はない。

六 三途(さんず)

仏教では、悪業をなした者が死後に赴く
三つの途(みち)のことで、三悪道をいう。
猛火に焼かれる火途(かず)、骨肉相食む
血途(けちず)、刀・剣・杖で責めたてら
れる刀途(とうず)である。

願わくば三十年以降に大往生にて、天国・

極楽浄土にいきたいものであるが、数多くの悪業を重ねてきた私には到底かなうものではない。三途行きを宣告されても、三者択一が許されるならば刀途を希望したい。そこでは刀・剣・杖を持つ地獄の鬼を相手に生前に修行した剣道・居合道・杖道を楽しまないものである。死後も健康で充実した生活の保障を得るためにも三道の習得が必要となるのである。

将来的には刀途の大改革を行い、剣道・居合道・杖道の愛好家がこぞって志願する楽園にしたい。今様に言えば「鬼滅の三道！無限！」である。

また、彼岸の中日（春分の日・秋分の日）とお盆を刀途の祝日とし、同日に実施している阿波支部主催の錬成会に見学ツアーを行いたいものである。しかし、この計画は、コロナ禍の時節、当分の間は自粛を余儀なくされるだろうし、さらにこのような荒唐無稽の考えをする者は、当分の間お呼びが掛からないであろう。

七 おわりに

「剣の道」の修行には、始まりがあっても終わりはない、入門はあっても卒業はないとよく言われる。このことは、三世十方（さんぜじっぽう・無限の時間と空間）において樂しめるといふことであろうか。

剣道雑感

美馬支部 松田 久司



剣道から離れた
いた期間を差し引
いて計算してみる
と、正味三十年近
く続けていること

になる。

日常生活がほぼ支障なく送れている。

「継続は力なり」、健康状態が保たれて
いる源泉は、まさに剣道が続けていること
にあると思っている。手に提げればこんな
に重いものかと感じる防具を身に着けて、
週二回、それも限られた時間ではあるが、
定期的にやって来た、「少年剣道教室」の
恩恵を感じている昨今である。

家内もいなくなつて、ときに寂しさを感じ
ることもあるので、この際と一念発起し
て、同級生である自分の内臓を大切にす
ることにしました。酒の機会を極力減らし、
酒量も大分押さえています。近々、胃や肝

臓、腎臓、すい臓などが、うちそろつてお
札に来るのではと期待している今日この頃
です。

それはさて、最近思いがけぬところで
「うちの子どもが松田先生に剣道を教えて
もらうたんでよ」とか、中年の人が「私も
教えてもらうた」と言っていたとか聞かさ
れると、ほのぼのとした懐かしい気持ちにな
り、又、うれしくもある。

小説を読むのが好きである。そのほとん
どは時代小説であり、協町図書館で文庫本
にして毎月十冊以上は借りている。図書館
の若い職員さん方も、本を捜すのに協力し
てくれており感謝している。

チャンバラが出て来る。身の毛もよだつ
シーンが展開する。それにしても、小説作
家の筆力、能力にはつくづく感心する。時
代考証もさることながら、古流各派の神髄
に迫る剣さばきの展開には、「ホー、そう
いうものか、なるほど！」と納得させられ
る。合理性と探究心、極意書等の吟味など
と、豊かな想像力があいまって生み出され
て来るのだろう。

教えられる文言も多く、その都度、忘れ
ぬようにメモっている。

これ等の小説作家の文言に触れていると、
全剣連の目標とする「剣居一体」がすんな
り心に入って来る。やはり「剣道の原点」
はいつの時代にあっても大切にしなければ
と思う。いっそ、剣道の昇段審査に制定居
合を採り入れたらどうだろうか。こんなこ
とを言えば、模造刀、居合帯などが要る！
負担が増える！と反対の声が聞こえて来そ
うな気がするが、でも反面、小、中、高等
学校などでの居合の稽古を目にすれば「格
好良い！」と入部して来る子等も結構出て
来るのではとも思われる。

外国人は、剣道人イコールサムライと思
うらしい。ところが居合は知らない、日本
刀は触ったこともないと聞くと大いに驚き
失望するらしい。別に外国人の関心に気を
使うこともないが、原点がすすんで行くの
は衰退の道につながって行くように思われ
てならない。

剣道の興廃は時代の流れに左右される。
平和な時代には熱い眼差しは注がれない。

しかし、治安が乱れ、周辺がきな臭くなると身を守ろうとする本能からか武道に関心が行く。

剣道よりも他の競技種目に子供達の関心が行く時代であってみれば、日本は平和なんだなあと喜ぶべきかも知れないが、剣道に籍を置く者の一員としてはやはり寂しさもある。

どうかこの道が、より一層の盛り上がりを見せる日の来ることを平和な日々が続くことと共に祈るばかりである。

以上

ある夏の思い出

小松島支部長 梅山 寧史

おかげさまで令和二年、六度目の年男を迎えることができ、終活を考えるようになると過ぎ行く時の短さ、速さを痛感しているところである。

ところで、昨今の交通インフラの整備、発達は目覚ましく、日本各地が短時間で往来できるようになった。私が大学生であった昭和の良き時代、今から半世紀前は移動手段といえば船、鉄道が主であった。

その頃のある夏の思い出。記憶をたどりながら青春のページを振り返ってみる。当時の学生にとって北の大地「北海道」は憧れの地であった。夏休み等に言い訳程度に家業の手伝いをするスネカジリの私にとっても高嶺の花の地であった。

私が所属した千葉県の大学剣道部では、年二回春と夏に合宿を行っていたが、三年生時の夏合宿を東北秋田県秋田市で行うことになった。私にとって自由に過ごせる最

後の夏休みでもあり、合宿に合わせて憧れの地へ行くことを計画。札幌市在住の伯母を訪ねるということで、渋々両親に北海道旅行を承諾してもらった。

昭和四十四年八月九日。夕方に小松島港を出発し、大阪から夜行列車に乗り換え、翌十日東京到着。丁度旧盆休みの帰省ラッシュ時ではあったが、品川駅で秋田行列車の発着席券（乗車整理券）を無事に手に入れることができた。十一日の夜に品川駅を出発し、一路秋田市へ。約十二時間かけて翌日の昼前に秋田駅到着。

八月十二日午後、合宿開始。発声練習から始まり基本稽古、互角稽古等。朝・昼・夕の三回の稽古に加え、朝はランニング、夜はミーティングと剣道尽くしの一日。東北といえども猛暑の中での稽古はきつかったが、食事に出た食用菊や鯉料理は美味しかった。

また、男鹿半島へのレクリエーション。バスの中では高校野球の決勝戦、愛媛松山商対青森三沢高。延長十八回引き分け再試合となった夏の選手権伝説の一戦である。

剣道だけではなく、思い出の多い合宿となった。

八月十九日朝、合宿終了。剣道具を後輩部員にお願いし、いざ「北海道」へ。秋田駅十時前発の列車で北上。車内で若い秋田美人？と相席したが、方言が理解できず会話に苦勞。十三時半過ぎ青森駅に到着し、青函連絡船に乗り換え、夕方憧れの北海道函館駅。札幌駅に到着したのは夜中二十三日三十分前。地図上では近いと思った秋田から北海道までの移動は、十三時間半余りと長い道のりであった。

小学生以来の伯母と無事再会を果たすことができ、ご厚意で伯母宅に宿泊。時計台等の札幌市内の名所に加え、積丹半島、襟裳岬、阿寒湖、晴れた摩周湖、屈斜路湖、層雲峡と観光地巡りを楽しんだ。

また、ジンギスカン鍋、札幌ラーメン等の味覚も堪能し、天候にも恵まれ、初秋の雄大な北海道を満喫することができた。

夏休みは八月三十一日まで。授業に間に合うよう、三十日の十三時過ぎに札幌駅を出発。青函連絡船の船内では、北海道出身

の同級生と奇跡的に会うことができたが、彼の指示により青森駅のホームを走ることとなった。二十三時五十九分青森駅発の夜行列車に無事着席、翌三十一日の昼前に上野駅到着。思えば、徳島から秋田、北海道へと日本列島を縦断。二十日余りの長い旅路であった。

札幌駅で購入した乗車券やアルバムを見

るたびに、遠い未知の土地へ足を踏み入れた時の感動が鮮明に蘇ってくる。

大学を卒業してから五十年。剣道を通じて切磋琢磨した同期生とは現在でも交流を続けており、二年に一度の割合で当時の事を肴に酒盃を傾けている。

主旨は違うがこれも「交剣知愛」！



北海道大学のポプラ並木にてジャンプする筆者

近年の阿南支部

阿南支部長 坂本 信幸



近年の阿南支部について振り返ってみます。

念であったことは、

徳島県剣道連盟や阿南支部において剣道の指導にあたり、要職についておられた先生方の訃報が相次いだことです。

県連会長、阿南支部長として長い期間お世話をいただいた、遠藤一美先生（平成三十一年）をはじめ、元県連審議員の濱田逸郎先生（平成二十七年）、同じく元県連審議員の福井軍二先生（令和元年）、元県連監事、元阿南支部長の有賀秀敏先生（平成二十六年）、元支部顧問の西岡侃先生（令和二年）です。先生方には薫陶を賜りました。そして、多くの児童生徒や青少年が剣道の指導者、立派な社会人として育てられました。我々は、先生方の遺志を受け継ぎ、

後進へつなぎ発展させる役目を担っています。

また、それぞれの実力が発揮され、良い結果や成果をあげられた支部員がたくさんおられました。特に次の三人を紹介します。

山口県の国体選手として招聘されていたが地元へ帰り、文理中学校教員として平成二十八年度全国教職員大会の個人戦（幼・義務教育の部）で優勝、平成二十八年度全日本剣道選手権大会に初出場し五位入賞された、大石洋史先生。警察を退職後、家業の郵便局のあとを継ぎ、平成二十八年度全国郵政武道（剣道）大会の個人戦に初出場し優勝された、敦賀晋平先生。主婦として家事や仕事をこなしながら稽古に励み、支部の女性で初めて令和元年六段に昇段され、令和二年に錬士を授与された、山崎沙織先生です。先生方の剣道に対する取り組みや成果は、剣道に励む児童生徒、青少年や支部員の目標として輝き続けることと思えます。これからのますますの頑張りに期待いたします。

さらに、支部の少年剣道教室について取り上げます。盛期には十四教室ありましたが、児童の減少や剣道離れにより半減しているところ、復活と新しく発足した少年剣道教室を紹介します。

多くの選手を育て優秀な成績を上げていた徳島至誠館が、復活することとなりました。至誠館は平成二十八年に閉館しましたが、卒業生や保護者から「再開して欲しい」との声が多く寄せられ、以前コーチとして指導されていた先生方が中心となって生徒募集を行い、令和二年から活動を再開されています。

つぎに、徳島剣道塾の発足です。支部においても少年剣道人口の減少は著しいところ「少年剣道人口を増やし、心と体を磨くとともに剣道の楽しさを知ってもらいたい」をモットーに、平成三十年六月一日に開設されました。塾長は、副支部長の河田清実、教士八段です。現在男女二十名が在籍し、それぞれの技術や成績の向上を目指し稽古に励んでいます。二つの少年剣道教室の子供たちの成長と、さらなる活躍に期待いた

します。

最後は、県下各支部も同じと思いますが、支部事務局の奮闘です。

支部では年間七つ程度の大会を実施しています。特に、清原杯争奪県下剣道大会は全国でも珍しい、少年、中学校男女、高校男女、一般男女と七部門の大会です。要項作成から始まり、発送、プログラム作成などを午後七時から行っていますが、疲れているとはいえ子どもたちや剣道愛好者のために頑張っている姿は、敬服に値します。児童生徒、青少年、剣道を愛する方々のため次世代に引き継いでいってもらいたいと思います。

終わりに、コロナコロナの世の中、くれぐれもご自愛ください。竹刀を握ることもままならぬ今日、従来のような稽古・大会が安全に開催されることを祈念しております。

コロナ禍の現状と私の思い

丹生谷支部長 岡 田 豊



令和二年は皆さんご存じのように新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行しました。

ワクチンの開発は進んでいますですが今も収まる気配が見えて来ません。日本でも緊急事態宣言が出され不要不急の外出自粛の要請協力が出され、解除迄一ヶ月半かかりました。剣道界への影響も対人稽古の自粛のお願いとなり、六月十日より面マスクを着用し再開となりましたが、試合大会は中止が相次ぎ、大変残念な思いをしました。

そのような状況下、丹生谷支部でよく行事ができたのは九月二十七日にB&G体育館で開催された剣道初段迄の審査会で、二回ほど延期となっていたので、受験者数は百四十二名というこれまでにない人数でしたが、感染防止策など徹底し適正な

対応にて無事行うことが出来たと思っております。

十二月十二日は、鶯敷中体育館にて丹生谷剣道大会を行いました。丹生谷地域も人口の減少で剣道部員数も減り、鶯敷振武館は小学生一四名、中学生九名、相生竜虎館は小学生四名、中学生五名、木頭練心館は小学生が三名、中学生が四名、総勢小学生二一名、中学生一八名という規模での開催となりました。朝九時の開会式から換気のため、窓を開放した状態で風が吹き大変寒い中での大会となりましたが、十三時ごろの閉会式まで、剣士達は元気いっぱい熱く充実した試合内容であったと感じました。次代を担う少年少女の今後の活躍を大いに期待します。また館員皆さまのご協力のもと、消毒・体温測定・健康状態の記入・マスク着用・室内での飲食禁止など万全を期して開催する事ができたことも心より御礼申し上げます。

丹生谷地区での残り二つの大きな行事である、四月の山家旗争奪県下剣道大会・八月の阿土少年剣道練成大会に於いては大変

残念ですが本年度は中止となりました。次年度は必ずや開催できることを祈る次第であります。

また木頭の恒例行事の一つ、令和三年元旦の木頭錬心館初稽古は、毎年県内外から多くの剣士が集まっていたき盛大に開催しておりますが、今年は木頭在住者のみでの小規模開催となりました。次年度よりあらためて皆様のご参加いただけますようお願い致します。

木頭錬心館の練習内容について。大切にしている事は、一、大きな声を出すこと。二、体をよく動かすこと。三、沢山汗をかくこと、以上の三つ。練習日は月・水・金曜日の週三日、練習時間は六時より八時の二時間。担当指導者は、小川大造先生です。私は七時より八時迄練習に参加しております。

剣道は礼に始まって、礼を持って、礼に終わると言われますように特に礼節を尊びます。私が木頭錬心館の館長としていつも子供たちに述べているのは、一、道場入り口での履物の整理。二、出入口での一礼。

三、大きな声で元気に挨拶すること。このような基本的な所作については、道場だけでなくいっどのような場においても実行していただけるよう伝えていきます。子供たちには、基本を大切に、礼儀作法を守り、将来どんな苦難に遭遇しても立ち向かっていく強い精神力を身につけて、これからも人として社会人として頑張っていってほしいと心より願っています。

最後に私自身、まだまだ体が続く限り、剣道を続けたいと思いますので県連の諸先生方、どうか今後とも指導いただけますよう、よろしくお願いいたします。



修行の身

海部支部長 影山 美雄



思えば随分長く
剣道が続けている
ものだ。小学校三
年生の頃からであ
る。戦後しばらく

GHQによって剣道が禁止された時期があ
り、解禁すると方々で復活した。私の地域
でもかつて剣道をしていた人たちが多くい
てその人たちによって復活した。私の最初
の師匠は学校の担任の先生だった。強いの
に憧れ、先生の勧誘に即応した。地元

の鎮守の森にある神社の社務所の舞台が稽古
場だった。あの頃そこでは人形浄瑠璃や地
元の一座による芝居が盛んに行われていた。
秋祭りの前には山車の太鼓の打ち子が練習
する合宿場にもなっていた。冬の寒い夜も
友達と連れ立って自転車を漕いで稽古に通っ
たものだった。先生との稽古は、歯が立た
ず、くやしくて涙を流しながらかかっていっ

たことが今では懐かしい思い出になってい
る。それ以来「修行の身」になっている。

私が今でも剣道が続けられているのは教
職に就いたことが一番の要因である。部活
を通して子供たちと剣道に熱中した。今で
もその時の部員たちと機会を作って会って
いる。いつしか私が歴任したそれぞれの学
校の部員たちが一つになり、「闘魂会」を
結成している。稽古をして、酒をくみかわ
し、思い出に浸り、人生を語り合っている。
至福の時である。

退職後、「一心館道場」を立ち上げた時
から入門している一人は、私が教師になっ
た時に出会ったひとりである。その門人と
は何とも長く密着した付き合いである。すっ
かり立派になった。もう一人の門人は、一
時間余の時間をかけて稽古に通っている。
剣道に対する姿勢が熱く、職場を道場の近
辺に定めているほどである。開館以来メキ
メキ上達し、難関の六段を一発で合格した。
七段もほどなく合格すると確信している。
彼との稽古の時は私も熱い血潮が燃えて来
る。何かに燃えるということは素晴らしい

ことを今も実感している。二人とも味のあ
る剣道をするようになった。自慢の門人で
ある。

剣道を通してかつての教え子や友人など
多くの人との交わりが私の人生を豊かにし
てくれている。面を付ければ一つの世界が
あり、ずっと以前の頃にも通じているよう
な気になる。タイムカプセルみたいである。
剣道は生涯続ける事ができる特性がある。

剣道は、剣技の修得を通じて身体と精神を
錬磨する武道である。剣技そのものも興味
深い結局は、ことに精神を練るためであ
ると思う。究極的には無念無想という極意
に達すべきものという概念があるが、この
ような最高の境地に達するには、至難の道
ではあるが、それに向かって一步一步前進
していくことに剣道を学ぶ真の意義と喜び
があると思う。

最近人生の無常をしみじみ感じるようにな
った。そして、日々を穏やかに過ごした
いと思うようになった。そのためにはどの
ように生きたらいいのかと、考えるように
なった。剣道の修行は厳しいものである。

だのに何故剣道に没頭しているのか考えることがある。人間は、何かに燃え、熱中した時に大きな充実感を味わうものである。甘ったるいものには味わえない。だから、厳しさに惹かれるゆえんがあると思う。

全日本剣道連盟の剣道の理念に、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と謳われている。長年一途に修行を積んでいくがなかなか人間形成ができない。

剣道の修行は奥が深い。人生の修行も奥が深い。まだまだ修行が足りない。精進したい。九十歳になった時、どんな剣道をしているか楽しみである。

ちなみに私の人生の修行上で最強の恐敵、難敵はマイワイフである。なかなか手強い。

徳島刑務所制す

刑務所支部長 森

直行



今もなお、全国的に新型コロナウイルス感染者が後を絶たず歴史的な異常状態が続いて

いる中、徳島刑務所支部における剣道部の活動状況について報告させていただきます。

新型コロナウイルス感染症防止のため徳島刑務所内の柔道、剣道の武道訓練は中止していました。令和二年六月から全日本剣道連盟及び徳島県剣道連盟が発出するガイドラインに沿って、感染防止措置を遵守しながら武道訓練を再開したものの、令和二年度における刑務所関係の全国大会、四国管内の全試合は中止となりました。

現在、当所の剣道部員は、平日午後五時から同六時半までの一時間、稽古をしておりますが、我々刑務官に対し、法務大臣から「矯正施設のような閉鎖空間で、ひと

たび感染者が生じると急速に感染が拡大して危機的状況になるおそれがある。治安の最後の砦である矯正施設において、そのような事態は断じて生じさせてはならない。」と命じられていることから、感染防止対策として事細かな内規が定められています。

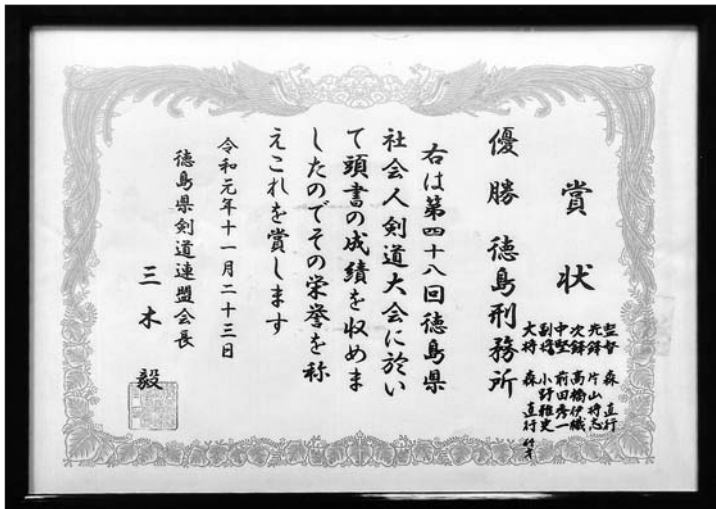
例えば、まず道場内での人数制限が十五名まで、元立ちは三名まで、当然、体温測定、手指消毒、手洗い及びうがいを行い、更衣室及び入浴場の同時使用は三名まで。稽古の二分の一は、原則一列となって同じ方向を向き、おおむね二メートルの距離をとって準備体操や素振りを行う。その後、面マスク、飛沫飛散防止シールドを併用して、つばぜり合いは避け、発声は極力抑制して基本稽古のみを行っております。コロナ禍における武道訓練は「できる範囲内で、できることを精一杯やる。」との思いで技術や体力の向上よりも、精神面の向上に努めることとし、更なる成長を成し遂げるよう稽古に精進しております。

以上が徳島刑務所支部における剣道部の活動状況であります。

最後に私事で誠に恐縮ですが、私は昭和四十九年四月一日付けで徳島刑務所に刑務官として拝命しました。昭和、平成、令和と四十七年間勤務して、令和三年三月三十一日に再任用任期満了で退職します。表題の「徳島刑務所制す」は、令和元年十一月二十三日、徳島市立体育館で開催された第四十八回徳島県社会人剣道大会に私が監督として、また選手として出場し優勝した際の徳島新聞に掲載された見出しであります。よもやこの大会が私の刑務官現役最後の大会になるとは夢にも思いませんでした。が、年号が平成から令和に替わった最初の記念すべき大会で優勝して刑務官生活に幕を閉じることに感慨深いものがあります。

当時の試合を振り返ると当所の選手五名が、一回戦から決勝戦までの五試合、引き分けこそしたものの、誰一人として負けた者はいなく刑務所支部の実力を十分に発揮できたものと自負しております。ちなみに私は四勝一分負けなしです。これもひとえに刑務所の道場で日々共に苦しい稽古に励んだ当所剣道部仲間のおかげであり、また、

私は剣道を通じて、その時々に出会った皆様方のご指導のおかげで人間として、剣道家として育てていただきました。その結果、今日があり、無事に良い結果で矯正剣士として終えることに對しまして、この紙面をお借りしまして心から感謝とお礼を申し上げ



ります。ありがとうございます。今後、少しでもご恩返しができるよう、これからも精進してまいりますので、引き続き、当所剣道部共々の御指導、御鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。本当にありがとうございます。



鞘の内

〜自分で自分を自分する〜

警察支部 平野 誠 司

世界的な猛威を振るう新型コロナウイルス感染症、まさに今年はこの感染対策に追われる一年となりました。現在も二度目の緊急事態宣言が発令されるなど、未だその終息の兆しも見えない戦々恐々の日々が続いています。また、この間の自粛、自粛の日常は、コロナ以前の価値観を打ち消し、受け入れざるを得なくなった新しい生活様式にも感情移入が始まっています。私自身も当初、稽古のない生活と葛藤しながら、独り稽古に没頭する日々を送っていました。が、今ではそれに加え、先達の著書に知己を探る日常に馴染もうと努めています。

剣道界は当初、対人稽古を自粛する措置をとりましたが、独自の「感染拡大予防ガイドライン」を定めると一転して振興の歩を進めました。一方、全国の警察剣道はこの全剣連ガイドラインをもっても承認され

ず、警察官の心身を錬磨する剣道も非常時においては治安維持を第一義とし、感染防止を最優先する職務上の中断として継続されています。

剣道人のほとんどが初めて経験する稽古の中断、そして再開。コロナ禍での稽古の在り方には様々な意見があり、考えがあることでしよう。それと同時に、剣道が歩んできた過去を振り返り、また剣道の将来に對し不安を募らせながら、現在する自分の心（剣道の大切さ）を再確認できたのではないのでしょうか。

今まで当然のようにしてきた稽古に制限（マスク着用、短時間等）を受け、また自粛や中断を余儀なくされてしまうことで、私たちは今正に非常時に直面していることを知り、天地自然の理を思い知らされ、そしてその自然と共存する大事に気付かされました。

「剣道とは、自分の命（一本）をとろうとする相手を目の前にして、刀（竹刀）を手にし、方便（規則）に従い、仮に勝敗を論じ、真の自己の、今の、ここの、精一杯

のはたらきを鍛錬し、人生を創造することである。」とは、曹洞宗、沢木興道老師の言葉。

現代社会の中にあって、仮に勝敗を論じながら、術を磨き、気を練り、一本（有効打突）の中に自己を高める剣道人生、まさにその過程で生じたコロナ禍。神様は私たちに剣道（人生）とは何であるかを問い直し、再考する時間を与えてくれたように感じてなりません。

警察支部員（警察職員）は、現在も大会や試合、また自己錬磨のために集う稽古でさえも「不要不急」とし自粛の要請を受けています。なぜ警察だけが、なぜ剣道だけがと思ひ悩んだことでしょうか、老師の曰く、剣道は「勝ち負け」だけを至上とせず、自己に向けられた剣の真理に気付き、その一振り一振りを自己に向かって振り抜いていく。この一念を、明日の自分に期待する前向きな姿勢として貫いてほしいと思っています。

非日常も長引けば大切な日常。剣道人として今必要なことは、正しい情報を入手し、

居合と剣道

冷静な判断と行動、そして目先の感情にとられない「鞘の内」の勝負を実践するところです。

「仮に勝敗を論じ」の意図するところは、

技量だけでなく心の鍛錬も必要とする境地であり、この剣心一如の心境こそ、我々剣道人が生涯めざして止まない「人間の根源的な感動」とする最高の一打（一本）へと繋がるものと信じたのです。

「今の、この、自分の大切な時に心を寄せて・・・、自分で自分を自分する。身をもって実際にやること。やれば、自分と一つになる。形そのものが精神そのものであり、態度そのものが道そのものである。」いま、師承の大切な剣の奥義を実感しています。

合掌



居合道部 福井 勝

コロナ禍の中、日々錬磨に励まれている剣道連盟の皆様には敬意を表します。私は剣道と

居合道の両道を稽古しております。今回、随想を執筆するにあたり、剣道と居合道の問題点、利点などを紹介したいと思います。

まず、刀（真剣）と木刀は長さ、反り、柄の長さはほぼ同じです。違う所は柄の握り方です。刀には汗等で柄が滑らないように絹紐か革紐が柄に巻かれており、その巻止（巻かれた紐が若干高くなっているところ）の前で刀を握ります。左右の手の握りの幅は人差指と中指の二本が入る位開ける程度です。

刀を握る右手は鍔と柄の間にある縁金を握らず、巻き止の初めの柄の山に右親指がかかるように握ります。この山を手掛かり

と言ひ、「事件ドラマで手掛かりがない」はここから来ています。

居合の修練は、日本剣道形四本目打太刀が「気を見て刃先を少し右に向け左鑓で巻き抑えてすり込みながら仕太刀の右肺を突く」のを仕太刀が「突いてくる『はな』を大きく巻き返して打太刀の正面を打つ」小太刀の部「一本目、二本目の鑓で受け流し打太刀の正面を打つ」は居合の基本。春秋の居合道講習会で必ず剣道形を全員でします。それは、居合は次の相手の事を考え、全て受け流しに振りかぶり、もし攻撃が遅れたら、受け流し次の瞬間勝つように設定している。居合の初心者には峰を上には振りかぶる。人間の本能と思います。私は剣道の面打ちが苦手です。居合には峰を上には真直ぐ振りかぶる事はない。いかに速く大きく打てるかが課題です。

刀は秒速百キロから百五十キロで降りると言われていますが、竹刀は空気抵抗で遅い。手の内を柔らかくして、竹刀の重さで下す研究をしています。居合をしていると刀の動きを見ているので動眼が鍛えられま

す。

居合では、膝のくるぶしが動かなくなる所まで腰を落とし「居合腰」丹田に力を集中し、頭上に刀を振りかぶった時、左右の小指で支えているだけ。切ったとき左手がへそ前一握りは剣道と同じ。あとは刀を止める時、両手の指紋部で柄を押して締める。絞ると刃筋が狂います。腕は下筋を主に使い、右足をすり足で速く出すと刀も速くなる。これを剣道練習で実践していますが難しい。

居合が剣道にプラスになるかわかりませんが姿勢はよくなると思います。

居合の練習時、立枝は左足で蹴って前に出る時左足を右足近くに送り次の敵に備えます。木刀で手を柔らかくし、初めは重さで物打ちを意識した素振りをお勧めします。刀の代わりになると思います。

納刀は、鯉口を左人差し指の第一関節を親指の爪で押し、鯉口から指半分出し刀を二の腕に回し、鯉口の人差し指と親指の間に峰を置き、刀は柄が人幅から出ないように真直ぐ前に引くと共に、鞘を帯に沿って

引くと刀身の半分で鞘引きできます。重要なことは刀で納めず鞘で納めるという点です。鞘で抜き鞘で納める。刀で納めるとケガをします。

まとまりなく自分の事を書きましたが、居合道に興味を持っていただければ幸いです。

居合は三級まで木刀で受審できます。一般は初段からです。剣道と審査基準は同じです。興味のある方は近くの道場で見学されてはいかがでしょう？



藍と剣

居合道部 吉 原 均



私は仕事で藍の研究をしておりまして、ご存じのとおり、徳島は藍染料の歴史ある産地で

す。私の藍に関する研究とは染色がメインでは無く、原料となる植物に関することです。意外と知られていないことですが天然藍染めの主な色素成分であるインディゴは、多くの種類の植物から得ることが出来ます。

日本で最も栽培されており、徳島でもよく見ることが出来るタデ科のタデアイ、沖繩で利用されているキツネノマゴ科のリユウキユウアイ、その他にもマメ科、アブラナ科といった、全く異なる科に属している植物です。これらのうち栽培が困難だったり、色素含量が少なかったりと利用価値が低い物も多く、藍を生む植物全てが利用できるわけではありません。これらの植物が何の

ためにインディゴの元になる物質を蓄えるのかはよく分かっていませんが、大変興味深いところです。

さて、この藍ですが、意外にも武士の精神性に関わりがあるのです。有名な話では、藍染めの色の中で、真っ黒に見えるほど濃い藍色である「褐色…かちいろ」と武士の関わりがあります。「かちいろ」の「かち」は、棒などで突く「搦ち」の事であり、かつて濃い藍色を染める時に、布を棒で搦いていた事に由来しているそうです。この「かち」を「勝ち」とかけて、戦での武功を願って褐色の服を鎧の下に纏う事が好まれたと言われています。

また藍染めには抗菌防臭作用があり、負傷した際などに役立つと考えられていた、と言われます。しかし私はこの説にはやや補足が必要だと考えています。藍植物の乾燥葉には多くの機能性成分が含まれており、抗菌性を示すことは知られていますが、「藍染め」の抗菌性については、議論が分かれています。これまでにいくつかの論文が発表されていますが、その結果は期待

通りとは言えないものが多いのです。それでは藍染めには明らかな抗菌性が無いと言うことなのでしょう。ここからは私の仮説ですが、実は藍染めと言っても、現在行われている藍染めと、古代に行われていた藍染めとは染料の製法が異なっているために、抗菌性に関する認識のギャップが生じている、と考えています。現在主流の藍染めは、タデアイの乾燥葉に加水して一二〇日ほど発酵させ、堆肥状にした「スクモ」と呼ばれるものを染料として用います。しかし古代の藍染めは乾燥葉そのものを染料としていたため、スクモでは発酵過程で失われてしまう機能性成分が豊富に乾燥葉の中にあり、それが染色布の抗菌性につながったのではないかと考えるのです。実際にタデアイ乾燥葉に含まれる機能性成分の一つが、スクモの発酵過程で大幅に減少するという報告もあります。また近年、青森県で乾燥葉を染料とした藍染めが盛んに行われていますが、この藍染めはスクモによる物と違い、明らかな抗菌性をうたっているのが特徴です。つまり、藍染めが負傷に云々

という話は乾燥葉染めを行っていた時代に成立したが、やがて染料がスクモに移行した後もその効果は同様にあると考えられ、引き継がれた、ということではないでしょうか。

藍染めに抗菌性があっても無くてもその魅力は衰えませんが、藍は剣を扱う物にとって縁起の良いものであり、実用的な効用も期待されていたと考ええると、私の研究も剣に通じるようで、なにやら心楽しくなってきました。

杖道との出会い

杖道部 徳山 豊



私は杖道への興味・関心を以前から持っていました。が、県内には学べるところがなく諦

と教えていただけることになりました。徹心道場の二人も加わり三人がご指導を受けることになりました。週三回、居合の稽古の前の約一時間を稽古に当てました。

めていました。二〇一五（平成二十七年）十月、高知県の亀井洋祐先生（居合道教士七段・杖道五段）が、勤務で吉野川市鴨島町に単身赴任され、徹心道場に稽古に来られました。亀井先生は居合道の各大会で常に上位入賞される実力者です。以来高知に転勤されるまでの三年十か月にわたり居合道を徹底的にご指導いただきました。この間の記録は、ノート三冊になりました。二〇一六（平成二十七年）年八月の頃でしたが、居合の前に杖道の稽古をされているのを見て、教えていただきたいとお願いしました。居合は単独動作だが杖は相手があるので、間合や体さばきを知る上で居合にも役立つ

亀井先生は杖道初段のときに全国大会に出場し、いきなり優勝されたというセンスの持ち主ですが、私は不器用で、基本も形も道場の稽古だけでは覚えられません。それで、早朝に庭で、習った基本と形を繰り返して復習しました。幸い周囲は畑や田んぼで近所からも離れており、気兼ねなく稽古ができます。参考図書・DVD・動画などで確認しながら続けました。退職し再就職をしていましたが、中学校に勤務しているときに比べれば時間的な余裕もありました。さらに、亀井先生に誘っていただき兵庫県の杖道支部が開催する講習会にもたびたび参加しました。そこでご指導いただいたのが、高知市出身で現在は神奈川県にお住まいの久田孝博先生（居合道教士七段・杖道教士七段）でした。久田先生からは、基本動作の留意点やコツを詳しくご指導いただきました。徳島県には杖道をする人がいな

いようだから、是非ともなかまを増やすように頑張ってほしいと激励されました。久田先生が高知に帰省されるときは、亀井先生が連絡をくださり高知での稽古会に参加しました。

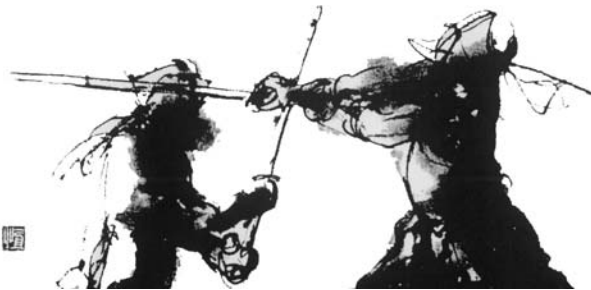
杖道も居合道と同じで古流と制定（新しく作られた形）があります。古流を是非とも学んで欲しいと薦めていただきましたが、そこまで学ぶ意欲がなく返答をあいまいにしていました。二〇一九（令和元）年五月、思い切って久田先生に入門しました。古流を学ぶには先生に入門することが必要です。一般に神道夢想流常杖術は六十四本とされるようですが、まだ五本しか習っておらず、先は遠い道のりです。

二〇一八（平成三十）年七月に高知県立武道館で昇段審査を受審し、初段をいただきました。徳島県では受審ができませんので、高知県剣道連盟に所属して受審することができました。二〇二〇（令和二）年八月に、コロナウイルスの影響で延期されていた昇段審査が高知県立武道館で開かれることとなり亀井先生のお世話で、二段の受

審ができました。審査の前には、高知市の清風館道場において終日にわたり亀井先生からご指導をいただきました。八月の道場内は三〇度を超えるような室温でしたが、それ以上の熱いご指導をいただきました。ご期待に応えなくてはと審査に臨みましたが、仕杖のときの七本目霞（かすみ）で杖を太刀に合わせたあとの動作が咄嗟に出ませんでした。何とか繕いましたが間が空いてしまいました。当日の相手は、亀井先生が務めてくださいましたが、申し訳ない思いでいっばいでした。合格はしたものの、苦い経験となりました。

しばらく落胆していましたが、坂本竜馬の「俺は落胆しているより次の策を考える人間だ」、松下幸之助の「ころんだら起きなはれ」の言葉に励まされ、次に向けて稽古に励んでいます。幸いなことに一村先生から、徳島県でも米倉先生の道場で杖道の稽古をしているので一緒にやりませんかとお誘いいただき、参加させていただいています。杖道は相対して稽古しないと技が相手に効いているかどうか分かりませんので、

稽古相手に出会えることはありがたいことです。どうか今後ともよろしくお願い申し上げます。杖道の道に出会えたのも亀井先生のお蔭でありますが、本県でも杖道が普及し多くの方が杖道に出会えますことを心から願っています。



杖道を始めて

杖道部事務局長 米 倉 武 志



「杖道をやってみないか？」
私が杖道を始め
たきっかけは父か
らの誘いでした。

父が剣道場の館長というのもあり、小学校から剣道をやり始めたのですが、どうも性に合わなかったらしく、中学生の頃には剣道から離れていきました。その後は弓道を少し学んだりはしていましたが、剣道とは無縁の生活でした。そんな折に、昨年の四月に父から冒頭の誘いがありました。最初は断ろうかと思っていたのですが、杖道のことを詳しく聞くにつれ興味が湧き、始めてみることとなりました。

杖道の初心者である私が説明するのも恐ろしいのですが、知らない方のために杖道について簡単に解説したいと思います。

杖道はその名の通り「杖（つえ）」を使

用する武道です。白樫で作られた、何の変哲も無い杖ですので、刃も、鐙も、柄もありません。しかし、杖のすべての部分を存分に使うことで「突かば槍 払えば薙刀 持たば太刀 杖はかくにも 外れざりけり」と古くから伝えられるとおり、槍、薙刀、太刀の要素を兼ね備えた千変万化する多種多様な技を繰り出すことができます。そして、何よりも特徴的であるのがその理念であり、「傷つけず 人を懲らして 戒しむる」と平和的で、攻撃を主としていません。

これは杖道が、元々は江戸時代に捕手術として学ばれ、用いられていた古武道が基になっているためです。杖道は前述の多種多様な技を用い、後の先を取って、相手を傷つけずに制圧することを目的としています。

杖道は剣道のように自由に技を掛け合うのではなく、決められた形に沿って技をかけていく形武道の一種です。基本をしっかりと身につければ身体的、年齢的なハンディが少ないといわれており、これまで武道を学んだことがない方や、あまり運動をされてこなかった方にも無理なく始めることが

できます。

また、杖道は健康法として優れているとの意見もあります。以下にその理由の代表的なものを挙げていきます。

両手を広げたなかで杖を操作する特性があり、左右の手足を様々な角度から同じように使うため、バランスの良い身体作りができ、身体に偏向性がある場合は、その修復に役立つ。

「手」を非常に複雑に使用するため、脳への良い刺激になる。また、「手」には内臓に関係あるツボが多くあり、それらを様々な角度から刺激することになるので、健康にも良い。

全身の筋肉をくまなく使う武道であるが、運動量は少なめであり、体力に恵まれていない人にも向いている。

他にも、多くの武道と共通することですが、杖道は大きな気合を出すことにより丹田が鍛えられます。丹田を鍛えることにより心身ともに充実させることができます。

前述したとおり、杖道はこれまで武道を学んだことがない方でも無理なく稽古する



ことができます。「改訂 杖道入門」によれば杖道人口の多くはこれまで武道の経験が全くなかった人とのことです。また、すでに剣道や居合道をされている方にとって

も杖道を学ぶことにより新たな発見があるかもしれません。興味のある方は、ぜひ杖道を始めてみてはいかががでしょうか。



私の一年のサイクルについて

高齢剣 出口 正 春

職場を離れてから、早くも十年目を迎えています。今、年齢も七十才になり、年月の過ぎ去る速さに驚いています。

思い返してみると、身体はさして大丈夫な方でなく、年齢を思うと元気にしているのが少し不思議な気がしている。そして、少年期に鮮やかな夕焼けを見て日が暮れるまで、遊び回ったことが脳裏に浮かんでくる。仕事をしていたころ、いつの日か、かつてのように過ごせたらと心で願っていた。それがいま時間的に自由になり、かつての無心の気分にはなれないが、時折昔に近いことができるようになってきた。このため金はなくとも割と幸せな気分と思っている。

さて、私の一年は、果樹の手入れを中心に進む。毎年早春の頃、わずかな果樹園の作業をし始め、少し後になると野山を巡り、春の息吹と自然の佇まいを楽しむ。殆んど一人の場合が多く、今年のコロナの影響も

なく自然の佇まいや新緑の恩恵を感じ過ごしてきた。

四月に入り、春草が伸びると、気乗りしないが止む無く草刈りを迫られる。

さらに五月から六月には、梅果実の収穫に数日を要し、少ししんどいが楽しむことにしている。

六月下旬から七月には害虫取り。

八月はそれに加え灌水にも手間と暇を取られる。手仕事であり最近の猛暑と相まって、九月上旬まで作業が続き、一番大変な時期である。

九月中旬からは少し楽になってくる。

十月は好季節で一年でも最高だ。この時期、小旅行に出かけることもある。

十一月からは、また果樹の選定作業が始まる。私は愚図なため、これに一か月余りかかってしまう。このころから寒くなるので三月中旬にかけ、最も心身が縮かみ落ち込む最低の時期だ。炬燵に入りびたり、大寒の過ぎるまで体調は下降の一途だ。

しかし、立春を過ぎ彼岸の頃になると有難いことに、体と気持ちがあほぐれだし、再

び外に出ていく気分が湧いてくる。かくして、また私の一年の繰り返しが始まることになる。



新型コロナウイルス禍での稽古

高齢剣 西 堀 和 文

百年前のスペイン風邪を体験した人は少なくとも自分の周りにはいない。八十過ぎの義母と話をしても、今回のコロナのような体験はないようです。インフルエンザもパンデミックとなり、世界的に深刻だったはずですが、あまり深刻さは感じていなかったような気がします。

二月ころ、コロナ報道が広がり、学校休校等深刻さが増してきましたが、まだそんなに深刻には感じていなかった三月の初め、子供の稽古は中止でも大人は大丈夫だ、なんていつも通りの稽古をして「また来週」と散会、その後は……。

県連から稽古休止の達示があり、長い長いお休み期間が続きました。

経済が止まり、やっとコロナ対策と経済の両立が必要とされ、全剣連からシールドとマスク着用による稽古の再開が伝えられました。でも、今年の夏は異常に暑い猛暑

日が各最長期間を記録するような暑い日々が続き、シールドとマスク着用の稽古はまさに暑さとの闘いでした。それでも稽古したい。特に中断が長く続き、稽古中毒のような者にとってはムズムズ感が高じて、いてもたってもという状態だったのでないでしょうか。こういった感覚は剣道だけでなく、すべてのアスリートというよりすべての人が感じていたものと想像されます。

先般、徳島剣道連盟で令和二年度初めての初段以下の剣道審査会が行われました。どの剣道教室もコロナ対策と暑さ対策に細心の注意をしながら少年剣道の御指導をされてきたものと思います。四月以降審査が行われず、審査を受ける子供たちも満を持しての参加だったと思います。審査は密を避ける様々な工夫がなされ、少々混雑したこともありましたが、全体的にはこのコロナ対策をうまくできたのではないかと思えました。

受審する剣士たちから受けた印象は「すごく出来がいい。」でした。猛暑とコロナで稽古もままならなかったと想像していま

したが、審査の出来を見る限りは全くそんなことは感じさせない出来栄であったと思います。むしろこの感想は審査会の役員としてお手伝いをしていた私個人の感想で、審査員の先生方の感想をお聞きしたものではありませんが、この剣士たちはこれらをよく乗り越えたものだと感じました。

コロナ禍はまだ続くでしょうが、長期にわたったことでマンネリ感やうっかり忘れが増えてくるのが予想されます。でも気を緩めることなく、涼しくなったこれからは感染防止をしっかりとしながら、稽古に一層励んでもらいたいと思います。当然、私たち（高齢剣）も感染予防には万全を期して、稽古の機会を多く持ち精進したいものです。

日日是好日（心に残る言葉）

高齢剣 栗 野 佳 明



（にちにちこれこうじつ）『お茶』が教えてくれた一五のしあわせ」著者森下典子 新潮文庫の書き抜きがあったので、これについて書きました。

書き出したのは、剣道でも同じようなことが言えるのではないかと参考にするためです。この本は、『茶道』についての物語ですが、平易にお茶の道を教えてくれます。「高をくくってはいけない。ゼロになって習わなければ。」

指導に対して、素直に謙虚でないといけないということでしょうか。

「稽古は、回数なのよ。一回でも多く重ねることよ。『習うより、慣れる』ってよく

言うでしょ。」

できるだけ回数を増やしたいと思います。

故障には、気を配れないといけません。

「そうやって、頭で覚えちゃダメなの。稽古は、一回でも多くすることなの、そのうち、手が勝手に動くようになるから。」

身体で覚えるということでしょうか、私も努力します。

「手が自分で動いた。『次はこう』と考えていないのに、勝手に動いた。」

主人公の若い女性弟子の言葉です。形を

しているときに勝手に体が動くことはありますが、止まってしまうこともあります。

次を考えていないので、何をしたらよいかわからなくなってしまうことがあります。

「一つ一つの小さなしぐさを正確に繰り返し返すことで、たくさん『点』を打つ。『点』と『点』がいっぱい寄り集まって、だんだんと『線』になる。」

こは、しっかり意識して、研究するべきところだと思います。

「頭で考えないの。手が知っているから、手に聞いてごらんなさい。もっと自分の手

を信じなさい。」

心理的な教えでしょうか。自分を信じて、捨て切って打ち込め！

「ちゃんと気持ちを切り替えなさい。炬になつたら炉の御手前に集中するの。」

様々な稽古法があり、形の稽古もある。それぞれ気持ちを切り替えて集中して取り組むことか。

「さあ気持ちを切り替えるのよ。今、目の前にあることをしなさい。『今』に気持ちを集中するの。」

勉強するときによく言われたように思います。子供への良い助言かもしれません。

「ねっ、人のお点前を見て、『あー、ここがきれいだな。』とか、いろいろ感じるのよ。見て感じるのが大事な勉強なんですからね。」

剣道の見取り稽古もしっかりと感じ取り、自分の剣道に生かしたいと思います。

「お辞儀は、ただ『相手に頭を下げる』ことではなかった。頭を下げるというシンブルな動きに、あらゆるものが含まれていた。

『形』そのものが『心』だった。」（主人公

の言葉。)

剣道の礼儀・作法について改めて深く考えさせられます。

「一期一会」、「一生に一度きり」

ここでの意味は、今のお茶、その後のお茶、明日のお茶、お茶だけでなくすべてが一度きりです。結構、厳しい解釈です。

「茶懐石・茶事」という話が出てきます。

大層な御馳走が出る会食です。朝から野点をして豪華な料理が出て、お酒も出て来た様に思います。招待する家で造るので準備は大変です。そんな機会があれば、是非、出席したいと思いました。足は相当痛いでしょうが、テーブル席があればと思います。

『雨聴』、雨の日は雨を聴きなさい。心も体もここにいなさい。あなたの五感を使って今を一心に味わいなさい。そうすれば分かるはずだ。自由になる道は、いつでも今ここにある。」

「日日是好日」は、このような心持ちから生まれた言葉なのだろうかと思いました。「気づくこと。生涯自分の成長に気づき続けること。『学び』とはそうやって自分

を育てることなのだ。」

これは剣道において修行そのものに思えます。私も自分の成長に気づき学び続けたいと思います。乾先生に申し渡された、十月末日に書きました。ちょうど酒を離れて三十日と二日です。今夜はブルームーン。



称号・段位合格者

剣道七段に合格して

板野東支部 木 下 裕 康

剣道を再開して二年目の五十八歳で、剣道を知らない妻を連れ、六段審査を福岡で受けました。その帰りに妻から、「次はいつになるの」と聞かれ、六年後に七段審査と教えると「ほな、次また福岡やね」と福岡での七段審査が二人の約束となりました。その後妻が亡くなり、約束を反故にする事が出来なくなりました。

この時から、福岡審査に照準を合わせ稽古に取り組み、今年の春先までは順調に仕上がっていると感じていました。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大により全日本剣道選手権、国民体育大会と本年の主要な行事が軒並み中止か延期となり、八月の福岡審査も延期になるのではないかと精神的に動揺もありました。加えて、最

後の詰めをしなければならぬ大切な時期に稽古が三ヶ月間も出来ず、七月に稽古が再開すると、春までは出来ていたはずの動きが出来ず、打っても打たれても、自分が納得できない状態で、審査当日を迎えてしまいました。

今回の審査は、今年度最初の審査会で少々緊張を覚えながら、第三会場一組目で審査を受けました。審査にあたり、私が気を付けたのは、自分の体勢を崩さず打ち切ることでした。

一人目に、初太刀を含め三本続けて面に出了ましたが、いずれも不十分な打ちとなっていました。自分で納得出来たのは、相手を会場隅に追い込んでの面と押え小手の二本のみでありました。不十分な面を三本も打ってしまい審査途中に、「今回は駄目かな。」

と一抹の不安を覚えました。最後までしっかりやらなければと思い直し二人目となりました。

二人目は女性の方でしたが、積極的な攻めに出てくる方でした。立ち会中、擦り

上げ面、出小手、出頭の面と自分なりに納得いく技を出すことが出来ました。

午後の部前半の発表で、「駄目かもしれない」と思っていた自分の番号がそこに有った時に、稽古は裏切らない、自分なりに稽古してきたことが結果に繋がったんだなと思いつつながら、稽古着を直し形審査に向かいました。

無事審査が終了した時、妻との約束が守れたことに安堵し、審査が終わった開放感と、合格した感激で、心地良い脱力感を覚えました。

今回、合格することが出来ましたが、自分自身はまだまだ、剣道七段としての実感が湧いてきていません。

これからの稽古で、本当の七段になったと言っていただけのように、自分を磨いていかなければと思っています。

最後になりましたが、日頃から御指導頂いている諸先生方には、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

剣道六段に合格して

徳島支部 綾部 文 明



令和二年十一月
愛知県審査会にて
剣道六段に合格さ
せていただきました
。これも、米倉

滋先生を始め、これまでお世話になった皆
様のお陰であり、心より感謝申し上げます。

コロナ禍にも関わらず受審できたのも、適
切な感染防御策を施した養武館道場での稽
古再開と、消毒や飛沫防止、三密回避を徹
底した審査会の実施、県外移動後の在宅勤
務及び剣道部活動に対する会社の理解、そ
して家族の支援があったからです。実技・
形の審査会場では、手指と共に初めて足裏
までスプレー消毒しました。試したり我慢
したり、できる事から取り組む先生方の強
い意志に励まされました。

私は佐賀県三養基郡みやき町にある中原
少年剣道クラブで剣道を習い始めました。

当時町内のジュニアスポーツには、野球と
バレーと柔道と剣道の四競技があり、「足
が遅くても、高く跳べなくても、力が無く
ても、剣道は大丈夫」という末安真知夫先
生の言葉に救われ兄弟三人ともお世話にな
りました。高校で三段審査不合格を経験し、
大学で体育会剣道部師範 湯村正仁先生
(範士八段) に御指導を受けたにも関わら
ず、昇段審査を受ける事はありませんでし
た。

少年指導に関わると保護者の皆様に「先
生」と呼んで頂くようになりました。分不
相応と違和感を覚えました。時が経つに
つれ自然と昇段審査を受けるようになりま
した。頑なに審査を拒んでいた私の背中を
押して下さったのは、剣道未経験の年上の
方々の真摯なお気持ちでした。徳島に来て
十五年目となりますが、途中二年間米国サ
ンディエゴに留学し、帰国後、子供達と甥っ
子が剣道を始めてくれました。移り住んだ
先で剣道を続ける事が出来て人脈も広がり
ました。これまで誠武館道場、徳島少年剣
道教室でお世話になり、現在養武館道場で

米倉先生に御指導頂き、養武館道場の皆様、
杖道の皆様、修武館道場の皆様、寶壽館道
場の皆様、たくさんの先生方から学んでい
ます。四段受審時に井川理之先生から学ん
だ、少年指導と自己鍛錬は不可分一体であ
るとの教えは六段審査に通じ、子供達から
も学び続けています。また高段位審査で求
められる品位風格を杖道から私なりに学ん
でいます。

課題ばかりで恐縮ですが、現在気を付け
ている事について申し添えます。私は遠く
から速く強く打つ事を意識してきましたの
で、技術的に打突の原理と踏み込み足を一
から学び直し、どの間合いからでも適正な
姿勢で刃筋正しく打突する事を私なりに意
識しています。また総合的な評価について
初めて考えるきっかけとなりました。評価
基準の一つである打突の機会について、対
人競技であるため答えを見出しにくいので
すが年齢と力量によって目安となる打突回
数は異なり、本番では同年代同力量の二人
に左右されず。稽古では、御相手毎に立
場が異なり打突の機会は容易に一致せず、

呼吸を合わせる事が肝要でした。とても難しいですが、目上の先生に対して呼吸を合わせ息を切らさない事を意識しています。その際私が最も苦勞しているのは、懸待一致を腑に落とす事です。先生に懸ければ打ち過ぎ、待てば待ち過ぎ、稽古の度に偏ってしまい、「自分勝手に打ってはならない」「もっと積極的に懸かるように」何度も同じ注意を聞く事となり、打つべきか我慢すべきか長く途方に暮れました。

審査が近づき、ふと「打つべき時」を待つ事ができました。集中し「その時」を感じた時、立合い稽古を見て下さった米倉先生から総合的に良い評価を頂けたと思います。頭ではなく腹で理解できたと思うと肩の荷が下り（足が遅くても、高く跳べなくても、力が無くても、大丈夫！大丈夫！）初心に帰り、無心で本番に臨むことができました。立合い一人目の愛知県江南武道館・天野賢太郎先生とはほぼ全て面と小手面の相打ちに終わったようで、一緒に合格させて頂きました。

これから相応しい剣道を創り上げるため

に今一度打突の強さと冴えについて、勉強し直したいと思っておりますので、今後とも御指導・御鞭撻の程どうか宜しくお願ひ申し上げます。



剣道称号

「教士」を授与されて

警察支部 小坂 治



令和二年五月剣道称号「教士」を授与されました。

この機会に、私の剣道経歴について

振り返ってみます。私は、小学三年生の時、友達に剣道をしているのを見て、「棒（竹刀）で叩き合いをしよう。おもしろそうだから、やってみよう」と思ったことがきっかけで剣道を始めました。中学、高校、大学と剣道を続け、その後、大学卒業後、徳島県警へ就職し、十年間に渡り機動隊で剣道特練員として、日々、剣道の稽古に打ち込んでいました。

ですが、機動隊を除隊してからは、刑事の道へと進み、剣道をする機会もほとんどなくなりました。

しかし、大学の同級生が七段合格後、教

士号に合格したというニュースを耳にするたびに「自分も頑張ってみよう」という気持ちとなりました。三年前から、私はもう一度竹刀を握り直し、剣道の稽古を再開させました。

そして、毎週木曜日、中央武道館で開催されている剣道連盟主催の強化稽古会に参加するようにしました。当時、私は美馬警察署に勤務していた関係で、貞光にある宿舎で生活しておりましたので、片道一時間三十分かけて、徳島の中央武道館まで稽古に通いました。この道のりが長く、しんどかったのですが、これも修業の一つと思って乗り切りました。

まずは、剣道七段審査に合格することを目標に定めて稽古に励んだ結果、平成三十年五月の京都審査会において無事七段審査に合格することができました。平成十一年に六段審査に合格してから、実に十九年の歳月が経っていました。

そして、令和二年の春、剣道教士号の受審資格ができたので、普段は、あまり目にしない剣道講習会資料や、称号段位審査規

制、細則、剣道審判運営の手引き、剣道試合審判規則、細則の本を熟読して称号試験に備えました。

しかしながら、今回は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、兵庫県で受験する予定であった剣道称号試験が、急きょ中止となり、表題論文提出をして、剣道称号「教士」をいただきました。

教士の基準は、剣理に熟達し識見優秀な者と定められています。

まだまだ未熟な私ですが、そう認められるように、これからも精進していきたいと思えます。

剣道教士称号審査に合格して

徳島支部 金野 裕美

令和二年十一月に実施された、剣道教士号審査を受審し、夫・卓司とともに合格することができました。令和二年度秋季の称号「教士」筆記試験は、東京都・名古屋市・神戸市・福岡市で実施が予定されていましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、春季筆記試験に引き続き、試験会場での実施が中止され、春季同様、小論文の提出となりました。剣道教士の課題は、「剣道指導者としてのあり方」でした。今まで受講してきた講習会資料等を参考に、理想的な指導者のあり方を、様々な角度から考察する時間が十分にあり、貴重な機会になりました。

今回、教士称号審査では、七五一名が合格しています。内、女性合格者は四十七名と、女性にとって高段位合格はまだ難関ですが、そのような中でも、女性剣道人口は着実に増えており、初段合格者の三分の一

は女性であるそうです。私の仲間の女性剣士に、お子さんが剣道を始めたのをきっかけに剣道をはじめ、日々努力をされている方がいます。稽古に行けば、いつも会える仲間だったのですが、大病を患い、大きな手術をしました。術後の厳しい治療を乗り越え、彼女は見事にカムバックを果たし、現在昇段に向けて更に意欲的に稽古に取り組んでいます。私自身、年齢を重ねるにつれて避けられない身体機能の衰えに、「やめ時」といつなのか、「いつまでできるのか」という事が常に付きまとうようになっていきましたが、勝った負けた、打った打たれたを越える、もっと深い剣道観と、より深い有効打突の追求を、自分の身体の変化とともにしていかなければならないという事を、剣友から学ばせていただきました。

今後更に、剣道をやってみたいという女性が増えることを願い、悪条件を乗り越えても続けることのできる剣道の魅力を引き出し、ひとりひとりの女性の個人的努力が継続できる剣道環境や、男性が多数を占める集団の中でも、女性の特性を活かした練習法や指導法が工夫され、なにより剣道ができる喜びや充実感を、一人でも多くの女性と共有できたらいいと思います。最後に、これまでご指導いただきましたすべての方々に、お礼を申し上げます。ありがとうございました。



練士に合格して

徳島支部 香 川 利 浩



平成三十年十一月に六段に昇段し、この度、練士の称号をいただくことができました。御

指導いただきました皆様にご場をお借りして御礼を申し上げます。

十数年離れていた剣道を再開し、娘が頑張っている姿を見て、私ももう一度目標を持つとうと五段受審を決意し、阿波支部の先生方や富岡東高校、川島高校の皆さんに稽古をつけていただき、合格することができました。六段受審に当たっては北井上剣道教室の先生方にご指導いただきました。はじめは、立ち合いでの一本を意識し、技や動きばかりを気にしてしまい手数も多く、納得できる稽古が出来ていませんでしたが、美馬先生から、「打つべき機会とは、我慢すること、相手の我慢が切れるところが打

つべき機会である」とご指導をいただきました。この言葉を念頭に稽古に臨むと必然的に手数も減り、相手が何をしたいのか、どこで打ちたいのかをより考えるようになりました。自分勝手ではなく相手本意で立ち合いに臨み、合格することができました。美馬先生をはじめ北井上の先生方、休日に相手をしてくれた同級生の鳴川先生には本当に感謝しております。

私が剣道を始めたのは小学校二年生、八歳の時でした。当時読んでいた漫画の主人公の防具姿にあこがれ、父に防具を買ってとお願いしたことがきっかけでした。土成スポーツ少年団に入部しましたが、初めの一年間は体力づくりと構え、足さばき、素振りばかりでした。防具を付けてからも、打ち込みとかかり稽古の連続で、剣道を始めたことを後悔していました。しかし、先生も稽古が終わるとやさしく、また生徒同士も仲がよく、やめないで続けられたのもこうした先生方や仲間がいたからだと思えます。

中学は地元の市場中学校に入学しました。

当時の市場中剣道部の先輩は三年生一人、二年生五人、計六人の少人数でしたが、剣道のレベルはとても高く練習も相当ハードなものでした。毎日の練習についていくのが精いっぱいでした。先輩のようになりたいと思いつながら一生懸命剣道に取り組み、三年生の総体では、長井、松永、香川、秋山、山田、河野のメンバーで優勝し。全中ではベスト八に入ることができました。指導していただいた先生はとても厳しかったのですが、一方で生徒のことを思いやり、大事にしてくれる方でした。私が剣道を続けてこれたのもこの先生がいたからと感謝しています。

高校は富岡東高校に進学しました。女子はすでに有名でしたが、男子は団体も組めない人数でほとんど無名のチームでした。河田先生の指導のもと、男子新入生、鳴川・松永・香川の三名を含めて臨んだ最初の総体で二位となりその後も四国大会、国体出場とよい成績を収めることが出来ました。高校での三年間は勝負を覚えた三年間でし

大学は京都産業大学に進学し、剣道部に所属、卒業後就職し、三十歳まで剣道を続けましたが、結婚と同時に仕事も忙しくなくなりだんだん剣道から離れてしまいました。娘が十歳で剣道を始めたのをきっかけに再開し現在に至ります。

好きな言葉に「守・破・離」という言葉があります。守は教えを受け真似て基本を身につける、破は学んだことを自分のもの(個性)にする、離は得たことを自分流に精一杯發揮する。思い返してみると小学生のころに先生から教わった基本。中学生で先生や先輩の真似をしたこと、高校・大学で勝負を覚えたことなど。自分の経験したことはまさにこの言葉ではないでしょうか。自分を導いてくれた先生方がいたからこそ練士をいただくことができました。今後は自分が子供たちを導いていくことが「離」となるのではないかと考えております。皆さん、今は我慢の時期で思うような稽古や試合ができませんが、必ず良くなることを信じて頑張りましょう！

居合道「錬士」をいただいて

居合道部 林 由美

六段に合格してから一年余り経って小論文の提出と予備審査を受け、令和二年十一月に「錬士」称号をいただくことができました。日頃より、ご指導くださいました先生方のおかげと感謝申し上げます。

段位は「技術的力量(精神的要素を含む)」、称号は「これに加える指導力や識見などを備えた剣道人としての完成度」を示すものとして審査を経て授与されるものと伺いました。小論文の課題は「剣道(居合道)指導の心構えの要点を記しそれを踏まえた上で自身の修行について述べよ」でした。

「竹刀(刀)の本意」「礼法」「生涯居合道」この一年余り、自分はこのことをどれだけ意識して稽古してきたのだろうか。その時立てた目標がどれだけ出来ているのか。そう問われている様な課題でもありました。限られた字数内にまとめるのは大変でしたが、六段受審の時とは全く違った緊張感で

小論文を提出いたしました。

予備審査では他にお二人受審される方がいらっしやいましたが、お二人ともすばらしく自分はまだまだ稽古量も取り組み方も乏しいと、反省しました。称号審査を受けるという事は、改めて自分を見つめ直し反省できる良い機会でもあったと思います。

錬士は「剣理に錬達し、識見優良なる者」に与えられるとありますが、それを更なる目標とし、「あれでも錬士六段」ではなく「あれが錬士六段」と思っていただけだろう、今後の修行に取り組みたいと思います。

令和二年度

称号・段位合格者一覽

— 剣道 —

【錬士】

【教士】

五月六日

五月六日

小坂 治

湯村 義喬
香川 利浩

十一月二十四日

十一月二十四日

山崎 砂織
安田 勝裕
出口 正春

金野 裕美
金野 卓司
岩原 靖人
河野 寿仁
井村 行宏
林 洋行
鈴木 啓三
住友 久夫

【七段】

八月二十九日
木下 裕泰

【六段】

十一月十五日
綾部 文明

【五段】

八月二十三日
井上 稔大
西沢 知也
井口 あすか

十一月二十九日
山ノ井 陽介
福本 正教
戸梶 琢哉

令和三年
二月十四日
辻 孝
玉田 理沙子

【四段】

八月二十三日
金森 祥太

令和三年
二月十四日
葛籠 徳人
濱田 諒
三宅 誠一
長井 昭人
生田 朱音
西岡 彩芽

【三段】

八月二十三日
岡山 大介
西谷 漸
中川 陽
小山 滉冬
桑村 有妃

十一月二十九日
松本 尊灯
小山田 亮太
永濱 幹大
後藤 浩也
宮田 滉大
西城 尚輝
山口 祐二
小西 智也
村中 花音
谷村 七海
山室 愛子
柳田 藍
山田 莉子

福田 真結海
岡崎 理
三好 優果利
武田 俊文

令和三年

二月十四日

眞貝 俊輔
沖野 友哉
藤本 豪太
谷口 航
花川 裕基
高田 迅人
立石 龍之介
中東 天雅
富田 哲平
森岡 壱誠
井上 和希
住友 英志
鳥澤 明未
金野 結月
佐藤 ちひろ
岩本 楓華
野崎 まひろ
垣内 菜々香

【二段】

八月二十三日

本庄 創思
井川 凱翔
羽坂 颯真
中野 脩大
村橋 烈
島田 輝
桑原 歩武
原田 紘輔
坂東 琉晟
香川 顕宏
近藤 正獅
撫養 思唯
香川 柊吾
徳永 唯吹
野尻 壮馬
榎本 翔
岡本 耕太郎
岡崎 進平
鳥海 聖
岡 輝晟

井藤 輝
篠辺 智輝
紅露 和輝
山本 優光
谷口 真
永瀆 聡良
倉橋 秀汰
内海 翔貴
栗田 星舞
森脇 康生
横手 良祐
次原 良渉
長岡 知希
古賀 春華
松本 彩愛
高田 穂花
由岐中 千智
佐藤 愛結花
小山田 奈央
阿井 楓
松田 明香里
山名 来実
武藏 小春

岩佐 ほのか
上田 凜
入江 美帆
大高 羽叶
國清 朱李
播磨 昌美
長野 悠来
伊丹 千尋
篠原 姫
瀬山 ちゆり
田村 凜乃
一楽 萌衣
十一月二十九日

桑原 康輔
佐藤 輝和
十一月二十九日
ウイークス ジョシユテ
仁木島 史弥
佐藤 治郎
近藤 蒼真
櫻木 怪毅
富永 晃汰
岡山 誠

令和三年

二月十四日

原和 慶
伊沢 直留
吉岡 瞭吾
井口 雅貴
横山 舞
大石 あおい

榎原 陽
大道 翔太郎
西原 楓翔
川原 瑞葵
三好 幸太
桑田 隆希
西村 翔
柳田 周作
板東 煌真
小田 朝日
吉田 悠真
小島 伶太
金谷 咲
片岡 壱会

西川 姫楓
香川 夕渚
蛭田 夢加
佐野 千紘
安藝 玲緒奈

【初段】

九月二十七日

藤井魁士 鈴木葉二 富増奎佑 吉田遥人 黒崎蒼太 吉岡隼 前山陽紀 多田健人 山添純也 入江亮太 森本理希 鳴門悠生 三木良織 尾畑涼月 岩本響輝 四宮真一郎 田代朔也 井上裕貴 原那由多 入江空男

山下悠人 野口稜人 藤川虹太 三橋拓真 熊澤翔生 橋本和馬 株田隆之介 西岡優太 石川元喜 椎橋栄斗 長尾光一郎 篠原翔騎 渡邊大樹 坂東将太郎 福池謙信 遠藤葵 鳥海芹 和泉皓大 渡内大河 中原光翼 富内一希 青木謙真 増尾優輝

板場鈴々 佐藤優多 松本怜久 濱田忠慶 築本秀舵 川人祐太 河下歩夢 種浦勇 原孝太郎 豊島圭吾 相田陽平 玉垣一樹 橋本葵 西岡桂吾 坂野太洋 片岡恭二朗 加藤雅樹 藏本望海 三宅悠太 楠本悠太 篠原嵩也 鈴木陽人 中西誠

岡部里緒 東内菜々 國見菜々 六條美玖 東原萌衣 赤池ひなた 後藤彩祢 今田碧月 佐藤瑠南 川野愛柳 四宮聖柊 四宮聖柊 福岡真詩 近藤美弥 鹿子美弥 森長未來 鈴江海音 高瀬絢菜 上村凌香 佐藤千夏 岡本望 小田有紗 谷本真智子

幸山洋輝 佐川皓志朗 小坂泰心 真田一輝 逢坂真翔 宮田真吾 辻村鴻人 七條隼 大和優星 平松政樹 野根栞太 富永悠太 榎本悠 稲田裕亮 米田有輝 佐藤圭悟 令和三年 一月二十四日 八木理恵 山橋直歩 和田鼓子 村田梨奈

橋本愛美 正木七菜 高嶋桜子 眞貝幸音 甘利慧 山本実加子 秋山鈴奈 榎本茉音 中岡倅奈 柏原あこ 大西結來 中村柑菜 大佛元彦 南大智 小笠雷太 宇田川祐生 阿部優樹 高木望成 山路健心 中野璃玖 植松優斗 宮本駿 山口健人

尾方暖心 計盛穂乃香 中江さくら 月岡雫

―居合道―

【錬士】

十一月二十四日

吉原 均

林 由美

徳山 豊

【三段】

十一月八日

岡山 博之

河野 暁子

西岡 利治

【二段】

十一月八日

西岡 悠天

白倉 基成

橋口 修二

【五段】

十一月八日

山田 師正

【初段】

十一月十日

森本 理希

三谷 典史

生城 暢大

十一月八日
大石 雅生



はじめまして

私の考える

武道との関り方について

自衛隊三等海佐 酒 井 康 充



令和二年に東京から徳島県に転勤してきてから、ようやく四国での生活に慣れてきました。

私は仕事の都合で約二年ごとに全国規模の異動があり、国内各地で勤務してきましたが、新しい配置に移るごとに業務内容が全く変わり、人間関係も新たに構築していかなければならない強いストレスの中、心の支えとなったのは転勤先における武道の稽古（剣道、居合、杖道）でした。

昨今、長時間労働やパワーハラスメントなど、職場環境を原因としたメンタルダウ

ンや自殺等がマスコミで報道されていますが、稽古を通じた心の鍛錬は、日々のストレスのかかる場面において、それを乗り越えていく力を養ってくれると思います。

私は、日々の稽古を自身の仕事や生活に生かしていく位置づけとして、次のとおり考えております。それは、「剣道で相手との呼吸や間合を測ることで駆け引きを学び、居合道では物事を主観的に掘り下げるだけでなく、自己を俯瞰的視点から客観視することを学び、杖道では一つの決まり事を相手との間ですり合わせつつ調整して精度を高めていくことを学ぶ。」といった点です。

私の武道歴についても触れてほしいとの編集者よりの要請がありましたので、以下に記しておきます。銃剣道と短剣道は自衛隊で選手要員だったので仕事として稽古しておりました。剣道は元々子供の頃から高校まで続けており、今はたまに稽古する程度です。杖道は千葉県剣道連盟で居合道の高段者は杖道を稽古することが望ましいとの方針があり、通勤帰りに東京都剣道連盟で杖道を始めました。転勤や出張と重なり、

杖道の昇段審査を受けられませんが、杖道経験は七年目です。空手は大学で稽古していた、最近まで細々と稽古していました。空手は居合道以上に流派が多く、転勤の先々で色々な流派の道場に通っていました。空手だけなら合計で十数段となりましたが、全部中途半端で恥ずかしい限りです。自衛隊での階級は三等海佐（少佐）、居合道六段練士、剣道三段、杖道二段、銃剣道七段教士、短剣道七段教士、空手道二段（千唐流）、槍道二段です。

話は変わりますが、徳島県は私が今まで全国各地で勤務した中でも気候が良い上、食べ物や風景も素晴らしく、過ごしやすい土地であると感じております。このような環境で稽古を続けられることは、非常にありがたいことです。

最後に、これからも諸先生や先輩方からのご指導を通じ、少しでも自身が成長していけたらと思っております。今後とも、よろしくお願いいたします。

徳島での四年間を糧に

歌手・タレント たなこう たなお

(本名・田中幹人 鳴門教育大学卒)



徳島の剣道関係者の皆様、はじめまして。鳴門教育大学剣道部出身の歌手・タレント

「たなこう たなお」と申します。

私は、兵庫県出身で、鳴門教育大学に進学後、剣道部に所属し、大学の稽古のみならず、鳴門市をはじめ徳島県の皆様に稽古をつけていただきながら、四年間剣道に励んでまいりました。三年次からは着任された木原先生の熱心なご指導をいただき、四年次には主将を務めるなど、とても充実した剣道生活だったことが懐かしく思い出されます。

大学卒業後は教員として地元兵庫県中学校に勤め、その後、淡路島の小学校に異動した際は、勤務後に鳴門教育大の稽古に



平成6年5月 西日本学生大会にて

参加させていただき、また、地元の道場の朝稽古に参加するなどして、少しずつではありますが、剣道を続けてまいりました。数年前に転勤で、稽古ができない状況になり、健康上の理由で教員を退職しました。しかし、大学時代に剣道から学んだことは、今でも大きな糧となって、その後の人生にも活かされていると感じています。

それは、構えと呼吸です。崩れた構えからどんなに打ち込んでも一本にはなりません。自分の呼吸や相手の呼吸を感じ取らなければ、打つべき機会がとらえられません。教員を退職するということは、大きな苦境でしたが、浮足立たずどっしり構えて呼吸を落ち着けて、健康を回復し、第二の人生について考えました。

教員時代、子どもたちの前で歌ったり、落語をしたりするエンターテイメントを積み重ねてきたことを活かそうという考えのもとに、あるカラオケ大会に出場したことがきっかけで、審査委員長の作詞作曲家のたきのえいじ先生にご指導いただくこととなり、一昨年CDデビュー致しました。

ここで、デビューシングルについて、ご紹介させていただきます。

両A面シングルとなっております、まず、私の師匠でもある、たきのえいじ先生の作詞作曲で、主人公が、定年の日にふと桜を見上げて思ったことを歌った曲です。長年、この国で働き社会を支えてきた世代の方、セカンドライフを送っている方、新たにセ

カンドライブを迎える方々に贈る温かい応援ソングです。

『さくら記念日』

思えば今日で 勤めが終わる
やり続けたと 今さら思う
席を譲る つもりはないが
ここらで人生 折り返し
桜の花が 風にゆれてる
俺をそっと 見送るように

初めて背広 着た頃が

心の中を 駆け巡る

次にもう一曲の「十九の友」は、私自身の作詞作曲です。十九歳で亡くなった親友が生前送ってくれたエールを胸に人生の様々な壁に立ち向かっていこうとする思いを熱く歌ったロック調のバラードです。この楽曲は、実際に十九歳のとき事故で亡くなった私の友人とのエピソードをもとにして作っています。

『十九の友』

負けて 負けて負けて 負けて
負け続けても いったって前を向け
ある晴れた 春の日に 君と出会った

上から目線 いつも張り合う
青春の日々
十九で君は旅だった

あれから季節はめぐれど

心折れそうなとき 君のエールが

聞こえてくるよ

くじけそうでも あきらめないで

どんなピンチも 逃げ出さないで

世界中の淋しい人の心に

灯りをともしたい だから

負けて 負けて負けて 負けて

負け続けても 何度でも立ち上がれ

泣けて 泣けて泣けて 泣けて

泣けて 涙あふれても

いったって前を向け

そしてカップリング曲として、

三十年以上続くラジオ関西の人気

アニメラジオ番組の主題歌『青春

ラジメニアの歌』をカバーさせて

いただきました。

私もリスナーということで、多

くのリスナーの皆さんからも応援

していただいています。

CD以外にも音楽配信サイトで、ダウンロードもできますので、お聞きいただけると幸いです。

デビューシングルのプロモーション以外に現在行っている活動は、YouTubeやミュージックビデオや食レポ、YouTubeのラジオ番組等を配信しています。また、新たに作詞作曲をしてコンサートで披露したり、ミュージックビデオにしてYouTubeで配信したりもしています。新しく作った楽曲は、現段階ではCD等の音源化はされていませんが、将来的には、何らかの形で音源化して皆様にお届けできるようにしたいと



思います。

最近では、自身のイメージキャラクター「Gキング」もコンサートの前半で歌うなどヒーローキャラクターのプロモーションにも力を入れています。Gキングがアンパンマンなどの曲を歌う小さな子どもたちや親子連れ向けのプログラムも開発中です。

また、芸能事務所を通してのお仕事として、俳優にも挑戦しています。今年三月には、フジテレビ系ドラマ「知ってるワイフ」などにもエキストラ出演して、主人公やキャストとフレームにおさまりました。現在東京を拠点に幅広く活動しながらいろんな方に知っていただけるように取り組んでおり



ます。

やっていることは、剣道とかけ離れたことではありますが、必ず心のどこかで、剣道をしている時のことをイメージして、取り組んでおり、剣道の教えは人生そのものにも当てはまると実感しています。

コロナ禍で、様々な活動が制限され、エントナーテイメント業界は厳しい状況ですが、慌てたり、諦めたりすることなく、ここでも心の中でしっかりと構えて、自身の呼吸も整え、世の中の呼吸をしっかりと読み取って、挑戦していこうと思っています。

今は、各地に出向くことが、難しい状況ですが、コロナ禍がある程度落ち着きましたら、落語&歌謡ショーや歌うヒーローGキングの小さなお子様向けのイベントなどで徳島の皆様にもご披露して、元気をお届けできたらと思っています。

引き続きYouTube等SNSで自身の活動を発信してまいりたいと思います。「たなこうたなお」で検索していただくとYouTube等のSNSがご覧になれますので、応援よろしくお願いいたします。



また、お仕事の依頼がございましたら、tanako-tanao@outkook.jp までご連絡いただけますと幸いです。

がんばろう徳島

事務局取材レポート

頑張ってます！

〃市場剣道教室〃

取材者 理事長 藤川 和 秋



剣道教室を訪問しました。

市場剣道教室は、昭和五十一年十月に創設され、本年度で四十四年目となります。人口減少で子供の入部が少なくなった時期もありましたが、頑張って剣道教室を継続されてきました。現在の指導者代表は、井内勝則先生（六十五歳）剣道四段です。そのほか、指導者は、沼田昌哉先生（五十六歳）

剣道三段、大野和則先生（三十七歳）剣道三段、尾田正和先生（三十五歳）剣道三段のほか、阿波支部長の一村昌和先生（六十八歳、剣道教士七段）も指導者として加わっています。

稽古日は毎週火曜日、木曜日、土曜日の週三日ですが、阿波支部の稽古会が毎週月曜日であり、その稽古会にも参加しています。少年剣士は、男子六人、女子六人の十二名です。

それでは稽古の取材状況をお伝えします。稽古の時間は午後七時三十分から午後九時には終了します。市場武道館の道場内は明るく、稽古開始までは各自交替しながら打込み台で面打ちの練習をしていました。その後、座礼を行い、基本稽古が始まりました。少年剣士たちは、井内先生の基本に忠実な面打ちの指導を受け、新型コロナウイルス感染防止のため面マスクを着装しながらでも元気に稽古に取り組



写真① 代表指導者 井内先生の指導状況

んでいました。

《写真①を参照》

それでは市場剣道教室の少年・少女剣士をご紹介します。男女に分かれ並んで写真を撮らせてくれました。まず男子からです



写真② 花の男子6人組 「どうだ！俺の構えは、いけてるかい！」

が、全員インタビューできずキャプテンだけ紹介させてもらいます。

《写真②を参照》

写真②右側の少年剣士が

○山本匠真（やまもとしょうま）君（八幡小学校五年生）です。

山本匠真君は幼稚園のときから市場剣道教室に入部し、今年で六年目になります。キャプテンとしての抱負を聞いたところ

「緊張感を持ってやっています。」と真面目で責任感のある返事が返ってきました。

まだ五年生です。来年を期待していますよ。

それでは、花の女子六人組を紹介しします。

《写真③を参照》

写真③右側から1番目

○矢田心晴（やた こはる）ちゃん 市場小学校五年生です。

小学校四年生から剣道を始めまだ二年目ですが、花の女子六人組のリーダーとして頑張っています。

写真③右から2番目

○瀬尾さくら（せお さくら）ちゃん 市場小学校四年生です。

写真③右から3番目

○阿部茉莉（あべ まこ）ちゃん 大俣小学校四年生です。

写真③右から4番目



写真③ 花の女子6人組 「男子には負けないわよ〜！」

○横川陽南（よこかわ ひな）ちゃん 八幡小学校三年生です。

写真③右から5番目

○瀬尾ひより（せお ひより）ちゃん 市場小学校一年生です。

四年生の瀬尾さくらちゃんの妹です！

写真③ 右から6人目

○大野紗奈（おおの さな）ちゃん 八幡
子ども園年長さんです。

紗奈ちゃんは、指導者の大野和則先生の娘さんです。お父さん大好きで、いつも傍で甘えています。お父さんと一緒にうれしくて、いつの間にか剣道も大好きになったようです。

以上、少年・少女剣士をご紹介しましたが、井内先生のほか指導者の皆さんや保護者の皆さん、そして少年剣士のみんなが仲良く稽古する風景に心温まるものを感じました。

井内先生は「少年剣士達が剣道を通じて人間的に成長してくれることを期待して頑張ります。」と決意を述べてくれました。

最後に、指導者、少年・少女剣士そして保護者全員で「頑張るぞ〜。オオ〜」の無言のポーズをとり写真を撮らせてくれました。

《写真④を参照》

）頑張れ、市場剣道教室！

追伸 市場剣道教室は、令和二年度全日本

剣道連盟の少年剣道教育奨励賞を受賞しています！

以上



写真④ 市場剣道教室の皆さん全員で「頑張るぞ〜。オオ〜！」

専門部報告

事業部より

事業部長 佐賀博史

事業部では、剣道連盟主催の大会及び講習会などの開催・運営を主な業務としており、各大会などが有意義で安全に実施されることを目的として活動しています。

令和元（平成三十一）年度の役員の改選などにより、事業部は、事業部長の私（佐賀博史）以下二十一名の理事・委員で運営しています。

令和二年度の活動状況は、新型コロナウイルスの影響により、全ての大会や講習会、稽古会が中止や延期となりました。

その一方で、延期となっていた令和二年度の全日本剣道選手権大会が、令和三年三月に長野県において男女同時に開催されることとなり、一月三十一日に全日本選手権大会へ出場する徳島県の代表選手を選出す

るため、県予選会が開催されることとなりました。

同予選会では、男子の部においては、二五名の精鋭がしのぎを削り、決勝戦では、白木恒二郎選手（名西支部）が美馬州一選手（徳島支部）を延長戦の末に下し、見事二回目の代表権を獲得しました。

また、女子の部には、坪井香歩選手（阿南支部）と玉田理沙子選手（徳島支部）の二名が出場し、熱戦の結果、坪井選手が初の代表となりました。

白木選手、坪井選手には、徳島県代表として全日本選手権での活躍を期待しています。（令和三年二月）

令和二年度は、同予選会が、唯一事業部として活動した大会であり、何とも言えない非常に残念な一年でありました。

最初は「休日に関道連盟の用事もなく、ゆっくりできるなあ」という安易な気持ちにもなりましたが、日々、何か物足りない穴が開いたような思いになりました。

コロナの影響で剣道ばかりでなく、外食や旅行などの普通の生活の一部までもが制限を受け、何の変化もない味気ない毎日が

続いています。

こんな日々を送る中で、剣友の皆さんと顔を合わせ、元気はつらつとして試合を見せてもらい、気分転換や刺激を受けること、ありがたさを痛感しているところです。

そういう意味からも一日も早いコロナの収束を願うばかりです。

終わりに、これら徳島県剣道連盟が主催する大会や講習会などについては、我々事業部員が中心となって運営していくところでありますが、到底、事業部員だけで実施できるものではありません。

審判の先生をはじめたくさんの先生方のご協力の下、素晴らしい大会等が実施できるのです。

令和三年度は、コロナが収束し、ひとつでも多くの大会や稽古会などで皆様にお会いできることを楽しみにするとともに、各大会等におきまして先生方、関係者の方々には、これまで以上のご協力をいただきませうようお願い申し上げます。

以上、コロナの収束と安心・安全の日常が戻ることを願い、事業部からの報告とさせていただきます。

審査部より

審査部長 佐藤 佳宏

令和二年度の行事につきましては、新型コロナウイルスの影響で居合道の部では、五段以下審査会（二回）、剣道の部では、初段以下審査会（二回）、二段以上審査会（二回）、と当初予定より開催回数が少なくなり、また対策のため審査要領も変更となり受審者の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

地元役員、審査員、剣道連関係者の方々にはコロナ禍の中、多大なるご協力を頂きまして心よりお礼を申し上げます。

一名、剣道錬士五名、剣道教士十九名という結果でありました。合格の先生方は下記のとおりです。

〈居合道錬士〉

吉原 均

林 由美

徳山 豊

〈剣道六段〉

綾部 文明（徳島支部）

〈剣道七段〉

木下 裕泰（板野東支部）

〈剣道教士〉

小坂 治（警察支部）

金野 裕美（徳島支部）

金野 卓司（徳島支部）

岩原 靖人（徳島支部）

河野 寿仁（阿波支部）

井村 行宏（徳島支部）

林 洋行（阿南支部）

鈴木 啓三（阿南支部）

住友 久夫（阿南支部）

審査会の結果につきましては、居合道の

部、受審者二〇名、合格者一九名、合格率九五%、剣道初段以下の部、受審者七十七名、合格者七十三名、合格率九九%、剣道二～五段・称号の部、受審者二〇〇名、合格者一六二名、合格率八一%となりました。

六段以上の高段位合格者につきましては、

居合道錬士三名、剣道六段一名、剣道七段

湯村 義喬（徳島支部）
香川 利治（徳島支部）
山崎 砂織（阿南支部）
安田 勝裕（阿波支部）
出口 正春（阿波支部）

強化部より

強化部長 平野 誠司

一 令和二年度実施結果

(1) 剣道連盟稽古会「強化稽古会」

毎週木曜日 19:00 ～ 21:00

(中央武道館) 2月27日より新型コロナウイルスにより中止
感染拡大により中止

(2) 地区交流稽古会

○ 南部交流稽古会

4月25日 (鷲敷B&G体育館) 中止

10月30日 (阿南スポーツセンター) 中止

中止

○ 西部交流稽古会

4月10日 (市立川島中学校) 中止

11月6日 (脇町小学校) 中止

(3) 長期育成強化

第26回 令和2年8月30日

(那賀川スポーツセンター) 中止

第27回 令和3年1月31日

(那賀川スポーツセンター) 中止

二 大会結果

(1) 4月29日

全日本都道府県対抗剣道優勝大会

中止

(2) 5月17日

四国四県剣道大会 中止

(3) 7月12日

全日本女子都道府県対抗剣道優勝大会

中止

(4) 8月23日

国民体育大会四国ブロック大会 中止

(5) 10月4日～10月6日

国民体育大会 中止

三 令和三年度強化計画

(1) 基本方針「文化的伝承と競技力維持の共存」

共存」

○ 日本剣道形から理法を修練する。

↳ 共習する稽古場の創造 (三世代教

習) ↳

↳ 武に向かう心の醸成 (魅力ある剣

道) ↳

↳ 理法 (刀法、心法、身法) に基づ

く指導」

○ 暫定的な試合・審判法から本質的な剣道指導を図る。

○ 競技力の向上を図る。

(2) 徳島県剣道連盟強化稽古会

【新型コロナウイルス感染状況により判断】

毎週木曜日 中央武道館

19:00 ～ 21:00

(第一木曜日

日本剣道形 19:00 ～ 20:00

合同稽古 20:00 ～ 21:00

(3) 長期育成強化訓練

基本方針に即した内容を中心に骨太剣

士を育成する。

女子部より

女子部長 竹 内 佳代子

今年度は、新型コロナウイルス感染症のため、徳島県女子剣道大会をはじめ、都道府県大会、国体予選などすべての大会の実施ができませんでした。

また、月一回を目安に実施してきた女子の稽古会も一度も行うことはできませんでした。

まだまだ感染拡大がおさまらず、不安な状況が続いているため、次年度の活動についてもどうなるかわかりませんが、今は一日でも早く、いろいろな活動が再開されることを願うばかりです。活動が再開され、各種大会や女子稽古会で皆さまと剣を交えたり、お会いできることを楽しみにしています。今後ともよろしく願います。

居合道部より

居合道部長 福 井 勝

平成二年度居合道行事は春からコロナウイルス発生により、全剣連行事では五月の京都大会、十月の石川県開催予定であった全日本居合道大会、九月の中央講習会などすべて中止。県外居合道大会もすべて中止となりました。県内の行事も公共施設が利用不可となり、また剣道行事中止に伴い居合行事も中止。

剣道の審査開始に伴い居合は十一月八日松茂第二体育館にて級、段、称号予備審査を実施。この日予定していた秋季講習会は中止。令和三年度は、二月十四日実施予定の県下居合道大会を中止。級審査会を実施予定。

コロナ禍が早く終息することを願い報告とします。

審判部より

審判部部长 富 浦 廣 志

一 本年度の活動

① 審判講習会の実施

日時…3月29日 コロナウイルス感染

拡大のため 中止

② 少年指導者審判委員講習会

日時…4月5日 コロナウイルス感染

拡大のため 中止

③ 各大会での審判研修の実施

・昼食時や団体戦第1試合終了後、審判研修を実施

④ 審判依頼 剣道連盟主催大会において

審判依頼を行っている。

⑤ 四国ブロック試合・審判法研修会への

参加

・コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインに伴う、暫定的な試合・審判法の趣旨・方法について研修を受けた。これに伴う趣旨・方法の周知を進める。

二 来年度の活動について

○全剣連重点指導の徹底(昨年度に引き

続き)

ア 宣告、表示を正確、明確に行う。

イ 「有効打突」及び「反則行為」の

見極め。

・適正公平に審判 私的な感情をな

くし公平に(＝信頼性)審判員も

見られている評価されている意識

・規則に載っていないことがおこつ

たら第一条に照らし合わせて判断

する。(剣道がより正しい方向に

向かえるか判断する)

・成人は成人の 少年は少年のそれ

ぞれの適正を見極めて。

・罅迫り合いの「空費」「不当」

「受けてから入って罅迫り合いに」

積極的に意識がなくても 組み立

てがそうになっているものもとって

いく。(不当な行為として判断す

る)

○コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインに伴う、暫定的な試合・審判法の

趣旨・方法の理解を深め、実践力を高められるよう、会員に対し啓発を行っていく。

「審判が良くなれば、試合が良くなる」という意識を高め、審判講習会や各種大会を通して、審判技能の向上や、審判員としての資質向上を図っていききたい。

中体連より

中体連部長 佐藤 浩

○令和二年度県内各種大会団体戦成績表

大会名 徳島県中学校新人剣道大会

日時 令和二年十一月二十一日(土)、

二十三日(月・祝)

会場 ソイジョイ武道館

男子

優勝 徳島中学校

準優勝 那賀川中学校

第三位 阿南中学校

第三位 小松島中学校

女子

優勝 那賀川中学校

準優勝 国府中学校

第三位 徳島文理中学校

第三位 土成中学校

大会名 徳島県中学校剣道強化錬成大会

日時 令和三年一月十六日(土)、二十

三日(土)

会場 ソイジョイ武道館

男子

優勝 徳島中学校

準優勝 那賀川中学校

第三位 木頭・高浦中学校

第三位 阿南中学校

女子

優勝 木頭・高浦中学校

準優勝 那賀川中学校

第三位 国府中学校

第三位 土成中学校

講習会・錬成会等

○中部・西部・南部地区指導者講習会

中止

○第二十回県中学校剣道夏季錬成会

中止

○第十六回四国中学校新人剣道大会

令和三年二月二十七日(土)

うだつアリーナ

優秀選手

男子二十三名、女子十九名

(顕彰一覧に掲載)

○令和二年度中学校剣道部員数

()は昨年度

	1年生	2年生	3年生	合計
男子	80人 (111人)	109人 (108人)	105人 (116人)	294人 (335人)
女子	61人 (63人)	53人 (63人)	63人 (65人)	177人 (191人)
合計	141人 (174人)	162人 (171人)	168人 (181人)	471人 (526人)

日頃は中学校剣道専門部の活動にご支援・ご協力をいただき誠にありがとうございます。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から各種大会等が中止となりました。

しかし、五月の緊急事態宣言の解除に伴い、「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」、「主催大会にあたっての感染拡大予防ガイドライン」の制定を受けて、徐々にではありますが活動が再開されました。

専門部としても県剣道連盟の指示を受け、全剣連ガイドラインに沿って各種大会の開催に向けて歩み出しました。様々な問題点を解決するために多くの先生方からご意見をいただくことで、各大会のガイドラインの作成を行うことができました。

そして、県中新人剣道大会・県中剣道強化錬成大会を開催することができたのも県剣道連盟をはじめ、大会運営に携わっていただいた全ての関係者の方々のお力添えがあったからです。改めて厚くお礼申しあげ

ます。本当にありがとうございました。

来年度以降も大会・錬成会等については、まだまだ準備が必要なことばかりです。皆様方のご協力なくしては運営することはできません。今後も様々なことでご協力を願うことがあると思いますが、なにとぞよろしくお願ひします。

最後に新型コロナウイルス感染症拡大による影響が一刻も早く終息に向かいますことを心よりお祈り申しあげます。

高体連より

高体連剣道専門部委員長

玉田晋作

一、大会報告

○第65回徳島県高等学校剣道新人大会兼

全国選抜大会予選

・日時 令和2年1月12日

・会場 ソイジョイ武道館

・男子 参加校数13校

優勝 富岡西

準優勝 川島

第3位 城北・鳴門渦潮

・女子 参加校数6校

優勝 富岡東

準優勝 富岡西

第3位 城北・川島

○第20回四国高等学校剣道新人大会

・日時 令和2年2月1日～2日

・会場 愛媛県武道館

・男子団体 富岡西・川島・城北・鳴門

渦潮が出場、富岡西が準優勝

・女子団体 富岡東・富岡西・城北・川島が出場

・男子個人 8名出場

準優勝 大城穂高(富岡西)

第3位 松本喜起(城北)

・女子個人 8名出場

第3位 塚田志緒(富岡東)

○第60回徳島県高等学校総合体育大会代替

大会(高校3年生個人戦)

・日時 令和2年7月24日(祝)

・会場 ソイジョイ武道館

・男子 36名出場

優勝 大空航己(城北)

準優勝 松本喜起(城北)

第3位 大城穂高(富岡西)

兼松凌真(城北)

・女子 22名出場

優勝 垣内菜々香(富岡西)

準優勝 正木彩加(川島)

第3位 福山花純(富岡東)

福田優那(富岡東)

○第54回徳島県高等学校剣道選手権大会

・日時 令和2年11月15日

・会場 ソイジョイ武道館

・男子 84名出場

優勝 松本尊灯(城北)

準優勝 立石龍之介(阿南光)

第3位 上元佑太(鳴門渦潮)

・女子 50名出場

優勝 岡崎理(富岡東)

準優勝 塚田志緒(富岡東)

第3位 山室愛子(富岡東)

嶋田優月(富岡東)

○第29回全国高等学校選抜大会 中止

○第45回徳島県剣道連盟会長杯争奪高校剣道大会 中止

道大会 中止

○令和2年度徳島県高等学校総合体育大会剣道競技 中止

剣道競技 中止

○令和2年度四国高等学校剣道選手権大会 中止

中止

○令和2年度全国高等学校総合体育大会剣道競技 中止

道競技 中止

○令和2年度国体四国ブロック大会 中止

二、強化事業

○令和2年度徳島県高体連春季強化錬成大

会 中止

○令和2年度徳島県国体少年の部強化錬成

大会

- ・日時 令和2年12月24日～25日
- ・会場 富岡東高校

・招待校

筑紫台高校女子剣道部（福岡県）

東奥義塾高校女子剣道部（青森県）

- ・県内参加者 富岡東10名、富岡西7名、城北6名、阿南光3名、城ノ内2名

三、人口調査

○平成28年度～令和2年度の人口推移

H28年度	H29年度	H30年度
241名	249名	243名
R元年度	R2年度	
242名	219名	

【傾向と課題】

県内高校生の剣道人口は、ここ数年減少傾向で推移してきたが、ここ五年間は240人台を維持してきた。しかし、今年度は前年から23名減（前年度比マイナス10%）の219名となった。この23名減の男女比は、男子22名、女子1名で、男子は前年度比マイナス14%と特に男子部員の減少が顕著である。本年度は新型コロナウイルスの影響で入部を控える者が多かったことが予想される。未だにコロナの収束は先が見えない状況であり、今後さらに剣道人口の減少が危惧される。

大学連より

大学連部長 木原資裕

令和二年度における大学の全国大会・四国大会・四国大会および徳島県大会は新型コロナウイルス感染症対策のため、すべて中止となっています。さらに、大学内の運動部活動も自粛または活動制限が厳しくなされており、また、大学での授業もインターネットを利用したオンライン授業が主体となり、学業においても十分な充実感を得ることのできない一年でありました。この国難ともいえる状況ではありますが、自分を見つめ、深める機会と捉え、一人稽古に励み、稽古を工夫しながら、来たるべき大会に備えてがんばっていきたくと考えております。今後ともご指導の程、よろしくお願いたします。

徳島県高齢剣友会より

乾 清 孝



令和二年度の徳島県高齢剣友会の活動は、コロナ対策のため総会の延期はもとより、四

国高齢者剣道交流大会、全日本高齢者武道大会、徳島県健康福祉祭剣道交流大会の各大会の中止に加え、定例稽古会、県西部・南部稽古会も自粛せざるを得なくなりました。

しかし、六月十一日付の県連の解除通知を受け、稽古再開は高齢者特有の既往症、体力の低下、重症化等を考慮して解除後一か月を置いての七月十一日から「感染予防ガイドライン」に基づき「面マスク」・「シールド」を着用して実施することとなりました。

なお、総会・理事会は、稽古再開日に合わせて七月十一日に開催し、本年度は高島

会長以下九十八名（役員改選等なし）の体制で活動を開始しました。

◎主な行事

三月

臨時四国高齢剣打ち合わせ会（一回目）
コロナ対策のため、第七回四国高齢者剣道交流大会は一年間延期する。（愛媛県開催）
以後の対応は、改めて打ち合わせ会で決定する。

十一月

臨時四国高齢剣打ち合わせ会（二回目）
一年延期していた愛媛開催の大会は、現時点ではさらに一年延期する。

〈事務局雑感〉

「えっと振りじゃな。元気にしようで。」
「ほんまじゃな。おまはんこそ元気にしよったで。」
「もう、身体が鈍ってしもて、しゃーないな。」

との出会い頭の一声が道場のあちこちで聞こえてきて、稽古再開初日（三十一名参加）のほんわかとした中にも久し振りに稽古ができるという浮き浮きした高揚感と剣道仲

間の元気な姿を見ることができたという連帯感に溢れる一コマの風景がありました。

剣道が各先生方の生活や人生の一部に取り込まれていることを実感させられ、私もそんな先生方の一員になれたことに幸せを感じる場面でした。

前職を退職して七年が経ちますが、健康管理にと剣道を再開した私がかんなに充実した経験をすることとなるとは当時は夢にも思いませんでした。こうした思いを多くの後輩にも体験してほしい、後に続く後輩を育てたいとの思いに駆り立てられています。

ということで、各先生方には一人一名の新規入会者の勧誘をお願いします。

徳島県剣道稽古場所一覧（令和3年度版）

支部名	教室および道場名	代表者・連絡先	稽古場所	日時 (少年・一般の区別明記のこと)
徳島支部	徳島少年剣道教室	生田浩章 088-664-1971	徳島剣道教室剣道場	少年 (火・水) 17:30-19:30 (土) 16:00-
	蔵本少年剣道クラブ	福永 徳 088-631-0207	加茂名中学校武道場	少年 (火・金) 19:00-21:00 (日) 18:00-21:00
	加茂名少年剣道教室	鈴江俊和 088-631-4753	加茂名小(木) 加茂名中(土) 加茂名南小(日)	少年 (木・土) 18:00-19:45 (日) 17:20-19:30
	東内道場	東内 勉 088-631-3971	研修道場 東内会館	少年 (木・土) 18:00-20:00
	上八万剣道倶楽部	川人 護 088-668-1384	上八万小学校体育館	少年 (水・土) 17:00-19:00 一般 (水・土) 19:00-21:00
	宅宮(えのみや)剣道倶楽部	河野通宣 088-668-0167	えのみや睦会武道場	少年 (土) 19:00-21:00
	入田錬成会	佐藤佳宏 088-644-3124	入田中学校体育館	少年 (火・土) 19:30-21:30 一般 (火・土) 21:30-22:30
	北井上剣道教室	美馬勝行 088-642-3898	北井上中学校体育館	少年 (火・金) 19:00-21:00
	徳島清風館道場	久保隆司 088-633-0727	国府小学校体育館	少年 (土・日) 17:00-19:00
	養武館	米倉 滋 088-668-6650	八万中剣道場(火) 養武館道場(木・土)	少年 (火) 19:00-21:00 (木・土) 19:30-21:00
	徳島親道館剣道場	矢武秀生 088-644-5171	親道館道場	少年 (火・金) 19:00-20:30
	佐古剣道クラブ	谷本浩志 088-637-2204	佐古小学校体育館	少年 (火・木) 17:00-19:00 (日) 9:00-12:00
	渭東少年剣道教室	吉田昌彦 088-664-2153	城東中学校黎明館	少年 (火・木・金) 19:00-21:00
	徳島錬心館	大澤孝彰 088-654-6325	錬心館道場	一般 (火・木・土) 19:00-20:00
	松紀和会道場	松村和宏 090-8970-4863	松紀和会道場	少年 (火・水・木・金) 19:00-20:30
日垂錬心塾	山本泰史 090-3780-9813	大松小学校(月・土) セント歯科(木)	(月) 18:10-19:30 少年 (木) 18:30-20:30 (土) 13:00-15:00	
鳴門支部	鳴門市光武館	寺西明弘 088-685-0703	光武館剣道場	少年 (火・木) 18:30-20:30 (土) 17:30-19:30
	鳴門市少年剣道教室	石村行範 088-686-8923	鳴門ソイジョイ武道館	少年 (月・水) 18:00-20:00 (土) 9:00-11:00 一般 (月) 20:00-21:00
	大麻錬成館	近藤敏晴 088-689-0857	大麻中学校剣道場	少年 (火・土) 18:30-20:00
板野東支部	北島少年剣道教室	伊賀雅人 088-698-4528	北島北小学校体育館	少年 (月・木) 19:00-20:30 一般 (月) 20:45-22:00
	誠武館道場	井川理之 090-4976-4477	北島町立武道館	少年・一般 (木・金・土) 19:00-21:00
	松茂少年剣道教室	米田利彦 088-699-6176	松茂町第二体育館 (武道館)	少年・一般 (火・金) 19:00-22:00
	修武館道場	武田修典 080-5664-2686	修武館道場	少年 (月・水・木) 18:30-20:00 一般 (水) 18:30-20:00

板野西支部	板野西稽古場	久次米繁興 088-692-7198	藍住町武道館	一般（火・木・土）21:00-22:00
	藍住剣道スポーツ少年団	久次米繁興 088-692-7198	藍住町武道館	少年（火・木・土）19:00-20:30
	剣道板野道場	米崎信弥 090-4972-4177	板野町体育センター	少年（火・水）19:30-21:00 少年（日）9:00-11:00
	上板少年剣道教室	藤本辰夫 088-694-5031	神宅小学校体育館	少年・一般（月・木） 19:00-21:00
阿波支部	阿波少年剣道教室	桑原啓治 090-2789-1801	林小学校体育館（火） 阿波中学校体育館（木）	少年（火・木）19:00-21:00
	土成町剣道スポーツ少年団	出口正春 088-695-3606	土成農業者 トレーニングセンター	少年（火・金）19:30-21:00
	市場剣道教室	井内勝則 0883-36-2686	市場武道館	少年（火・木・土）19:30-21:00
	阿波支部稽古会	塩田善治 0883-35-2894	市場武道館	少年・一般（月）20:00-21:00
美馬支部	脇町少年剣道教室	柴田宗忠 0883-53-2629	脇町小学校体育館	少年（火・金）19:00-21:00 一般は8:30-22:00
	徳島春風館道場	青木茂生 0883-53-7118	徳島春風館道場	少年・一般（月・木・土） 19:30-21:00
	半田剣道教室	大川 功 0883-64-2181	半田スポーツセンター	少年・一般（月・木） 19:00-21:00
	美馬市体協剣道部	中川 正 0883-53-0116	脇町中学校武道館	一般（月・水・土）19:00-22:00
三好支部	東みよし淳志館	増田和広 0883-79-3704	三好中学校体育館	少年・一般（月・木） 19:00-21:00
	佐馬地少年剣道クラブ	笠井憲次郎 0883-74-0036	馬路小学校体育館	少年・一般（水）19:30-21:30
	三野少年剣道クラブ	久保和雄 0883-77-3899	三野中学校体育館	少年（土）18:00-20:00
	山城町剣道修錬クラブ	島尾眞且 0883-86-1398	山城中学校武道館	少年・一般（水・土） 19:30-21:30
	奥祖谷剣道クラブ	中石 昭 0883-88-5802	旧 栃之瀬小学校 体育館	少年（火・金）19:30-21:00
	井川武道会	中川勝弘 0883-78-2115	三好市柔剣道場	少年（水）20:00-21:00
麻植支部	麻植支部稽古会	日野利之 090-2783-3416	川島中学校体育館	少年・一般（金）（20:00-21:30）
	上浦剣道教室	近久 寛 090-1329-7817	上浦小学校体育館	少年（水・土）18:30-20:00
	鴨島少年剣道教室	藤川和秋 090-2786-5975	鴨島第一中学校武道館	少年（火・木・土）19:15-21:00
	川島剣道スポーツ少年団	猪野和男 0883-25-6004	農村環境改善センター 市立川島中学校体育館	少年（火・木・土）19:00-21:00
	山川スポーツ少年団 修錬館	柳谷照男 0883-42-6936	山川中学校武道館	少年（水・土）19:00-21:00
	吉野川少年剣道教室	片山尊史 0883-25-6014	牛島小学校体育館 西麻植小学校体育館	少年（火・水・金・土） 20:00-22:00
	寶 壽 館	日和田慈海 0883-42-3605	醫 光 寺	随時利用可 ただし、事前確認のこと

徳島の剣道

阿南支部	阿南少年剣道教室	中西 実 088-664-4879	阿南市武道館	少年(火・木・金) 19:00-21:00 一般(火・金) 21:00-22:00
	新野少年剣道教室	馬見和秀 0884-36-2428	新野小学校体育館	少年(火・木・土) 18:30-20:30
	大野小学校剣道部	西岡直彦 0884-22-6535	大野小学校体育館	少年(月・水・木) 18:30-20:30 一般(水) 21:00-22:00
	徳島至誠館	中山繁輝 090-1002-8976	徳島至誠館道場	少年(月・水・金) 19:00-21:00
	那賀川少年剣道クラブ	二反田和則 0884-21-2207	今津小学校体育館(火) 那賀川B&G体育館(水・金)	少年(火・水・金) 19:00-21:00
	那賀川剣道教室 わかあゆ会	山田耕司 0884-42-3381	平島小学校体育館	少年(月・水・金) 19:00-21:00
	羽ノ浦少年剣道教室	森 眞一 0884-44-5415	羽ノ浦中学校武道館	少年(火・金) 19:00-21:00 一般(水) 19:30-21:00
	徳島剣清塾	河田 清実 090-1579-7001	阿南第一中学校剣道場	少年(月・水・金) 19:00-21:00
丹生谷支部	振武館	奥田博志 0884-62-1134	那賀町B&G 海洋センター武道場	少年(水・金) 19:00-21:00 一般(水・金) 21:00-22:00
	相生龍虎館	山下勝也 0884-62-0834	相生小体育館	少年(火・木・土) 16:00-18:00
	木頭錬心館	小川大造 0884-68-2242	木頭中柔剣道場	少年・一般(月・水・金) 18:00-20:00
	北川小学校剣道クラブ	谷 次郎 0884-69-2430	那賀町北川体育館	少年(月・水) 18:00-19:30 (金) 18:00-20:00
小松島支部	小松島支部稽古会	梅山寧史 0885-33-1251	小松島中学校武道場	一般(木) 19:30-21:00
	小松島小剣クラブ	青木博志 0885-33-1251(梅山)	北小松島小学校体育館(月金) 小松島小学校体育館(水)	少年(月・水・金) 19:00-21:30
	和田島少年剣道クラブ	園田慎吾 090-1572-3951	和田島小学校体育館	少年(火・金) 19:00-21:00
	立江剣道教室	原 知永 0885-38-2121	立江小学校体育館	少年(火・土・日) 18:30-20:00
海部支部	海部川剣道教室	丸岡偉人 0884-73-3175	海部小学校体育館	少年・一般(月・木) 19:00-20:45
	牟岐剣道クラブ	谷口順二 0884-72-0490	牟岐町民センター	少年・一般(月・水) 19:00-21:00 少年・一般(土) 18:30-20:00
	一心館道場	影山美雄 0884-79-3125	一心館剣道場	少年(月・木) 16:30-18:00 一般(水・第2金・第4金) 18:00-20:00
名西支部	石井少年剣道クラブ	近藤正章 088-674-5288	石井町立高浦中学校武道場	水・土 19:30-21:30
	久武館	瀬部克好	久武館道場	水・土 19:30-21:30
県剣道連盟	徳島県剣道連盟稽古会		中央武道館	一般 木 19:00-20:30
	女子部稽古会		中央武道館	一般 第1日曜 18:00-19:00
	高齢剣稽古会	乾 清孝 090-4974-0107	ソイジョイ武道館	一般 土 14:00~ 開催日は毎月変更(要確認)

居合道 道場案内

日本古来の伝統武道である居合道。時代を超えて受け継がれてきた居合道をより多くの人に体験していただきたいと願っております。是非お問い合わせ下さい。 居合道部

道場名	代表者・連絡先	稽古場所	日 時
大和 錬心館	錬士六段・西本 忠司 自宅 0884-69-2120 携帯 090-7143-0160	木頭中学校柔剣道場 那賀町木頭和無田	火曜日 19:00～21:00 木曜日 19:00～21:00
徹心道場	代表者 教士七段・吉岡 修一 0883-24-5341	鴨島第一中学校武道場	月曜日 19:30～21:30 水曜日 19:30～21:30 金曜日 19:30～21:30 (少年)
大和 養心館	範士八段・原田 勝 自宅 0885-33-0222 携帯 090-7141-8996	大和養心館 小松島市金磯町11番78号	月曜日 18:00～21:00 水曜日 18:00～21:00 金曜日 18:00～21:00
阿波洗心館	代表 五段・村井 恒治 090-3789-7846	松茂町第二体育館	火曜日 20:00～22:00 (月曜祝日の週は休み)
		セント歯科体育館	土曜日 19:00～21:00
居合道錬成会	四段・鎌田 貴 携帯 080-5661-7133	徳島県立中央武道館	月曜日 19:00～21:00 金曜日 19:00～21:00
阿波居合道伝習会	教士八段・坂本 憲一 自宅 0883-36-3008 携帯 090-1576-4773	阿波市立八幡小学校体育館	火曜日 19:00～22:00
		徳島市農業環境改善センター	水曜日 19:00～21:00
		徳島県立中央武道館	月曜日 19:00～21:00 金曜日 19:00～21:00
大湊道場 (全日本剣道連盟)	教士七段・福井 勝 携帯 090-5143-3596	阿南市武道館	日曜日 10:00～12:00 (行事日を除く)
鳴門道場	錬士六段・満壽 良史 自宅 088-686-7115 携帯 090-9778-2350	鳴門市健康福祉交流センター 軽運動場	土曜日 9:30～12:00 (第1・3土曜を除く) 日曜日 9:30～12:00
徳島春風館道場	錬士六段・青木 茂生 自宅 0883-53-7118 携帯 090-8693-4935	徳島春風館道場 (穴吹町三島)	水曜日 19:30～21:00
剣道・板野道場	五段・川人 政利 自宅 088-698-2970	南公民館	水曜日 19:30～21:30
		板野町体育センター	日曜日 11:00～12:00

※令和3年度徳島県剣道連盟の新しい取組みとして以下のプロジェクトを実施します。ふるって申し込み下さい。

頑張れ！少剣強化プロジェクト実施要項

1 趣旨・目的

平成2年度は、新型コロナウイルス感染拡大のため、全国大会はもちろん県下の剣道大会、錬成会等も中止を余儀なくされ、緊急事態宣言中は、剣道の稽古さえも一時中止されました。現在、高体連や中体連の剣道大会は、感染対策を行いながら少しずつ復活の兆しが見えていますが、少年剣道教室に所属する少年剣士は、今だに全国大会及び県下剣道大会が開催されず県下58教室、少年剣士562人は、ほとんど各道場において稽古のみに頑張っており取り組んでいます。しかし現状は、指導者も少年剣士も新型コロナウイルス感染のため大会が開催されず閉塞感や失望感に追い込まれ、剣道の技術や精神的にも成長に繋がっていません。

このため剣道連盟は令和3年度において、この現状を打破するためピンチをチャンスとしてとらえ、少年リーダー強化訓練（人数制限、分散実施等）のほか、県下各地域における剣道大会、錬成会等の開催を奨励するため「頑張れ!少剣強化プロジェクト」を立ち上げることとしました。

2 「頑張れ!少剣強化プロジェクト」実施内容

(1) 実施期間

令和3年4月1日から令和4年2月20日までの間

(2) 実施内容

- 各支部、剣道教室が開催する少年剣道大会、錬成会
- 連盟会長が地域に貢献していると認めた剣道大会、錬成会に対し、連盟から補助金を交付し支援する。

(3) 補助金対象費目、金額

- 対象費目 会場費、交通費、新型コロナウイルス感染防止対策費
- 補助金額 上限3万円を補助する。

(4) 手続き

「頑張れ!少剣強化プロジェクト」申込書に必要事項を記入し、連盟事務局（事務局長）に開催日1か月前には申し込むこと。

(5) 新型コロナウイルス感染拡大防止対策の徹底

大会等の運営においては、全剣連の「主催大会実施にあたっての感染拡大予防ガイドライン」を遵守すること。

3 実施結果報告

- (1) 「頑張れ!少剣強化プロジェクト」実施報告書により報告すること。
- (2) 報告書には会場費「徳島県剣道連盟」宛て領収書（原本）及び指導者名簿（県補助金用）を添付すること。

※全剣連の要請により、本連盟においても医・科学委員会が設置されることとなりました。

医・科学委員会に関する内規

(委員会の設置)

第1条 徳島県剣道連盟会則第4条第1項第7号に定める剣道等の医・科学に関する事業のため、医・科学委員会をおく。

(任 務)

第2条 医・科学委員会は、次の任務を担当する。

- (1) 剣道人等の健康問題に係る医学面からの調査及び研究に関すること。
- (2) 医・科学に関する研修会、講習会等の開催及び派遣に関すること。
- (3) 「安全」をキーワードとした武道具・用品の調査及び研究に関すること。
- (4) 剣道等における重大事故発生時の情報収集、分析、要因の解析等による事故防止対策のほか、全日本剣道連盟への報告に関すること。

(委 員)

第3条 医・科学委員会は、次の5名の委員をもって構成する。

- (1) 委員長 1名(会員である医師)
- (2) 副委員長 1名(理事長)
- (3) 委員 3名(副理事長、事務局長、剣道具店経営の会員1名)

2 委員の任命は県剣連会長が行う。

3 委員の任期は2年間とする。ただし再任を妨げない。委員が欠けたときは県剣連会長が選出し、任期は前任者の残留期間とする。

(重大事故調査)

第4条 県内において剣道における重大事故(入院を要するもの・入院治療と同等の治療を受けた場合)が発生した場合、医・科学委員会は、事故の概要把握、要因の分析等のため、連盟の支部、剣道教室、専門部会等に対し必要な指示及び調査・報告を求めることができる。

(報 告)

第5条 医・科学委員会は、剣道における重大事故が発生した場合は、事故発生1週間以内に全日本剣道連盟に重大事故報告フォームにより報告するものとする。

(会の招集)

第6条 医・科学委員会は、必要の都度委員長が招集し、これを主宰する。

(運 営)

第7条 医・科学委員会の運営に関しては、会則第12条4項を準用するほか、必要な事務は事務局において処理する。

附 則

1 この内規は令和3年4月1日より施行する。

令和2年度 大会 記録

第45回 徳島県中学校新人剣道大会

日時 令和2年11月21日(土) 女子

令和2年11月23日(月・祝) 男子

【団体戦】

場所 鳴門ソイジョイ武道館

順位	女子	順位	男子
優勝	那賀川中学校	優勝	徳島中学校
準優勝	国府中学校	準優勝	那賀川中学校
第3位	徳島文理中学校	第3位	阿南中学校
第3位	土成中学校	第3位	小松島中学校

[男子決勝]

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝敗	代表戦
徳島	藏本	三宅	篠原	橋本	片岡	$\frac{3}{2}$	
	ココ		メ				
那賀川				ド		$\frac{1}{1}$	
	大和	和泉	原	平松	橋本		

[女子決勝]

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝敗	代表戦
那賀川	高嶋	内田	山本	甘利	柏原	$\frac{6}{4}$	
	コメ		メ	メ	メコ		
国府						$\frac{0}{0}$	
	板場	月岡	香川	谷本	國見		

第31回 徳島県中学校剣道強化錬成大会

日時 令和3年1月16日・23日(出)
場所 鳴門ソイジョイ武道館

[団体戦]

順位	男子	順位	女子
優勝	徳島中学校	優勝	木頭・高浦中学校
準優勝	那賀川中学校	準優勝	那賀川中学校
第3位	木頭・高浦中学校	第3位	国府中学校
第3位	阿南中学校	第3位	土成中学校

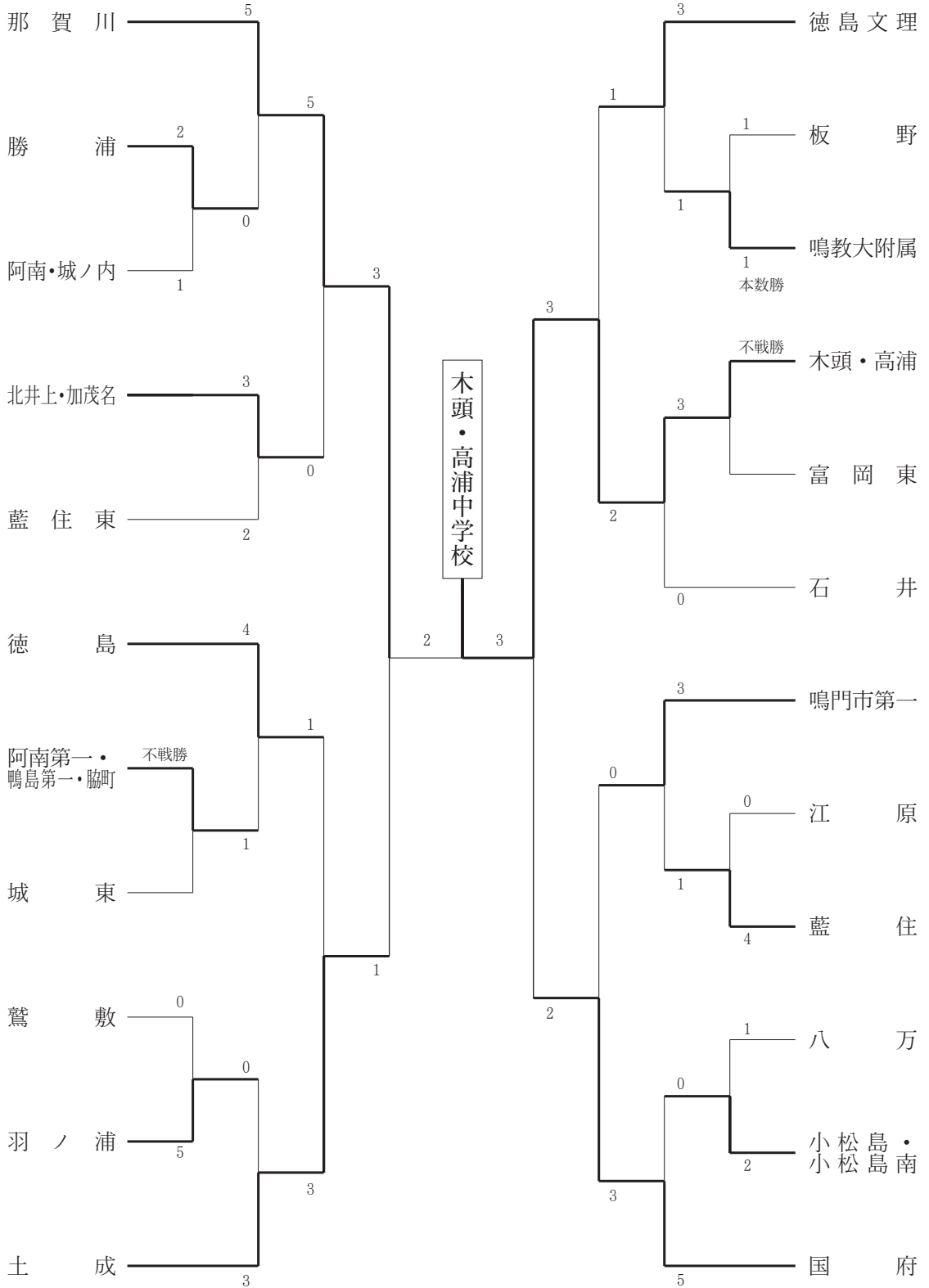
[男子決勝]

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝敗	代表戦
徳島	藏本	橋本	篠原	楠本	片岡	○ $\frac{5}{3}$	
	メ	メ	メ	メ	ドコ		
那賀川		メ		メ		△ $\frac{1}{0}$	
	大和	和泉	尾畑	平松	橋本		

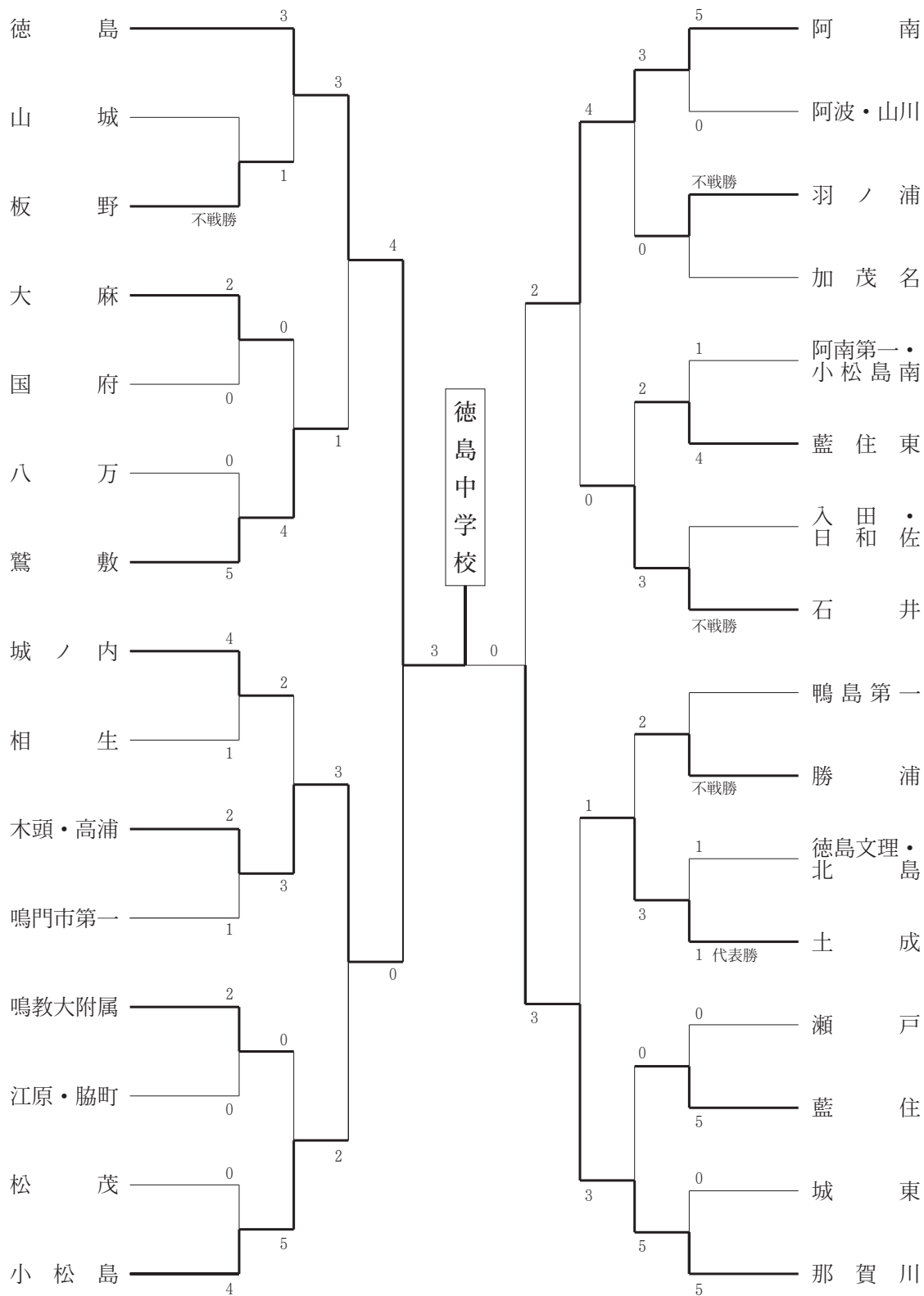
[女子決勝]

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝敗	代表戦
那賀川	高嶋	内田	山本	甘利	柏原	△ $\frac{4}{2}$	
	コメ	○○					
木頭・高浦			メ	反メ	コメ	○ $\frac{5}{3}$	
	赤池		近藤	鈴江	福岡		

〈女子団体戦〉



〈男子団体戦〉

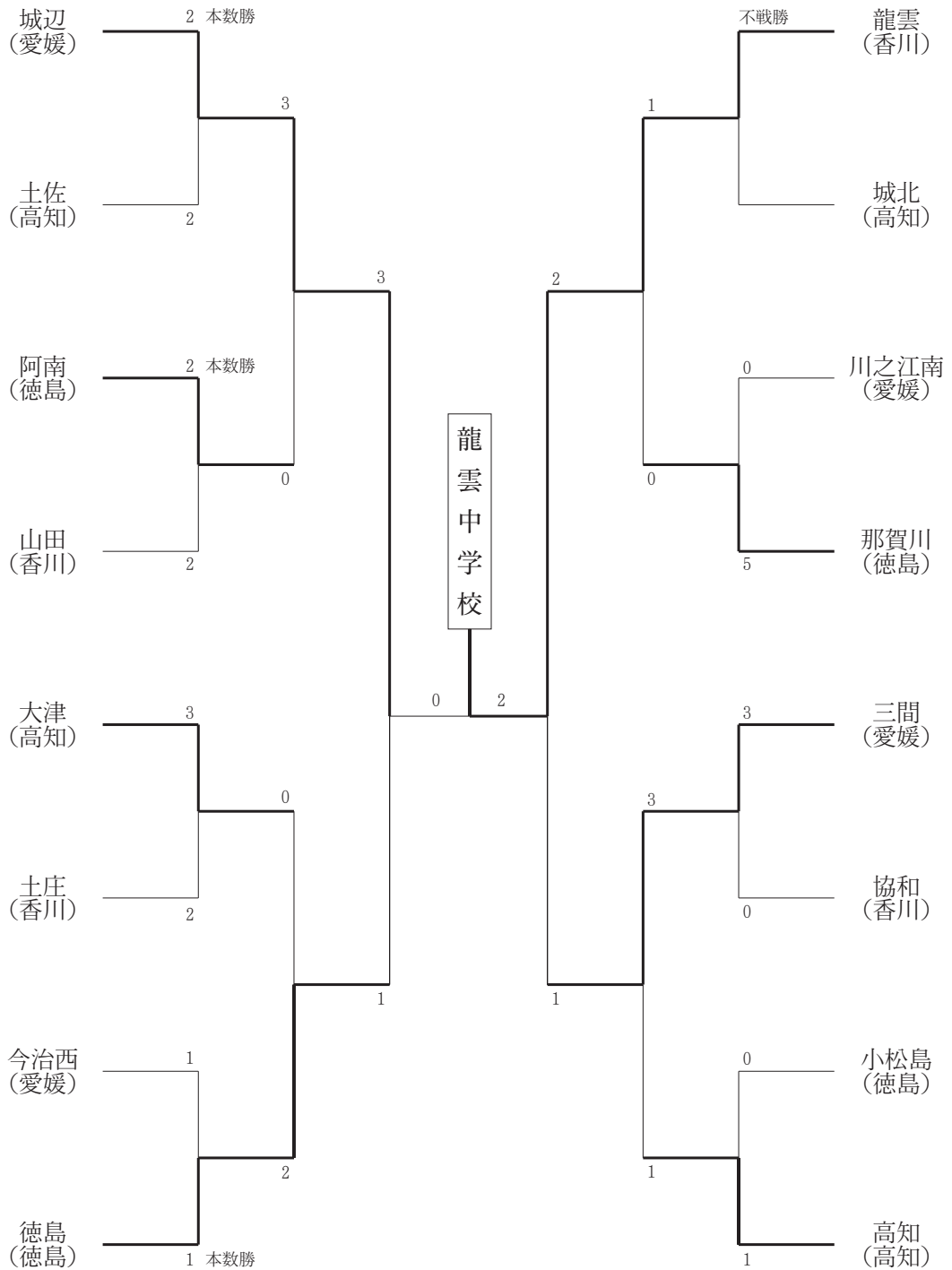


第16回 四国中学校新人剣道大会

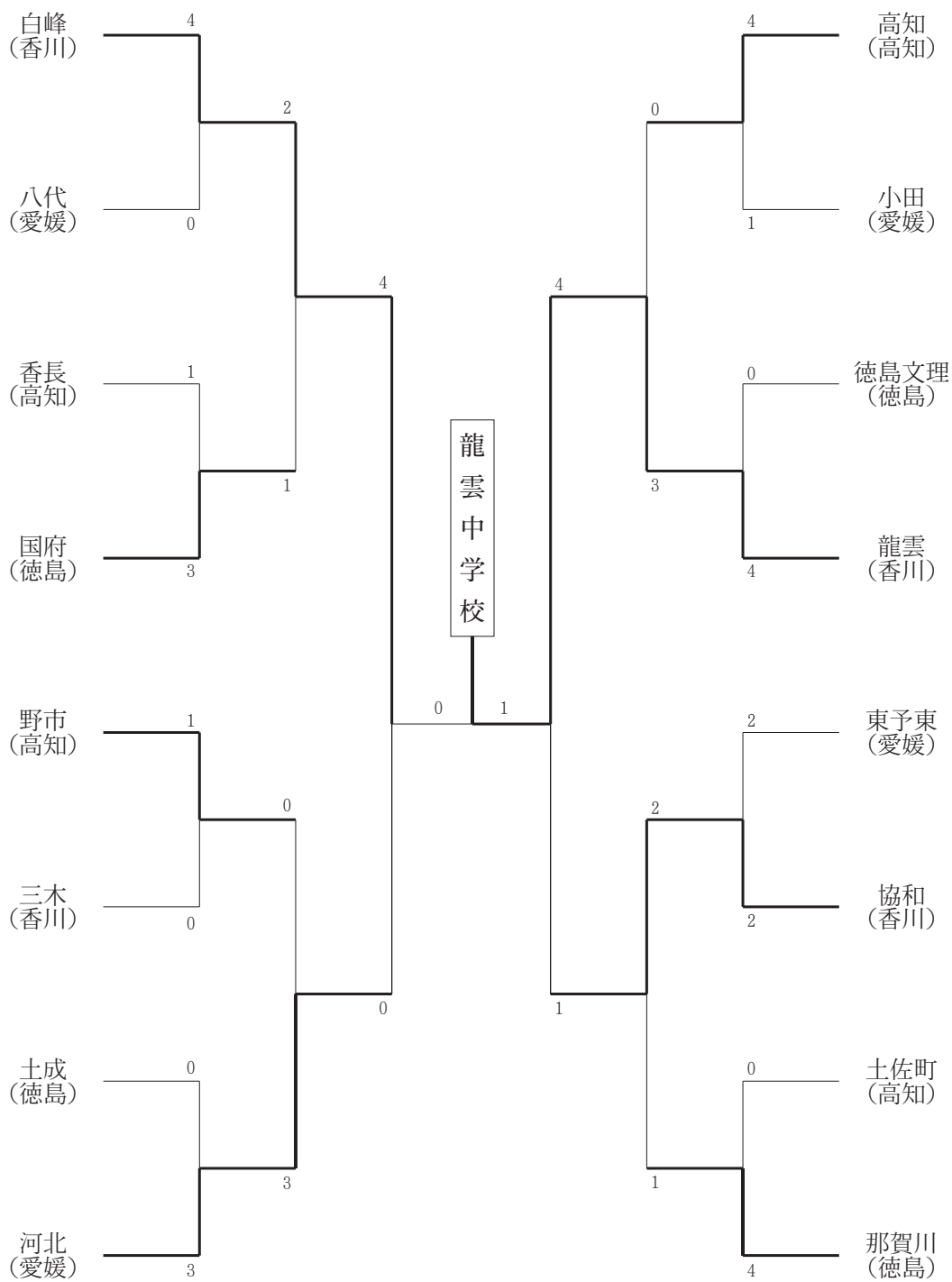
日 時 令和 3 年 2 月 27 日 (土)

会 場 う だ つ ア リ ー ナ

〈男子団体戦〉



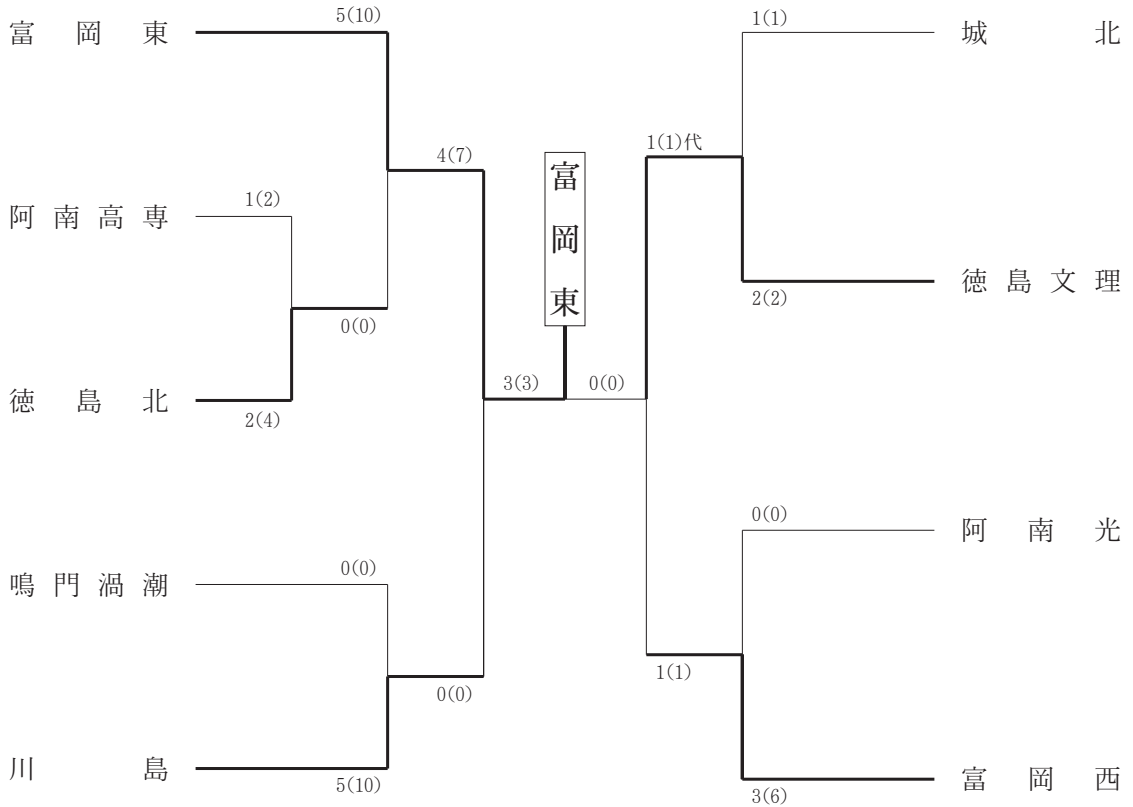
〈女子団体戦〉



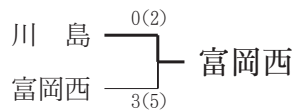
第65回徳島県高等学校剣道新人大会兼全国選抜大会予選

女子の部

日 時 令和 2 年 1 月 12 日
場 所 鳴門ソイジョイ武道館



順位決定戦



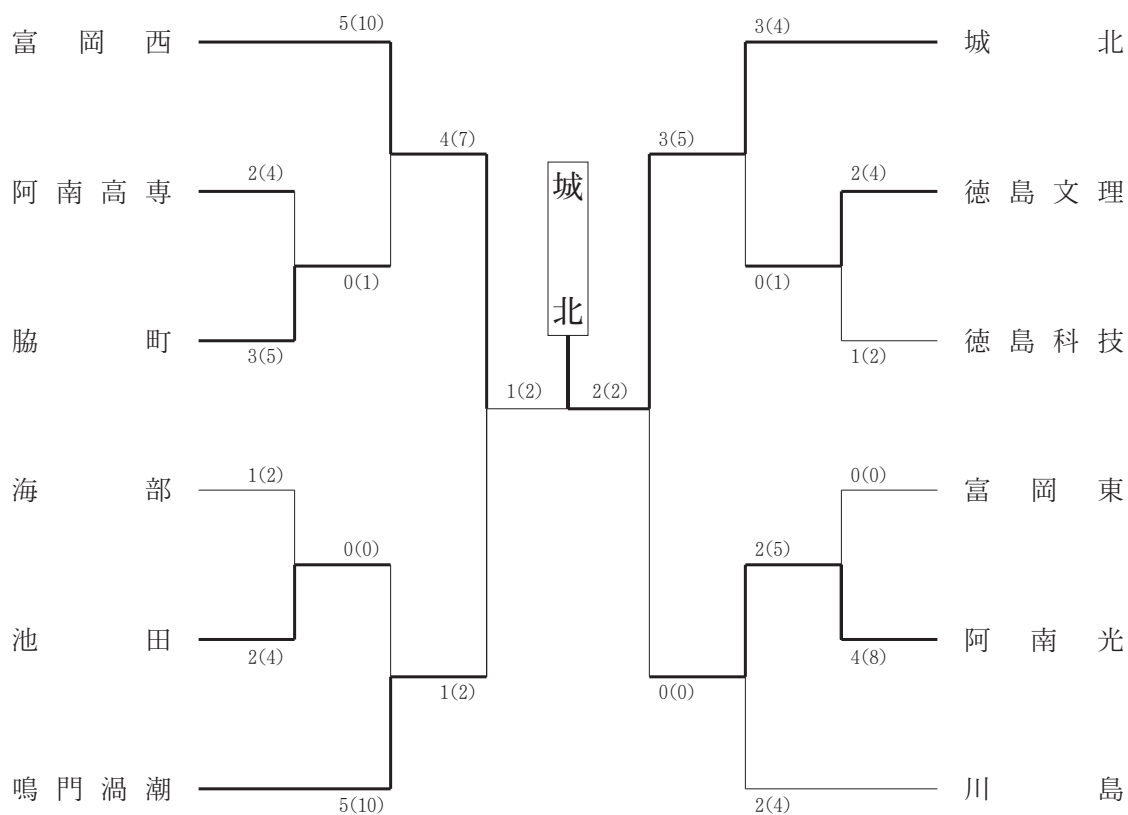
決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
富岡東	藤井	山田	塚田	岩本	岡崎	3	3	
	⊗	一本勝	⊗	一本勝	⊗			
徳島文理	古川	佐藤	播磨	金野	▲一楽	0	0	
	⊗		⊗					

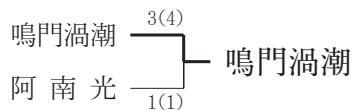
順位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
川島	伊丹	坂東	大塚	田村	野崎	0	2	
	⊗		⊗	⊗	⊗			
富岡西	一本勝	一本勝	⊗	⊗	⊗	3	5	
	⊗	⊗	福本	中山	松葉			

男子の部



順位決定戦



決勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
富岡西	松田	三好	田上	岩谷	橋本	1	2	
	△	△	⊖		▲			
城北	△	△		一本勝⊗	一本勝⊗	2	2	
	添木	小山田	武知	永濱	松本			

順位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
鳴門渦潮	上元	安井	四宮	谷本	米田	3	4	
	▲	⊗	△	一本勝	一本勝			
阿南光	一本勝⊕		△			1	1	
	玉垣	次原	富田	津山	立石			

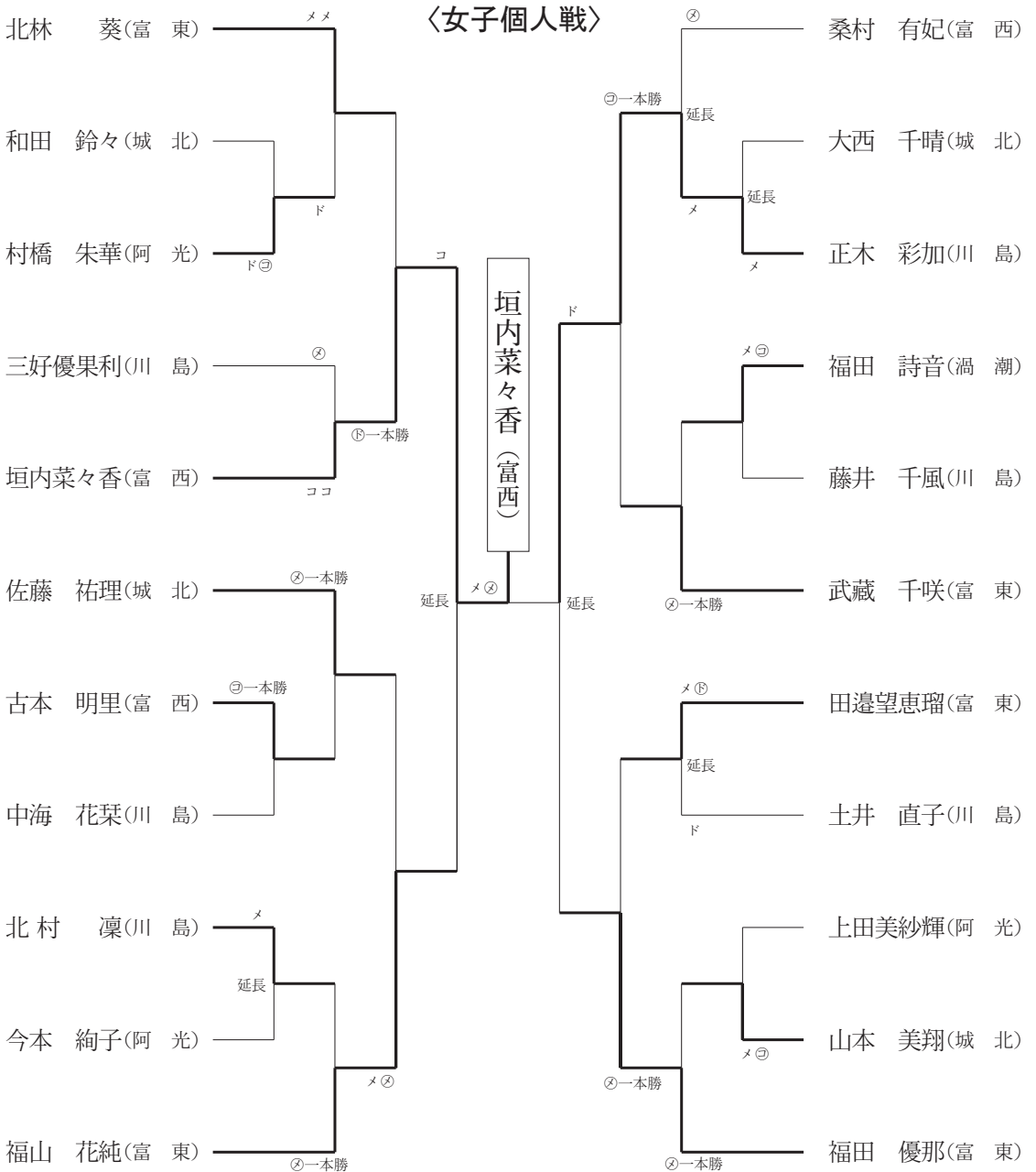
第60回 徳島県高等学校総合体育大会代替大会剣道競技

女子の部

日時 令和2年7月24日(金)

場所 鳴門ソイジョイ武道館

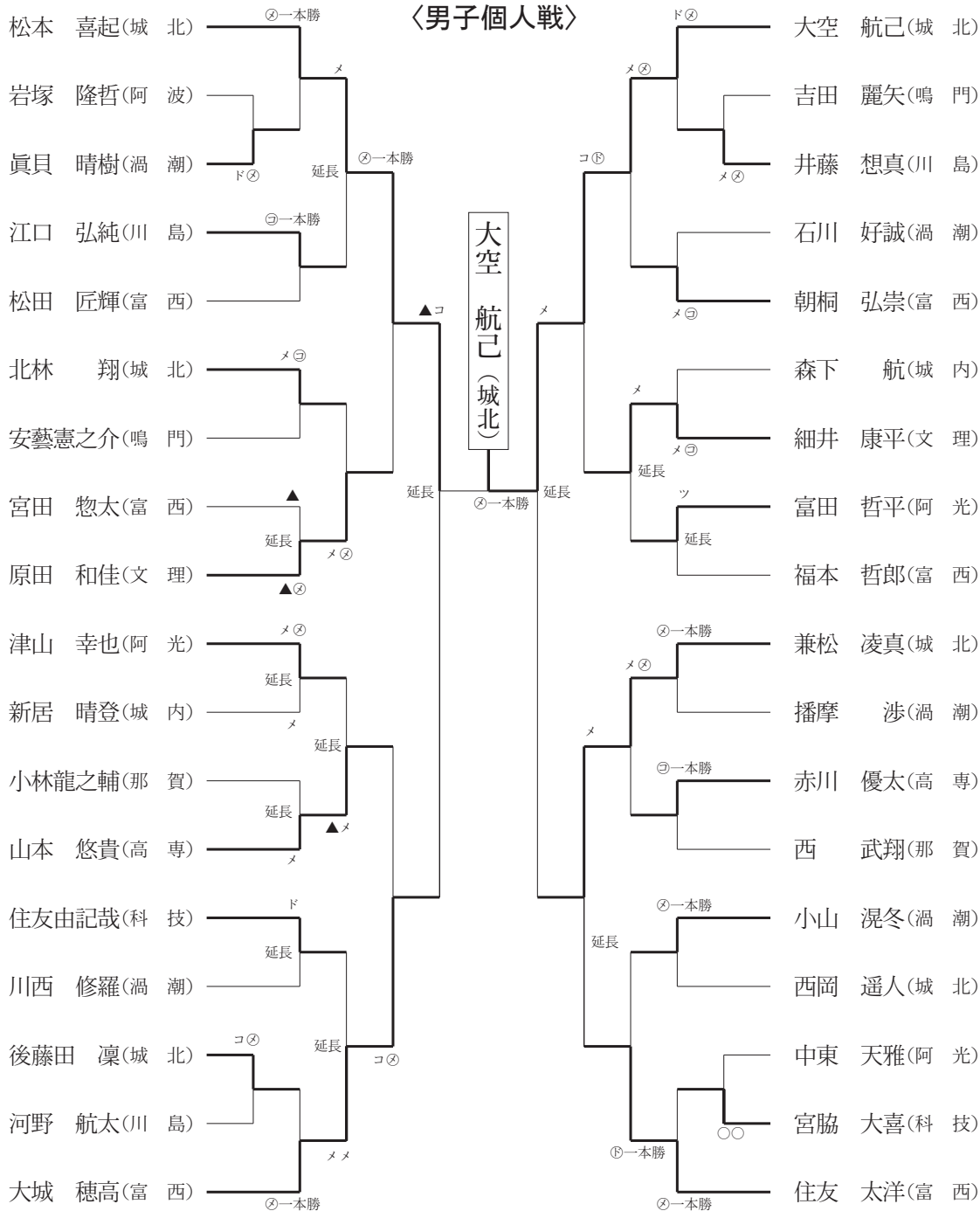
- 優勝 垣内 菜々香 (富西)
- 準優勝 正木 彩加 (川島)
- 第三位 福山 花純 (富東)
- 第三位 福田 優那 (富東)



男子の部

優勝 大空 航己 (城北)
 準優勝 松本 喜起 (城北)
 第三位 大城 穂高 (富西)
 第三位 兼松 凌真 (城北)

〈男子個人戦〉

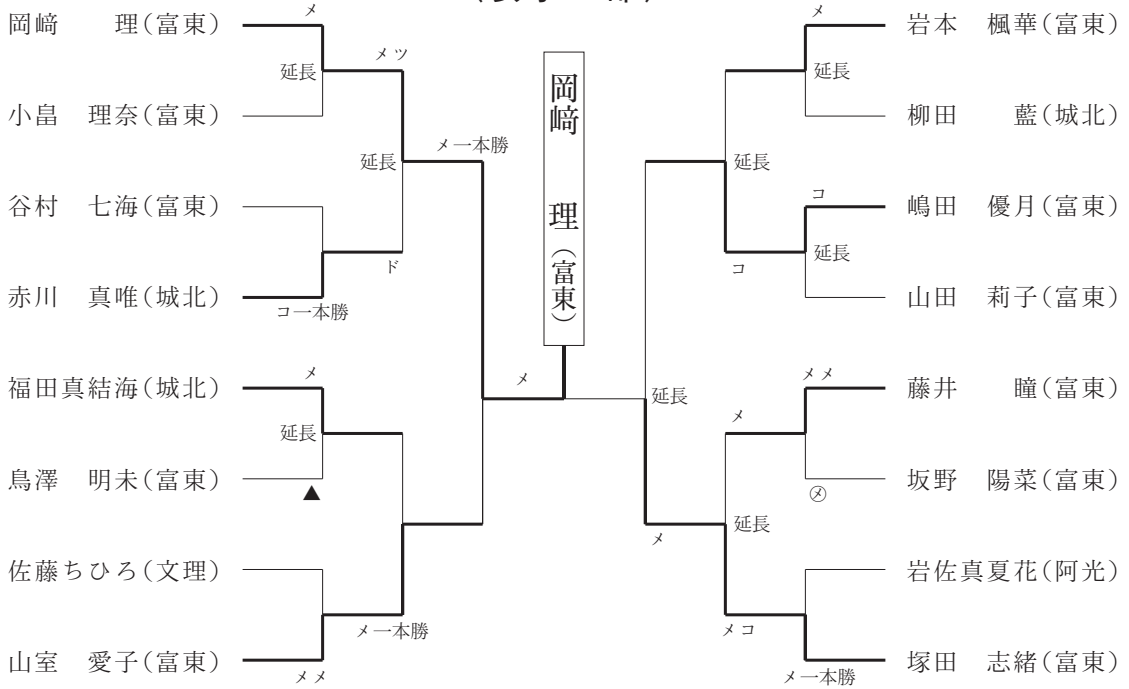


第54回 徳島県高等学校剣道選手権大会

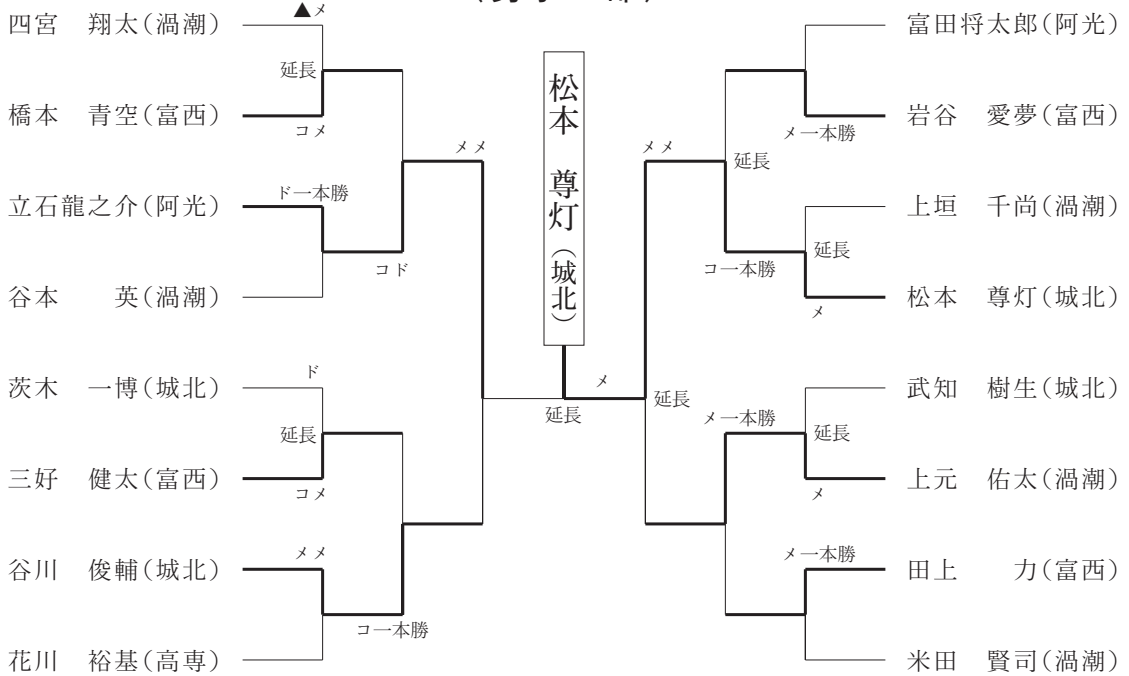
日時 令和2年11月15日(日)

会場 鳴門ソイジョイ武道館

〈女子の部〉



〈男子の部〉

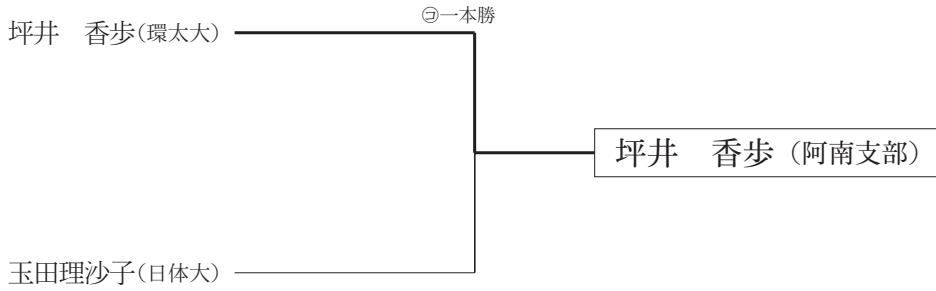


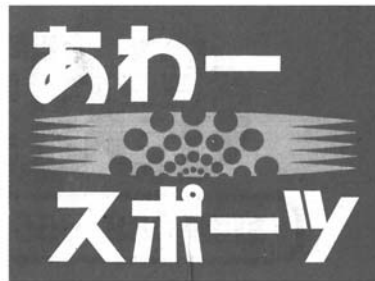
第68回 全日本剣道選手権大会県予選会 第59回 全日本女子選手権大会県予選会

優勝 白木 恒二郎 (名西支部) 日時 令和3年1月31日(日) 午前9時30分開会
 準優勝 美馬 州一 (徳島支部) 場所 中央 武 道 館
 第三位 濱田 諒 (阿南支部)
 第三位 山ノ井 陽 介 (阿南支部)



優勝 坪井 香歩 (環太平洋大学〔阿南支部〕)
準優勝 玉田 理沙子 (日本体育大学大学院〔徳島支部〕)





剣道

◆2019年度阿南支部少年大会
「6年生を送る会」
(2月23日・阿南市武道館)

【団体】①那賀川教室わかあゆ
会A(先鋒Ⅱ尾畑涼月、中堅Ⅱ原
那由多、大将Ⅱ平松政樹)②新野
教室A(甘利慧、高瀬純菜、吉田
遥人)③阿南教室A(山本実加
子、福多伊織、森川凌太郎)④那
賀川教室わかあゆ会B(黒崎蒼
太、稲田裕亮、仁尾徳之進)

【個人】小学1年①羽坂菜那
(那賀川教室わかあゆ会)②平田
愛芽(徳島剣清塾)③亀井心暖
(徳島剣清塾)④水口萌香(徳島
剣清塾)▽2年①河田淳紀(徳島
剣清塾)②小原陽斗(大野小剣道
部)③須藤汰心(阿南教室)④山

ノ井夏希(那賀川教室わかあゆ
会)▽3年①河田蒼生(徳島剣清
塾)②高瀬智菜(新野教室)③吉
田晃人(新野教室)④本庄媛鞠
(大野小剣道部)▽4年①阿井輝
(阿南教室)②西岡葵土(阿南教
室)③岩浅花(徳島剣清塾)④木
村仁(阿南教室)▽5年①大和希
輔(那賀川教室わかあゆ会)②林
巧(阿南教室)③濱田百合愛(那
賀川教室わかあゆ会)④奥津瑛太
(那賀川教室わかあゆ会)▽6年
①原那由多(那賀川教室わかあゆ
会)②仁尾徳之進(那賀川教室わ
かあゆ会)③尾畑涼月(那賀川教
室わかあゆ会)④平松政樹(那賀
川教室わかあゆ会)
▽錬成賞 森川凌太郎、林蓮
阪本奏一郎、福多伊織、山本実加
子、入江亮太(以上阿南教室)平
松政樹、仁尾徳之進、原那由多、
尾畑涼月、黒崎蒼太、稲田裕亮、
山崎春花、濱田心愛(以上那賀川
教室わかあゆ会)甘利慧、佐々木
清人、高瀬純菜、吉田遥人(以上
新野教室)

2020年(令和2年)7月25日 土曜日

新型コロナ 主要関連記事



代替大会各競技でV決まる 21面

徳島県高校総合体育大会代替大会は24日、3競技が行われた。ソフトボールは男子が小松島、女子は池田辻が優勝。ホッケー男子は阿南光が富岡西を下した。3年生だけが参加して個人戦が行われた剣道も優勝者が決まった。

男子 大空(城北)
女子 垣内(高岡西) V

剣道
(鳴門)イシヨイ武道館

【男子】個人準々決勝 松本(城北)メー 原田(徳島文理)、大城(富岡西)メー 山本(阿南高専)、大空(城北)ド
コー 細井(徳島文理)、兼松(城北)メー 俵(富岡西)メー
準決勝 松本コト 大城、大空メー 兼松
▽決勝



女子個人決勝 川島の正木を下し優勝した富岡西の垣内(左)鳴門イシヨイ武道館(家段良臣撮影)

大空メー 松本
【女子】個人準々決勝 垣内(高岡西)ド 北林(富岡西)メー 佐藤(富岡東)、福田(富岡東)メー 佐藤(城北)、栗(川島)コ
武蔵(富岡東)、福田(富岡東)メー 田邊(富岡東)メー 準決勝
垣内コト 福田、正木、福田
▽決勝



城北・大空航己(男子) 決勝でチームメイト対決を制し中学から一

積極的な仕掛け

○：「今まではタイトルを取れなかったので、最後の大会は優勝を狙って挑んだ」。女子個人を制した垣内(富岡西)。表彰式で掛けられた金メダルが誇らしげだった。決勝の相手は小学生時代からよく知る実力者の正木(川島)。「気持ちで負けないように戦った」の言葉通り、開始早々から仕掛け、得意のメンを連続して決めた。海南小から阿南一中に進み、下宿生活をしながら中学、高校と剣道一筋に打ち込んできた。「先に1本を取られた初戦は緊張した」と振り返ったが、逆転勝利で本来の積極性を取り戻すと、次々と難敵を下し頂点に立った。

垣内は「卒業後も剣道を続けたい。この優勝で支えてくれた家族や先生に少しは恩返しできたかも」と笑顔を見せた。

精で互いに手の内は知り尽くしていた。中盤で隙が見えたので思い切った仕掛けた。集大成の大会で優勝できてうれしい

ニちゃん

PROUD ~ 部活にささげたアオハル

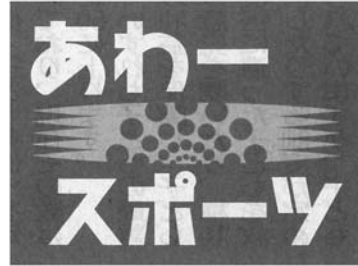
鳴門渦潮高

徳島県内高校の部活動で、新型コロナウイルスの影響で大会が中止になるなどした3年生の思いを紹介します。
(おわり)

剣道部

小山滉冬主将 この3年間は先生や保護者の皆さんのおかげで、四国大会やインターハイに出場するなど多くの貴重な経験をすることができました。これからの生活でも周囲の方への感謝の気持ちを忘れずに歩んでいきたいです。





剣道

◆2020年度阿南市市民体育祭
競技
(10月31日・ソイショイ武道館)

【小学低学年】①川端日和(鳴門少年剣道教室)②天満栞(天麻錬成館)③梶原暁人(鳴門市光武館道場)④天満百華(天麻錬成館)

【小学高学年】①豊田大晴(鳴門市光武館道場)②大塚仁葉(鳴



各部門の上位入賞者

門市光武館道場 ③西村渚(鳴門市光武館道場) ④吉永百花(鳴門少年剣道教室)

【中学】①鳴門悠生(鳴門一) ②森長未来(鳴門一) ③後藤彰裕(鳴門一) ④福池謙信(鳴門一)

◆2020年度阿南少年選手権大会(11月3日・阿南市那賀川スポーツセンター)

▽新入生①内田陽澄(那賀川剣道教室わかあゆ会)②大西潤(那賀川剣道教室わかあゆ会)③橋本悠希(阿南少年剣道教室)④須藤

綾太(阿南少年剣道教室)▽小学1年生①岩浅詩(徳島剣清塾)②大松谷凜太郎(那賀川剣道教室わかあゆ会)③福田翔真(那賀川剣道教室わかあゆ会)▽同2年生①平田愛芽(徳島剣清塾)②水口萌香(徳島剣清塾)③亀井心暖(徳島剣清塾)④山川素奈(徳島剣清塾)▽同3年生①河田淳紀(徳島剣清塾)②山本京(阿南少年剣道教室)③山ノ井夏希(那賀川剣道教室わかあゆ会)④棚橋爽斗(徳島剣清塾)▽同4年生①河田蒼生(徳島剣清塾)②高瀬智菜(新野少年剣道教室)③吉田晃人(新野少年剣道教室)④桑原健造(那賀川剣道教室わかあゆ会)▽同5年生①西岡葵士(阿南少年剣道教室)②阿井輝(阿南少年剣道教室)③金澤悠翔(阿南少年剣道教室)④岩浅花(徳島剣清塾)▽同6年生①林巧(阿南少年剣道教室)②大和希輔(那賀川剣道教室わかあゆ会)③澳津瑛太(那賀川剣道教室わかあゆ会)④古賀大翔(羽ノ浦少年剣道教室)

居合道

◆2020年度審査会合格者
(11月8日・松茂第2体育館)

▽初段 生城暢大、三谷典史、森本理希▽2段 白倉基成、西岡悠天、橋口修▽3段 岡山博之、河野曉子、西岡利治▽4段 大石雅生▽5段 山田節正

城北3年ぶり栄冠

女子は富岡東7連覇

剣道

県高校新人大会

剣道の全国高校選抜大会は17日、男館で団体戦が行われ、男会館選手選を兼ねた第1回大会で、女子は城北が3年ぶり7度目、男子は富岡東が7年



男子決勝・富岡西対城北 大将戦で1本勝ちし優勝を決めた城北の松本(右) 鳴門ノイシヨイ武道館(山田百穂撮影)

男子決勝は17日、大将戦で1本勝ちし優勝を決めた城北の松本(右)は、富岡東と対戦し、1分35秒で1本勝ちした。試合前、松本は「自分までつないで、仲間に喜ばせてほしい」と宣言していた。3年ぶりの栄冠に破顔一笑した。

大将、宣言通りの仕事 城北

城北は準決勝で敗れた昨年のリベンジを果たし、「意識する部分はあった。うれし」と喜んだ。コロナ禍で例年のように練習試合を積み重ねた分、OBの大学生らを相手に稽古に励んだ。県内で公式大会の団体戦が行われたのは昨年の新人大会以来1年ぶり。待ち望んだ舞台で、鍛錬の成果を存分に発揮した。

副将・永瀨の活躍も大きい。中堅戦を終えて0-1。負ければ後がなくなる状況にも「大将に回すことができていた」と冷静に臨み、鮮やかな相手で勝利をもぎ取った。自らの敗戦で富岡西



女子決勝・富岡東対徳島文理 副将戦で勝利し栄冠を手にした富岡東の岩本(左)

連続32度目の栄冠を獲得した。男女の優勝チームが全国大会(3月26、28日、愛知県春日井市総合体育館)に出場。上位4校が四国新人大会(2月6、7日・高松市音川総合体育館)に進む。

城北3-0 徳島文理 阿南光2 (本勝) 2川野準法勝 富岡西4-0 鳴門高 城北3-0 阿南光3 法定戦 鳴門高3-0 阿南光2 法勝 富岡東4-0 松本 梅 橋本

女子団体1回戦 城北2-1 川島 徳島文理1 代表勝 藤井 古川 阿南準法勝 富岡東1 富岡西3 法定戦 富岡 山田 徳島北 川島 鳴門高 西3-1 川島 塚田 徳島文理1 城北 富岡西 法勝 岩本 佐藤 阿南準法勝 富岡東4 富岡東3-0 徳島文理 岡崎 梅 金野 泉

あわー スポーツ



団体中学校の部優勝の木頭



団体小学校の部優勝の木頭練心館

剣道

◆第67回丹生谷大会

(12月12日・鷺敷中学校)

【団体】中学校①木頭(西岡優太、福岡詩、山下悠人)②鷺敷A③相生A▽小学校①木頭練心館

(福岡鈴、松本奏利) ②相生龍虎館

【個人】中学1年①鈴江海音(木頭)②米田有輝(相生)③前山陽紀(相生)▽同2年①山下悠人(木頭)②中野璃玖(鷺敷)③西岡優太(木頭)▽小学1、2年①大谷優(鷺敷振武館)②松本心昊(木頭練心館)③鈴木望(鷺敷振武館)▽同3、4年①松本羽太(鷺敷振武館)②中山丈太郎(鷺敷振武館)③福永颯太(鷺敷振武館)▽同5、6年①松本奏利(木頭練心館)②福岡鈴(木頭練心館)③中野蓮(鷺敷振武館)

2021年(令和3年)2月1日 月曜日

白木恒 (名西支部) 2度目V

女子は坪井(阿南支部)初優勝

剣道

全日本選手権県予選

剣道の第68回全日本選手権、第59回全日本女子

選手権徳島県予選会は31日、県立中央武道館で行われ、25人が出場した男子は白木恒二郎(名西支部、川島高教)が5大会

ぶり2度目、2人で争った女子は坪井香歩(阿南支部・環太平洋大)が初優勝を果たした。2人は3月14日に長野市真島総合スポーツアリーナで同時開催される両選手権に出場する。

【男子】準々決勝 白木恒(名西支部)メド、日和田(麻植支部、蒲田(阿南支部)メコメ

賢(阿南支部)、山井(阿南支部)コ反、竹内(鳴門支部)、美馬(徳島支部)メー森(徳島支部)▽準決勝 白木恒メー、濱田、美馬メー、山井



【女子】決勝 坪井(阿南支部)コ、玉田(徳島支部)でうまくコテを打つこと(女子の一騎打ちを制して初優勝を果たし)「苦手とする上段の構えの相手が、自分の剣道をやり切ろうと挑んだ。中盤の練り合いの中



男子決勝で美馬との師弟対決を制し、5大会ぶりの優勝を飾った白木恒(左) 県立中央武道館

師弟対決 面目保つ 白木恒

延長戦にもつれ込んだ男子決勝は、3分区切りの戦いを3度繰り返し、5分の小休止を挟んで再開された直後に白木恒(名西支部)が攻勢を強めた。「長引くと体力が持たないと感じ、思い切っていた」。相手が止まった一瞬を突く飛び込みメンで決着をつけた。決勝で竹刀を交えた国士舘大の美馬(徳島支部)は、昨年度まで勤務していた城北高時代の教え子。「負けるわけにはいかないし、やりにくかった」。師弟対決を制して面目を保ち、ほっとした様子だった。本年度から勤める川島高で剣道部顧問として生徒を指導する傍ら、自身も研さんを積む。初出場した5大会前の全日本選手権は2回戦敗退に終わったため、リベンジを誓う28歳は「今回はベスト4を狙いたい」と意欲をのぞかせた。(石津遼)

全国トップと互角の戦い

この見極めや技を決め切る力は向こうが上だった」と認めつつ、「自分たちにも勝負できる実力は備わっていると感じた」と手応えを口にした。

前日は1、2回戦を代表戦の末に勝ち上がり、3回戦では前回準優勝の島原(長崎)に1-0で勝利。厳しいソーンで結果を残し、実力を証明した。岡崎主将は「自信になった。夏も8強以上を目指す」と二段上の高みを見据えた。(石津 寛)



全国トップの強豪と互角に渡り合った。4強の壁に阻まれた富岡東だが、準々決勝では今大会を制し、インターハイでも4連覇中の強豪・中村学園女子(福岡)を相手に0-1と引けを取らない戦いを披露。今夏のインターハイへの期待が高まる堂々の8強だった。

準々決勝は先に1本を取られ、後がない状況で大将戦に。託された岡崎主将は写真1は懸命に攻撃の糸口を探ったが、守りに入った相手を最後まで崩せなかった。チーム全体の戦いを振り返り「勝負ど

富岡東女子 4強ならず



た。剣道は2009年以来12年ぶりに8強入りした女子団体の富岡東が中村学園女子(福岡)との準々決勝に臨んだが、0-1で惜敗し、21年ぶりのベスト4進出は果たせなかった。富岡東の岡崎理(さと)主将が優秀選手に選ばれた。ソフトテニスの男子つるぎ、女子脇町はともに初戦の2回戦で敗れた。体操女子は東京五輪代表入りを目指す父親が鳴門市出身の畠田千愛(東京・大智学園)が個人総合を4種目合計57・750点で初制覇し、種目別の平均台、床運動と合わせて3冠に輝いた。

剣道

(春日井市総合体育館) 【女子】準々決勝

◇決勝と徳島県関係

中村学園女	1-0	富岡東
福岡	1-0	富岡東
御堂	1-1	山村
寺坂	1-1	山田
鈴木	1-1	塚田
池田	1-1	岩本
松永	1-1	岡崎
▽決勝		
中村学園女	1-0	筑紫台
福岡	1-0	福岡
中村学園女	3年ぶり6度目の優勝	
【男子】決勝		
桐蔭学園	0-0	島原
神奈川	1-0	長崎
相模学園	17年ぶり3度目の優勝	

剣道体験発表 作文コンクール



日本剣道少年団研修会体験・実践発表で優良賞を受賞した後藤さん
 〓 鳴門市の鳴門市第一中

コロナ下での気持ち表現

タイトルは「恵まれた日々」。新型コロナウイルスの影響で試合や遠征が中止になり、休校で部活動ができなくなった時の気持ちを「仲間との思い出が、今までの頑張りが削られていく。寂しくて悔しくてたまりませんでした」と表現。その後、非公式戦ながら団体戦ができた喜びを「当たり前だと思っていた日々が、どれだけ恵ま

た。後藤さんは「これからも一つ一つ試合を大切に、集中して臨みたい」と話している。コンクールには全国の小中学生から1493点の応募があった。後藤さんの作文は中学生の部で四国代表に選ばれ、全国大会に進んでいた。（青木寛倫）

後藤さん（鳴門一） 全国3席

児童生徒が剣道を通して学んだ体験……場連盟主催で、鳴門市第一中学校2年の後藤彩希さん(14)〓市光武館道場研修会体験・実践発表(全日本剣道道場)所属が第3席の優良賞に選ばれた。

令和三年度

剣道・居合道昇段審査 学科試験問題・解答例

※令和三年度は、以下の問題より各段二問出題
されます。

この試験問題と解答例は、あくまで自分の
剣道修行の参考のために記述したものである。
名称等、正確に記憶しておかねばならない事
柄もあるが、試験問題の多くは、今の自分の
レベルで考え、自分の言葉で表現することを
求めている。決して、試験のためだけに丸暗
記して、こと足りえたと思わないでもらいた
い。

学科問題においても、正々堂々、真剣勝負
の気迫で取り組み、今の自分のありのままを
表現すべきである。また、そのことが採点者
の高い評価を受けることにつながることも付
記しておく。

【剣道】

※ 初段の部

① 中段の構えの姿勢で注意することを書きなさい。

- (1) 肩を落として背筋を伸ばす。
- (2) 首筋を立てて顎を引く。
- (3) 腰を入れて下腹部にやや力を入れる。
- (4) 両膝を軽く伸ばして、重心を両足の中間にかけて立つ。
- (5) 目は全体を見つめる。

② 三つの間合を説明しなさい。

- 間合とは自分と相手の距離をいう。間合には、一足一刀の間合、遠い間合、近い間合の三つがある。
- (1) 一足一刀の間合⇨剣道の基本となる間合で、一歩踏み込めば相手を打突することが出来る距離であり、一歩さがれば相手の打突をかわすことが出来る距離である。
 - (2) 遠い間合（遠間）⇨相手との距離が一足一刀の間合より遠い間合で、相手が打ち込んできてもとどかないが、同時に自分の打突もとどかない距離である。
 - (3) 近い間合（近間）⇨相手との距離が一足一刀の間合より近い間合で、自分の打ちが容易にとどくかわりに、相手の打突もとどく距離である。

③ 基本打突や技の稽古で気をつけることを書きなさい。

- (1) 正しい姿勢で、気を充実させ、互いの攻め合いから打突する。
 - (2) 適切な間合をとって、確実に気剣体一致の有効打突となるようにする。
 - (3) はじめは「ゆっくり、大きく、正確に」を主眼とし、習熟するにしたがって「速く、強く、より正確に」打突できるようにする。
- ④ 日本剣道形で使われている「五つの構え」について書きなさい。
- (1) 中段の構え⇨すべての構えの基礎となる構えで、攻防に最も適した構えである。
 - (2) 上段の構え⇨太刀を頭上に振りかぶり、相手の気を圧して、捨て身で攻撃する性格をもつ構えで、諸手左上段・諸手右上段がある。
 - (3) 下段の構え⇨剣先をさげて自分の身を守りながら、相手の変化に応じて攻撃に転ずる構えである。
 - (4) 八相の構え⇨太刀を大きく右肩にとり、あいての動作を監視しながら、相手の出方によって攻撃にでる構えである。
 - (5) 脇構え⇨半身になりながら太刀を右脇にとり、あいての動作を監視しながら、相手の出方に応じて臨機応変に攻撃に転ずる構えである。

⑤ 「切り返しの目的」を述べなさい。

切り返しは、正面打ちと連続左右打ちを組み合せ、基本動作を総合的に練習するためのものである。姿勢や構え、打ちの刃筋や手の内の作用、足さばき、間合いの取り方、呼吸法、さらに強靱な体力や旺盛な気力を養い、気剣体一致の打突の習得を目的とする。

※ 二段の部

① 「剣道で礼儀を大切に理由」について述べなさい。

剣道を修練する上で、互いに心を練り、身体を鍛え、技を磨くためのよき協力者として、内には相手の人格を尊重して常に感謝の念を持ち、外には端正な姿勢で礼儀正しくすることが、剣道にとって極めて大切なことである。稽古や試合の前後の礼法を立派に行うことはもちろんのこと、終始、正しい心、慎みの心といった礼の本体を離れることなく、素晴らしい剣道を創造していくうえで、礼儀は大切な要素である。

② 「打突の好機」について説明しなさい。

打突の好機はたくさんあるが基本的には次のとおりである。

- (1) 相手の動作の起り頭(出ばな)
- (2) 技の尽きたところ(動作や技が終わったと

ころ)

- (3) 居ついたところ(身体の緊張がゆるんだ瞬間、気持ちで圧倒されたとき)
- (4) 引き端(退がるころ)
- (5) 受け止めたところ(受け止めた時に隙が生じる)
- (6) 息を深く吸うところ(息を吸うときは、相手の動作が止まる)

③ 「稽古で心掛けなければならないこと」とは、どのようなことか述べなさい。

- (1) 竹刀の点検、準備運動、整理運動をはじめとした安全面に留意する。
- (2) 大きな目標や研究心をもって取り組む。
- (3) 礼儀作法を重んじる。
- (4) 立会いの「初太刀」を大事にして、一本一本をおろそかにしないように、常に旺盛な気力で、精魂を込めて稽古をする。
- (5) 基本に忠実に稽古をする。
- (6) しかけていく技を積極的に使って稽古をする。
- (7) 稽古後は反省し、工夫・研究を怠らない。

④ 剣道形を実施するときの「足さばき」で気をつけることを書きなさい。

足さばきとは、相手を打突したり、相手の攻撃をかわしたりするための足の運び方である。日本剣道形では、歩み足、送り足、開き足が使われるが、注意点は次のとおりである。

- (1) 足さばきは、すべて「すり足」で行い、踏み込み足は使わない。重心を上下動させず、滑らかに行うことが大切である。
 - (2) 足の運びは、原則として前進するときは前足から、後退するときは後ろ足から動作を起す。
 - (3) 足さばきは、原則として一方の足に他方の足が伴う。特に打突時の後ろ足は残さずに、前足に伴って引き付ける。
- ⑤ 「正しい鍔せり合いと注意点」を説明しなさい。

鍔せり合いとは、相手を攻撃したり相手が攻撃してきたときに間合いが接近して鍔と鍔がせり合った状態をいう。自分の竹刀を少し右斜めにして手元をさげ、下腹に力を入れて自分の体の中心を確実に保つようにする。お互いの鍔と鍔がせり合う中で手元の変化や体勢の崩れから打突の機会をつくる。

- 注意点
- (1) 手元をさげ、下腹に力を入れて腰を十分伸ばす。
 - (2) 首を真っ直ぐに保って相手と丈くらべをする気持ちで相対し、身体が前傾しないようにする。
 - (3) お互いの鍔と鍔がせり合うようにする。
 - (4) 相手の肩に竹刀をかけたり、刃部を身体にかけたりしない。
 - (5) 必要以上に力んだり、気を抜いて休んだりしない。
 - (6) 積極的に技を出すか、分かれるようにする。

※ 三段の部

① 「平常心」について説明しなさい。

物事(事象)の変化に対し動揺することなく、日頃の気持ちで冷静に対応できる磨かれた心の状態をいう。事に臨んで心を動かすことなく、ふだんと変わらない平常の心で対処することは非常に難しいことである。剣道では、この平常と変わらない心を持たなければならないことを強く求めている。

② 「三殺法」について説明しなさい。

相手を制するための手だてとして、相手の剣、技、気の三つを封ずる。

- (1) 剣を殺す⇨相手の剣を押さえ、払うなどして剣の働きを制する。
- (2) 技を殺す⇨先手先手と攻め、相手に技をしかける余裕を与えない。
- (3) 気を殺す⇨気力で相手を圧倒し、相手が攻撃しようとする機先を制する。

③ 互格稽古で注意することを書きなさい。

- (1) 修得した基本動作や応用動作を崩すことなく、充実した氣勢で真剣に行く。
- (2) 相手を恐れず侮らず、相手と対等の気持ちで行う。

- (3) 立会いの「初太刀」を大切にし、一本一本に精魂を込めて打突する。

- (4) 間合のとおり方や攻め方、打突の機会の見つけ方やつくり方、技の出し方などを工夫する。
- (5) 相手をより好みしないで、多くの人と稽古をする。

④ 剣道形の必要な理由と効果について述べなさい。

剣道形は剣道の技術の中でもっとも基礎となるものを選んで定められたもので、剣道形を繰り返し修練することによって、剣道の基本的な礼儀作法や技術、剣の理合を修得することができ、さらに内面的な気の働きの気位といった剣道の原理原則をも心得できる。修練の効果としては次のようなことがあげられる。

- (1) 礼儀が正しく、落ち着いた態度が得られる。
- (2) 姿勢が正しくなり、冷静な判断力が得られる。
- (3) 間合を知り、機敏な動作が修得できる。
- (4) 技について自分の悪い癖がとれる。
- (5) 気合が練られ、充実した気合が得られる。
- (6) 剣道の気位が高まり、風格が備わる。

⑤ 「手の内」について説明しなさい。

剣道でいう、手の内とは、竹刀の柄を持った両手の持ち方を言い、竹刀の握り方、打突したり応じたりするときの両手の力の入れ方、緩め方、釣り合いなどを総合した掌中の作用である。(竹刀の持ち方は、左手は柄頭から小指が出な

いように一ばいに持ち、右手は鏝にふれない程度に持つ、左右両手とも親指と小指と薬指とで握ります。肘は伸びすぎず、両腕の肘関節を柔らかくして軽く柄を握り、ぬれ手拭をしぼる気持ちで両手首をしめ入れるようにし、左右の親指と人差し指の割れ目が竹刀と弦と一直線になるようにします。)竹刀を強く握りしめないで、正しく保持し、手首をリラックスさせることにより、肩、肘、手首、掌へと運動が伝道し、効率のよい鋭い打突が可能となる。(打突に際しては緊張と解緊をたくみに行き、手の内のさえを生み出すよう努力しなければなりません。)

※ 四段の部

① 有効打突について説明しなさい。

有効打突は、剣道試合・審判規則第十二条に、充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものと規定されている。このような諸条件を満たした一本が有効打突となる。言いかえれば、気剣体一致の打突である。有効な打突は理合と残心からなっており、理合を要素と要件に分けると、要素には、間合・機合・体さばき・手の内の作用・強さと冴えが含まれる。要件には、姿勢・氣勢(発声)・打突部位・竹刀の打突部・刃筋が含まれる。残心は、打突後の身構え・気構えである。

② 剣道の四戒について説明しなさい。

四戒とは、驚、懼、疑、惑の四つをいい、剣道修業中に、この中の一つでも、心中に起こしてはならないという戒めである。驚は「おどろく」であり、懼は「気づかい」「恐れる」、疑は「あやぶむ」「あやしむ」、惑は「心が乱れる」「思いあやまる」です。

驚⇨予期しない事態に驚いて、心身の活動が乱れ、正常な判断と適切な処置がとれず、為す術のない状態になる。

懼(恐)⇨恐怖のことで、相手を恐れて、精神の活動が停滞し、四肢が震えて自由な動きを失う。

疑⇨相手の気持ちや行動をあれこれと疑い、平静な判断を下せず、決断がつかない状態である。

惑⇨心の迷いである。心が迷うときは精神昏迷、敏速な判断や軽快な動作をなすことができない。

③ 残心の重要性について述べなさい。

打突した後でも相手に心を留めて、もし相手が再び反撃しようとしたら、直ちにこれを制し得る油断のない身構えと気構えになっていなければならぬ。もし、打突した後に油断していたならば、逆に相手に反撃されてしまう。また、打突した後には心を残そうとすれば、かえって残

そうとするとところに心が止まってしまおうとされている。心を残さず、思い切って捨て身で打突することによってこそ、自然と相手に対する油断のない心が生まれ、これが相手の反撃に備える身構えと気構えになる。

④ 剣道形を行うときの「木刀の正しい操作」について説明しなさい。

木刀の操作と身体の移動を合理的に行うとともに、充実した氣勢で気剣体を一致させて行うことが要諦である。特に打突をより有効にするためには、次のように刀を正しく操作することが大切である。

- (1) 握り方が正しく「切り手」になっている。
- (2) 握りを変えないで、正中線に沿って振り上げて振り下ろす。特に「萎やす」「すり上げる」「支える」「押さえる」ときは、左こぶしを正中線から外さないように注意する。
- (3) 振りかぶりと振り下ろしは、一連の動作(一拍子)で行い、刃筋正しく行う。
- (4) 打突する瞬間は、小指、薬指、拇指球で軽く握り締め、物打ちで打突部位を正確に打突する。
- (5) 振りかぶりや抜き技は、左小指の握りを緩めず、剣先が両こぶしよりさがらないように注意する。
- (6) すり上げは、鎧の効用を使って、半円を描く心持ちで行う。

⑤ 熱中症の症状と処置について述べなさい。

高温環境下で発生する障害の総称で、熱疲労、熱痙攣、熱射病の3型に分類される。

熱痙攣は大量の発汗により、汗とともに塩分が失われ塩分不足のために、筋肉の痙攣を起こす。

処置としては、涼しい場所に寝かせ、水分の補給(食塩水、スポーツドリンク等)を行う。

熱疲労は大量に汗をかきすぎることからくる、脱水症状で、全身の脱力感、めまい、血圧低下、ひどい場合は失神する。処置としては、涼しい場所に運び、頭を低くして寝かせる。水や薄い食塩水を飲ませる。

熱射病は熱中症の中でも最も重症で、体温が異常に上昇して、意識障害をおこす。ひどい場合は死亡することもある。処置としては体温をすみやかに低下させることである。冷却法として、涼しい場所に移動、水で身体を濡らし、うちわなどで送風する。また、水で体表を冷却する、などを行い、意識がはっきりしない場合は救急隊へ連絡する。

※ 五段の部

① 審判員の心得について述べなさい。

剣道試合の審判とは、公正に両者の勝敗を裁決することである。剣道の試合は、剣道発展のための方法であり手段である。従ってその審判は、剣道の正しい発展に沿ったものであり、その発展に役立つように実施されなければならない。

一般的要件

- (1) 公正無私であること。
- (2) 剣道試合・審判規則、運営要領を熟知し、正しく運用できること。
- (3) 剣道に精通していること。
- (4) 審判技術に熟達していること。
- (5) 健康体で、かつ活動的であること。

留意事項

- (1) 服装を端正にすること。
- (2) 姿勢・態度・所作などを厳正にすること。
- (3) 言語が明晰であること。
- (4) 数多くの審判を経験し、反省と研鑽に努めること。
- (5) よい審判を見て学ぶこと。

② 「気位」について述べなさい。

気位とは、自信から生ずる気品、威厳である。技術が円熟し、精神が鍛錬された結果、自然に

備わるものである。竹刀を構え合わせた時、驚懼疑惑の念を生じて恐れちごこまり、戦わないうちに負けた気持ちになるのは、相手の気位に押されて、位負けした結果である。このような気位を故意に真似しようとしても技術、精神が円熟していない限り、かえって隙を生じて、打ち込まれることになり、見苦しい結果になる。技術の進歩、精神の鍛錬の度合いは、自然と気位に現れるので、一朝一夕に備わるものではない。なお自信と慢心とは大いに違うもので、慢心は剣道で最も戒むべきものである。

③ 互格稽古について説明し、指導上の留意点を述べなさい。

技能や気力が同等の者、あるいは同等に近い者が、互いに気をはかり、相手の変化に対して互格の態度や対等の気持ちで有効打突を競い合うなかで、総合的な能力を養う稽古法である。指導上の留意点

- (1) 修得した基本動作や応用動作を崩すことなく、充実した氣勢で真剣に行わせる。
- (2) 相手を恐れず侮らず、相手と対等の気持ちで行わせる。
- (3) 立会いの「初太刀」を大切にし、一本一本に精魂を込めて打突させる。

- (4) 間合のとり方や攻め方、打突の機会の見つけ方やつくりかた、技の出し方などを工夫させる。
- (5) 相手をより好みしないで、多くの人と稽古をさせる。

④ 剣道形を実施するときの留意点について述べなさい。

剣道形は、一定の形式と順序に従って行う一連の約束動作であるが、形を形骸化させない生きたものにするため、お互いが寸分の緩みのない気の働きをもって行わなければならない。

- (1) 立会前後の作法、立会の所作、刀の取り扱いを適切に行う。
- (2) 五つの構えと小太刀の半身の構えを正しく行う。
- (3) 目付けや呼吸法を心得て、終始、充実した氣勢、気迫をもって合気で行う。

- (4) 打太刀（師の位）、仕太刀（弟子の位）の関係を理解し、原則として打太刀が先に動作を起こす。
- (5) 「機を見て」「入身になろうとする」といった打突の機会を理解して行う。

- (6) 打太刀は一足一刀の間合から打突し、仕太刀は物打ちで打突部位を正確に打突する。
- (7) 振りかぶりは、剣先が両こぶしよりさがないようにし、一拍子で打つ。
- (8) 足さばきはすり足で行い、打突するとき後ろ足を前足に引き付ける。
- (9) 残心は十分な気位をもって行う。

⑤ 剣道における熱中症の予防と対処について述べなさい。

熱中症とは、高温環境に高湿度が加わると、うっ熱（体熱の放散が妨げられた状態）によっ

て、体温上昇が助長されて体温調節機能が障害された状態を総称したもので、熱失神・熱疲労・熱痙攣・熱射病などに大別される。剣道では夏場に発生しやすい。最も致命率の高い熱射病では、体温上昇、意識障害、痙攣、血圧低下、発汗停止などの症状をきたす。

予防するには体感温度に注目して剣道場の換気に配慮し、休息を数多くとり、水分、塩分の補給を考慮する。頭痛、めまいなどを訴える者が続発するときは、練習のペースダウンや中止など早めの対応が必要である。

対処方法は、全身の冷却、水分補給、電解質の補給を行うことであるが、応急処置としては、

(1) 全身の冷却

涼しい場所に移動し、衣服を脱がせる。水で身体をぬらし、送風する。

水で体表を冷却したり、頸部、わきの下、脚のつけね、膝のうしろを冷却することも有効である。

(2) 水分の補給

水分や薄い食塩水、またはスポーツドリンクを補給する。

意識障害のあるときは危険なので、体温を下げる応急処置を行いながら救急車を呼んで病院にて治療を行う。

【居合道】

※ 初段の部

① 居合道を習おうとした動機を記せ。

(例は示さない、自分の考えで述べよ。)

② 居合道と礼儀について記せ。

礼儀は人間として、また平和な社会生活をすすめる上で大切であり、ことに武道では昔から「礼に始まり礼に終わる」といわれ、きわめて大切なものとされてきた。技が上達しても、品位や人格が欠けているようでは、ほんとうの居合を習ったとはいえない。居合は日本刀使用の運動である関係上、万が一にもその使用法をあやまるようなことがあってはならず、道場だけでなく、日常生活の中でも常に礼儀正しく立派な人格と精神を養う心が必要である。

③ 刀を安全に取り扱うための「目釘」について記せ。

目釘は、刀身と柄を固定する重要な働きをするものである。目釘の素材は、竹・角・生鉄などがあるが、通常は堅い三年を経過した古竹(真竹)材が使用される。目釘は、目釘穴と同

じ太さに削り、頭部分をやや大きくする。目釘の竹の表面側(表)を柄頭方向とし、ガタつきがないよう強く挿入する。練習前には、必ず目釘が抜け落ちたりゆるみがないかを点検して安全を確認しなければならない。

④ 『全日本剣道連盟居合(解説)』作法における、

「(一) 携刀姿勢」・「(二) 出場」・「(三) 神座への礼」より穴埋め式(五カ所)による問題を一問出題する。

※ 二段の部

① 居合道修行の目的について記せ。

居合は初め一種の刀法として始まったが、その目的は精神の鍛錬が第一で、第二に身体の錬磨、第三に術技の訓練という順になる。心身の錬磨は剣道と同じだが、その技術は剣道の根本となるものである。つまり刀の運用や礼儀など、すべてが剣居一体のものであり、この修行をするには、自分自身の心身の錬磨、人格の向上につながるものである。

② 柄の握り方について記せ。

柄の握りは、右手は人差し指が柄巻きの一文字にかかるようにし、左手は柄頭を余し親指に

人差し指を付けて握る。両手の握りの間は指二本位（約三〜四セ）で、握る力は小指、薬指、中指の順で強く握り、人指し指と親指には力を入れず切る瞬間、前にぐっと握りしめる。いわゆる茶巾絞りの要領である。

③ 居合道の目付について記せ。

座ったときの着眼は四から五釐先の床とし、立ったときの着眼は、自分の目の高さの前方、一点を見つめるのでなく、遠くの山全体を眺める気持ちで八方に心眼を開き、目は半眼、動作中の着眼は仮想敵の面、又は顔の中心部とする。切り下ろしたときは切先のとを追うようにして倒れた仮想敵を見越した所とする。目はいつも平静でまばたきしたり、目を凝らしたりしてはいけない。

④ 『全日本剣道連盟居合（解説）』術技における一本目から三本目までの「要義」と「動作」について穴埋め式（五カ所）による問題を一問出題する。

※ 三段の部

① 居合道の流派を自己の流派を含め五派以上記せ。

無双直伝英信流、夢想神伝流、伯耆流、無外流、水鷗流、関口流、貫心流、心形刀流、新蔭流、長谷川英信流、大森流、田宮流

② 残心について記せ。

常に油断しない心のことで、敵を斬突したあとも敵に心を残して、次の攻撃に備えて直ちに対応・制圧できるような姿勢・態度・構えをくずさないことをいう。納刀にさいしても、「納刀すなわち抜刀の心」という言葉があるように一動作ごとに気も心も充実させ隙を見せないことが大事である。

③ 自信と慢心について記せ。

修練を重ねた結果、正しく立派な居合が出来るようになること、おのずから自信が湧いてくる。自信をもつことにより平常心を保つことが出来、如何なる場合に於いても心の落ちつきと確かな技前を發揮することが出来、そこには気位も備わってくるものである。しかし心の修業が不十分な者が軽々しく自信をもつことは、これが自負心となり、いわゆる慢心となる。慢心は修業の過程でもっとも戒めるべきものである。

④ 『全日本剣道連盟居合（解説）』術技における一本目から五本目までの「要義」と「動作」について穴埋め式（五カ所）による問題を一問出題する。

※ 四段の部

① 居合道の呼吸について記せ。

静かに腹式呼吸する。通常は、一つの技を終えて次の技に移るときは、ゆっくりと二回呼吸して息を整え、三回目の息を吸いおわる頃に刀を抜き始める。そして吸い込んだ息を一気に吐き出し抜刀する。納刀してから軽く吐く。長い技のときは、息継ぎの必要がでてくるが、息を継いだかわからないようにする。呼吸法には個人差があることからそれぞれに工夫が必要である。

② 序破急について記せ。

一般的には「序」はものごとの始まりで、静かなことを現し、「破」とはやぶれること、「急」は激しくなることである。これを居合の術技では刀の運速を表現する用語として用いたもので、刀の運行を三段階に分析し、わかり易く表現したことはといつてよい。抜刀について説明すると、鯉口を切つて静かに刀を抜き始めることが序で、しだいに抜刀速度を速めることは破、抜き付けの瞬間を急という。序破急は抜刀ばかり

でなく。すべての術技に序破急の動きを生かさなければならぬ。

③ 気剣体の一致について記せ。

「気」とは、意志とか心の精神作用をいうのであって、心の判断によって動作を起こそうとする決心を指す。「剣」とは、刀の働く作用を指す。「体」とは、体勢で、身体の力、手足の動きを指す。気剣体の三つが一致して腰が不動のものとなり、初めて有効適切に正確な技を出すことができるのである。居合は腰で抜き、腰で切るとまで言われるように腰の安定がもっとも重要であり、常に気剣体を一致させ腰の安定を心がけ修業することが肝心である。心気力の一致、心形刀の一致、心眼足の一致と言われる言葉は皆、同意語で大切な教えの一つである。

④ 『全日本剣道連盟居合（解説）』術技における一本目から七本目までの「要義」と「動作一」について穴埋め式（五カ所）による問題を二問出題する。

※ 五段の部

① 真剣の取り扱いについて留意する点を記せ。

居合道において、所有もしくは使用する真剣は、まず登録証が交付されている「登録刀」でなくてはならず、練習時や各種大会の参加時には、必ず登録証（コピーは不可）を携行し、登録刀を譲り受け、もしくは相続、購入した場合は登録証発行の都道府県教育委員会に「二十日」以内に所有者変更届けを提出しなければならぬ。また、体格に合わせて、刀身を短くしたり、樋の無い刀に樋を彫る場合は、都道府県の教育委員会に許可申請等の手続きを終了したのち改造を行い、新たな登録証の交付を受けなければならない。真剣を扱う居合人は少なくとも過失による事故を起こさぬよう、人前での刀の運行は勿論のこと平素から目釘や鯉口の点検、使用後の手入れや保管場所に注意して、常に安全を確保しなければならない。

② 守破離について記せ。

居合道における修業の段階を示したもので、「守」とは修業がある程度に上達するまでは、師の教えを忠実に守り、稽古に励み、理合や技術を修行し、決して他に迷わないこと。「破」とは、修業を積み、学んだ流派の教えを自分のものにし、更に進んで他の流派を学び、長所を採り入れ守の段階では得られなかった新しい分野を開拓すること。「離」とは苦心研究し破の段階を越えて、遂に独自の境地を見出し、自己

の流派をみ出し剣の奥義を極めることであり、守破離の教えは人生の生き方にも同じことがいえる。

③ 居合道と剣道の関係について述べよ。

居合道は日本刀を用いてその刀法、手の内を修練するものであり、仮想する前後、左右ないし斜方の敵に対して鞘放れの一瞬に抜き打ち、又受け流した後、切り下ろして勝ちを納めるもので、いわゆる、そこに居て敵に合わすものである。しかるに居合道と剣道は古来より一流派の中に双方があって表裏一体、車の両輪の如くその理合、目的とするところは一つであって、両道を併せ修行する事によって相乗的にその効果が高められるのである。

④ 『全日本剣道連盟居合（解説）』における一本目から十二本目までの「要義」と「動作一」について穴埋め式（各五カ所）による問題を二問出題する。

令和3年度 徳島県剣道連盟行事予定

県内行事					
月	日	曜日	行事	場所	主催
4	11	日	少年剣道教室指導者講習会	9:30~ ソイジョイ武道館	県剣連
	18	日	第76回国体一次予選(6月13日延期)	9:30~ ソイジョイ武道館	〃
	24	土	第1回少年強化訓練(中止)	9:00~ ソイジョイ武道館	〃
	25	日	第46回会長杯争奪高等学校剣道大会(中止)	9:00~ ソイジョイ武道館	〃
	29	木・祝	第1回審査会(剣道 初段以下)(中止)	9:00~ ソイジョイ武道館他	〃
5	8	土	第50回中学校剣道選手権大会(中止)	9:30~ ソイジョイ武道館	中体連
	9	日	居合道春季講習会、審査会(中止)	9:00~ 松茂町第二体育館	県剣連
	22	土	第2回少年強化訓練(中止)	9:00~ ソイジョイ武道館	〃
	23	日	第1回剣道 審査会(二段以上)(中止)	9:00~ ソイジョイ武道館	〃
6	5~6	土~日	第61回徳島県高等学校総合体育大会	9:00~ 藍住町民体育館	高体連
	12	土	第3回少年強化訓練(中止)	9:00~ ソイジョイ武道館	県剣連
	13	日	第76回国体予選	9:30~ ソイジョイ武道館	〃
7	20	日	第2回審査会(剣道 初段以下)	9:00~ 中央武道館	〃
	27	日	剣道中央講習伝達講習会(中止)	9:30~ ソイジョイ武道館	〃
	3	土	第4回少年強化訓練	9:30~ ソイジョイ武道館	県剣連
	4	日	中学校授業協力者養成講習会(中止)	9:00~ 中央武道館	〃
8	3~4	土~日	令和3年度四国インカレ大会(中止)	9:00~ ソイジョイ武道館	大学連
	9~11	金~日	第57回高等専門学校体育大会四国地区剣道競技	9:00~ ソイジョイ武道館	工業高等専門学校
	22~23	木~金	第75回徳島県中学校総合体育大会	9:00~ 松茂町総合体育館	中体連
	23	金・祝	第69回全日本剣道選手権大会県予選会 第60回全日本女子剣道選手権大会県予選会	9:30~ 中央武道館	県剣連
	23~25	金~日	剣道連盟土用稽古(中止)	19:00~ 中央武道館	〃
	30	金	徳島県防犯少年剣道大会(中止)	9:00~ ソイジョイ武道館	徳島県警察本部
	1	日	第2回剣道審査会(二段以上・称号) 第59回四国中学校総合体育大会	9:00~ 中央武道館 アマノパリエールホール	県剣連 四国中体連
9	7	土	第5回少年強化訓練	9:00~ 中央武道館	県剣連
	22	日	国体ブロック予選	9:00~ 吉野川市民プラザ	四国剣連
	23	月	第40回四国教職員剣道大会	9:30~ 中央武道館	四国学剣連
	4	土	第6回少年強化訓練	9:00~ ソイジョイ武道館	県剣連
10	5	日	第41回女子剣道大会	9:30~ ソイジョイ武道館	〃
	19	日	第49回徳島県社会人剣道大会 居合道伝達講習会、審査会	9:30~ ソイジョイ武道館 9:00~ 松茂町第二体育館	〃 〃
	23	木・祝	眉山ライオンズ剣道大会	9:00~ 徳島市立体育館	眉山ライオンズクラブ
	25	土	第26回徳島県健康福祉祭剣道交流大会	10:00~ 松茂町第二体育館	県高齢者会
	26	日	第3回審査会(剣道 初段以下)	9:00~ ソイジョイ武道館他	県剣連
11	9	土	第7回少年強化訓練	9:00~ 中央武道館	県剣連
	17	日	県連盟主催剣道秋季講習会	9:30~ 中央武道館	〃
	22	金	南部交流稽古会	19:00~ 阿南スポーツセンター	〃
	30	土	第18回徳島県中学校剣道1年生大会	10:00~ ソイジョイ武道館	中体連
12	5	金	西部交流稽古会	19:00~ 脇町小学校	県剣連
	7	日	第51回徳島県少年剣道優勝大会 居合道秋季講習会、審査会	10:00~ ソイジョイ武道館 9:00~ 松茂町第二体育館	〃 〃
	13	土	第8回少年強化訓練	9:00~ ソイジョイ武道館	〃
	14	日	第55回高等学校剣道選手権大会	9:30~ ソイジョイ武道館	高体連
	23	火・祝	第46回中学校新人剣道大会 眉山杯大学剣道大会	9:30~ ソイジョイ武道館 9:30~ 徳島文理大学	中体連 大学連
	28	日	第3回剣道 審査会(二段以上)	9:00~ ソイジョイ武道館	県剣連
	4	土	中四国地区剣道合同稽古会	14:00~ 吉野川市民プラザ	全剣連後援
1	5	日	第43回全国スポーツ少年団剣道交流大会県予選会	10:00~ 松茂総合体育館	県体協
	11	土	常任理事会	13:00~ アミノパリエールホール	県剣連
	12	日	第70回全日本都道府県対抗剣道優勝大会県予選会 第14回全日本都道府県対抗女子剣道優勝大会県予選会	9:30~ ソイジョイ武道館	〃
	18	土	第9回少年強化訓練	9:00~ ソイジョイ武道館	〃
	8	土	新年役員会、互礼会	13:30~ 未定	県剣連
2	9	日	令和4年 稽古始め	9:30~ 松茂町総合体育館	〃
	15	土	第10回少年強化訓練	9:00~ ソイジョイ武道館	〃
	16	日	第66回県高等学校新人大会兼全国選抜大会県予選会	10:00~ ソイジョイ武道館	高体連
	21~23	金~日	剣道寒稽古	19:00~ 中央武道館	県剣連
	22	土	第32回県下中学校剣道強化錬成大会	10:00~ ソイジョイ武道館	中体連
	23	日	第4回審査会(剣道 初段以下)	9:00~ ソイジョイ武道館他	県剣連
	30	日	剣道四、五段受審者講習会 長期育成強化訓練	9:30~ ソイジョイ武道館 9:30~ 那賀川スポーツセンター	〃 〃
3	5	土	第11回少年強化訓練	9:00~ ソイジョイ武道館	県剣連
	13	日	第4回剣道審査会(二段以上、称号) 居合道県下大会、審査会	9:00~ ソイジョイ武道館 9:00~ 松茂町第二体育館	〃 〃
	19~20	土~日	第17回四国中学校新人剣道大会	9:00~ アミノパリエールホール	四国中体連
	26	土	令和3年度 理事会	13:00~ 未定	〃
4	12	土	第12回少年強化訓練	9:00~ ソイジョイ武道館	県剣連
	13	日	令和3年度 総会	13:00~ 未定	〃
	27	日	令和4年度審査員・審判員講習会	9:30~ ソイジョイ武道館	〃

令和3年度 全剣連(主催・共催・後援)行事予定(案)

月	日	曜日	《全剣連 居合道審査会》	場所	主催
5	3	月・祝	八段審査会 称号(範士・教士・錬士)	京都市	全剣連
6	25	金	六・七段審査会	大分県	〃
7	2	金	六・七段審査会	新潟県	〃
11	7	日	六・七審査会(江戸川区)	東京都	〃
	13	土	教士称号筆記試験	兵庫県他	〃
	23	祝火	称号(教士・錬士)	東京都	〃
月	日	曜日	《全剣連 剣道審査会》	場所	主催
4	29	木・祝	六段審査会	京都市	全剣連
	30	金	七段審査会	〃	〃
5	1~2	土~日	八段審査会	〃	〃
	3	月	称号(範士・教士・錬士)	〃	〃
	15	土	七段審査会	名古屋市	〃
	16	日	六段審査会	〃	〃
8	7	土	七段審査会	福岡市	〃
	8	日	六段審査会	〃	〃
	21	土	七段審査会	新潟県	〃
	22	日	六段審査会	〃	〃
11	13	土	七段審査会 教士称号筆記試験	名古屋市	〃
	14	日	六段審査会	名古屋市	〃
	20または21日		六段審査会	東京都	〃
	23	祝火	称号(教士・錬士)	〃	〃
	23~24	火祝、水	七段審査会(足立区)	〃	〃
	25~26	木~金	八段審査会(千代田区)	〃	〃
月	日	曜日	《県外行事》	場所	主催
4	3~4	土~日	第56回中央講習会(剣道)	神戸市	全剣連
	17	土	中四国合同稽古会(広島県)	県立総合体育館	後援 全剣連
	18	日	第19回全日本選抜剣道八段優勝大会	名古屋市	全剣連
	29	木・祝	第69回全日本都道府県対抗剣道優勝大会	大阪市	全剣連
6	8	火	第43回全日本高齢者武道大会	八王子市	後援 全剣連
	18~20	金~日	四国高等学校総合体育大会	高知県	四国高体連
	26	土	中四国合同稽古会(愛媛県)	愛媛県武道館	後援 全剣連
	26~27	土~日	中央・地区講習会(居合道)	大分県	全剣連
7	3	土	中四国合同稽古会(岡山県)	岡山武道館	後援 全剣連
	3~4	土~日	中央・地区講習会(居合道)	新潟県	全剣連
	10	土	第13回全日本都道府県女子剣道優勝大会	奈良県橿原市	〃
8	5	木	第63回全国教職員剣道大会	花巻市	全剣連共催
	9~12	月~日	第68回全国高等学校総合体育大会	金沢市	全剣連共催
	20~22	金~日	第51回全国中学総合体育大会	川崎市	全剣連共催
	21~22	土~日	中央・地区講習会(杖道)	北海道	全剣連
9	4	土	中四国合同稽古会(香川県)	高松市香川総合体育館	後援 全剣連
	5	日	第 回全日本東西対抗剣道大会	大分県	全剣連
	19	日	第60回全日本女子剣道選手権大会	奈良県	全剣連
	26	日	第16回全国都道府県対抗少年剣道優勝大会	大阪府	後援 全剣連
10	2~4	土~月	第76回国民体育大会剣道大会	三重県	主管 全剣連
	9	土	中四国合同稽古会(広島県)	県立総合体育館	後援 全剣連
	17	日	第56回全日本居合道大会 第48回全日本杖道大会	東京都 名古屋市	全剣連 全剣連
	30~11/1	土~月	第33回全国健康福祉祭剣道交流大会	岐阜県関市	後援 全剣連
11	3	祝・水	第69回全日本剣道選手権大会	東京都	全剣連
	13~14	土~日	第70回全国青年剣道大会	東京都	全剣連
12	4	土	中四国合同稽古会(徳島県)	吉野川市民プラザ	後援 全剣連
R4 1	29~30	土~日	中央・地区講習会(杖道)	東京都	全剣連
2	5	土	中四国合同稽古会(岡山県)	岡山武道館	後援 全剣連
	5~6	土~日	第22回四国高校剣道新人大会	高知市	四国高体連
	19~20	土~日	第11回女子剣道指導法講習会	兵庫県	全剣連
3	12	土	中四国稽古会(高知県)	高知県立武道館	後援 全剣連
	26~28	土~日	第 回全国スポーツ少年団剣道交流大会 第31回全国高等学校剣道選抜大会	愛知県春日井市	全剣連共催
年度後半			第59回中堅剣士講習会 第10回女子剣道指導法講習会	奈良市	全剣連 〃

☆徳島県剣道連盟 稽古会《中央武道館》

木曜日 19:00~19:15(体操・素振り)

19:15~20:00 (小中高一般/基本~指導稽古)

20:00~20:45 (高・一般合同稽古)

毎月第1木曜日 19:00~19:45 日本剣道形の稽古(対象は中学生以上)

19:45~20:45 基本稽古・合同稽古

※ 稽古会休みのお問い合わせは、事務局またはホームページでご確認下さい。

徳島県剣道連盟(執務時間 平日午前10時~午後4時)

〒770-0861 徳島市住吉3丁目9-6 栗本マンション106号

TEL 088-652-2337・FAX 088-652-2360

令和3年度 級位・段位審査会実施計画表

《 剣 道 》 初段以下一覧表

審査日	申込み 締切日	中 部	西 部	南 部
4/29 (祝木)	4/15 (金)	ソクゾウ 武道館 (鳴門支部)	土成農業者 トレーニング センター	那賀川 スポーツセン ター
6/20 (日)	6/6 (日)	中 央 武道館 (徳島支部)	美郷ふるさと センター体育館	小松島市立 体育館
9/26 (日)	9/12 (日)	ソクゾウ 武道館 (板野東支部)	三野体育館	相生体育館
1/23 (日)	1/9 (日)	ソクゾウ 武道館 (鳴門支部)	穴吹スポーツ センター	日和佐中学校 体育館

《審査受験申込時の注意》

- 審査受験申込書に全ての項目、特に現在有する級位、段位を受領した年月日は確認して、氏名のフリガナ、住所等を正確に記入し、審査料を添えて申込む事。
この申込書は、合格後全剣連への登録の基となりますので至て明記すること。
- 現在の級位、段位の合格後に姓名が変わった者は、氏名の下に旧姓名を書くこと。
- 現段位を県外で登録受領した者は、その県名を記入すること。

- 審査受験申込書の締切日は、一覧表のとおりとし、事務向・郵送又は郵便受けに直接投函する場合は、締切日までに届くようにすること。なお事務局へ郵送又は直接郵便受けに投函した場合は、締切日までに必ず申込書が到達しているか事務局に確認すること。

- 審査受験申込書の取扱責任者については、一般の受験者は、支部に所属し県剣道連盟会員である事とし、取扱責任者は所属支部長が署名、捺印する事。また大学生については、県内大学剣道部に所属する者は、剣道部責任者、県外の大学に所属する者は、出身地区の支部長の署名、捺印とする。
小・中・高の受験者は、各所属の教室(道場)または、学校の責任者が署名、捺印する事。
- 剣道四、五段の受験者は、四・五段講習又は、伝達講習会・秋季講習会を必ず受講すること。
- 申込み締切後においては、審査会欠席時の審査料の返金は、行わないこととする。

以上の項目が守れない場合は受験できませんのでご注意ください。

《 剣 道 》 二段以上・称号一覧表

剣 道				居 合 道			
審査日	申込み 締切日	審 査 段 位	審 査 会 場	四五段 講習会 日時・会場	審査日	申込み 締切日	審 査 会 場
5/23 (日)	5/9 (日)	二段～ 五段	ソクゾウ 武道館	/	5/9 (日)	4/25 (日)	松茂町 第二体育館
8/1 (日)	7/18 (日)	二段～ 五段 (称号)	中央 武道館	/	9/19 (日)	9/5 (日)	松茂町 第二体育館
11/28 (日)	11/14 (日)	二段～ 五段	ソクゾウ 武道館	/	11/7 (日)	10/24 (日)	松茂町 第二体育館
2/13 (日)	1/30 (日)	二段～ 五段 (称号)	ソクゾウ 武道館	1/30(日) ソクゾウ武道館	2/13 (日)	1/30 (日)	松茂町 第二体育館

- 注意 1. 称号審査については、行事予定表の伝達講習会(6月)または、秋季講習会(10月)を受講の上、1年以内に上記審査会において受験する事。
- 注意 2. 四・五段受験予定者は、四・五段講習会又は、伝達講習会・秋季講習会のみで受験すること。受講から1年以内に2回の審査を受審できるものとする。(平成21年3月8日改訂)

《 剣道審査申込先 》		《 居合道 審査申込先 》	
〒770-0861 徳島市住吉3丁目9-6 栗本ソクゾウ106号	TEL 088-652-2387 FAX 088-652-2360	〒772-0014 鳴門市撫養町弁財天字派名34-31	TEL 088-686-7115 携帯 090-9778-2360
徳島県剣道連盟 事務局内		居合道部事務局	
柳谷 照男 宛		満寿 良史 宛	

受付 8:45～9:30
剣道連盟稽古会 8:30～9:25
受審者稽古 9:25～9:45
開会式 9:50～

* 学科試験、実技、形の順で実施

徳島県剣道連盟 審査資格

令和2年4月1日現在

級・段位	資 格
6～8級	小学1年～3年生は、認定により技倆相当の級位を与える。
5 級	小学4年生以上は、5級より受審できる。
4 級	中学生以上は、4級より受審できる。
3 級	高校生（相当年齢）以上は、3級より受審できる。
2 級	大学生、一般（大学生相当年齢以上）は、2級より受審できる。
1 級	小学6年生以上を受審資格とする。
初 段	13歳以上を受審資格とする。（年齢基準 審査日）平成24年4月1日より居合道受審者一般（高校生相当年齢以下を除く）については、2級及び1級を認定とし初段から受審できる。
二 段	初段を1年以上経過した者。
三 段	二段を2年以上経過した者。
四 段	三段を3年以上経過した者。指定講習会を受講済みであること。
五 段	四段を4年以上経過した者。指定講習会を受講済みであること。社会体育指導者資格初級の認定を受けた者については、五段の学科審査を免除するものとする。
六 段	五段を5年以上経過した者。
七 段	六段を6年以上経過した者。
八 段	満46歳以上で七段を10年以上経過した者。
錬 士	六段取得日より1年以上経過した者。指定講習会を受講済みであること。
教 士	七段取得日より2年以上経過した者。指定講習会を受講済みであること。

*級位は、経過日数を必要とせず毎回受審可能。

審査料・登録料（消費税含）一覧表

令和元年10月1日現在

〈単位＝円〉

	入 会 金 (徳島県で初めて受審する者)	審 査 料 (消費税10%含)	再 審 査 料	登 録 料 (消費税10%含)
3級以下	1,000	1,000	—	2,500
2 級	〃	1,500	—	3,500
1 級	〃	2,000	—	3,500
初 段	〃	3,000	3,000	6,950
二 段	〃	4,000	4,000	9,120
三 段	〃	5,000	5,000	12,390
四 段	〃	6,000	6,000	17,820
五 段	〃	8,000	8,000	23,280
六 段	〃	11,000	—	46,000
七 段	〃	15,400	—	57,000
八 段	〃	19,800	—	79,000
錬 士	〃	18,700	—	46,000
教 士	〃	27,500	—	79,000
範 士	〃	—	—	167,000

剣道連盟事務局だより

事務局長 柳 谷 照 男



平成三十一年度（令和元年度）の徳島県剣道連盟役員改正により、事務局長という大役に任命され、連盟の運営内容も十分理解せず、お引き受けしてから、早くも二年経過しました。

初年度は、大きな事故もなく無事に終えましたが、令和二年一月頃から、新型コロナウイルスの世界的流行により、人類の存続を脅かされる状況とまで言われている中で、稽古の自粛の願いを余儀なくされ、各種大会も中止が相次ぎ、稽古の目的、会員皆様方が、目標を見失うのではないかという状況にまで追い込まれてしまったように感じた年でありました。

そのような中、新型コロナウイルスは、どのような状況になると感染リスクが高まるのか判明してきたことから、稽古前後の手消毒、飛沫を防ぐためにマスクの着装、更にシールドをつけ、飛沫を受けない状態での稽古を余儀なくされ、初めのころは、息苦しさの中、不便を感じながらの稽古に励まれていたことと思います。

事務局としては、この一年間は、各種大会の準備等に追われることもありませんでしたが、新型コロナウイルス感染予防を行いながらの

稽古等の周知徹底をお願いすることに終始してまいりました。今後についても、気を緩めることなく感染予防を徹底して、稽古等に励んでいただけますようお願い申し上げます。

一、審査について

(1) 審査会実施にあたって「感染拡大予防ガイドライン」を発生しております。

受審者並びに審査員、立ち合い、係員等には受付時、審査時等内容の徹底をお願い致します。

(2) 審査の申し込みは、各支部長及び各学校と道場の責任者が責任を持って申し込みをお願いします。

特に次の確認をお願いします。

(確認事項)

- ① 申請書には、申請者が必要事項を記入すること。
- ② 徳島剣道連盟審査資格の年齢、年数等を満たしているか。
- ③ 氏名欄には、ふりがなが正しくふられているか。
- ④ 前回受審日に間違いがないか。
- ⑤ 責任者は、記載漏れ等確認したことを称するための押印を忘れていないか。

二、徳島県剣道連盟主催の大会及び講習会等の情報提供について

新型コロナウイルス感染防止のため、令和二年度は大会及び講習会等の中止は余儀なくされておりますが、情報提供してまいり

ますので、各支部長及び各学校、各道場の責任者は、情報の周知徹底をお願いします。

三、各販売書籍について

「徳島の剣道」もインターネットでも閲覧できるようにになりましたが、会員の中には、冊子を好まれる方もおられますので、引き続き冊子でも発行します。

会員の皆様のご理解の上、すべて完売できますよう、ご協力をお願いします。

四、徳島県剣道連盟ホームページ掲載について

各種大会及び講習会等できる限り、会員の皆様方に情報を発信するよう、努力してまいりますので、ご理解お願いします。

五、各支部及び会員からの情報提供について (役員等の計報の手配と連絡)

令和三年度より、医・科学委員会が設置されます。
どのようなことでも、情報提供をお願いします。

連盟関係者の計報については、確認が取れ次第、事務局に報告依頼と関係者に連絡をお願いします。

六、徳島県の人口減少が確実な現状について

徳島県は人口が減少し、少子高齢化が進む中、更には、新型コロナウイルスによって、剣道教室の稽古等の活動に支障がでてい

る状況下ではありますが、幸いにも「鬼滅の刃」の漫画が大ブームとなっております。その影響を受けて、剣道を始められる方もおられるようです。

今後も徳島県剣道連盟会員一人一人が多くの人に声をかけて、少なくとも現状維持に取り組んでいきたいと思っておりますので、会員皆様方のご理解とご協力をよろしくお願いします。

支部会員の皆さんからの情報提供のお願い

会員の表彰や訃報・ニュース等々、事務局が把握できていないと思われる事柄について、電話連絡でもかまいませんが、以下をコピーし、ファックスでお送り下さい。

徳島県剣道連盟 事務局 TEL 088-652-2337 FAX 088-682-2360 (24時間OK)

会 長	副会長	理事長	事務局長		
賞揚、報告	(支部行事予定、行事結果、会員の表彰、訃報、怪我等、ニュース 支部役員変更報告等、その他)				
件 名					
年 月 日	年 月 日				
支 部 名	支部				
支 部 長 名					
役員名・会員名					
添 付 資 料	有 ・ 無				
内 容					

編集後記

今回の『徳島の剣道』は新型コロナウイルス感染症対策のため、多くの大会・講習会が中止となり、例年の内容構成と大幅に変更を余儀なくされています。ご容赦下さい。

私事で恐縮ですが、毎回『徳島の剣道』を発行し終えると、次回はもっと早く発行できるようにしたいと自己反省を繰り返しています。また、今年は私自身が職場を三月末で定年退職となった関係で、四月以降の時間をこの『徳島の剣道』編集作業に自由に使うことができ、もっと早く充実した編集ができると考えていました。しかし、早くもできず、むしろ発刊が大幅に遅れています。時間があるからと言って、編集作業が進む訳ではなく、ある意味で身を削る思いの緊張感と集中力がないとこの作業は完成しないことを痛感しています。楽しんで、いい編集などできるはずがないのです。この緊張感と集中力をいかに沸き立たせるかが、これからの私の課題であります。そのためにも、皆さんからの編集者への叱咤激励とこの『徳島の剣道』への新しい企画や情報提供をお願いします。

『徳島の剣道』第三十七号

編集委員会

木原資裕	藤川和秋	三木毅	西谷肇一	中村稔裕	別宮憲治	久保隆司	柴田宗忠	西本浩章
------	------	-----	------	------	------	------	------	------

『徳島の剣道』第37号

令和3年7月20日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 藤川和秋

☎770-0861 徳島市住吉三丁目9-6
栗本マンション106号室

TEL 088-652-2337

FAX 088-652-2360

